

ハイスクールD×D オッドアイの銀猫

takubon

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は月の出ている真夜中、悪魔に襲われた。しかし、一匹の猫？によって助けられた。これが少女と猫？の出会いだった。

小説を購入して、気分転換に投稿してみました。一応二作目なんですけど、まだまだ初心者です。タグは追加する事があるかもしれませんが。それを踏まえてそれでもいいという方は少しでも楽しんでくれたら嬉しいです。はじめてハイスクールD×Dを読む人にもわかりやすいようにしていきたいです

目次

序章

転生と出会い	1
誤解と腐女神	13
猫とにゃんこ	22
学校と愚痴	32
誘拐と別れ	40
旧校舎のディアボロス	
始まりと思い	47
悪魔と墮天使	53
シスターとはぐれ悪魔	71
理由とマッサージ	84
魔王様と説明	96
アーシアと後日談	110
使い魔と龍王	119
戦闘校舎のフェニックス	
決断と藍華	149
再会と誓い	160
夜這いと婚約者	175
焼き鳥と藍華	196
みんなと修行	215
みんなと修行2	229
露天風呂とドライブ	252
イツセーと悩み	272
開始と序盤	292

中盤と終盤	309
決闘と逆鱗	328
銀猫と正体	347
後日談2と羞恥	365
月光校庭のエクスカリバー	
電話と神様	380
異変と逃走（必死）	386
エクソシストと聖剣	399
対峙と秘策	411
リュウと昔話	423
飲酒とキャラ崩壊	434
イツセーと獣	444

序章

転生と出会い

『いや、ホントマジでゴメン』

『いや、いきなり謝られても分からないんですが……』

僕は気がついたら真っ白な所にいて、目の前には土下座している青年？がいた。うん、自分で言ってる訳がわかんないですね

『取り敢えず頭を上げてくれませんか？流石に初対面の人にいきなり土下座されて困惑しかないので』

そう言うと、目の前の青年さんは頭を上げてくれた。と言うかビツクリするほどイケメンだなこの人

『ああ、ゴメン。そうだよね、じゃあ言うけど……君は死んだ』

『ああ、なんとなくそんな感じはしました』

『えっ？……え？マジで？』

『マジです。夢かと思いましたがさつき思いつきり抓ったらちゃんど痛かったですし、なんとなくあなたは普通の人は雰囲気が違う感じがするんで。多分あなたは神様か閻魔様じゃないですか？』

『う、うん。俺は一応君たちの言う所の神だよ。あと君、随分落ち着いてるね。普通ならこんな状況でそんなに落ち着けないよ？』

『慌てた所でもうどうしようもないですしね。人間、落ち着くことは大切です。所で僕の死因は何ですか？』

『あ、ああ、ええくと君の死因は交通事故。トラックに轢かれそうになつていた子供を庇って死んだ』

『あく、そういえばそうでしたね……その子は大丈夫ですか？』

『うん、君のおかげで特にケガもしてないみたいだよ』

『それは良かった……で神様、これから僕はもうなるんですか？天国ですか？地獄ですか？どっちかっていうと天国の方がいいんですけど。あ、そう言えば何で最初に謝っていたんですか？』

『い、いや、実は君が死んだのは俺のせいなんだ。君は本来もつと生きられるはずだったんだけど、間違つて君の人生の書類を捨てちゃつ

『今思いつくのはこんな感じですかね』

『えっと、三つ目は一つ目があるから別に良いんじゃないかい？』

『3つ目は自分だけじゃなくて自分以外にも使えるようにですよ』

『ああ、なるほどね。それじゃあ四つ目の変身能力ってのは？』

『それは・・・笑わないですか？』

『うん、笑わないよ』

『実は僕・・・猫が好きなんです』

『・・・はい？』

『実は僕・・・猫が好き』『いや、聞こえてるよ。それと変身能力とどんな関係があるの？』

『生前で僕は猫が好きで、猫になりたいなあーって思ってたんですよ。だから好きな時に猫になれるようにと思って、って笑ってますよね？』

『くつくくつ、い、いや、ごめんごめん。そ、そんな可愛らしい事だと思わなくってね・・・ぷふうっ！』

『思いつきり笑ってるじゃないですか。もういいです』

『ごめんごめん、わかった。その能力にはあらゆる生き物に変身できるようにしておこう。あとはないのかい？まだまだ全然OKだよ？』

『今僕が思いつくのは、こんな感じですかね』

『そうか、じゃあ転生してからまた何かあったらいつでも言ってくれ。向こうについてもこっちと連絡を取れるようにしておくから』

『わかりました。あつ、最後に一つ良いですか？』

『なんだい？』

『僕がいた世界から——僕がいたという事を消してくれませんか？そして、出来れば僕の家族がみんな幸せな人生を送れるようにしてください』

『・・・それは可能だけど、本当にいいのかい？』

『はい』

『わかった・・・よし、じゃあ転生だ』パンパン

神様が手を叩くと扉が現れた。その扉の上にはよくあるルーレットのようなものがついている

『この扉をくぐるとルーレットが回ってルーレットが止まった所が君の転生先になるよ』

『転生って随分アバウトなんですね・・・』

思わぬ転生の方法にそれ以上の言葉が出なかった。というかバイオハザードとかチラツと見えただけであんな世界には行きたくないなあ・・・あ、こういう事考えちゃいけないんだった

『じゃあ、神様色々ありがとうございます』

『いやいや、これくらいは当然だよ。君の人生が素晴らしいものになる事を祈ってるよ』

『はい』

そして、僕は扉をくぐった

チチチチチチチ

『さて、彼は一体どんな世界に転生するのかな？』

彼が扉をくぐった後、俺はルーレットの行く末を見守っていた。そろそろ回転が止まる頃だ

チ、チ、チ、チー！

『おっ！決まったみたいだね！どれどれ・・・ハイスクールD×Dか。まあ、隣のバイオハザードよりはましだよね』

どうやら少年はフラグを回避できたようだ

『ああ——ッ!?容姿のルーレット回してもらおうの忘れてたあ!』

この神はまた失敗したようだ

『・・・し、仕方がない、俺が代わりにこっさり回しておこう。エイツ』
クルルルル・・・

そして神がルーレットを4回回した結果、少年の容姿が決まった。

・瞳は赤と青のオッドアイ

・髪の毛の色は白銀色（プラチナ）

・髪型は艦これの時雨改二みたいな髪がはねて猫耳みたいになっている。後ろの長さは背中まで

・性別 男の娘

『oh・・・ま、まあ彼なら許してくれるよね！髪型も彼の好きな猫みたいだしさ！・・・さ、さあて！俺はお仕事しようっと！』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「——ん？ん？は・・・」

少年が目覚めるとそこは夜中の公園のベンチの上だった。辺りには人影はない

「あ、そっか。僕転生したんだっけ」

見た感じ僕が前世でいた世界と同じように見えるけど・・・

「あ、そうだ、早速猫に変身してみよう」

目を瞑って念じてみると体が光り出し、それが収まる頃には僕は猫の姿になっていた。

「にゃー♪（わぁー♪ホントに猫になってる!!）」

少年は自分の手や尻尾を見てテンションが上がった

『きやああああ!?!』

そんな時、猫に変身して聴力が上がった少年の耳に少女の悲鳴が聞こえた

「んや!?!んやー！（悲鳴!?!あっちか!）」

少年は猫の姿のまま悲鳴が聞こえた方へ駆け出した。その速度は特典により施された身体能力強化のおかげで普通の猫では考えられないくらいのもを出していた

「確かこのあたりだったはず・・・」だ、誰かあ・・・」っ！そっちか（!）」

少年が声の聞こえた場所にたどり着くと、目を疑う光景がそこにはあった。

壁際に尻餅をついて泣いている女の子

そしてその女の子にゆっくりと近づくと、異形の者。そいつはまるでライオンのような体に蝙蝠のような羽が生えており、顔には角が何本も生えていて、牙は鋭く、目の前の女の子を食べようとその大きな口を開いていた

「にゃんにゃん! (その子から離れろ! ライオンもどきいい!!)」

僕はそのライオンもどきに向かって思いつきり地面を蹴り、そいつにタツクルをかました。いきなりの事にライオンもどきは踏ん張る事も出来ず、そのまま吹っ飛んでいった。すぐさま女の子を見ると、幸い大きな怪我はないみたいだ

「にゃー!? にゃにゃにゃにゃ! (大丈夫!? 今のうちにここから離れて!)」

それだけ女の子言い、僕はライオンもどきが吹っ飛んでいった方に走る。そいつは20メートル先まで吹っ飛んでいたけど、ライオンもどきはピンピンしていた。既に立ち上がってこつちを射殺さんばかりに睨んでくる

「ガルルルル...」

どうやら僕に標的を移したらしい。

「...なんだ、貴様は」

こいつ喋れるの!? その事に驚いていると、ライオンもどきは酷く不機嫌そうに低く唸り声を上げる

「せつかくの俺様の食事の邪魔をしやがって... 貴様から食ってやるっ!! グルアアアア!」

吠えながらこつちに突進してくるライオンもどき。だけどそんなんじや全然遅い!

僕はそいつの突進を余裕で避け、パンチを放った

「にゃん! にゃっ! (喰らえ! 本家猫パンチ!)」

「ギャッ!」

ライオンもどきはコンクリートの塀に叩きつけられた。けどまたすぐに起き上がってきた。なんちゆうタフさだよ

「ふはははは！そんなチンケな攻撃など、戦車の俺様には効かん！」

戦車？一体何の事？も、もしかして口から砲撃でも撃つて来るの？

「グアアアッ！」

またライオンもどきが僕に向かって突進してくる。けどまた僕はライオンもどきの攻撃を躲し、カウンターを当て続ける

攻撃、躲す、カウンター、攻撃、躲す、カウンター、攻撃、躲す、カウンター、攻撃躲す、カウンター……

そうした延々と繰り返される攻防が10分ほど経った頃、僕は躲しきれず何度か攻撃を食らったけど、まだダメージは少ない

対してライオンもどきは目に見えてボロボロになっていた。一見すると僕の方が優勢だけど、僕は呼吸も上がってきて、体力がそろそろ危なくなってきた

「ぐうっ……この俺様がこんな奴にここまで追い詰められるなんて……」

でも、あつちも足に来てみたいだ。さつきからもうフラフラしてる。僕もそろそろ辛くなってきたから、次で決める！

そう思った時、聞こえるはずのない第三者の声が聞こえてきた

「ね、猫ちゃん！大丈夫!？」

「っ!？」

な、なんでこっちに來てるの!？」

見れば、さつきの女の子らしき人影が僕達の傍まで来ていた。その時僕の意識は完全に女の子に向いてしまった。そして、戦闘中に置いてその致命的な隙をライオンもどきは見逃さなかった

「グルアー！」

「(!?しまっ、ぐあー!)」

僕はライオンもどきの一撃を始めてまともに受けて、吹っ飛ばされた僕は扉に叩きつけられた。すぐに立ち上がろうとするけど、叩きつけられた時の衝撃のせいで脳震盪を起こしてしまったみたいで、上手く起き上がることが出来ない

「く、くそー!)」

「ふん、手ごずらせおつて。さあて、食事の続きでもするとしよう」

ライオンもどきは僕を食べようと僕に向かって歩み寄ってくる。そんな時、ライオンもどきの体にどこからか石ころが飛んできて当たった。ライオンもどきと僕が石ころが飛んできた方を向くと、そこには何かを投げた後のポーズをした女の子がいた

「ね、猫ちゃんから離れてっ!!」

「はっ……ならばお前から先に食ってやろう」

「ひっ!」

ま、まずい!

何とか起き上がろうとするんだけど体が言う事を聞いてくれない!くそっ、動けよ!動けよ僕の体……!

「ふふふふ、さあ、喰ろうてやるぞ」

まるで勿体ぶるように、その凶悪な牙を恐怖で固まってしまったという女の子の恐怖を煽るようにゆっくりと近づけて行くライオンもどき

なんとか必死に立ち上がりとしているその時、か細く呟いた女の子の言葉を猫となった僕の耳が拾った

「猫ちゃん……今のうちに、逃げて」

「っ!」

目の前に死の恐怖が迫っているのに自分の事より僕の事を心配したその声を聞いた時、僕の中で何か切れた

ライオンもどきと女の子の距離はもうほとんどないと言っている。女の子は恐怖のあまり気絶してしまった。その鋭い牙が今にも女の子に刺さろうとしたその時――

「(ゾワッ!?)」

ライオンもどきはその動きを止めた。いや、正確には止められた。その原因は自身に対して向けられた強烈な殺気が、ライオンもどきの体をまるで石のように固めてしまったからだ

「(な、なんだこの殺気は!?!この殺気、ゆうに上級悪魔クラスだがっ

!?)」

次の瞬間、ライオンもどきの体は強い衝撃とともに空に打ち上げられた

「(な、なにが、グアツ!?)」

空中で何度も強い衝撃をその体に受け、意識が朦朧としてきた時、最後にその目に映ったのは――

月明かりをバツク輝かせる白銀の毛

宝石の様な赤と青の瞳でこちらを鋭く見据える

銀色の翼を持った一匹の猫だった

その後、ライオンもどきは強烈な衝撃を受け、その目を永遠に閉じた

「はあ、はあ、や、やっと倒した」

少年は翼を消し、疲労した体に鞭を打って何とか女の子の元へと歩み寄る。そして女の子の状態を確認する

「ケガは・・・足を擦りむいた程度か・・・はっ!」

少年が念じると、光が女の子の足を包み、光が収まると傷は最初からなかったの様に綺麗になくなっていった

「ふう・・・上手く行ったみたいだ。これでよしと――っ、あ、れ・・・?」

疲労の蓄積と慣れない治癒の力を使ったことにより、少年はその場で崩れるように気絶した

「う、ううん・・・あれ、私生きてる?あの怪物は?・・・っ!猫ちゃん!?!」

女の子の目の前には最初に助けてくれた銀色の猫が力なく横たわっていた。慌てて抱え上げるとちゃんと息はしていたが、所々ケガをして血が出ていた。女の子はきつとこの猫が自分を助けてくれたんだとすぐに分かった

「待つて猫ちゃん！すぐに手当てしてあげるからね！」
女の子は猫を揺らさないように抱え、その場を去った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「んっ……知らない天井だ」

寝起きから割とバカなことを言ってるなど自覚しつつも、辺りを見回す。見た事のない部屋で、ぬいぐるみなどもあり、女の子らしい感じの部屋だ。そして自分の体の異変に気がつく。なんかありえないほどに包帯が体中に巻きつけられていた。お蔭でちよつと苦しい

「えくと、確か……あつ！」

少年は昨日の事を思い出した

「(という事はもしかしてここは……)」

思い当たっている途中に、部屋の扉が開いた

「あつ！猫ちゃん、目が覚めたんだね！」

声や輪郭からして恐らく昨日助けた女の子なのだろう。昨日は暗くてその顔をよく見れなかったけど、少し垂れ目気味で橙色の髪を三つ編みにした眼鏡をかけた女の子がいた。年は恐らく幼稚園年長か、小学校低学年位だろう

「体は大丈夫？家にあつた包帯をありつたけ巻いたから多分大丈夫だと思っただけ……」

クスッ

子供らしい考えに微笑ましくなる

「(ああ、心配しなくても大丈夫だよ)にやー」

あ、そう言えば猫になつてから猫語しか話せないのか。だから昨日言ったことも分からなかったのかあ、ついうっかりしてたな

「よかったあ、元気みたいだね。」

「(そっちも元気なようで何よりだよ)にやー」

「うん？お腹がすいたの？」

ダメだ、話が噛み合わない。まあ、確かにそろそろお腹がすいたか

ら別に良いっか

「にゃー」

「そっかそっか、じゃあちよつと待っててね。今ご飯持ってきてあげるからね」

そう言つてタタタタつと部屋を出て行つてしまった

『ヤッホー！元気にして・・・どうしたのその恰好？』

頭の中に神様の声が響く。何これ？

『ああ、いきなりでゴメンね。これは言つてた俺と連絡を取る手段だよ。頭で念じてもらえば会話が出るから』

『・・・こう、ですか？』

『そうそう、でどしたのその恰好？ミイラみたいになつてるよ』

『えつと、実は・・・』

僕は昨日起こつた事を神様に話した

『ふむふむ、俺が仕事をしてる間にそんな事があつたんだ』

説明中に包帯を何とか解き、体の状態を確認したけど傷はもう治つていた。流石神様特典

『ええ。あつ、そう言えばこれつてどういう事なんですか？』

『これつて？』

『この銀色で赤と青のオッドアイの事ですよ』

部屋にある鏡に写つている猫は銀色で瞳が赤と青のオッドアイだった。一瞬人形かと思つたよ。何この配色

『あ、ああー・・・そ、その事なんだけどね？』

神様から聞いた内容に僕はベツトの上で頭を抱えた

『何その容姿、厨二みたいじゃないですか・・・それに男の娘、男の娘つて・・・』

『ゴメン！ホントに毎度ごめんなさい！』ガンツ

今神様が土下座している光景が鮮明に浮かんだ

『はあ・・・まあいいですよ。それより僕は一体どんな世界に転生したんですか？』

『ハイスクールD×Dの世界だよ』

「・・・(おおう)にゃおう」

え、ええー・・・マジですか？

『マジだよ』

・・・どうやら僕は死亡フラグ満載の世界に転生したようです

誤解と腐女神

ハイスクールD×D

僕が転生したこの世界は俗に言う、超パワーインフレの世界です。この世界には天使や悪魔、堕天使などが本当に存在していて、その三勢力はお互いに争っており、大昔に起こった三大勢力の大戦中の真つ最中に二天龍と呼ばれている赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオンという二匹のドラゴン達が大喧嘩をし出し、三勢力に多大な被害をもたらした

そこで三勢力はこのままお互いに争っている場合ではないと思い、お互いに協力して二天竜を何とか封印した。しかし、その時の魔王や聖書の神は死んでしまい、三勢力は一旦争うのをやめた

そして魔王や純潔の悪魔の多くが亡くなってしまった悪魔は、種そのものが存続の危機に陥った。そこでチェスを模した悪魔の駒《イービル・ピース》を開発し、他の種族から悪魔に転生する事が出来る様にした

昨日のライオンもどきは、「はぐれ悪魔」と呼ばれるもので、転生により下僕悪魔となったものが、強力な力に溺れて自らの主を殺す、あるいは下僕となる際に強制的に転生されたり、酷い主の元から逃げたためにお尋ね者となった悪魔の事を言う。昨日会ったライオンもどきは恐らく前者でそう言った者達は無関係に人を襲ったりする危険な者なので、見つけ次第悪魔、天使、堕天使などは殺す事になっている

これが神様から教えてもらったこの世界と昨日の事に関する事だね。僕が知ってたのはパワーインフレって事くらいだったから助かったよ。こうなるんだったらもう少し友達に詳しく聞いておけば良かったなあ

『早速ですが神様、お願いしたい事があるんですが、良いですか？』

『OKOK!何でも言ってよ!』

『僕に魔力を使えるようにしてくれませんか?この世界には魔法なんかもあるみたいですから』

『任せて!...はい、これで君はその身に魔力を持って使えるように

なったよ。今はその力がばれないように隠してるけど、レベルで言うと魔王クラス位かな？鍛えればもつと上がるよ〜」

『え？そ、それって結構チートですよ？しかもまだ上がるんですか？』

『うん！目指せ、最強！』

『僕、最強とかあんまり興味ないんですけど・・・まあ、ありがとうございますぞいます』

『良いつて事よ。おつ、どうやらあの子が戻って来たみたいだね。じゃあまた何かあつたら俺の事を念じて呼んでね〜！バイチャ☆』

神様の声は聞こえなくなった。そして丁度その時、部屋の扉が開いた

ガチャツ

「お待たせ、猫ちゃん！あつ、包帯とつちやつたんだ。でも、ケガ治ってるみたいだね、良かったあ」

「にゃー」

持ってきてくれたのはミルクと焼き魚と、何故かチョコレートだった。あれ？確か猫ってチョコってダメなんじゃなかったっけ？

「はい、いっぱい食べてね♪」

・・・そんな笑顔で言われたら残すわけにはいかないじゃないですか・・・ええい、ままよ！

結局全部綺麗に平らげたけど、特に何ともなかった。けど、女の子のお母さんが僕に食べさせた者の内容を聞いて慌てて女の子に猫がチョコを食べると死んでしまう事を伝えると、女の子は泣き出してしまった

僕はそのまま女の子の母親と大泣きしている女の子に連れられ近所の動物病院に連れて行かれたけど、何ともない事に医者も女の子の母親もおどろいていた。女の子は泣きながら僕に謝って来たので猫らしく慰めたよ。泣いている娘を見るのは好きじゃないからね。でも取り敢えず、チョコレートは禁止になりました

それから僕は女の子（名前は藍華）の家、桐生家のペットとなり、名をシルと名付けられた。体の色が銀色だから英語のシルバーから略

してシルだそうだ。まあ、僕的には覚えやすくいいかな、って思ってる。それに、前世の名前は忘れてしまったからちようどいい機会だと思おうし

桐生家は藍華と両親の三人家族で、父親は普通のサラリーマンで出張で今は家におらず、母親は専業主婦という一般的な家庭だった

藍華は今年小学一年生で、夜中に学校に忘れ物をした事を思い出して、こっそり一人で学校まで取りに行こうとしてあのライオンもどきに襲われたらしい。そして、僕を家に連れて帰った時、母親に夜中に出ていた事を叱られそうになったけど、僕の事を見て慌てて治療をしたらしい。あの時の包帯はどうやら藍華のお母さんがやったようです

そういつたことを藍華は笑って僕に話してくれた。何というか、小学校一年生なのに真夜中の学校に忘れ物を取りに行こうとするとは随分度胸があるな。そして、お母さんの方はちよつと抜けているというかなんというか・・・

そして僕が桐生家のペットになってから一か月ほどが経った。藍華は今日も元気に学校に通ってる。その間、僕はブラブラと街なんかを散歩してたり。だって家にいても暇だし。それに天気の良い日以外に出ないのはなんだかもつたいたいからね

今日も天気も良く、良い散歩日和だ。あつ、ちなみに僕は猫の姿のままだよ。人の姿になってもいいんだけど、あの姿はかなり目立つ。しかも僕の体の年齢は神様によれば藍華と同じなので、そんな子が真昼間から一人で歩いているといろんな人に心配されてしまつて、おちおちゆつくりと散歩も出来ない。そんなわけで猫の姿のままなのだ。さあて、今日はどこに行こうかな？

そこそこの時間をブラブラ歩いていると、長い階段の上に鳥居が目に入った。今日はあそこに行ってみようかな

そう思い、僕は階段を上ると小さいけど綺麗にされている社が見えた。そして、鳥居の所に何か壁のようなものが見えるのだけど、これは何なのだろう？

そんな事を考えていると、突然、その壁みたいなのが割れてしまった。そして僕の背後に変な格好の人が二十人程、何も無い所から突然姿を現した。

「結界が!? 朱乃! こっちに!」

社から出てきた巫女さんがひどく慌てた声を出す。その後ろには藍華と同じくらいの子の小さな巫女の服を着ていて、先程声を上げた巫女さんによく似た女の子だった

「ようやく見つけたぞ。さあ、その穢れた者をこちらに渡せ」

「お断りです! この子は私とあの人の大切な娘です! 絶対に貴方たちなんかに渡しません!」

しっかりと女の子を抱きしめながら言う巫女さん。やっぱりあの2人は母娘の様だ

「お前も墮天使に穢されたか... ならば致し方あるまい。お前も一緒に葬ってやろう」

変な格好の集団は、不気味な輝きを放つ刀やらなんやら武器を手に二人に近寄ろうとするけど、その足は止まった。なぜなら丁度双方の間に猫の姿の僕が現れたからだ

「なぜこんな所に猫が? 如何なるものも入って来ないように結界を張っていたはずだが」

「そんな事はどうでもいい、さっさとあいつ等を始末するぞ」

猫に構わず怪しい格好の者達が二人に近寄ろうとした時、猫の体が光出した。

「な、なんだ!?」

「眩しいっ!」

突然の光に巫女の親娘も変な格好の集団の者も目を瞑る。そして光が収まった後、目を開けると猫がいた場所には——銀髪の赤と青のオッドアイの、一見すると美少女が立っていた

「な、なんだ貴様は!」

「巫女さん達、そこから動かないでくださいね」

変な格好の集団の問いかけを無視して巫女の母娘に話しかける僕。母娘は突然現れた僕にビックリしているようだ。うん、猫が人に変化

したらそうなるよね

「き、貴様あー！無視をするとは餓鬼のくせにいい度胸だな!!」

「邪魔立てするなら貴様も始末してくれる!!」

集団から二人が武器を持って僕に向かって飛び出してくる。沸点低すぎない？子供に無視されたくらいで激昂するとか、大人としてどうなのさ・・・あつ、そもそもこいつ等大人数で巫女さん母娘を手に掛けようとしてたんだった。じゃあ、そんな事言っても無駄か

「っ!?!いけない!逃げて!!」

母親が叫ぶが、シルは動く素振りを全く見せない

「死ね!!」

振り下ろされた怪しげな武器が当たりそうになった時、シルはようやく動きを見せた

「ガツ!?!」「へぶらっ!?!」

シルはその二人組を目にも留まらぬ速さで殴りつけた。殴られた二人組は孤を描きながら宙を舞い、頭から地面に突き刺さり、犬神家状態になった

「二・・・二・・・二」

双方とも今日の前で起こった事に啞然とした表情を浮かべた。たった今、彼らの目の前でそんな事を成したシルはというと、目で相手の人数を数えて

「あと19人か。早くしないと帰って来ちゃうからさっさと行かせてもらうよー!」

そう言つて僕は集団に突っ込んで更に二人、頭を掴んで地面に突き刺した。どうみてもこいつ等悪人だから容赦はしないでいいよね!

「っ!?!ぜ、全員でかかれ!!」

集団は一斉にシルに襲い掛かるも、5分と経たないうちに全員がシルの手によつて犬神家状態にされた

「ふうー、これで終わりっつと」

手についた土埃を払い、僕が巫女の母娘を振り返ると、二人は口を開けて啞然とした表情を浮かべていた。擬音をつけると、ポカーンって感じかな?

「あの、ケガとかありませんか？」

「……………」

僕が問いかけても二人ともフリーズしたまま固まってしまっていて反応がない。うーん、どうしたものか？

っ!?ゾワッ!

そう思っていると、僕は鳥肌が立つ程の強烈な殺気を感じて一気にその場を飛び退く。すると、僕がさっきまでいた場所に光の槍が地面に深々と刺さり、その衝撃で土煙が舞った。それからその向こうで何かが巫女の母娘の前に降り立ったのが僅かに見えた

そして急に土煙が晴れるのと同時に、僕の目で前を黒い羽根が舞った

そいつは黒い4対8枚の黒い翼を背に持ち、髭を生やした厳格そうな顔立ちのおじさんで、恐らく墮天使という者だろう。その顔は怒りに染まっていて、鋭く細められた眼光で僕を射殺さんばかりに睨んでくる

凄く…怖いです。いや、本当に!何、この人!?何でこんなに怒ってるの!僕怒られる様な事したっけ!?まさか、さっきの奴等の仲間……

「私の妻と娘には指一本触れさせん!!」

……さっきのやつらの仲間かと思ったけど、どうやら違うらしい。しかもなんだか勘違いしてるみたいです

「あ、貴方……」

「二人とも、もう大丈夫だ。今すぐにこいつをブッコロス!!」

しかも物騒なこと言ってるよ?どうしよう?何でか完全に僕、悪者みたいじゃないですか……巫女の母娘はまだ完全に立ち直ってないみたいだし、マジでどうしようか?」

「……………」

で、僕が考えた結果……………逃げる!

僕は翼を生やして空へと飛び上がった。何で逃げるかって?あの、いやあの墮天使さん、怒り狂って話聞いてくれそうにないし、な

ら逃げた方がいいと思います！まる！あれ、作文？

「逃がすかあツツ!!」

しかし追ってくる墮天使さん。わく、めっちゃ顔怖いんですけど
(泣)

追いかけているながら光の槍や雷を投げつけてくる墮天使さん。当たってもそんなに大した事にはならないと解ってるんだけど、やっぱり怖いんだよね。だって僕ってついこの間まで一般人だったんですよ？怖くないわけないじゃないですか。はてさてどうしたものか……『ヤッホー！……って、また何かまたなんかすごい状況だねこれは。一体どしたの?』

『はい……なんかすごい勘違いされて……』

く光の槍と雷を避けながら神様にどうしてこうなったかを説明中く
『なんとというか……ドンマイ』

神様の同情する声が辛いです

「待てやゴルウアアアアアツツ!!」

まだ追ってくるよお、ドンだけですか！

『うーん、じゃあ転移しちやえばいいんだよ!』

『転移?魔法は最近少しは使えるようになりましたが、僕転移魔法と
か出来ないんですけど……』

『大丈夫大丈夫、今から君の頭に転移魔法のやり方をインストールしてあげるから!チョコチョコイのチョコイ!っ』

変な掛け声とともに僕の頭に転移魔法のやり方が入ってきた。僕はすぐに転移魔法を発動した

「っ!逃がさん!」

飛び切り特大の雷を放ってくる墮天使さん。しかしギリギリで転移が完了し、雷は僕に当たる事はなかった。

「くっ、逃がしたか……仕方がない、朱璃達の元へ戻るとしよう」

この後、神社へ返って来たバラキエルは妻の朱璃からビンタをもらい、娘の朱乃からは「父様のバカ!」と言われ、orz状態となり、遅れてきた墮天使総督のアザゼルがそんなバラキエルと犬神家状態に

なっている集団を見て何が起こったか全くわからずに酷く困惑した
そうなの



そして僕が転移した先は桐生家の近くの林の中だった

『ふうー・・・神様助かりました。それに転移魔法以外の他の魔法も教
えてもらって』

『良いつて良いつて、こっちが好きでやってる事だし・・・でも、君に
一つお願いしたい事があるんだよね』

『?何ですか?僕に出来る事なら遠慮なくいつてください』

『そ、そうかい?じゃあ言うけど・・・君の写真を撮らせてもらいたい
んだ』

『写真、ですか?僕の?』

『う、うん。実はね・・・』

神様の説明を聞いて僕はまた頭を抱えた

『え、ええつと、つまりこういう事ですか?ルーレットで性別男の娘は
中々出ない超レアな物で、男の娘好きの女神様達が神様がルーレット
で男の娘を出した事を聞きつけて神様に僕の写真を要求してきたと、
そういう事なんですか?』

『う、うん。転生自体がそんなにない事だから余計レアなんだよ。基
本神々って娯楽に飢えてるのが多くつて、普通に転生でも結構話題に
なるし。しかもその腐女神達のお願いつて言うのが「脅迫」と書いて
「お願い」って読む方だから———』

『断れなかったと』

『はい・・・しかもその中には俺の初恋の女神もいて余計・・・』

『あー・・・なんというか、その・・・ドンマイです』

今の僕にはそんな言葉しか浮かんでこなかった

『・・・はあ、わかりました。神様には数えきれない恩がありますしね。
でもやるならなるべく早くしてくださいね?そろそろ藍華が帰つて

来ちゃうんで』

『あ、ありがとう！俺なんかの為に……！なんか君に惚れそうだよ』
『ごめんなさい、こんな見た目ですがそっちの方はお断りです！』

『じよ、冗談だよ。俺もちゃんと女の人が好きだから！ホントだよ！』
『分かってますつて。さ、とつととやりませよ』

そして僕はさっさと撮影を終え、桐生家に帰ってとつと寝た。うん、今日はもうちかかれたもん。だから藍華、今日はもう寝かせてちょうだいな

「シールー！遊ぼうよお！」

「にやあくにやー（グニグニしないでえ〜）」

〜神界〜

『は、はい。これ頼まれてたやつ』

神は頼まれた写真を持って、（腐）女神達の元へと来ていた。そこには有名な名の女神が多かった

『まあ！ありがとう！きて、どれどれ……ブハツ!?!』

写真を見たるとたんに鼻血を吹き出す女神。ちなみにこの女神が神様の初恋相手。神様が告白しようとした直前に男の娘しか興味が無いという事を知り、彼の初恋は終わった。ちなみに名前は愛と美の女神と呼ばれているあのヴィーナスだ

『ヴィーナス!?!しっかりして！いったいどんな写真が写って……ぷはあああ!?!』

今度は天照大御神がヴィーナスの写真を見て真っ赤な液体を吹いた

それからそこにいた女神全員が写真を見て鼻血を吹き、倒れていた。そして後日、神様の元に他の写真を要求したそう。ちなみに彼は三人目が吹いたあたりでその場から去っていた

猫とにやんこ

「すう・・・すう・・・」

「さて、寝たみたいだね」

夜、藍華が寝た事を確認して僕は藍華のベットから抜け出す。藍華は僕と一緒に寝たがるから眠るまで一緒に居なきゃいけないから少し大変だ。そして僕は藍華の部屋から出て、転移魔法を発動する

転移した先は空が紫色だった。ここは冥界

悪魔、堕天使たちが暮らしている場所だよ。ここは藍華達がいる人間界、つまり地球と同じくらいの広さがあつて、海が無い為に大陸は人間界よりも遥かに広くなっている。悪魔や堕天使は先の大戦で数を減らしている為手つかずの土地も多い。僕が転移した場所は冥界の偏狭なので修行の場所には丁度いいんだ。それに・・・

「おつ、今日は猪もどきか」

「ブルルルル！」

僕の目の前には猪のようなやつがいる。ただし、その体長は普通の猪の倍以上はある。ここには魔物もいるから良い対戦の練習にもなるんだよね。僕は変身を解き、人型になる

「さて、今日はどんな技を使ってみようかな？」

「ブルア！」

猪もどきは雄叫びを上げて僕に向かって真つすぐに突っ込んでくる

「うーん、猪は丸焼きにするから。じゃあ・・・火竜の鉄拳！」

「ピギッー！」

猪もどきはこんがり丸焼きになった。こいつって結構美味しんだよねえ。でも中々遭遇しないから食べる機会が少ないのがちよつとあれなんだよね

「火竜の鉄拳はもうだいぶマスター出来たかな？今度は他の技を使おうと」

神様が教えてくれた魔法の中には滅龍魔法もあつたんだ。今完全にマスター出来てる滅龍魔法は火竜の鉄拳と天竜の咆哮だけ、中々難

しいねえ。今度は火竜の翼撃込りにチャレンジしてみよっと

もし、これからあの神社で会った墮天使さんくらいの強さの奴に藍華や藍華の家族が襲われるような事があった時に、ちゃんと守れるようになる為に僕はあれから修行をしている。僕はあの夜に出会った藍華を、あの優しい女の子の事を絶対に守って見せる

「さて、じゃあ頂くとするかな」

僕は目の前の丸焼きになった猪もどきを氷で作った剣で綺麗に切り分けて、食べやすい大きさに切った猪もどきのお肉を持ってきたお皿に適当に盛りつける。芳醇な肉の匂いに、喉を鳴らす

「いただきます。はむ、もきゅもきゅ・・・ん♪美味しいにゃ♪」

口の中に入れた瞬間、お肉がとろけて口一杯に肉の旨みが広がる。猪もどき、見た目は不細工だけどお前の肉は上品な味だ。思わず猫語になっちゃう程だね。ああ、幸せ

僕がお肉に舌鼓をうっていると、背後の茂みから二つの気配を感じた

「——そんな所にいないで良かったらどう？このお肉とっても美味しいよ。お皿も予備の奴持ってきてるし」

「っ!?」ビクッ

すると、猫耳と尻尾を生やした白い髪と黒い髪の2人組が恐る恐るといった感じで出てきた。まさかじゃん娘だったとは・・・

「い、良いの・・・?」

「寧ろみんなで食べた方が美味しいしね。待ってて、すぐに盛り付けるから」

そう言つて僕はお皿を二つに肉を盛り付けて二人に渡す。少しの間顔を見合わせていた2人だったけど、僕にお礼を言ってお肉を食べ始める。そして一口食べた2人は顔一杯に喜色を浮かべた。凄い幸せそうだね、僕も傍から見るとあんな感じなのかな?

それから凄い勢いで食べ始めた2人だけど、白い小さな女の子の方は黒い子よりも早いペースだった。よっぽどお腹がすいてみたいだね

「慌てなくてもまだまだたくさんあるから大丈夫だよ?」

「モグモグ・・・」コクリ

「あの、本当にありがとうね」

「全然気にしないで。あつ、水もどうぞ」

僕はコップも出して魔法で水を注いで二人に渡す

「うん、ありがとにゃ」

「・・・おかわり、お願いします」

「はいはい、ちよつと待っててね」

そしてお代わりを続けて結構あつたお肉はあつという間に無くなつていった

「(ゴ)馳走様」

見事完食。ここまで綺麗に食べつくすとある意味壮観だねえ。後で骨は地面に埋めておこうつと

「ふうー、美味しかったです」

「だにゃ、ありがとうね」

「お粗末様でした。そう言えば自己紹介がまだだったね僕の名前はシル、よろしくね」

「私の名前は黒歌、でこっちは私の妹の白音だにゃ」

「どうも」ペコリ

「二人はどうしてこんな所に？結構ここって危ないよね？」

そう言うのと黒歌が少し悲しそうな顔で僕に自分たちの事を話してくれた。二人は妖怪・猫又という種族の中でも特に強い力を持つ猫？と呼ばれるもので、家族と一緒に暮らしていたが、少し前に両親が病気で亡くなり、誰も自分たちを助けてくれる人がいなかった黒歌達は、この森に迷い込み猛獣から逃げ回ってお腹がすいていた所に美味しそうな匂いにつられてここまでやってきたらしい。まだ幼い二人が随分と苦勞をしたんだな・・・

「それで黒歌達はこれからどうするの？」

「・・・分からない・・・でも、白音だけは絶対に守るにゃ！」

「姉さま・・・」

白音を抱きしめて宣言する黒歌。なら・・・
「わかった。ちよつと待っててね」

僕はそう言って立ち上がり、近くの大きな木まで近寄る。そして、手に氷で出来た剣を持ってその木を斬る

「はっ！」

一拍の間を置いて木は切断され、材木がたくさん出来た

「こんなもんでいいかな？」

「な、何をするつもりにや？」

「何ってここに家を建てるんだよ？」

「い、家ですか？」

「うんちよつと待ってて、すぐに出来るから・・・」

トントン！カンカンカンツ——

そして5分くらい結構立派なウッドハウスが出来上がった。うん、我ながら上出来だね

「うわあ〜」

2人は驚いてる。まあ、5分で家が出来たらそりゃあ驚くよね。これも身体能力の高さとちよつと使った魔法のお蔭だよ

「さ、出来たよ。黒歌達の家」

「え・・・？」

今度は揃ってキョトンとした表情になる黒歌達。可愛いねえ

「・・・はっ！ど、どういう事にや!?!説明してほしいにや！」

「コクコク！」

「だって黒歌達行く所無いんでしょ？本当なら僕が住んでる所に来てもらった方がいいんだけど、僕も居候してる身だから決める事は出来ないんだ、ゴメンね。で、行く所がないなら作っちゃえって感じで作りました。ちなみにベットとかもちゃんとするし、シャワーやお風呂も魔法を使って出るようにしてあって、ご飯とかも僕が毎日人間界の昼間と夜に作りに来るし、冷蔵庫にも作っておいて置くから生活面で心配する事はないよ」

「ど、どうして私達にそこまで・・・？」

「んー・・・なに、単なるお節介だよ。それにここで会ったのも何かの縁だしね」

「あ、ありがとうございます・・・本当に、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「良いつて良いつて、あ、ちなみにこのウッドハウスの半径50メートルは結界が張ってあるから猛獣達も近寄って来ないから安心していいよ。今日はもう疲れただろうから早くお休み、ベットはフカフカだからぐっすり眠れると思うよ。僕はまた明日来るからね」

2人は最後まで僕にお礼を述べて、ウッドハウスに入って行った。僕はそれを確認して転移魔法を発動させ、人間界に帰った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、僕が人間界に帰ってきたらまだ朝の4時だった。まだ藍華を起こすには早いので、僕は港町の朝市に向かう事にした

「今日のおすすめはと・・・マグロと鯛が良いが入ってるのか。白音は一杯食べるだろうからマグロは丸々一匹でいいかな。あとは・・・アワビ、メバル、車海老か。よし！美味しい朝ごはんをいっぱい作ってあげよつと）すみません！この紙に書いてあるやつ全部ください」
「あいよ、ちよつと待っててくださいね。全部で350万円になります」

「はい、どうぞ」

ちなみに今の僕には認識阻害用の魔法がかかっている、見た目は業者さんに見えるようになってる。あとお金はこの前買った宝くじの賞金だよ。金運も上がってるみたいだね。正直当選番号を見た時は結構混乱したよ

「はい、お待ちどうぞさん。毎度あり！」

「ありがとうございます」

僕はカートに商品に乗せて人がいない所まで移動して買ったものを異空間の倉庫に入れ込む。これは本当に便利で、入れたものは例えばアツアツのラーメンとかは何時間後に取り出してもアツアツのまままで麺も伸びてないのだ。反対に冷たいアイスを入れたら冷たいま

まっっていう感じなんです

そして僕はまた猫に変身して転移魔法を発動させて桐生家に戻ってきました。時刻は6時半、もう少ししたら藍華を起こす時間です。僕は藍華のベットの傍で藍華の寝顔を眺めます

「うん・・・シル・・・」

藍華が寝言で僕の事を呼ぶ。全く可愛いじゃないか。そして今僕の事をロリコンと思った人、出ておいで。僕の爪で思いつきり引っ掻いてやるぞお

そして7時になったので僕は藍華を起こす。これは僕がこの家に来てからの日課となってるんだ

「ほら藍華、朝だよー！起きて起きて」にゃー！にゃにゃー

「ううーん・・・もう朝、なの？」

「(そうだよー、だから早く顔とか洗っておいで)にゃー」

眠そうな藍華のパジャマを噛んで、洗面所まで引っ張っていく

「わかった、ちゃんと行くからシル、引っ張らないでえー」

そして洗面所に藍華が行った事を確認した僕は先にリビングに向かう。キッチンには藍華のお母さんが朝食を作っていた

「あらシルちゃん、おはよう。藍華はもう起きたかしら？」

「(おはようママさん、藍華は洗面所だよ)にゃー」

「そう、いつも藍華を起こしてくれてありがとうね。もう少ししたら朝ごはん出来るから食卓で待っててね」

「(わかった)にゃー」

何故か藍華のお母さんとは会話がちゃんと成立する。もしかして猫語がわかるんだろうか？そして食卓で待っていると、まだ少し眠そうな藍華が食卓にやってきた

「おはよーシルー」

「(おはよう、藍華)にゃー」

「はい、朝ごはん出来たわよー」

今日は焼き魚ですか。うん、いい匂いでおいしそうだ

「いただきます・にゃー(いただきます)」

そして、朝食を食べ終えた藍華は小学校へ向かう

「じゃあ、お母さん、シル。行って来ます！」

「いつてらっしやい、車には気を付けてね(にやー)」

そして、藍華が家を出たのを見送った僕も、そろそろ出ようかな

「(じゃあ、僕も行ってきますね)にやー」

「あら、今日もお出かけね。藍華が帰ってくる頃には帰って来て頂戴ね」

「(了解しました)にやん」

「いつてらっしやい。シルちゃんも車には十分気を付けるんだよお」

「……やっぱりお母さんは僕の言葉がわかっているのかな？ 藍華より会話が成立するんだけど、これって偶然？」

そして僕は家の近くの林で転移魔法を発動して、黒歌達のウッドハウスに転移した。黒歌達はどうかやまだ眠っているようなので、先に朝食を作っておこう。キッチンで異空間の倉庫から食材を取り出し、調理していく。今日の食材は本マグロと丸々一匹と鯛とアワビと車海老とメバルと途中で買ったお米と野菜諸々

お米は鯛と一緒に炊き込んで鯛めしにして、マグロはお刺身にして……アワビと車海老はそのまま網で焼こうかな。メバルはお汁に入れてあとはサラダ、こんな感じでいいかな

「よし、いっちょ頑張りますかな！」

「うん、ここは……知らない天井だにや」

ネタを言い終えた黒歌が起きると隣には妹の白音が寝息を立てていた。こんなに安心して眠れたのは久しぶりだにや。そして黒歌は昨日の事も思い出した

「夢じゃ無かったんだね……ん、いい匂いだにや」

「姉さまおはようございます」

さっきまで眠っていた白音はパツチリと目を覚ましていた

「白音おはよう、この匂いで起きちゃった？」

「はい、とてもいい匂いです」

二人は揃って匂いのするキッチンまで行った。そこには昨日会ったシルがエプロンをつけて料理を作っていた

「あつ、黒歌、白音おはよう」

「おはようございます（だにゃ）」

「もうちよつとでごはん出来るから、机に座って待っててね」

二人は言われた通り机に座ってシルの作る朝食を待っていた。キッチンから漂う匂いで白音は涎が出てしまっていた。かく言う黒歌も先程からそわそわとして落ち着きがない

「お待たせく出来たよ」

そう言つて机に並べられたご馳走に2人は同時にのどを鳴らした

「さあ、召し上がれ」

「い、いただきます!!」

黒歌と白音は昨日よりもハイペースでドンドン食べ進んでいく。山盛りだったマグロのお刺身も直ぐに半分くらいになってしまった。そして、黒歌と白音はシルが作った料理を綺麗に全部食べてしまった。その内半分以上は白音の胃に消えて行った事に、シルは戦慄していた

「ご馳走様でした!」

「二人とも昨日あんなに食べたのによく食べたね」

満腹なお腹を撫でて満足そうな2人に、食器を片付けるシルはとても嬉しそうな笑顔だった

「それはシルの作った料理が美味しすぎるからだにゃ。もうお腹いっぱいだにゃ」

「本当にとても美味しかったです」

「良かった。あ、デザートもあるんだけどお腹一杯ならいらな・・・」

「デザートは別腹にゃ!（ですー）」

「ふふつ、待ってて。今持ってくるから」

そして、デザートをみんなで一緒に食べたシル達はお茶を飲んでゆっくりしている

「ふう、お茶が美味しいにゃ。シル、改めてお礼を言わせてほしいにゃ。本当にありがとう。私は今とっても幸せにゃ」

「私からもありがとうございます。姉さまと一緒に私もとても幸せです」

「良いつて良いつて、二人が幸せで僕も嬉しいよ」

「それにしてもシルって何でも出来るんだね。家も作っちゃうし料理も上手だし昨日の猪みたいなのやつも倒しちゃうくらい強いし。シルっていったい何者なんだにや?」

「私も気になります」

「んー、僕は一応人間だよ。でもいろんな生き物に変身できる能力も持ってるんだ。こんな風に」

そう言つてシルは猫に変身して見せ、また人型に戻った。

「へえ、そんな力を持つてるんだ。人間なのにすごいにや」

「ビックリです」

「まあ、基本的には猫の姿でいる事が多いんだけどね。僕の容姿って結構目立つから。ズズズ」

「成程にや、確かに銀髪オツドアイなんて人間界じゃ目立つわね。ズズズ」

「でも、髪もとっても綺麗です。目もまるで宝石みたいです。ズズズ」

「ありがとうございます、そう言つてくれると嬉しいよ。でもどうせならカッコいいつて言われる方がいいかな、男には。ズズズ」

「ぶふっ!」

黒歌と白音は飲んでいたお茶を勢いよく吐き出し、綺麗な虹が出来た

「うわっ!?!突然どうしたの?」

「ケホツケホツ!し、シルって男だったにやん!」

「ああ、そう言えば言つてなかったね。僕はこんなんだけど男だよ。ズズズ」

「ケホツ、今までで一番の驚きです」

「あはは、まあそういう事だけど、これからもよろしくね?」

「勿論だにや(です)」

「ありがとうございます・・・ふあ、さて、じゃあ僕はちよつと一眠りしようか

な。客間のベットを借りるね」

そう言つてシルは客間のベットで一眠りする事にした。そしてシルがお昼過ぎに目を覚ますと、シルが寝ていたベットには黒歌と白音が一緒に寝ていたそうな

学校と愚痴

「はい、 $1+5=6$ いくつでしょう。この問題分かる人？」

「はいはい」

僕は今日、藍華の小学校まで藍華の様子を見に来ている。僕は校舎の近くの木に登って藍華がいる教室をのぞく。どうやら今は算数の時間みたいだ

「じゃあ・・・兵藤君」

「はい！答えはイチゴです！」

「はい、兵藤君はバケツを持って廊下で立ってようね」

「ええ!？」

「はいはいはい！」

クラスに一人は、ああいう子いるよね

「はい、じゃあ今度は桐生さん」

お、藍華が当たった。頑張れ藍華！

「はい！答えは6です！」

「はい、よく出来ましたね」

うんうん、流石藍華だ

「桐生！そこはボケるところだろ！」

「うっさい！あんたは黙って廊下に立ってろ！」

「はい兵藤君、バケツ追加ね」

「ファッ!？」

「はいはいはい！」

うん、藍華はちゃんと学校生活を送れているみたいだね。そして4時間目も終わり、給食の時間になった。机をくっつけてみんなで食べる風景は見ていて懐かしいなあ。今頃黒歌達もお昼ご飯を食べているころかな。今日は朝に黒歌達の昼食と夕食を作ってきたから藍華の学校生活をちゃんと見ておこう。・・・これは決してストーカーとかではないからね

ワイワイ、ガヤガヤ

みんな楽しそうにいろんな話をしながら給食を食べている。

「やっぱりおっぱいはいいよな！」

「だよな！おっぱいは最高だぜ」

「今日もあのおっぱい紙芝居のおじさんの所に行こうぜ！」

「二ビバ、おっぱい!!!」

・・・うん、まあ子供ならそういう子もいるよね。ああ言う子は将来過去の自分を思い出して後悔するんだよね。

「おー！プリンが一個残ってるぞー！」

「二よっしやー！二二」

「そういや今日は田中が風邪で休みだったな！」

「田中ナイス！」

「お前のプリンは無駄にしないぜ！」

顔は見た事ないけど田中君、ドンマイ。

「食べたい人挙手！」

「二二はい！二二」

「よし！じゃあじゃんけんだ！」

田中君のプリンを巡ってクラス全員が壮絶な戦いを繰り広げた。

「俺はこの拳に俺のすべてを賭ける！」

「負けられない！私は負けるわけにはいかないの！」

「神様、俺に力を貸してくれ！」

「この戦い、勝つのは私よ！」

「俺に勝てるのは・・・俺だけだ！」

みんなすごいね。セリフだけ聞いたたらカッコいいけど、これって田中君のプリンを巡ったじゃんけんだからね？

そして、じゃんけんはドンドン進んでいき、最後に二人が残った。

「全てに勝つ僕は、すべて正しい」

1人はなんかどこぞのバスケット選手みたいな事を言ってる男子。そしてもう1人は、

「私は負けられない！シル、私に力を貸して！」

はい、藍華です。君もそんな事言ってるんだね。お兄さんびつくり

だよ

「勝つのは僕だ」「勝つのは私よ」

「じゃんけん、ぽん!」

勝ったのは・・・

「やったー!私の勝ちー!」

藍華だった。見事勝利した藍華はプリンを高々に掲げている。そして負けた男の子はガツクリと膝をついていた。やったね、藍華。みんなが藍華に羨ましそうな視線を向ける中、藍華は幸せそうにプリンを頬張った。

そして昼食も終わりお昼休みになるとみんなは校庭に出てボール遊びや縄跳びといった子供らしい遊びをしていた。藍華は教室で机に座って友達と話している。

「それでね、ん? ってシル!」

おっと、ばれてしまったようだ。まあ、今は普通に教室の中から見える位置に移動してたから当然かな

「(ヤッホー藍華) にゃ〜」

「何々? 藍華あの猫知ってるの?」

「うん、ほら前に話してたうちで飼ってるシルだよ」

「わくホントに目の色が左右違うんだ〜」

「それに綺麗な銀色なんだね」

「ねえ藍華、シルちゃんはどうしてここにいるの?」

「多分、いつもの散歩じゃないかな? よく私が学校に言ってる間は散歩してるみたいだし。シル、こっちおいで」

「にゃ〜」

僕は木から窓に飛び移って藍華の元まで歩み寄る。藍華は僕の手を抱え上げて机の上に僕を乗せた

「改めてこの子名前はシルだよ。ほらシルも自己紹介して」

「(いつも藍華がお世話になってます) みゃー」

ペコリと頭を下げて挨拶する

「「可愛い〜♪」」

「ねえ！ちよつと抱っこさせてもらってもいい？」

「私も！」

「撫でてでも噛んだりしない？」

「いいよ。あとシルはとっても賢いから噛んだりはしないから安心していいよ」

それから僕は藍華のお友達に抱っこされたり撫でられたりして休み時間を過ごした。そして昼休みが終わり、午後の授業がはじまつたんですが、

「さあみんな、自分の好きな物を書いてね」

「シル、じつとしててね」

「(了解)にゃー」

5時間目はみんなでスケッチの時間だったみたいで、僕はクラスの生徒達のスケッチ対象になっています。授業が始まるんで帰ろうとした僕を教室に入ってきた先生が見つけて、僕がここにいてもいいと言ってくれたのです。

「(しかし、ジツとしてるのも中々大変だね。でも・・・)」

「うくん、もうちよつと尻尾は長いかな？」

「耳は・・・こうで。目は・・・」

「先生ー！銀色ってありますかー？」

「シルちゃん、ちゃんとジツとしてる」

「すごいね藍華ちゃん、シルちゃんって」

「うん！」

「(みんな頑張ってるみたいだし、頑張ろうっと)」

「イツセー！お前何描く？」

「そんなのおっぱいに決まってるだろー！」

「だよなー！」

「(君たちはどれだけ好きなんだい・・・)」

そして、一時間くらいして授業は終わった。流石にずっと動かないでいるのは肩がこるわ

「はーい、みんなよくかけましたね。今日描いたものは教室に飾りまーす。兵藤君と松田君と元浜君以外。三人は放課後残って教室の

掃除です！だから今日は三人以外帰ってよし！

「「「やったー！」「」「」「何っ!？」」

ああ、まあドンマイだね。

「先生！何ですか!？」

「俺たちの作品（おっぱい）のどこに不満が!？」

「大きさも完ぺきだったはずです！」

「何か無駄に良い出来だったからムカついた」

「「何ですかそれ!!」」はっ！もしかや先生の胸が小さいから・・・」

「よし、みんな！今日だけじゃなくって、これから一週間、いや一か月は教室の掃除はしなくてもいいぞー！あと、三人は掃除が終わった後
O☆H A☆N A☆S H Iだ」

「「ファッ!？」」

おお、掃除頑張れ三人組。

「さっ、あんな馬鹿ほっつといて帰ろっかシル」

「にゃ〜」

「バカとは何だ！」

「「そっだそっだ！」」

「本当の事ですよ？シルの方がずっと頭がいいわよ」

「「猫に負けるわけがないだろう！」」

「じゃあ、証明してあげる。先生、何か問題出してください」

「うん？じゃあ・・・7+5+9+6+8=？」

「「いきなり難しすぎでしょ!!」」

確かに、小学校一年にはちよつと厳しいんじゃないかな？

「シルなら解けるわよ。ね？シル」

まあ、解けるけどね

「にゃ」

僕は藍華の机の上にある鉛筆を啜えて空いている紙に答えの数字を書く。そして紙を啜えて先生の元に持っていく

「にゃ〜」

「あら、ありがとう。どれどれ・・・まあ、正解！答えは35です。本当に賢いわね〜」

「「「おお〜!」」」

「ほらね」

「「Orz」」

藍華に言われて、三人はガツクリと膝をついた。ちよつとかわいそ
うだとは思うけど・・・

「よくやったねシル。偉いぞ〜それ、うりうり〜!」
「にゃ〜」

こうして、藍華に撫でもらえるからね。ゴメンね?

そんな感じで、僕の藍華の学校生活見学は終わりました。そして、
帰り道。藍華の頭に乗って揺さぶられている時、僕は今日会ったあの
兵藤君、だったかな?その子の事について考えていた。

「(彼からは何か不思議な力を感じたけど、あれは何だったんだろう
?)」

すぐく小さな力で、近くに接近してないと全く分からないくらいのも
のだったけど、何か特別な力の気がするんだよね〜。今度神様に聞
いてみようつと

『呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん!』

噂をすればなんとやらつていう奴かな。というかそんなキャラで
したっけ?!

『自分探しの最中DAZE☆』

『そうなんですか・・・辛い時はいつでも相談に乗りますよ』

『ありがとう・・・今度一度話を聞いてもらつていいかな?』

『もちろんです。で、神様。あの子から感じるあの不思議な力は何な
んですか?』

『それはね、彼、兵藤一誠君に宿っている「神器」というものだよ』

『神器?』

『簡単に説明すると、神器って言うのは前に話した死んだ聖書の神が
作った人間あるいは人間の血を引くものに宿る不思議な力の事なん
だよ。中にはドラゴンとか魔獣とかを封印した神器もあつて、そう
いった神器はとても強力な力を持つてるんだ。まあ、大半の人は自分

の中の神器の存在に気がつかないまま生涯を終える人も多いんだけどね』

『へえ、じゃあ兵藤君に宿っている神器ってどんなの何ですか?』

『彼の神器は「赤龍帝の籠手」というもので、かつて三大勢力を壊滅一歩手前まで追い込んだ二天竜の片割れ、赤龍帝ドライグの魂が封印されているんだ。神器の中でも神すら滅ぼすことが出来る力があると
言われている13種の神滅具(ロンギネス)の一つだね。ちなみに能力は所持者の能力を10秒ごとに倍加させる力と、倍加した力を他者に譲渡できる力を持つてるよ』

『何それ、チートじゃないですか。そんなにすごい力が彼に宿ってたなんてびつくりです』

『まあ、この世界、「ハイスクールD×D」の主人公だからね』

『え?・・・そうなんですか?』

『YES☆MA☆JI☆DA☆ZE☆』

『分かりました。今日の夜は僕に全部悩みを吐き出してください。誰かに話すことで少しは楽になりますから。黒歌達にご飯を作ったらゆつくりお話ししましょう』

『うん、ありがとう・・・』

テンションがさつきと偉い違う。これは、相当な事みたいだね

そしてその日の夜、日が昇るまで神様の悩みと愚痴を聞いてあげた。お酒の力も借りて胸の内を全部吐き出した神様は、朝にはだいぶスッキリとした声になっていた。

『いや、ありがとう!誰かに話すだけでだいぶ楽になったよ!』

神様、苦労してるんだね・・・今度から定期的に話を聞いてあげよう。うん、そうしよう。話の内容は・・・女神で察してください。

『あ、ちなみに君にも何個か神器あるからね』

『え?そうなんですか?』

『うん、ほら君が滅龍魔法を使う時にマフラーが出るでしょ?あれだよ』

『マジですか。何か火竜の翼撃を出来る様になった時から出てくるよ』

うになって何だろう？って思ってたんですよ。じゃあ、他の神器って
どんなの何ですか？』

『それは秘密だよ、出てきてからのお楽しみって事で。じゃあそろそろ俺は仕事に戻るね。今日は本当にありがとう。またね』

それっきり神様の声は聞こえなくなつた。出てきてからのお楽しみかあ。どんなのだろうなあ？

「おっと、そろそろ藍華を起こさなくっちゃ！」

こうして今日も僕は藍華を起こしに黒歌達の今日の朝食の献立を考えながら、藍華のベットまで行くのでした。

誘拐と別れ

「ふう〜・・・さて、これからどうしようか」

僕の周りには倒れた複数の恐らく悪魔と壊れた建物の瓦礫で一杯だった。どうしてこうなったのかは少し時間を遡る。

〜少し前〜

僕はいつもの様に黒歌達に藍華が学校に行くのを見送った後、黒歌達の朝ごはんを作りに移り魔法を使ってウッドハウスに移した。しかしそこで異変に気がついた。机や椅子などは倒されており、所々まるで争ったかのように散らかっていた。僕はすぐに黒歌達を探したが、家には誰もいなかった。外に出た僕は黒歌達の気配を探った。すると、ここから少し離れた場所に黒歌達の気配を感じ、急いでそこに飛んでいった。

「ここかー」

僕が見ついたのはそこそこ大きな屋敷だった。この中から黒歌達の気配を感じる

『ええい！大人しくしている！』

『うっ！』

『白音?! よくも白音をつ！』

僕は屋敷から聞こえたそんな声に、屋敷の壁を魔法で破壊し、中に入った。そこには頬に殴られた様な跡がある白音を抱きしめた黒歌と、二人を取り囲むようにして複数の男たちがいた。

「な、なんだ貴様は!？」

その中でまるでヒキガエルみたいな顔の奴が僕に向かって叫ぶが、僕はそいつの言葉を無視して白音と黒歌に駆け寄る。

「白音、黒歌！大丈夫!？」

「し、シル！白音が殴られて怪我を！」

白音は気絶していて殴られたときに切ったのか、口からは少し血が出ていた。

「!?いつの間に！」

「お前も大人しくしている！」

「煩いっ！」

『ぐあっ!？』

僕は片腕だけ火竜の翼撃を発動して、周りの奴等を薙ぎ払った。

「待ってて、すぐに治療するから」

僕が念じると白音の口元が光、傷はすぐに塞がって血の跡も消えた。

「これでよし。それで黒歌、いったい何があったんだい？」

「いつもみたい家にシルを待ってたらいきなりあいつらがやって来たんだにや！そして無理やりここに連れてこられて私の従属になれ、って言われてイヤだ！って言ったら殴られそうになった私を庇って殴らせまいってした白音が殴られたんだにや！」

「ぐ、ぐう、よ、よくもやってくれたなー!!」

さつきふっ飛ばした悪魔の一人が起き上がってきた。その顔はまるでヒキガエルのようだった

「シル、あいつにや！白音を殴ったのは！」

「そうか・・・わかった。黒歌、ちよつと家で待っててね。すぐに終わらせるから」

黒歌が領き、僕は転移魔法を発動させて黒歌達をウッドハウスへ転移させた。

「貴様！よくも邪魔をしてくれたな！見た所人間の様だな。人間風情がこの私をつ！貴様は絶対に許さん！」

そうやってヒキガエルみたいな顔のやつが僕に向かって吠える。許さないだつて？

「それはこっちのセリフだよ」

「っ!？」

自分でもびっくりするくらい冷たい声が僕の口から出た。そしてヒキガエルは僕から発せられた殺気で体を固まらせた。

「(な、何なんだこいつは!? 本当に人間か・・・!)」

「さて、黒歌達してくれたお返しをしないとね」

僕は指をながらゆっくりとヒキガエルに近づく。

「わ、私は上級悪魔だぞ! 私をどうにかしようものなら、魔王様が黙っていないんだぞ!!」

ヒキガエルみたいな顔の悪魔が狼狽した声で僕に向かって叫ぶ。

上級悪魔? 魔王?

「上等だ! お前らこそ覚悟は出来てるんだろうな? 僕の家族、黒歌や白音に手を出したことをっ!! 僕は、僕の家族に手を出す奴は上級悪魔だろうが魔王だろうが関係ない! 全員ぶっ飛ばす!」

「こ、このっ・・・人間風情がっ!!」

ヒキガエルが僕に向かって魔力弾を放ってくるが、それを躲して拳に炎を纏わせる

「紅蓮火竜拳!!」

「べぶらっ?!?!」

「はああああああああ!!」

僕はヒキガエルの顔に連続で力一杯拳を放つと、拳はヒキガエルの顔や体にめり込み、ヒキガエルは壁を突き破ってそのまま木々何本もを薙ぎ倒しながら外に吹っ飛んでいった。

そして冒頭に戻ります。

「取り敢えず黒歌達の所に戻ろう」

僕は再び転移魔法を発動させてウッドハウスに転移した。

ウッドハウスに着くと、黒歌と目が覚めた白音が駆け寄ってきた。「ゴメンね二人とも、怖い思いをさせて。僕がちやんと悪魔達も入って来られないように結界を張ってれば、こんな事にはならなかったのに・・・」

「うんうん、そんな事ないにや！シルは全然悪くないにや！」

「そうです！シルさんは身寄りのない私達にとつても良くしてくれました！悪いのは全部あいつ等です！」

二人は泣きながらもしつかりと僕に言葉を述べた

「ありがとう二人とも・・・さて、これからどうしようか？」

「ねえシル、あのヒキガエルはどうしたんだにや？」

「うん？あのヒキガエルなら僕が本気でぶっ飛ばしといたよ。僕の大切な家族に手を出したんだし。でも、あいつしぶとそうだしなあ」

それにあいつ（ヒキガエル）なんか偉い奴みたいだったし（魔王様がどうのこうの言ってたし）、下手したら悪魔全員を敵に回しちゃったのかな？取り敢えずここではもう暮らせないなあ

「か、家族・・・？」

「いいんですか？」

「うん？だって僕達つてもう家族でしょ？ってあれ？どうして二人とも泣いてるの？あ、もしかして嫌だったかな？」

「二違うにや!!・違います!!」

「おおう」

近くでいきなり大声出されたから耳がキーンってするね

「これは悲しくって泣いてるんじゃないやなくてうれし泣きにや。ね？白音」

「はい、とても嬉しいです」

「そっか・・・」

僕は2人を優しく抱きしめると、二人も僕に抱き返してきた。



そして、人間界の真夜中、僕は転移魔法を使い、藍華の部屋に来ていた。お別れを言う為に。眠っている藍華の頬には涙の跡があった。

「すう・・・すう・・・」

「(ゴメンね藍華)」

僕は今日でここを離れないといけない。僕がこのままここにいる

と藍華達に迷惑がかかってしまう。だから今日でお別れだ。

僕は藍華の枕元に一つのビー玉を置く。ビー玉には赤、青、シルバーの三色の綺麗な模様が入っていた。

「藍華、これは僕からのプレゼントだ。このお守りは僕の代わりに藍華の事を悪い者から守ってくれるよ。大事にしてね。バイバイ、藍華。元気だね」

最後に別れの挨拶を済ませた僕は、そっと藍華の部屋から出て、扉を閉めた。

玄関から外に出ると、黒歌と白音がいた。僕が別れの挨拶を言いに行く間、ここで待ってもらっていたのだ

「お待たせ、二人とも」

「お別れは済んだんですか？」

「うん」

「シル、本当にこれでいいのにかにや？」

「いいんだ、これで。それに、渡すものは渡してきたしね」

「それってこの綺麗なビー玉の事かしら？」

「二つ!？」

その声に振り返ると、玄関には藍華のお母さんがビー玉を持って立っていた

「ど、どうして・・・」

「私ね、昔から狸寝入りが得意なのよ☆シルちゃんが私のベットの傍にこれを置いて行った時からバツチり起きてたのよ」

「マジですか・・・」

「マジです♪」

ウインクと共にサムズアップで僕に答える藍華のお母さん。見た目のせいか違和感が全くない。寧ろ似合っている。いや、今はそんな事じゃなくって

「いつから僕の事気がついていたんですか？」

「うくん。なんとなく、かしら?」

「なんとなくですか・・・」

「初めて会った時から普通の猫ちゃんとは違うな〜って思ってたけ

ど、人型になれるなんて知ったのは今日が初めてよ？しかもこんなに可愛らしい感じだったなんて、もつと早く知りたかったわ〜」

すごいのかすごくないのかよくわからないな藍華のお母さんって

「男が可愛いって言われても微妙なんですが・・・あと、今まで黙ってごめんなさい」

「いいのよ、それくらい。それよりも・・・行っちゃうのね」

「はい、僕がここにいと藍華や貴方に危険が及んでしまうので。そのビー玉はお守りです。二人の事を守ってくれますよ。だからちゃんと持っていてくださいね・・・では、今までお世話になりました」

最後に頭を下げて去ろうとした時、背後の僕に向かって藍華のお母さんがこう言った

「いつでも帰ってらっしゃい、ここは貴方の家なんだから、私も藍華も待ってるわ。藍華には私が上手く言っておくわ。勿論、そこにいる二人も一緒に帰っていらっしゃい」

「わ、私達もかにゃ？」

「ええ勿論よ。だから例え何年かかってもいいから、ここに帰ってきてね」

「・・・はい」

僕の声は寒くはないのに少し、震えていた。

そして、僕達は藍華のお母さんに見送られて桐生家を去った。

その数日後、シルの言っていたヒキガエルの様な顔の上級悪魔によつてシルは危険生物認定にされ、はぐれ悪魔と同じように見つけた場合、討伐されるようになった。それからシルの事を見つけた悪魔達や墮天使、エクソシスト、時には天使が何度も彼の事を討伐しようとしたが、その全員が彼一人に返り討ちにあった。しかし、彼の事を討伐しようとした中には、無傷で済んだ者もいた事と、SS級の凶悪で討伐困難と言われていたはぐれ悪魔も何体も葬っていることから彼の事を恐れる者と、英雄視する者で分れている。彼の事を皆は『オツドアイの銀猫』と呼び、その名と実力は冥界や天界、さらには神々達までに広く知れ渡る事になった

そして、シルが桐生家を去って約10年程が経った頃、

「あ、あの！兵藤一誠君、ですよね？」

「は、はい！そうですけど、俺に何か？」

「好きです！私と付き合ってください！」

「ええ!?お、俺でよかったら喜んで!!」

物語が今、始まろうとしていた。

旧校舎のディアボロス 始まりと思い

SIDE イッセー

おつす！俺の名前は兵藤一誠、高校二年生だ！今日の俺は人生で最っ高の気分だけ！なんと俺に彼女が出来たんだ！この前、女子剣道部の着替えを覗いて女生徒達に散々叩かれて、暗い青春だとかこれから俺の人生は華も実も無く、おっぱい触れる事すら叶わず終わっちゃうのかあ、って軽く絶望してた時、声をかけられたんだ！

「どうしたのイッセー君？」

それがこの子、名前は天野夕麻ちゃん！黒髪のとつても可愛い子で、俺はこの子に告白されたんだ！学校じゃあ同級生の二人と合わせて『変態三人組』と呼ばれて女子からはゴミを見るような目を向けられているこの俺がだぜ！ついに俺にも春が来たぜー！『変態三人組』の残りの二人に、俺が彼女が出来た事を報告したら血涙出しながら悔しがってたなあ。そして今日は夕麻ちゃんとデートをしてるんだ！こんな可愛い子とデートできる日が来るなんて、今日は本当に最高だぜ！

「何でもないよ夕麻ちゃん、次はどこに行こっか？」

「うーんと、あ！あそこに行きたい」

「よし！じゃあ行こうか！」

それから俺達は夕方まで洋服屋や、ゲームセンターといったいろんな所を回ったり、一緒に昼食を食べたりした。本当に今日は楽しかった。夕麻ちゃんも楽しんでくれたみたいで良かったぜ。そして、俺達は夕暮れの公園に来ていた。

「一誠君、今日はとっても楽しかったよ」

噴水のあたりで夕麻ちゃんが俺に振り向いて微笑む。夕日を浴びたその顔はとても綺麗に輝いていた。

「俺もスッゲー楽しかったぜ夕麻ちゃん！」

「そっか。ねえイツセー君、私達の記念すべき初デートって事で、一つ、私のお願いで聞いてくれる？」

お、お願いって、これはもしかしてキスか!?

「な、何かな、お、お願いって」

俺は期待に胸を膨らませながら夕麻ちゃんの言葉を待った。

「死んでもらおうか」

しかし待つていたのは夕麻ちゃんの声ではなく、背後からかけられた知らない男の声と、俺の胸から突き出た槍の先だった。

槍が抜かれてありえないくらいに血が胸から噴き出すのを見ながら、俺はそのまま地面に倒れた。地面に俺の血がドンドン広がっていく。

「貴様は我々にとって危険な存在だ。恨むならその力を宿した神を恨むんだな」

コートを着た男が倒れた俺に向かってそう言う。槍を持つてるって事はこいつが俺を刺したのか。危険な存在って何なんだよ・・・

「さて、仕事も終わった事だ。レイナー様、帰投しましょう」

「ええ、わかったわ。ゴメンねイツセー君、これは上からの命令なの・・・バイバイイツセー君、今日は結構楽しかったわ」

夕麻ちゃんと俺を刺した男は背中から黒い翼を生やして飛んでいった。

残された俺は仰向けになって自分の手についた血を眺める。そして思い浮かぶのはこの血と同じ真っ赤な髪を持つあのんだ

リアス・グレモリー先輩。うちの学校、駒王学園の三年生で『駒王学園の二大お姉さま』って言われている学園のアイドルで、人間離れ

した美貌とどこまでも赤い髪を持った人だ。

「(どうせ死ぬんなら、あの人の胸で死にたかったぜ)」

すると、イツセーの傍に魔法陣が生まれ、魔法陣から人が現れた。

「貴方ね、私を呼んだのは」

「(だ、だれだ・・・?)」

俺はもう目が霞んでいてその人物がよく見えない

「死にそうね。傷は・・・へえ、面白い事になってるじゃないの。そう、貴方がねえ・・・。本当に面白いわ」

もう何を言ってるのかも分からない。

「どうせ死ぬんなら私が拾ってあげる。貴方の命、私の為に生きなさい」

俺の意識はゆっくりと落ちて行った。

SIDE OUT



ガチャッ

「ただいまにやー!」

「ただいまです」

「お帰り二人とも。今日は学校どうだった?」

台所から二人に挨拶をするのは、エプロンをつけた銀髪オツドアイの少年だった。

「まあ、いつも通りかにや」

「そっか」

「今日の夕食は何ですか?」

「今日はね、二人の好きな魚が安かったから魚料理だね。もう

ちよつとで出来るからね」

「本当!? やつたにや! 流石は私達の事よくわかつてるね、シル!」

「うわ!? いきなり抱きつかないでよ黒歌、台所じゃあ危ないよ」

「ごめんにや」

「全く、姉さまはもつとちゃんとして下さい」

「うっ、白音の言葉が痛いにや」

「ははは、じゃあ二人とも、食器を出しておいてくれるかな?」

「はい、ほら姉さま。いつまでも抱き付いていないで食器を出すくらい手伝ってください」

「うう、わかつたにや」

そして、黒歌と白音が食器を出し終えた頃に夕食が出来た。料理を大きな机に並べてみんなで座って夕食を食べ始める。

「にや」このお魚味がしみ込んでとつても美味しいにや」

「こつちの魚の煮付けも美味しいです」

「シルの料理はいつも美味しいにや」

「ありがとう、そう言ってもらえると作り手にとってはすごく嬉しいよ」

「そう言えばアリス達は今日はどうしたんだにや?」

「アリスはいつもの散歩に行ってるよ。多分明後日くらいには帰るって言ってたね。あとの皆も今日は用事で出てるみたいだし、帰りはいつになるかちよつと分からないって」

「ふくん、まあ私はシルと一緒に居られればそれでいいにや。それにあの女がいない間はシルに一杯甘えられるしね」ご馳走様」

「私もです。ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

「食器洗い手伝います」

「いつもありがとうね白音」

そう言つてシルは白音の頭を優しく撫でた

「・・・にや」

「あー! 白音ズルいにや! 私もシルにナデナデされたいにや! 私もお皿洗い手伝うにやん! だからシル、私も撫でて!」

「はいはい、よしよし」

「にや〜♪シルのナデナデは格別にや〜」

「はい、そうですね〜」

「はい、お終い。そろそろ食器洗いしようね」

「わかったにや！〜はい」

そして、三人で食器洗いを終えたシル達はソファアームに座ってリラックスしていた。シルの膝には黒歌と白音が頭を置いていて、シルは二人のサラサラの髪を優しく撫でていた。

「うにや〜♪なんだかこのまま寝ちやいそうにや〜」

「はい・・・にや〜♪」

「二人とも、お風呂が入るまで寝ないですよ?」

「わかってるにや〜・・・」

「は、い・・・」

「って、言ってる傍から・・・まあ、いつか。後で起こそうっと。・・・うん?」

シルは何かの気配を感じて顔を上げた。

「この気配は公園からか・・・堕天使か、数は・・・2。近くにまだ2ついるみたいだね。うん?それと悪魔の気配が一つ、いや二つになったな。一つはグレモリーの次期党首の者みたいだけど、もう一つは感じた事が無いな。この街にいる悪魔の気配は全部知ってるはずだから・・・新しく転生させたかな。という事は・・・」

シルはゆっくりと天井に赤と青の目を向けた

「物語が、始まるのか・・・」

『♪♪♪、お風呂が沸きました』

最近のお風呂ってこうして音声でお知らせ出来るなんてすごいよね

「ん、湧いたみたいだね。二人とも、寝るのはお風呂に入ってからにしてね。ほら起き起きて」

「うくん、あれ？私、寝ちゃったかにや？」

「う、ん・・・おはようございます」

「おはよう二人とも、さ、お風呂が沸いたみたいだし入っておいで」

「シルも私達と一緒に入るかにや」

「冗談はいいからさっさと入っておいで、お風呂上がりのおやつ抜きにするよ？」

「すぐに行くにや！ってあれ？白音は？」

「白音ならとっくに行っちゃったよ」

「白音く！お姉ちゃんを置いて行かないでく！」

黒歌は白音を追いかけて風呂場に向かって行った。僕はリビングのドアを開けてベランダに出た。空には星が出始めていた

「あれから10年か・・・」

少し冷たい風が僕の頬を撫で、髪が風に揺られる。

「もう少しで、君に会いに行くよ・・・藍華」

「シルく、デザートはく？」

「その前にちゃんと服を着なさい。バスタオル一枚だと風邪ひくでしょうが」

「私の心配してくれるんだくシル優しいにや」

「いいから早く服を着てください姉さま、シルが困ってます」

「早くしないと黒歌のデザート僕が代わりに食べちゃうよ。今日のは新作の奴なんだけど」

「そうですね姉さま、私も食べちゃいますよ」

「今すぐ着替えてくるにや!!だからデザートは食べないで！」

悪魔と墮天使

「ううゝ怠い・・・」

よう、俺は兵藤一誠、親やみんなはイツセーって呼んでる。最近の俺は朝、妙に調子が悪いんだ。毎朝登校する時は体が怠く感じるし、日差しが肌に突き刺さるような感じでキツイんだ。反対に夜になると体の底から力が湧き上がってくるような感じになるんだ。夕麻ちゃんとデートした日から俺は自分が変わってしまったように感じてならないんだよなあゝ

私立駒王学園、それが俺の通う高校だ

数年前まで女子高だったせいとか、男子よりも女子の割合の方が多いこの学校は、学年が下がるごとに男子の比率が上がるが、それでもやはり全体的に女子が多い。二年生である俺のクラスでも男女比は、三対七で、三年生だと二対八になっている。

難関と言われている試験を突破してこの高校に入学したのもすべては女子高生に囲まれたハーレム学園生活を送るためだ！そして彼女の二、三人くらいすぐに出来ると思ってた

しかし！現実残酷だった。二年間この学校に通ってるけど、そんな美味しい展開はなかった！モテるのは一部のイケメンな男子だけで、俺達なんかはゴミ屑みたいな目で見られる始末。一体何がいけなかったんだ！

「よう、イツセー。貸したDVDはどうだった？エロかっただろ？」

そう言っただけでクラスの自分の席に座った俺に声をかけてきたのは、丸刈り頭の俺の友人、『変態三人組』の一人、松田。見た目爽やかなスポーツ少年に見えるが、日常的にセクハラ発言が出る変態だ。スポーツが万能なのだが、所属しているのは写真部。女子の着替えなんかを撮影しているので、別名『エロ坊主』『セクハラパラッチ』。

「ふつ、今日は風が強かったな。おかげで朝から女子高生のパンチラが拝めたぜ」

気障っぽい言い方をしている奴が、もう一人の友人で『変態三人組』最後の一人。眼鏡を通して女子のスリーサイズを数値化出来るという特殊能力を持ったロリコンだ。こいつの別名は『エロメガネ』『スリーサイズカウンター』。

「イツセー、いいもん手に入ったぞ」

松田がそう言つて自分のカバンから中身を次々と机の上に置いていく。それらは全部卑猥な本やDVDだった。

「ひっ」

遠くで女子たちが軽く悲鳴をあげた。はい、こういうのがいけないんですよ！

次に聞こえてきたのは、最低く、とかエロガキ死ねと蔑んだ女子たちの声だった。

「騒ぐな！これは俺たちの楽しみなんだ！邪魔するなら脳内で犯すぞ！」

相変わらずのセクハラ発言をする松田。少し前の俺ならこれらを見て目を輝かせて松田達と騒いでいたが、最近は朝が辛いのでそんな気分になれない。

「おいおい、これだけのお宝を目の前にしてそ何だよ、その顔は」

「あー、あれか？お前に彼女が出来たってあれ」

「・・・お前ら本当に覚えてないのか？」

「だからそんな事知らないって。なあ元浜？」

「ああ、そんな事があれば俺達は首を吊っている。夢なんじゃないのか」

この通り、二人は夕麻ちゃんの事を全く覚えていないのだ。最初は俺をからかっているんだと思っただけど、そうじゃなかった。本当に知らなかったのだ。確かに俺はこいつらに夕麻ちゃんの事を紹介したし、その時血涙を流しながら悔しがっていたこいつらに俺は鼻高々に「お前らも早く彼女作れよ」と言つてやった。俺はそれを覚えている

のに、夕麻ちゃんはまるで最初から存在しなかったかのように、俺の記憶以外で彼女の痕跡は全く存在しなかった。俺の携帯に入っていた彼女の電話番号もアドレスもメモリには記録されていなかった。本当にあれは全部幻だったのだろうか？でも、俺の記憶ははつきりと夕麻ちゃんの事、一緒にデートした事、公園で俺が刺された事もその時の痛みも全部覚えてるんだ。本当にどうなってるんだ・・・？

考え込む俺の肩に松田が手を置く

「まあ、元気出せよ。よし、今日は放課後に俺ん家に来い。秘蔵のコレクションをみんなで見ようじゃないか」

「それは素晴らしい。イツセーもそれを見れば元気になるさ」

「だろう？俺らは欲望で動く男子高校生さ。エロの為に俺達は生きていく！」

「そうだ！よく言った松田！よし、俺も家から秘蔵のコレクションを持って来よう」

グフフといやらしい笑い声を上げる二人。変態だ。まあ、その中俺も入ってるんだけど俺も変態で生きる男子さ

「わーったよ！今日は無礼講だ！炭酸飲料とポテチで祝杯を上げながら、エロDVDでも視聴しようじゃねえか！」

半ばヤケクソ気味に俺も賛同する。

「おお！それだよ、それ！よく言ったイツセー！」

「その意気だ！ともに青春をエンジョイしようじゃないか」

盛り上がる俺達。取り敢えず夕麻ちゃんの事は今日は後回しだ！今日は思いつきり憂さを晴らすぜ！

そんな時、俺の視界に紅が映った。教室の窓から見える校門。一人の女生徒が登校している光景が俺の目を釘付けにする。

真紅の髪をした少女。人間離れた美貌を持った我が校のアイドル。父親の仕事の都合で日本の学校に通っている彼女は北欧の出身だと聞く。誰もが彼女の美しさに目を奪われ、一瞬で心をもとらわれる。

リアス・グレモリー

この学園の三年生で、俺の一個上だ。それなのに彼女から漂う雰囲気は高貴さが溢れていた。皆の視線が彼女に集中する。

美しい

彼女の存在を一言で表すならそれだ。皆がその姿に見惚れ、話していたものや何かをしていた者達は、その動きを止める。

彼女の視線が動き、一瞬だけ俺を捉えた。

「っ!？」

俺は、一瞬で心まで掴み取られる感覚に陥った。な、何なんだこの感じは・・・？

俺が謎の感覚にとらわれている間にリアス・グレモリーは校舎に入って行っていた。

◇◇◇◇◇

「くそっ！何でなんだよ！」

悪態をつきながら俺は今、夜の道を全力疾走で走っていた。やつぱり夜になると俺の足はおかしい位の速度を出していた。今日は放課後に松田の家で三人でDVD鑑賞して、途中で虚しくなって帰ったんだけど、帰り道にあいつに出会った。

「貴様は、あの時の人間か？何故生きている・・・なるほど、そういう事か。お前の主は誰なんだ？」

それは俺の事を刺したあのコートの男だった。俺は返事もせず、全力でその場から駆け出して奴から逃げた。そして、一五分位走っただろうか、俺は開けた場所に出た。そこは見覚えのある公園だった。俺は走り歩みに変え、少しだけ息を整えながら噴水の辺りまで歩みを進めた。ここは、夕麻ちゃんとデートの最後に訪れた場所だ。そして、俺が刺された・・・

ぞくっ！

背筋に冷たい物が走った。ゆっくりと振り返った俺の眼前に黒い羽根が舞った。

「逃がすと思っっているのか？これだから下級な存在は・・・」

上を見上げると、あの時と同じように黒い翼を広げたコートの男が空にいた。悪い夢なら覚めてくれよ

「ふむ、もしやお前ははぐれか。主の気配も仲間の気配もない。ならば殺しても問題あるまい。元々お前は我々にとって危険因子だ。今度こそ・・・死ぬ」

そう言っつてコートの男は俺に向かってあの時と同じ光の槍を投げた。

殺される!!

俺はギョツと目を瞑った。しかし、いつまで経っても何も感じなかった。俺は恐る恐る目を開けると、俺の目の前に誰かが立っていた。

「なっ?!私の槍を素手で止めただと・・・!?!」

コートの男が驚いているように、目の前の人物の手には光の槍が握られていた。後姿しか見えないが、その人物は月夜に輝く綺麗な銀髪をしてこんな時期なのに白いマフラーをしていた。

「大丈夫?」

その人物は振り向かずにも分俺に向かって問いかける。

「・・・あつ、は、はい。あなたは・・・」

「貴様は一体何者だ!」

俺の問いかけを遮ってコートの男が目の前の人物に向かって叫ぶ。

銀髪の人は手に持った光の槍を少しクルクル回すと、

「返す」

そう言っつて、コートの男に向かって槍を投げつけた。

「っ!?!ぐうー!」

男はとっさに避けたが、光の槍は男の腕を掠め、空へと飛んで行っってしまった。男の腕からは血が出ていた

「き、貴様く!!」

コートの男は無茶苦茶怒った様子で両手に光の槍を出現させ、銀髪の人に向かって投げようとした時、俺たちの傍の地面がひかり、魔法陣の様なものが生まれた。そこから出てきたのはあのリアス・グレモ

リー先輩だった。

「その子に触れないでちょうだい」

「紅い髪・・・グレモリー家の者か」

コートの子が憎々しげに先輩を睨みつける。

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。この子にちよつかいを出すなら容赦はしないわ。」

先輩は堂々とした姿勢でコートの子に向かって言う

「・・・ふふつ、これはこれは。その者はそちらの眷属か。という事はこの街もそちらの縄張りというわけか・・・まあ、いい。今日の事は詫びよう。だが、下僕は放し飼いにしない事だな。私のようなものが散歩がてらに狩ってしまうかもしれないぞ?」

「ご忠告痛み入るわ。この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたら、その時は容赦なくやらせてもらうわ。と言っても、貴方の方が返り討ちにあつたようだけどね」

「くっ・・・その台詞、そっくりそちらへ返そう、グレモリー家の次期党首よ。わが名はドーナシック。今度会った時はあの者と共に葬つてくれようぞ」

そう言つてコートの子は先輩を睨みつけ、翼を広げて腕を抑えながら空へと飛んでいった。助かった、のか?

「あの者? 一体何の事かしら」

「あ、あの・・・」

「ごめなさい、兵藤一誠君。色々と聞きたい事はあると思うけど、詳しい話は明日の放課後に話すわ」

「・・・わかりました」

俺は分からない事だらけだけど、取り敢えず納得しておいた。そして、先輩と別れた俺は家へと帰った。

「そう言えば俺を助けてくれたあの人がどうしたんだろう?」

あの銀髪の人、気がついたらいなくなつてたし、いったい何者だったんだろう?!



ガチャッ

「ただいま〜」

「お帰りにやん、シル」

「少し遅かったですが、何かあったんですか？」

「うん、ちよつとね」

家に帰った僕を玄関で出迎えてくれたのは黒歌と白音だった

「シ〜ル〜、我は待ちくたびれたぞ〜」

リビングの方からアリスの声が聞こえてきた

「はいはい、もうちよつと待っててね〜。じゃあ早速調理を始めようかな」

僕は買い物袋を持ってキッチンへ向かう。そして袋から中身を出して台所に並べていく。

「手伝います」

すると、白音が手伝いを申し出てきた。

「ありがとう。じゃあ、卵と牛乳と買ってきたチーズを混ぜてもらえるかな」

「了解です」

白音はボールに牛乳とチーズと卵を割って入れ、ミキサー並の物凄いスピードでかき混ぜだした。その間に僕も調理をする。

そして調理を開始して30分後に完成した

チーン！

オーブンから取り出したのは綺麗に焼き上がったチーズケーキだった。僕は魔法を使ってケーキを冷ましてレモン等で作ったグラサージュを表面に塗り、均等に切り分けた。本当なら冷蔵庫とかでゆっくり冷やすのが良いんだけど、アリスがこれ以上待てないみたい

だしね

「みんな、出来たよ〜」

「にやははは、いい匂いにゃ〜」

「とっつても美味しそうです」

「全く、待ちくたびれたぞ」

そう言っつてソファアールから起き上がってきたのは紅い髪に同じく紅い目を持った十代後半から二十代前半くらいの美女、アリスだった。

「ごめんごめん。じゃあどうぞ召し上がれ」

「二いただきます」

「ん〜♪この上にかかっているソース甘酸っぱくつて美味しいにゃ〜」

「はい、それにしつとりとしていて滑らかです。モグモグ」

「やはり、シルの作ったものは美味しいな。おかわり！」

チーズケーキはみんなに好評だった。僕はそんな幸せそうにケーキを頬張るみんなを見て、頬を緩ませた。そしてワンホールあつたケーキはあつという間に無くなってしまった。

「にゃふ〜、美味しかったにゃ〜」

「はい、今度はチョコレートケーキがいいです」

「あ、私も私も！」

「我は今度はイチゴのショートケーキがいいな。というわけでシル、明日はチョコレートケーキとショートケーキを頼むぞ」

「あははは、わかったよ。でも、ちゃんと夕食も食べてね。特に黒歌とアリス、野菜もちゃんと食べるんだよ？。ピーマンとか」

「うっ、ぜ、善処します」

この二人はピーマンが苦手なのだ。そう言う所は子供らしくて可愛いと思えるけど、残すのはダメです。

「私はピーマンもへっちゃらです」

「白音は好き嫌いが無くつて偉いね〜」

胸を張つて少し得意げになる白音。この子は好き嫌いとかが無く、

何でもよく食べます。そんな白音の頭を撫でてあげれば、白音は気持ちよさそうに目を細めた

「ううう、白音ばかりズルいにゃ！」

「そうだそうだ！我たちの事も撫でろ」

「明日ちゃんとピーマンも食べられたら二人も撫でてあげるよ」

「にゃ〜♪」

「ぐぬぬぬ、白音め〜！」

白音に向かって二人が恨みがましい視線を向けるが、白音は気にせず僕に撫でられていた。

『♪♪♪、お風呂が湧きました』

「ほら、お風呂も沸いたみたいだしみんな入っておいで」

「たまにはシルも我らと一緒に入ったらどうなんだ？」

「そうだにゃ！一緒に洗いつこしようにゃ！」

「あのね、何度も言ってるけど、僕は男なの。男女が一緒に入るのほどうかと思うよ」

「我・私は、気にしない（にゃい）」

「僕が気にするの。早くいかないと明日の夕食はピーマンづくしにするよ？」

「二行ってきます!!!」

ドタタタタ、と慌てた様子で二人は風呂場へと駆けて行った。

「さ、白音もお風呂に入っておいで」

「・・・はい」

白音は何か言いたげな様子だったが、返事をして二人に続いて風呂場へと向かっていった。家のお風呂はかなり広いので、三人が浸かって余裕の広さがあるのだ。

そして僕は机に座ってお茶を啜りながら今日の出来事を思い出していた。あの少年、10年くらい経っているけど、あの容姿と感じたあの力からあの時、藍華の学校見学に行った時に出会ったあの兵藤君だろう。10年前に会った時より感じる力が強くなっていったなあ。

それにしても偶々あの時、買い物帰りに僕があの近くを通っていたから無事だったけど、あの子の主は一体何をしていたんだ？もし、あ

の時僕があそこにいなかったらあの子は消滅していたぞ。見た所、ただ自分が悪魔だって自覚していないみたいだったし。まさか説明していなかったの？一体どういう考えで・・・

「シル！我はちゃんと100数えて出たぞ！だから我は風呂上がりのイチゴ牛乳を所望する！」

「はいはい、ちよつと待ってて・・・アリス、いつも言ってるでしょ、ちゃんと何か着てって。そんな恰好じや風邪引・・・かないか」

風呂から上がったアリスはタオルすら身に纏っていなかった

「当然だ！我は風邪など引かん！」

ふん！と目を逸らしているのを見えないが、恐らく胸を張って言うアリス。

「とにかく、早くちゃんと服を着て」

アリスを視界から外したまま務めて冷静に言うけど、僕の心臓はドキドキとしている。

「どうした？顔が少し赤くなっているぞ？」

そう言ってくるアリスの顔は恐らくニヤニヤとしている事は容易に想像できる

「いいから、早く服を着て。じゃないとピーマンだらけにっ!」

「イヤだ！お願いだからピーマンだけは勘弁してくれ！ピーマンだらけはイヤだ！」

そう言ってアリスは僕の正面から抱き付いてきた。風呂上がりのまだ少し湿った髪からはシャンプーなどの良い香りがした。そして僕のお腹の辺りには大きくて柔らかい物が二つ、二人の間でその形を変えていた。

「わ、わかったから！ピーマンだらけにはしないから！」

「本当か!? 本当だな！」

「本当だから、だからちゃんと服を着て・・・！」

「そ、そうかあ」

ガバツと顔を上げて僕に聞いてくるアリスに僕はそう答えるとアリスはホツと安堵の息を漏らす。早く離れて・・・

「ふう〜、良いお湯だった・・・にや」

「どうしたんですか？姉さ・・・ま」

その時、ちようど風呂から上がった黒歌達がリビングにいる僕達を見て固まった。

「む？どうしたのだ二人とも？」

「な、なななななにをしてるんだにや!？」

「なについて・・・裸で抱き合っているだけだが？もう目が悪くなったのか？」

「何で裸で抱き合ってるんだにや!!」

「カクカクシカジカだ」

「い、いやアリス。それじゃあ全然わからないと思うよ」

「何でピーマンで抱き付くことになるんだにや!!」

「何でわかるの!？」

「さっさと離れるにや!」

しかしアリスは僕から離れようとはせず、逆にさらに強く抱き付いてきた

「ふふふっ、どうだ羨ましいか？」

「うにやー!!こうなったら力づくで引きはがすにや!!」

「ふっ、愚かな・・・やってみろ！」

二人はそのまま僕の傍で取っ組み合いを始めようとした。そんな二人に僕は、

「いい加減に・・・しなさい!!」

バチンツ!!

「あう!？」

二人のおでこに凸ピンをした。二人はおでこを抑えてその場に蹲った。

「あうう〜、の、脳に響くにやあ〜」

「こ、この我が凸ピンごときに・・・!」

「あ、アリスのせいになー!」

「何っ！我のせいだと！」

「二人とも、もう一発いつとく?」

「ごめんなさい!!」

二人はその場で即座に綺麗な土下座をした

「はあく……さっさと着替えてきなさい。黒歌もバスタオル一枚じゃなくってちゃんとした格好をきなさい」

「イエス! マム!」

「誰がマムですか、本当にもう一発凸ピンするよ?」

「ごめんなさい、サー!」

「はい、わかったらとっとと着替えてきなさい」

「イエス、サー!」

二人はすぐに駆けだして行った。

「全く二人は……あの二人が戦ったらこの家どころか町がが軽く吹っ飛んじゃうよ。うん? 白音どうしたの?」

「あの……やっぱり男の人って胸の大きい人が好きなんですか?」

「何でいきなりそんな話になったか分からないけど……それは人それぞれじゃないかな? 少なくとも僕はそんな事で好き嫌いを決めたりはしないよ」

「そうですか……ジュース飲んできますね」

そう言っって白音は冷蔵庫に向かっていった。なんだか妙に嬉しそうなのは何でだろう?

「さて、僕もお風呂に行ってくるかな」

そう言っって僕は着替えを持ってお風呂に向かって行った。そう言えばあの墮天使達どうしようかなあ



「やあ、どうも。君が兵藤一誠君だね」

翌日の放課後、俺は教室で昨日リアス・グレモリー先輩が言っっていた使いの者を待っていると、自分の席にある男子が訪ねて来ていた。こいつはリアス・グレモリー先輩と同じく、この学校では有名人だ。目の前にいるこの男は、この学校一のイケメン王子、クラスは違うけ

ど、俺と同じ二年生の 木場 祐斗（きば ゆうと）だ。爽やかなイケメンで、そのイケメンスマイルでこの学校の女子のハートを打ち抜いている。

こいつに対しての黄色い歓声が廊下や教室のあちらこちらから聞こえてくる。イケメンは死ね!!

「で、何の用だ」

俺は目の前のこいつに呪詛を送りながら尋ねる。しかし、木場は相変わらずイケメンスマイルで続けてくる。

「リアス・グレモリー先輩の使いできたんだ。僕について来てもらえるかな?」

!?, こいつが先輩の言ってた使いか

「・・・わかった」

「こつちだよ」

俺は渋々立ち上がって木場について行く

『嫌ー!』

「そ、そんな木場君と変態兵藤と一緒に歩くなんて!」

「汚れてしまうわ木場君!」

「木場君×兵藤なんて許せないわ!」

「いえ、もしかしたら兵藤×木場君かも!」

「さっさと離れなさいよ変態!」

「こうなるから嫌だったんだよー!! さっさと行くぞ木場!」

「ど、どうしたんだい兵藤君、泣いているのかい?」

「うるせえイケメン! お前には俺の気持ちなんかわかるか!」

「僕は別にイケメンじゃないよ」

「ケンカ売ってんのかっ!!」

そして途中女子に散々言われながら俺は、木場の後について校舎の裏側の木々に囲まれた旧校舎と呼ばれる、現在は使用されていない校舎に来ていた。外観は木造で古いが、ガラスや窓とかは割れておら

ず、壊れた部分も一目では分からないくらいだ。古いだけでそこまで酷くはなかった。

そして俺達は旧校舎に入り、二階のある扉の前に来ていた。

「ここに部長・・・リアス・グレモリー先輩がいるんだよ」

俺はその扉にかけられたプレートを見て驚いた。『オカルト研究部』そうプレートには書かれていたのだ。あの先輩がオカルト？はははは、何それ全然似合わない。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

木場が扉の前で中に確認を取ると、扉の向こうからリアス先輩の声が聞こえ、木場が扉を開け中に入るのに続いて俺も部屋に入り、中の様子に驚いた。部屋一面にそれこそ天井にまで見た事もない模様や文字みたいなものが記されていた。部屋の中央には一際大きな魔法陣みたいなものが描かれており、不気味さ満載だった。

「・・・失礼しました！」

「待つて待つて、わかるけど帰らないで」

回れ右をして速攻帰ろうとした俺の肩を木場が掴んで止める。

ええい！こんな怪しさ満点の所にいられるか！

「落ち着きなさい、兵藤一誠君」

「あらあら」

その声に振り返ると、ソファーにリアス・グレモリー先輩が座っていた。そして先輩の後ろにはよく知った顔の女性が立っていた。

その人物は黒髪ポニーテールで大和撫子を体現しているリアス・グレモリー先輩と並んで我が校のアイドル。『二大お姉さま』の姫島朱乃（ひめじま あけの）先輩だった！いつもニコニコ笑顔を絶やさない男女問わず憧れの先輩が何でここに!?!

「これで全員揃ったわね。兵藤一誠君。いえ、イツセー。私達オカルト研究部は貴方を歓迎します」

「え、は、はい」

「悪魔としてね」

・・・リアス先輩って痛い人？
そんな事を思ってしまった俺は悪いのだろうか？

「粗茶です」

「あつどうもつす」

俺はソファーに座って姫島先輩が淹れてくれたお茶をずずつと一飲み。

「うまいです」

「あらあら、ありがとうございます」

うふふ、と微笑む姫島先輩。俺の机を挟んで向かいのソファーにはリアス先輩、俺の隣には木場が座っている。

「朱乃、貴女もこちらに座ってちょうだい」

「はい、部長」

姫島先輩もリアス先輩の横に座り、全員の視線が俺に集中する

な、なんででしょうか？そんなに見られると緊張するんですけど・・・
「単刀直入に言うわ。私達は悪魔なの」

こんなに美人なのに先輩ってやっぱり痛い人なんだ・・・

「信じられないって顔ね。まあ仕方がないわ。でも、昨夜、黒い翼の男に襲われたでしょ？あれは堕天使と言って、元々は神に仕えていた天使だったんだけど、邪（よこしま）な感情を持っていたため、地獄に堕ちてしまった存在。私達悪魔の敵でもあるわ」

堕天使とききましたか。ファンタジーもここに極まるね。まあでも実際に会ったし、先輩の言ってる事は多分本当なんだろう。

それから俺はリアス先輩から天使と悪魔と堕天使が昔から争っている事の説明と天野夕麻ちゃんも堕天使という事、そして俺と接触したのはある目的の為という。

「目的って？」

「貴方を殺すため」

「っ!? な、何で俺がそんな!」

「落ち着いてイツセー。仕方がなかった・・・いえ、運が無かったのでしょうね。貴方とは違って殺されない所持者もいるわけだし・・・」

「運が無かったってどういうことですか! って、うん?」

俺って殺されたの? 俺ってこうして生きてるぞ?

「先輩、でも俺生きてるっすよ! 大体何で俺が狙われるんすか!!」

「それは貴方に宿っている神器を狙ってよ」

神器? また聞きなれない単語が出てきたぞ

で、先輩から説明された神器について簡単にまとめると、神器ってのは特定の人間に宿る規格外の力で、歴史上に残る人物や世界で活躍する人の多くがその神器を宿した者だそうだ。

大半は人間社会規模でしか機能しないものらしいけど、中には悪魔や墮天使の存在を脅かすほどの神器もあるらしい。

「イツセー、手を上にかざしてちょうだい」

え? なんで

「いいから早く」

先輩に急かされ、俺は左腕を上に掲げた。

「瞳を閉じて、貴女の中で一番強いと思う存在を心の中に思い浮かべてちょうだい」

い、一番強い存在?

「ド、ドラグ・ソボールの空孫悟(そらまごさとる)かな・・・?」

「では、それを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべるの」

俺は心の中で悟がドラゴン波を撃つ姿を思い浮かべた

「その姿を真似るのよ、強くよ? 軽くじゃダメ」

ええ!? こんな所で物真似をやれと!? この年になって周囲に人もいるのにそんな恥ずかしい事をせにやあなんのですか!? いくら俺だって恥ずかしいんだぞ! 絶対笑い物じゃん!

「ほら、早くしなさい」

再び先輩に急かされる。ええい! もうこうなったら自棄だ! やつ

されたと解り、死ぬ寸前だったイツセーの命を救うにしたの」

命を救う？という事は俺は先輩に助けてもらったのか？それで生きてるのか？

「悪魔としてねー。イツセー、貴女は私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わったわ。私の下僕として」

バツ！

その瞬間、俺以外のみんなの背中から蝙蝠の様な翼が生えた。

バツ！

俺の背中からも何かの感触が生まれる。背中越しに見れば、俺の背中からもみんなと同じ様な翼が生えていた。・・・マジか

「改めて紹介するわね。祐斗」

リアス先輩に名を呼ばれ、木場が俺に向かってイケメンスマイルを向ける

「僕は木場祐斗。兵藤君と同じ二年生だよ。えーと、僕も悪魔ですよ。よろしくね」

「あら、次は私ですわね。三年生、姫島朱乃ですわ。一応副部長をしております。今後もよろしくお願いしますね。これでも悪魔ですわ。うふふ」

そう言って、礼儀正しく姫島先輩は頭を深く下げた。最後にリアス先輩。紅い髪を揺らしながら堂々と言う。

「最後は私ね。私が貴方たちの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、イツセー」

母さん、父さん。どうやら俺は人間をやめただけでなく、とんでもない事になったみたいです。

そして次の日の放課後、

「俺はハーレム王になるぜ!!」

イツセーは新たな野望を胸に、真夜中の道を自転車でチラシを配りながら駆けていた。

シスターとはぐれ悪魔

ピピピピッ！ピピピッ！ピピ、ガチャ

「う〜ん、朝か・・・ん〜！」

午前6時、目覚ましの音で目を覚ました僕は、上半身を起こして軽く背伸びをする。そしてベッドに目を向ければ、僕の右側にはアリスが、左側には黒歌と白音が寝息を立てていた。僕はみんなを起こさないうようにベッドから抜け、洗面所で顔を洗ってからキツチンに向かい、朝食と黒歌達のお昼のお弁当の準備を始める。今日の朝食は洋食にしよう。お米を洗って炊飯器のスイッチを入れる。ご飯が炊ける間にお弁当の具の調理を開始する。今日の具は、から揚げと、ソーセージと、卵焼きと、小吹芋と、レタスと、デザートに兎さんのリンゴと、三色おにぎりでもいいかな。まずはから揚げの鶏肉の下ごしらえからだね。

そして、僕は調理を開始した。ちなみにかから揚げを作るときのポイントはお肉は出来るだけ均等の大きさに切ることだよ。あと、お肉をつけこむたれにマヨネーズを少し加えると、肉汁が一杯のから揚げが出来るよ。ちよつとした豆知識でした。

そして、僕が調理を開始して約一時間後、寝癖がついた白音と黒歌が起きてきた。

「おはようによ〜・・・ふあ〜」

「おはようございます・・・ふあ」

「おはよう二人とも、洗面所で顔を洗っておいで」

二人はあくびをしながら洗面所に向かって行った。そして三十分ほどして戻ってきた頃に顔を洗い終え、寝癖も直った黒歌達が戻ってきた。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

今日の朝食は僕が朝に焼いたパンが数種類に、フワフワ半熟オムレツと、ミルクココアだ。相変わらず白音はよくたべるなあ。白音の

お弁当は黒歌の三倍はあるんだけど、もしかしたらそれでも足りないかな？ 今度もっと大きめのお弁当箱買ってこようかな。何段重ねかのお重箱とかにしてみようかな。

そして朝食を食べ終えた二人は制服に着替えて登校の準備をする。

「じゃあ行つてくるにゃー！」

「行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。車には気を付けてね」

「もう、大丈夫にゃ。車に轢かれてもへっちゃら・・・」

「車の運転手さんが危ないから」

「そっちの心配!?! 私の心配じゃないの!?!」

「ほら姉さま、早くいかなないと遅刻しますよ」

「うう〜！シル！帰ったら覚えてるにゃ〜！」

ガチャンツ

「さて、今度は食器洗いと洗濯だね」

二人を見送った僕はいつもの様に家事に精を出すのだった。そして、10時を少し回った頃、ようやくアリスが起きてきた。アリスの髪は二人以上にぼさぼさになっていた。

「おはようアリス、ご飯はどうする？」

「ん、いる」

「わかった、すぐに作るね。その前に寝癖を直すからこつちおいで」

僕は櫛を持ってソファーに座ってアリスに手招きをする。アリスが僕の隣に横向きに座ると、僕はまず手櫛でアリスの髪を透いてから櫛を使ってアリスの髪を梳いていく。アリスの髪は枝毛などもなく、スルスルと櫛が通って行く。そして5分ほどしてアリスの髪を梳き終え、寝癖も綺麗に無くなった。

「はい、お終い。じゃあ今すぐご飯を作るから、ちゃんと寝ないで待つてよ」

「うむ」

そして僕はすぐにアリスの分のご飯を作り、アリスは食べ終わるといつもの散歩に出た。それから僕は掃除を始めて、気がついたらお昼を少し過ぎていた。

「そうだ、今日はスーパーで野菜が安くなってるんだった」

僕はすぐに出かける仕度をして、エコバックと財布を持ってスーパーに向かった。その時、認識阻害用の魔法をかけ、僕の見た目は20代前半の男性に見えるようになっていた。

「はわう！」

そして、買い物を終えた僕は家に帰る途中の公園の近くを通っていた時に、前を歩いていたシスターが手を大きく広げ、見事に顔から路面にこけていた。あんなこけ方をする子は生まれて初めて見たな。こけた時にシスターが被っていたヴェールが風に乗って僕の足元に飛んできた。僕はヴェールを拾って、シスターへ近寄り、起き上がれるように手を差し出した。

「大丈夫？」

「あうう。何で転んでしまうんでしょうか……？あぁ、すみません。ありがとうございますうう」

シスターは僕の手を取り、起き上がってお礼を言う。シスターは多分僕と同じくらいか、一個下くらいだろうか。ストレートブロンドの髪に、グリーン色の双眸が綺麗な美少女だった。というか顔面から転んだのに鼻のてっぺんが少し赤くなってるだけってある意味すごいよね。

「はいこれ、君のでしょ。この町には旅行かな？」

「あ、ありがとうございますうう」

シスターは旅行鞆の様な物を持っていた。僕は拾ったヴェールをシスターに渡すと、シスターはペコペコと頭を下げた後に首を横に振った。

「実は私、この町の教会に今日赴任する事になりました……あなたもこの町の方なのですよね。これからよろしくお願いします」

そう言って再び頭を下げるシスター。

しかし、この町にある教会と言えばあそこだけど、確かあそこは……この町に来てから困っていたんです。その……私って、日本語がうまく話せなくって……道を尋ねても、道行く皆さんに言葉が通じな

くって……」

ああ、なるほどね。確かに英語とかならともかく、スペイン語はわかる人はそうそういないだろうしね。ちなみに僕は神様の特典のおかげで全ての言語がわかります。あ、そうだ。神様のカウンセリングそろそろしとかなないと。今夜あたりにでもしておこうか。

「その教会なら知っているよ。良かったら案内しようか？」

「は、本当ですか！あ、ありがとうございます！これも主のお導きのおかげですね！」

涙を浮かべながら心底ほつとしたような顔になるシスター。そして僕はシスターを引き連れて教会へ向かう途中に公園の前を横切った。その時男の子の泣き声が聞こえてきた。見れば公園で男の子が転んで膝を擦りむいていた。僕が行こうとするよりも早く、僕の後ろを着いていたシスターが突然男の子の元に駆け寄って行った。

「大丈夫？男の子ならこれくらいで泣いてはいけませんよ」

シスターは男の子の頭を優しく撫で、自身の手のひらをケガを負った膝へと当てた。すると、手のひらから淡い緑色の光が発せられ、膝のケガがみるみる消え去って行った。恐らくあれは彼女の神器の力なのだろう。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫です」

シスターは男の子の頭を一撫ですると、僕の方へ顔を向け、舌を出して小さく笑う。

「すみません、つい」

「いや、気にしないで。所でその力は……」

「はい、治癒の力です。神様からいただいた素敵な物なんです」

そう言って微笑むシスターだが、その表情はどこか寂しげだった。

その後、男の子は迎えに来た母親に連れられて帰って行った。そして、男の子は帰る途中に、

「ありがとう！お姉ちゃん！」

シスターに向かって感謝の言葉を述べた

「ありがとう、お姉ちゃん、だって」

通訳してシスターに伝えると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。そして

僕達は再び教会へ足を向けて歩き出した。そして教会から数分歩くと、古ぼけた教会が見えてきた。

「あ、あそこです！良かったあ」

地図に描かれたメモと照らし合わせながらシスターは安堵の息をつく。さて、さっきの彼女の力を見て確信した。僕はポケットから小さな巾着袋を取り出す。巾着袋には首にかけられるように紐がついていた。僕はそれをシスターに渡した。

「これは・・・？」

「それはお守りだよ」

「お守り、ですか？」

「うん。それは君の事を守ってくれるよ。何か辛い事や悲しい事があつたら、そのお守りに向かって助けを呼べば、君の事をきつと助けてくれるよ。じゃあ、僕はそろそろ用事があるからここで失礼するね」

「ま、待つてください！案内していただいただけでなく、このようなものまでいただいたのですから、何か教会でお礼を、せめてお茶でも・・・」

「別にそんな事気にしないで。それにそろそろ帰らないといけなし」

「でも、それでは・・・」

困り顔になるシスター。ここまで案内してくれたお礼にお茶でもって感じなんだろうけど、そろそろ帰らないとアリスがうるさいからなあ。

「じゃあ、今度会った時はお茶をいただきに来るよ。おっと、そうだ」
パチンツ

僕が指を鳴らすと、認識阻害用の魔法が解け、本当の姿が露わになる。シスターはとても驚いた表情になった。

「こつちが僕の本物の姿。僕の名前はシル。君は？」

僕が名乗ると、シスターははっとした顔になった後、笑顔で答えてくれた。

「私はアーシア・アルジエントと言います！アーシアと呼んでください

い！」

「じゃあアーシア、これからよろしくね。友達として」

「と、友達。いい、良いんですか？わ、私とお友達になってくれるんですか？」

「もちろんだよ。今度会ったその時は僕が作ったお菓子を持っていくよ」

「・・・はいっ！シルさん、私とっても嬉しいです！こちらこそよろしくお願いしますね！また必ずお会いしましょう！」

華のような満面の笑みを浮かべたアーシアに別れを告げ、僕は家に帰る道を歩いた。アーシアは僕の姿が見えなくなるまで、ずっと見守ってくれた。本当に良い子だな。そして家に帰った僕は、同じく散歩から帰ってきたアリスと一緒に昼を一緒に食べて、夕方、黒歌達が帰ってくるまでリビングのソファアに座ってまったりとしていた。帰ってきた黒歌が、僕に膝枕されているアリスを見て、一悶着あったのはいつものこの家の日常です。



よう！イツセーだ。俺が悪魔になったという事を部長たちから知らされて数日、俺は毎晩自転車でチラシ配りをしていた。

簡易版魔法陣。欲のある人間がこのチラシに願いを込めると、俺達が召喚される仕組みになっている。俺は悪魔として、リアス・グレモリーの眷属悪魔として頑張っていた。俺は悪魔になって日が浅い為、まずは悪魔社会の仕組みを勉強するために、下積としてチラシ配りを夜中にやっていた。

悪魔のお仕事。それは、召喚され、契約を結んで、相手の願いを叶えて、その代償としてそれ相応の対価をいただく事らしい。対価は別に命とかじゃなくて、お金だったり、物だったり、がほとんどらしい。

そして何度も契約を取って願いを叶えれば、悪魔の王から評価さ

れ、評価が上がれば俺みたいな人間からの転生悪魔でも王様、つまり魔王様から爵位をもらえるらしい。そ・し・て！爵位を持てば、俺も自分の下僕を持てるようになるんだ！つまり！俺の念願のハーレムを作る事が出来るのだ！！現実世界じゃあ、ただの人間の俺じゃあどう頑張ったたって女の子の群れを作る事なんて不可能だ。それにどうせもう人間には戻れないんだ。なら俺は悪魔として、ハーレムを築く為に絶対に成り上がってやるぜ！！

「うおおおおおお！やってやるぜー！！俺は、ハーレム王になってやる！！」

そして俺は今日も真夜中の中、自転車を漕いでチラシ配りを頑張るのだった。

「いい事イツセー。もう二度と教会に近づいちやダメよ」

あれから数日後の放課後、俺は部室で部長に怒られています。俺は少し前から悪魔としての仕事を本格的に始めたんだ。最初はレベルの低い契約から始める事になった俺は、魔法陣を使って依頼者の元に向かおうとしたんだけど、どうやら俺の魔力は悪魔の子供以下らしく、魔法陣が上手く発動しなかった。というわけで俺は前代未聞の足で直接依頼者の元へ向かう事になった。もう泣きながら自転車漕いで依頼者の所に行ったよ！最初に行った依頼者の人も泣いている俺に事情を聞いて同情してたし。

で、今まで二人の依頼者の所に契約を取りに行ったんだけど、そのどちらも契約は取れなかった。最初の人は森沢さんっていう人でその人とは朝まで大好きなドラグ・ソボールの事を語り合って、二人目はミルたんっていう魔法少女の格好をした巨漢な人でその人とは朝まで一緒に魔法少女のアニメのDVDを一緒に見ただけで、結局二夜連続契約は取れないという事になったが、終わった後に書いてもらうアンケートでは最大級の評価がなされるといったこれまた前代未聞

の事で、部長も反応に困るほどだった。

そして、二日連続で契約が取れなかった俺は、表向きの部活が終わった夕方に帰ってる時に一人のシスターに出会ったんだ。名前はアーシア・アルジェント。最近この町の教会に越してきたシスターだ。金髪の美少女でとっても可愛いくて優しい子だった。彼女はどいうやら道に迷っていたようで、俺は彼女を教会まで案内したんだ。で、それが部長の耳に入ってから、俺は何故か怒られているんだ。部長の表情はいつになく険しい。

「教会は私達悪魔にとって敵地。踏み込んだだけで神側と悪魔側の間で問題になるの。今回はあちらもシスターを送ってあげたあなたの厚意を素直に受け取ってくれたみたいだからよかったけど、天使はいつも監視しているわ。いつ、光の槍が飛んでくるか分からなかったのよ」

マジ？俺ってそんなに危ない状況だったのか……。確かにあの時教会に近づいた時に感じた、寒気や恐怖が半端じゃなかったしな。俺の中の悪魔の本能が「危ない」って事を教えてくれてたんだろうな。「教会の関係者に関わっちゃダメよ。特に『悪魔祓い(エクソシスト)』は我々の仇敵。神の祝福を受けた彼らの力は私達を滅ぼせるの。神器所持者が悪魔祓いなら尚更、もう、それは死と隣り合わせのと同じ義だわ」

迫力のある凄まじい眼力で俺に向かって真剣な表情で言う部長。

「は、はい」

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、悪魔祓い達にやられたら完全に消滅するの。無に帰すのよ……。無。何もなく、何も残せず、何もできない。それだけの事があなたにはわかる？」

無。正直よくわからなくて反応に困る俺を見て、部長はハッ、と気づいたように首を振った。

「ごめんなさい、少し熱くなりすぎたわね。とにかく今後は気を付けてちょうだい」

「はっ」

「あらあら、お説教は済みましたか？」

俺と部長の会話が終わった時、いつの間にか朱乃さんが傍に立っていた。

「朱乃、どうしたのかしら？」

部長の問いかけに朱乃さんは少しだけ顔を曇らせた。

「大公から討伐の依頼が来ました」

俺と部長達、オカルト研究部のみんなは町はずれの廃屋に来ていた。どうやらここに「はぐれ悪魔」という主の元から逃げ出した奴がいるらしい。俺達はそれを討伐するように、上級悪魔からの依頼が届いたらしい。「リアス・グレモリーの活動領域に逃げ込んだ為、始末してほしい」と。こういうった事も悪魔のお仕事の一つだそうです。今は特に被害が出ていないらしいが、放っておけば一般の人などに被害が及ぶため、早急に討伐しなければいけないらしい。

時間は深夜、暗黒に満ちた世界だ。周囲は背の高い草木が生い茂り、遠目には廃墟になった建物が見える。悪魔になってから暗闇でもよく見えるぜ。辺りはシーンと静まり返っている。が、周囲に満ちている敵意と殺気が半端じゃない。足がガクガクと震えてくる。そんな俺に部長が話しかけてくる

「イツセー、いい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

俺に死ねと?!俺じゃあ戦力になるところか速攻で死んじゃいますよ!!

「大丈夫、何もいきなり戦わせたりなんてしないわ。でも、悪魔の戦闘を見るだけでも十分に役に立つわ。よく見ておきなさい。ついでに下僕の特徴を説明してあげるわ」

下僕の特徴?何ですかそれは?

それから部長は俺に悪魔や墮天使や天使が争って疲弊した悪魔が、少数精鋭の制度を作り、チエスを模した『王』『女王』『騎士』『僧侶』

『戦車』『兵士』の5つの特性を持った、『悪魔の駒』を開発した事と、爵位持ちの悪魔にそれを授け、下僕悪魔に強大な力を分け与える事にした事を俺に教えてくれ、最近ではその制度が爵位持ちの悪魔達に好評で、自分の下僕を使って実際のチェスの様にゲームを行い、上級悪魔同士で競う事、『レーティングゲーム』というものが悪魔の間で大流行して、大会なんかも行われてるらしい。

そして、優秀な人間なんかを自分の手駒にする『駒集め』というのも流行っているらしい。駒の強さ、ゲームの強さが悪魔としての地位や爵位なんかにも影響するかららしい。優秀な下僕は自分の悪魔としてのステータスになるんだとか。

つまり、ゲームが強くて、下僕も優秀だったりすると、悪魔としては立派で自慢らしい。ちなみに部長はまだ成熟していないので公式なゲームには参加出来ないみたいだ。俺達がゲームに参加する事は当分ないらしい。そう言えば部長に聞きたい事があるんだった。

「部長、俺の駒の役割や特性って何なんですか？」

「そうね、イツセーの駒の特性はー」

そこまで言って部長の言葉は止まってしまった。俺にもその訳がわかった。全人を強烈な寒気が襲った。さつきより殺気や敵意が一層強まったからだ。暗がりから何かがゆっくりと俺達に近づいて来る。

「誰だ」

地の底から聞こえるような低い声。その声を聞くだけで、恐怖だけが俺を支配した。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しに来たわ」

部長は俺と違って一切臆さず暗がりに向かって言い渡す。やっぱり部長はすごいなあ

ズン、ズン、

そして重い足音を響かせ、暗がりから俺たちの前に姿を現したのは、上半身は手に槍らしきものを持った人間の女性だった。しかし、下半身は四足あり、すべての足がまるで大木のごとく太く、爪も鋭い。尾は蛇のようになっていて、うねうねと動いていた。全体の大きさは

5メートル以上は軽くあると思う。これが悪魔なのか？だよな「はぐれ悪魔」なんだから。

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れ回るのは万死に値するわ！グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげる！」

「小賢しいいいい！小娘ごときがああ!!とつとと失せろおおお！」

吠える化け物だが、部長はそれを鼻で笑うだけだった。

「ふん、祐斗！」

「はい！」

バツ！

俺たちの近くにいた木場が飛び出していった。速っ！反応出来なかつたぞ！

「イツセー、さっきの続きをレクチャーするわね」

こんな時にですか!?!今はそれどころじゃないと思うんですけど!!

そんな俺の内心を無視して部長はそのまま俺に話しかける

「祐斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となつた者は速度が増すの。そして、祐斗の最大の武器は剣」

部長の言う通り、化け物の攻撃を躲していた木場の手には、いつの間にか西洋剣のようなものを握っていた。そして祐斗の姿が消えたと思つたら、次の瞬間には化け物の両腕が槍と共に胴体からおさらばしていた。化け物の悲鳴が木霊する。

「これが祐斗の力。目では捉えきれないスピードと、達人並みの剣さばき。ふたつが合わさる事で、あの子は最速の騎士になるの」

「次は朱乃ね」

「はい、部長。さてさて、どうしましょうか？」

朱乃さんはいつものニコニコ笑顔で化け物に近寄る。化け物は斬られた腕の痛みでもがき苦しんでいる

「朱乃は『女王』。私の次に強い『兵士』『騎士』『僧侶』『戦車』すべての駒の特性を持った、最強の副部長よ」

「ぐうううう・・・」

「あらあら、どうしまししょうか？」

化け物が朱乃さんを睨みつけるが、朱乃さんはニコニコ笑顔のままだ。

「イッセー、朱乃はね。魔力を使った攻撃が得意なの。雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして究極のドSなの」

「え?ど、ドSすつか?」

あのgr朱乃さんがですか?

「そうよ。朱乃はね、普段は優しいんだけど、戦闘が始まってテンションが上がると、相手が敗北を認めてもそのテンションが収まるまで止まらなくなってしまうの。でも、普段は優しいから今度甘えてご覧なさい。あなたの事も可愛いと言ってたからきつと優しく抱きしめてもらえると思うわ」

「さて、部長の説明も終わった事ですし、そろそろ行かせていただきますわ」

そう言つて朱乃さんは両手を天にかざすと、その手にバチバチと雷が生まれた。そして朱乃さんの手から雷がバイザーに向かっていき、バイザーに当たーーー

バチイン!

『?!?』

らずに、突然バイザーを覆うように出来た結界みたいなもので雷が弾かれた。その場にいたバイザーを含めた全員が驚いた。

「間に合ったか・・・」

そしてこの場にいる誰の者でもない者の声が俺たちの耳に届いた。

誰だ!?

俺達が声のした方へ顔を向けると、そこには誰かが立っていた。しかし、その顔は丁度影になっていて誰なのかよく分からない。いや、この声、俺はどこかで・・・

そして、雲がゆつくりと動いて、隠れていた月の明かりがゆつくりと移動して、その人物の顔が明らかになった。

月明かりを浴びて輝く銀髪

片方の瞳はまるで部長の髪の毛の様に鮮やかな赤。もう片方はサファリアの様な透き通る青

そして、見覚えのある顔の下半分を隠す白いマフラー

「あ、あなたは、もしかして・・・」

俺の声に、その人物は俺の方に顔を向けた。二色の瞳が俺を捉える「やあ、元気そうだね新米悪魔くん。公園の時以来だね」

その人物はあの日、公園で俺を助けてくれたあの人だった。

理由とマツサージ

「やあ、元気そうだね新米悪魔君。公園の時以来だね」

そう言つて、はぐれ悪魔を討伐に来た俺達の目の前に現れたのは、俺の事を救つてくれたあの銀髪の人だった。

「・・・イツセー、知り合いなのかしら?」

部長は俺に向かつてそう聞いて来る。俺はあの人が、この間公園で自分を救つてくれた事を部長に簡潔に説明した。

「そう・・・あなたは何者?何故私達の邪魔をするのかしら。事と次第によつてはあなたも消し飛ばすわよ」

見れば部長も木場も構えて臨戦態勢を取つていた。朱乃さんは二人と違つて何故かボウつとしてるけどいったいどうしたんだ?

「つて、待つてくさいよ部長!木場!あの人は悪い人じゃないすつて!俺の事を助けてくれたんですから!」

「そこを退きなさいイツセー」

俺は部長達の前に立つて手を大きく広げて部長達に訴えかけるが、部長は聞く耳持たないつて感じた。

「はあく、やつぱりこうなるよね・・・二人とも、後は頼んだよ」

銀髪の人のため息を零しながらそう言つと、銀髪の人その後ろから顔まで隠れるフードを深く被つたローブを着た二人組が現れて、バイザーの元へと近寄つて行った。バイザーは近づく二人組を警戒して起き上がつて攻撃の構えを取ろうとした。

「大丈夫だよバイザー。その二人と僕は君の敵じゃない」

「そんな事信じられるものかあ!!」

バイザーは銀髪の人に向かつて鋭い眼光を向けながら吠える。俺はそんなバイザーにまた足が震えそうになるが、銀髪の人はずっと動じずに静かに口を開いた

「・・・その証拠に、僕達は君が主の元から逃げた理由を知っている」
「っ!?!」

「だから、君の苦しみもよくわかる。大丈夫、僕達は絶対に君には危害

を加えない。だから僕達の事を信じてほしい」
「……………」

真つ直ぐにバイザーに目を向けながら話す銀髪の人。しばらくお互いに目を合わせたままだったが、やがてバイザーは「わかった……と頷いた。それを確認したローブの二人組はバイザーが入るほどの大きさの魔法陣を展開させた。

「っ!?待ちなさい!」

部長が手からバイザー達に向かってどす黒い魔力の塊が打ち出されるが、すでにバイザー達は転移していて、魔力の塊はそのまま向こうへ飛んでいった。そして、この場に残ったのは俺達オカルト研究部の面子と銀髪の人だけになった。

「くっ、逃がしたわ……あなた、どういうつもり?はぐれ悪魔を逃がすなんて」

部長が銀髪の人に向かってバイザー以上の鋭い眼光と共に、両手にさつきよりも大きな魔力を纏わせる。部長めっちゃ切れてます。でも怒った顔も綺麗ですね、とは口が裂けても言えない。木場はいつの間にか銀髪の人の後方で剣を構えていた。

「君達は彼女……バイザーがどうしてもはぐれ悪魔になったか知っているかい?」

しかし、そんな状態でも銀髪の人は何一つ動かさず、俺達に向かって口を開く。

「そんなの主の元から逃げたからでしょう」

「では、なぜ主の元を逃げたかを知っているかい?」

再び質問する銀髪の人

「そんなの強力な力に溺れて、己の欲求を満たす為に自分の主の元から逃げたに決まってるでしょ。一体あなたは何が言いたいんだよ」

部長はイライラがドンドン強くなっているみたいだ。俺も銀髪の人何が言いたいのかわよく分からない。

「はあく……じゃあ新米悪魔君、君はなぜはぐれ悪魔になるかを知っているかい?」

うおっ!いきなりこっちに質問が来たぜ。ええつと確か……

「えっと、さつき部長が言ってたように自分の主から逃げたりしてつて事ですよね？」

「そうだね、そして君は主の元から逃げ出す理由を知っているかい？」

「逃げ出す理由・・・？」

「ああもう！祐斗！」

「はい、部長！」

とうとう痺れを切らした部長が木場に向かって言うと、木場は銀髪の人に向かって斬りかかった。

危ない!?

しかし、銀髪の方は振り返らずに木場の剣を躲した。

「っ?!うっ」バタン

「ゴメンね、ちよつと眠っててね」

驚いて一瞬動きの止まった木場に銀髪の方が手刀を首に落とすと、木場は糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「祐斗!!よくも私の可愛い下僕をつ・・・!」

「あのね、先にやってきたのはそっちなんだけど・・・」

「黙りなさい！朱乃！二人で行くわよ！イツセーは下がってなさい！」

「・・・」ボク

しかし、部長が呼びかけても朱乃さんはボクつとしたままだった。

「朱乃！聞いているの!」

「はあ・・・少し黙っててくれないかな」

「っ?!?!」

刹那、銀髪の人から強烈な、それもさつきの部長なんか目じやないくらいの殺気が放たれた。部長は途端に尻餅をついて、顔を真っ青にして瞳に涙を浮かべながらガクガクと震えだした。でも、俺は部長の様に震えてたりしていない。何でだ？

「新米悪魔君、さつきの続きだけど、君の言った通り主の元から逃げた下僕がはぐれと呼ばれるんだ。そして、下僕が逃げる理由は大きく分けて二つあるんだ」

震えている部長を無視して、銀髪の方は指を二本立てながら俺に再

び話しかける。

「一つは、さつきそこのグレモリー家の人が言ったように悪魔になって己の力に溺れた者が好き勝手に生きる為に主の元から逃げるから。そしてもう一つの理由は主にあるんだ。例えば承諾無しに無理やり悪魔に転生させた、とか主からの待遇が酷かったり、とかね」

気絶した木場を抱え、こつちに歩み寄りながら続きを話す銀髪の人「そして実は、さつきのバイザーは後者の方なんだ。彼女は見た目はああだけど、争い事は嫌いで、とある森で平和にひっそりと暮らしていたんだ。そこへある上級悪魔が彼女が住んでいる森にやって来て、自分の眷属になるように言ったんだ。でも彼女はそれを断ったんだけど、結局無理やり転生されてしまったんだ・・・」

そして、彼女は無理やり転生された事と、戦う事を嫌って主に眷属を辞めたいと言ったんだけど、その主はそんなバイザーを黙らせる為や言う事を聞かない時は、魔法で攻撃したりしていたんだ。そんな主の元から逃れる為に、バイザーは主に攻撃をして怯んだ隙に逃げ出したんだ。そして、彼女の主は、自分に攻撃して逃げたバイザーに激怒し、バイザーをはぐれ悪魔として報告したんだ」

そ、そんな背景があったなんて・・・俺、てつきりはぐれ悪魔になったのってみんな自分の力に溺れた危ない奴等だって思ってた・・・「まあ、はぐれ悪魔の3割〜4割くらいはそう言った主のせいではぐれになってしまった者達なんだ。そして、残りは・・・そこに隠れているような悪魔になって自分の力に溺れた危険な奴さ。悪いけどこの子をよろしくね。そろそろ出てきたらどうだい？」

そう言っ、銀髪の方は俺に木場を預け、暗闇に向かって話しかける。

「ばれてましたか、気配は消していたんだけどねえ」

シヤランツ

そう言っ暗闇から姿を現したのは頭に黒いシルクハットを被り、タキシード姿の若い男性だった。その手には真黒なサーベルが握られていて、怪しい光を放っていた。

「いくら気配は消せても、その体についた血の匂いでわかったよ。S

S級はぐれ悪魔、クリコツト」

「ふふふっ、あははははははは！そうかそうか、血の匂いでわかってしまったか。今度はちゃんと血の匂いも消しておかないとなあ〜」

「その必要はないさ。お前に今度はないよ・・・」

銀髪の人から発せられるプレッシャーが上がった

「・・・お前はここで終わらせる」

「ははははっ！面白い！私の正体を知って挑んでくる奴なんて久しぶりだね〜。最近じゃあみんな逃げちゃうからつまらなかつたんだよ。まあ、そういう奴等はみんな切ってしまったけどね。でもそれだけじゃあ飽きてくる。偶々この町に来てみたら強い力を感じてここまで来たけど・・・君は私を楽しませてくれるかな？」

「楽しむ余裕があれば、ね」

「ふふふっ、いいねえいいねえ〜じゃあ・・・簡単に死なないでね」

ヒュッ！

刹那、男の姿が視界から消えた。木場より速い!?

「後ろがお留守だよっ！」

気がつけば男は銀髪の人の後ろですでにサーベルを振りおろしている所だった。そして、サーベルがもう少しで当たる所で、今度は二人の姿が消えた。一体どこに・・・？

ドコッ!!

鈍い音が辺りに響いた。でも、見渡しても俺の周りには木場や座り込んでいる部長やいまだにボウっとしている朱乃さんしかない。

ドコーンッ!!!

そんな時、突如上から何かが俺達の目の前に降ってきて轟音と共に土煙が舞った。い、いったい何なんだ!?

そして、土煙が晴れると、そこには大きなクレーターが出来ていて、その中心にはさっきの男が仰向けに倒れていた。

「ぐうう・・・油断しましたよ。今のは大分効きました・・・」

男はよろよろとサーベルを杖代わりにして立ち上がった。さっきまでピンピンしていたのに、その姿はもう満身創痍だった。

「そう？まだ話せるなんて、結構余裕そうだけど？」

上から声が聞こえ、俺は空を見上げた。そこには銀髪の人が銀色の翼を広げていた。その翼は、俺が襲ったあの堕天使の翼とは比べ物にならない、いや、比べるのなんておこがましい程綺麗で、その翼を広げた姿は神秘的で見惚れるほどだった。

「いえいえ……もうこつちは体の彼方此方がガタガタですよ。ゴフツ！……こんな事は生まれて初めてです」

男は血を吐きながらも、何故か嬉しそうに頬を緩ませた。

「随分、嬉しそうだね」

「ええええそりやあもう。こんなに嬉しいのは久かた振りですよ。本当ならば、万全の状態で貴方と戦いたかったのですが、それは油断した私の落ち度……さあ、続きをしましょう！」

男はよろよろとしながらもサーベルを構えた。

「そうか……なら、これでどうっ？」

銀髪の人が手を男に向けてかざすと、男を光が包み、光が晴れると男の傷が綺麗さっぱり無くなっていった。

「……どういうことですか？」

男は怪訝な表情で問う。俺も同じ気持ちだ。何で敵の傷を治したんだ？

「なに、ちよつとした気まぐれさ。これで全力で戦えるだろう？」

銀髪の方はゆっくりと地面に降りてきて、翼を仕舞った。

「さて、お前のお望み通りだ。全力で来なよ」

「……あなたは本当に面白い、では今度は油断せず最初から全力で行きましょう」

男はサーベルを地面と水平に構ると、サーベルから発せられる力と男の殺気が増した。そして銀髪の人の手にはいつの間にか透き通った色をした一振りの剣が握られていた。

それからの戦いは何が起こったのか俺にはさっぱり分からなかった。突然、二人が同時に消えたと思ったら連続で金属同士がぶつかる音が響いた。よく見れば地面には小さなくぼみが次々と出来ていた。さらにまるで何かに切られた様な跡が地面や近くにあつた木々、廃墟

になった建物についていった。

多分だけど二人は俺なんかには見えなくらいの速度で斬り合っているとと思う。どんだけ速いんだよあの二人・・・悪魔になって動体視力も上がったのに残像すら見えないってどゆこと

そして俺はここで気がついたことがある。俺達の周りの地面には斬撃の跡が一切無い事に。そしてよく見れば、さっきバイザーに攻撃した朱乃さんの雷を弾いた物と同じようなものが俺達を囲う様にしてあった。きっとこれは俺達に被害が行かないようにあの人がしてくれているとすぐにわかった。

そして5分くらいして二人が止まったおかげで、二人の姿がようやく見えた。

「はあ、はあ、はあ、・・・」

息を切らしているのはシルクハットの男だった。体は所々ボロボロで、持っているサーベルにも罅が入っていた。対する銀髪の人は一――

「大分息が切れてきたみたいだね。僕も用事があるし、そろそろ終わりにさせてもらおうよ」

全くの無傷だった。それどころか銀髪の方は息一つ乱れてはいなかった

「はあ、はあ、はあ、・・・おやおや、もうお仕舞ですか？楽しい時間が過ぎるのはあつという間ですねぇ。じゃあ、私の最後の一撃、その身に受けてご覧なさい！」

息を整えた男は、相変わらず嬉しそうな笑みを絶やさずに再び剣を構え、銀髪の人と同じく剣を構えた。そして次の瞬間――

ギインツ！

金属音が響いたと思ったら二人の位置がさっきと真逆になっていた。え？・・・え？何？マジで見えなかったんだけど

「・・・いやあ、お強いですね。そうだ、最後に貴方のお名前

を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

男は銀髪の人と背中合わせのままそう問いかける

「僕の名はシルだよ。『銀猫』、と言った方がわかりやすいかな」

シルと名乗った銀髪の方は、ゆっくりと振り返って男にそう答えた「おやおやーやはり、あなたがあのかの有名な『オッドアイの銀猫』でしたか。いやあく、噂通りのお強さでしたね。完敗です」

振り返りながらそう言う。男の胴体には斬られた様な痕があった。その時、男が手に持っていたサーベル全体に罅が走り、サーベルは碎け散った

「おやおや、碎けてしまいましたか。まあ、どうせもう必要無いから良いんですけどね。最後に本当に楽しませていただきました。・・・では、私はそろそろ限界の様なのでこれにて失礼します。バイチャ☆」最後にそう言うと、男は倒れ、塵芥と化して宙に霧散した。あとには碎けた男のサーベルの破片と、被っていたシルクハットだけが残された。

「さて、終わった事だし僕は帰らせてもらうね。あとの事はよろしくね新米悪魔君」

その時丁度風が吹き、俺が目を瞑っている隙にあの人はいなくなってしまった。残ったのは俺と気絶した木場といまだにボウつとした朱乃さんと座り込んだままの部長だけになった。

「ぶ、部長、この後どうしますか？」

「・・・」

俺が問いかけても部長は俯いたままだった

「部長・・・？」

「・・・イツセー、あなたは祐斗と朱乃を連れて先に部室に帰ってなさい」

「え？部長は？」

「いいから早くしなさいっ!!」

「イエス！ママ！失礼します！」

物凄い部長の剣幕に押されて俺は肩に木場を背負い、朱乃さんの手を引いてその場を急いで逃げるように去った。

「・・・絶対に許さないんだから・・・！」

一人残ったリアスは、魔法陣を展開して自分の根城に戻った。そして、リアスが座っていた場所には水溜りが出来ていたそうなの・・・



ガチャツ

「ただいま〜」

「お帰りなさいです」

「お帰りにゃん」

「ただいま二人とも、それで彼女は？」

「大丈夫です。傷もちゃんと治りました」

「さつき元居た森に帰してきたにゃ。その森にも仙術をかけてきたから、もうよそ者が立ち入る事は出来ないからこれで安心にゃ。『ありがとう』って言ってたにゃ」

「そっか、よかった。二人ともありがとうね」

「にゃ〜♪」

二人に劳いの言葉と共に優しく頭を撫でる

「シ〜ル〜！帰ったなら飯だ〜！」

「はいはい、わかったよ。今から作るから待っててアリス」

「手伝います」

「私も手伝うにゃ」

「ありがとう二人とも。じゃあ早速始めようか」

「おー！」

そして今日もシルの家は皆笑顔が絶えなかった



畳の敷かれた六畳ほどの和室。部屋の中央にはちやぶ台があり、ちやぶ台の上にはお酒の瓶と、つまみが乗せられていた

ここは精神世界、つまり僕の夢の中ですね。今ここには僕と神様がいます。

「こっちは仕事してるのにさく、頑張ってる仕事してるのにさく。もうほんと嫌になっちゃうよ・・・んぐっんぐっ」

神様は瓶に直接口をつけて酒をのどを鳴らしながら勢いよく飲み干します。神様の近くには空になった一升瓶が9つ。今のでちやぶど10です。

「神様、今日はお酒はその辺にしておいたらどうですか？今日は何時よりもよりお酒の量が多いですよ」

「ぶはあー！飲まなきゃやってらんないよ！もうほんとに嫌になっちゃうんだよ！・・・ホントにマジで何で俺って神なんてやってるんだろう。もう辞めたいよお・・・」

どうも、シルです。今日は一週間ぶりに神様のカウンセリング、もとい愚痴を聞いてあげているのですがなんか神様がやばいです。軽く鬱が入ってきていますね。

「神様、神様は少しお休みを取られてはどうですか？最近は何も休んでいないようですよ、有給を使って一度ゆっくりとしてきたらどうですか。」

「・・・そうだね、そう言えば有給が結構溜まってたなあ。今やってる仕事が終わったら一度、ゆっくり休もうかな・・・」

「それが良いですよ。あ、そうだ、神様ちよつとここにうつ伏せに寝てください」

僕は想像で布団を出す。ここは僕の夢だからこういったことが出来るのだ。

「うん？こうかい？」

神様は僕に言われた通りに布団の上にうつ伏せになった。僕は神様に「失礼しますね」と言い、神様の上にまたがるように乗り、指で背中や肩を押していく

「大分つ、凝ってますねっ、神様っ」

「おお、いいよおシル君、すごい気持ちがいいよおく・・・」

「肩なんか、ガチガチに、なってるじゃ、ないですか。今度からは、マッサージも定期的に、することにしませうつと」

「そうしてくれると助かるよお、ああそこそこ。そこすごい良いよお」

「ここですか？んしよつと」

「そこそこ、いやあく、シル君は本当にすごいねえ。マッサージも出来ちゃうなんて」

「神様がこの前会った時に疲れている感じだったので、ちよつと本を買ってきて練習してきたんですよ」

「し、シル君！僕の為に態々っ・・・！」

神様はうつ伏せのまま顔を少しこちらに向けて、感激した様子になっている

「ええ、神様には本当に色々お世話になってますから、これくらいは、ね」

「シル君・・・結婚しよう」

「冗談はやめてください、つと！」

「痛たたたた！痛い！そこは痛いよシル君！」

「神様がそんな事言うからですよ。それに神様、カッコ良くて仕事も出来るんですから良い人なんてすぐにできますよ」

「いや、しばらく恋はいいかな・・・もう恋なんて・・・」

あ、しまった。これは今神様にとってはタブーだった。

「ほら、神様。ここはどうですか？」

「おおっ!?そこもすごいいいよ!ちよつと痛いけどこれはいた気持ちいってやつだね」

それから僕が起きる時間まで神様の肩、背中、腰、足裏など様々な場所のマッサージをしてあげた

「いや、シル君のマッサージはすごいねえ。体がまるで羽みたいになくなったよ。今なら飛んでいけそうな気がするね」

「いや、神様飛べるでしょう?」

「あはっ!そう言えばそうだったね。じゃあそろそろ時間みたいだし、俺はそろそろ帰るね。本当にありがとう」

良かった、神様大分元気になったみたいだね。神様は僕に感謝の言葉を述べて帰って行った。そして僕の意識がゆっくりと浮上して行った。

ピピピッ!ピピピッ!ピピッ!ガチャツ!

「うゝん、朝か・・・んゝ!」

僕はいつもの様に軽くストレッチをした後、いつもの様に黒歌達を起こさないようにベットから抜け、朝食とお弁当の準備をする為にキッチンへ向かうのだった。

次はもう少し早めに愚痴を聞いてあげようっと。

魔王様と説明

よう、イツセーだ。はぐれ悪魔の一件のあの後、俺は木場と朱乃さんを連れて部室まで帰ってきたんだけど、

「ボウく・・・はっ！いい、イツセー君！あ、あの人は!?あの人はどこに行っただんですか！それにあなたあの人と知り合いなんですか!？」

「お、落ち着いてください朱乃さ・・・」

「教えてください！あの人はっ！あの人は私と母様の恩人なのです！それなのに私達はっ！あの人に酷い事を・・・！だからイツセー君！あの人の事について知っている事を教えてください!!」

いつもの落ち着いた様子ではなく、朱乃さんは必死な様子で俺にあの人の事を聞いてきた。俺はその勢いに戸惑いながらも俺の知っている事、あの人がこの前俺を救ってくれた事と、名前はシルって事、あの時のシルクハットの男がシルって人の事を『オッドアイの銀猫』と呼んでいた事を教えた。あとどこに住んでいるとかは分からない事も。そしてすべて話すと朱乃さんはようやく落ち着いてくれた

「そう、ですか・・・やっぱり銀猫があの時の人だったんですね・・・ありがとうございますイッセー君、あと取り乱したりしてごめんないい」

「い、いえ。全然気にしてないっすから。それよりも朱乃さんもあの人、シルっていう人と知り合いだったんすか？」

「ええ・・・あの人は・・・」

「ううん、ここは・・・?」

朱乃さんの話の途中で木場が目を覚ました。そしてその後めっちゃくちや怖い顔した部長が帰ってきて、その日は解散になった。あの時の部長の背後には般若がいたように見えたのは俺の気のせいじゃないはずだ。

そして、二日後の土曜日。つまり今日の朝、部長の呼び出しで部室

に向かっている途中で木場に会って一緒に話をしながら部室まで向かった。昨日は部長からメールで連絡があつて部活や悪魔のお仕事はお休みになつて、今朝、また部長から連絡がきて部室に来る様に言われたんだ

「なあ木場。休日の朝っぱらから呼び出しなんて、一体何なんだろうな?」

「多分、昨日のはぐれ悪魔の事じゃないかな。それと・・・」

そこまで言つて部室の扉の前に到着した時、木場は言葉を止めた。

「・・・僕がここまで来て初めて気配に気づくなんて・・・」

木場は目を細め、顔を強張らせていた。何事?しかし俺は気にせず部室の扉を開いた。室内には知らない人が二人いた。一人は部長と同じ紅い髪のイケメンで、もう一人は銀色の髪をしたクールな感じのメイド服を着た美女だった。二人とも歳は二十代前半くらいかな?

「やあ、待っていたよ二人とも。そして君がリアスの新しい眷属の兵藤一誠君だね」

紅い髪のイケメンが俺に笑顔を向けて話しかけてくる。うわっ、声までカッコいいなあ。

「ど、どうもつす。ええつと、どちら様でしょうか?」

「初めまして、兵藤一誠様。こちらのお方はサーゼクス・ルシファー、今代の魔王でございます。そして私はグレモリー家に仕える者でグレイフィアと申します。以後、お見知りおきを」

銀髪のメイドさん、グレイフィアさんから紹介とそう丁寧な挨拶を頂いた。つて、え?今色々とすごい単語が聞こえてきたんですけど、魔王?

「・・・ええええええええつ!?ま、魔王様ああ!?!」

一拍遅れて驚きの声を上げる俺に、さらに隣にいた木場が俺に衝撃の事実をぶち込んでくれた

「補足すると部長はサーゼクス様の妹だよ」

「はいいいいいい!?部長が妹おおお!?」

俺、悪魔になつてから本当に驚く事の連続だな

「ははははーいやあ、良い反応をするねえ」

サーゼクスさん、いや魔王様は愉快そうに笑った。いや、何で魔王様がこんな所にいい!?

「はあ・・・落ち着きなさいイツセー」

部長が嘆息しながら言う部長。いや、いくらなんでも無理でしょう、と抗議しようとして部長の方に目を向けるが、

ドヨーン・・・

って効果音が背景に付きそうな程、部長は目に見えて元気が無かった。ぶ、部長おお!? どうしたんですかあああ!? 一昨日は背後に般若がいたのに一晩でこの変わり様は一体何があったんだ!! 木場も部長の変わり様に驚いている。朱乃さんは・・・なんか落ち着きがないって感じだな

「ぶ、部長。一体どうしたんすか・・・?」

「いやね、リアスはグレイファイアから一昨日の夜からずっとお説教を受けてね。ちよつと落ち込んでいるのさ。でも、落ち込んでいるリアスも可愛いなあ」

「サーゼクス様、ふざけていないでここに来た目的をちゃんと果たしてください」

ギユウツつと頬を抓るグレイファイアさん

「いはい、いはい。わはったはらは、はなひておふへほ(痛い、痛い。わかったから、離しておくれよ)」

あ、あれ? 魔王様って想像してたのと随分違うな。何かノリが軽いつていうか。それと魔王様ってシスコン?

「痛たたた。あ、相変わらず容赦がないねグレイファイア」

「それが私の務めですから」

どんな務めですか、とは聞けなかった。

「コホンツ、・・・私が今日、君たちの元へ来たのは昨日のはぐれ悪魔に関する事だ」

さつきとは打って変わって真面目な表情になる魔王様。俺達の表情も自然と引き締まる

「あのはぐれ悪魔、バイザーと言ったね。彼女のはぐれ認定は解除されたよ」

「っ！」

俺と木場は驚いた。部長達は先に聞かされていたようで驚いてはいなかった。いや、部長は寝不足と疲労のせいかもしれないけど。というか朱乃さんがさつきからそわそわして落ち着きがないんだけど・・・トイレ？

「彼女の元主の上級悪魔の様々な不正、バイザーにした仕打ちの証拠がとある者から提出されたんだ。よつて彼女のはぐれ認定は解除され、その上級悪魔には今朝処分が言い渡されたんだ」

「その証拠を提出したとある者とは、もしや・・・」

コンコンツ

木場の言葉の途中で部室の扉がノックされた

「ん、いいタイミングだね。どうぞ、入ってくれ」

『失礼します』

そしてサーゼクス様の呼びかけで入ってきた人物は、俺達にとって見覚えのある顔だった。

「やあ、待っていたよ銀猫君」

そう、入ってきたのは昨日会ったばかりの『オッドアイの銀猫』こと、シルさんだった。今日はあの白いマフラーはしていなかった

「すまないね、待たせたかな？」

「いや全然。さ、座って座って」

魔王サーゼクス様に席を勧められ、シルさんはソファアに座った。机を挟んで魔王様と部長が並んで座り、部長の後ろには部長の眷属の俺達が立っている。シルさんが来てから朱乃さんが一層落ち着きがなくなった。そう言えばシルさんが朱乃さんの恩人とかって言ってたな。シルさんが来るから落ち着きが無かったのかあ。席に座ったシルさんにグレイフィアさんがお茶を出す。

「さて、さっきの話の続きだけど、証拠を提出したのは目の前にいる、そして君達が一昨日会った、シルバーキャット、『オッドアイの銀猫』だよ。単身、証拠を持って私の所に乗り込んで来たのさ。いやあ、あ

の時は何事かと思ったよ」

「すまないね。急を要していたものだからね」

ま、魔王様の所にたった一人で乗り込むなんて、この人マジでスゲエな

「お、お言葉ですが魔王様。『オッドアイの銀猫』は、はぐれ悪魔と同じように危険生物認定のはずです。なのにどうして捕まえたりせずここに迎えたのですか?」

え?シルさんてそうだったの?

すると魔王様は苦笑交じりに首を横に振った

「いや、それは無理だよ。これは直に会ってみて改めて分かった事なんだけど、私じゃあ目の前にいる『オッドアイの銀猫』に全く及ばないよ。それどころか、ここにいる者や私の眷属全員でかかっても彼を倒す事なんて不可能だよ」

「「?!!」」

部長達が信じられないように目を見開いて驚いた。俺?俺はさつきから驚きすぎて脳が追いつかないんだよ。シルさんは特に気にした様子も見せずにお茶を飲んでいた。

「お、お兄様ったら、いくらなんでも冗談が過ぎますわ」

「いえ、サーゼクス様の言っている事は本当ですお嬢様。現に私は一昨日は気圧されて一步も動くことが出来ませんでした」

頬を引き攣らせながら言う部長に、真剣な表情で話すグレイフィアさんの言葉が、今度こそ驚愕に目を限界まで開く部長達。隣の木場が言うには、グレイフィアさんは『最強の女王』と呼ばれていて、サーゼクスさん、魔王様の眷属は皆有り得ないくらい強い人ばかりみたいで、サーゼクスさん、自身も『紅い髪の魔王(クリムゾン・サタン)』と言われるくらい最強の魔王様らしい。そんな人達が束になっても敵わないって、・・・凄すぎでしょ!?!どんだけすごいこの人!!

「あ、すみません。紅茶のおかわりを頂いてもいいでしょうか?あと、この紅茶はなんというものでしょうか、良かったら教えてもらえますか?」

「はい、ただいま。それはクリムゾン・レッドと呼ばれるグレモリー家

の敷地で最近栽培している茶葉を使って淹れたものです」

シルさんは相変わらずお茶を呑気に飲んで紅茶の話をしていた。呑気だな！いや、これが余裕ってやつなのか・・・

「はははっ、気に入ったのかい？良かったらいくつか君に送ろうかい？今回の事のお礼、というわけではないけどね」

「そうしてくれると嬉しいよ。さて、じゃあそろそろ例の話に移りたいんだけど・・・」

「そうだったね。じゃあ、まず君が言っていたこの町の教会にいます言っていた、墮天使達の事についてだね」

っ!?

墮天使と聞いて俺の体が反応する。

「その話をする為に、人と呼んであるんだ。呼んでももいいかな？」

「ああ、構わないよ」

「どうも」パチンツ！

サーゼクス様の許可をもらったシルさんが指を鳴らすと部屋に魔法陣が現れた。

ばあああ！

そして魔法陣から姿を現したのは・・・

「・・・久しぶりね、イツセイ君」

「ゆ、夕麻ちゃん・・・！」

そう、俺の初めての彼女で墮天使の、天野夕麻ちゃんだっただ。どうして彼女がここに・・・！見れば夕麻ちゃんの他にも金髪ツインテールのゴスロリ服を着た子と青いロングヘアーのスーツを着た見知らない女子が二人いた

困惑する俺やみんなにシルさんが一から説明をしてくれた。

夕麻ちゃん、彼女達墮天使はこの町にやってきたのは、上からの命令で俺に宿っている神器を危険視して排除する為と、もう一つ命令とは関係なくある目的があったらしい。

「彼女達と一緒に居た墮天使ドーナシックは、彼女達が根城にしていた古い教会である儀式を行おうとしていたんだ。そしてその儀式で言うのが、神器が宿っている者から神器を抜き出すというものだったんだ」

「しかし、神器を抜き取られた人間は死んでしまうのでは・・・」

「えっ！そんなんですか!?!」

驚いた俺の頭に嫌な予感が走った。古い教会つてもしかしてこの前に行ったあの・・・

「そう、普通ならそうなんだけど。ドーナシックは彼女達、レイナーレ達に『これは新しい方法を使っていて神器を抜かれても死ぬ事は無い』と言っていたんだ。レイナーレ達はドーナシックの言葉を信じ、儀式の準備を進めていたんだ。しかし、本当はドーナシックの言っていた事は嘘で、その儀式では神器を抜かれた人間は死んでしまう物だった。それに気がついたレイナーレ達はドーナシックに問い詰めた。そうだよな?」

シルさんの問いかけにシルさんの後ろにいた夕ま・・・レイナーレが口を開いた。

「はい・・・私達はドーナシックに問い詰めました。するとドーナシック嘲笑を浮かべながら『あんなシスターが死んだ所で別に構わないでしょう』と言ったわ。その言葉に激怒した私達は、ドーナシックに襲い掛かった。でもドーナシックは私達三人がかりでも歯が立たなかったわ。命令とはいえ兵藤君を殺した私達が言える事じゃないけど・・・あの子は、あの子だけはっ！あの心優しいアーシアだけは救いたいと思ったのよ!」

「アーシアだって!?!」

俺は驚愕の声を上げた。さっきの嫌な予感が当たっちゃった!じゃ、じゃあアーシアは・・・!

「落ち着いて新米悪魔君、いや、兵藤一誠君。君の心配している事は起きていないよ」

最悪の考が浮かんだ俺の心を読んだか様なシルさんは首を振って否定した。

「アーシアは無事だよ。儀式の前に彼女は助け出して、今は安全な所にいるよ」

「そ、そうなんですか。良かったあ・・・」

俺はほっ、つと安堵の息を漏らした。そして俺のせいで中断してしまった話の続きを離してくれた。アーシア・アルジェントという『聖女』と祭られた少女の事を――

欧州のとある地方で生まれた少女は生まれてすぐに両親から捨てられた。捨てられた先の教会兼孤児院でシスター達に育てられ、子供の頃から信仰深く育てられた少女の身に力が宿ったのは、八つの頃だった。

偶然、負傷した子犬のケガを不思議な力で治した所を教会の関係者に見つかり、そこから少女の人生は変わりだした。

教会の本部に連れて行かれた少女は、治癒の力を宿した『聖女』として担ぎ上げられ、訪れる信者に加護と称して体の痛い所やけがを治した。少女の噂が噂を呼び、少女は多くの信者から『聖女』として崇められた。――少女の意思とは関係なしに。

待遇に不満はなかった。教会の人達も良くしてくれたそうで、ケガを治すことも嫌ではなかったらしい。むしろ彼女は自分の力が役に立つのが嬉しかったぐらいだった。少女は自分に授けてくれた神様に感謝した。でも、少女は少しだけ寂しかった。それは少女には心許せる友人が一人もいなかったからだ。

みんな優しくしてくれ、大事にしてくれたが、誰も少女の友達にはなってくれる人はいなかった。それは何故か、少女は理解していた。彼らが自分の事を人間ではなく、まるで異質なものを見るような目で見ていた事に・・・

そしてある日、転機が訪れた。少女は偶然ケガをした悪魔を見つけたのだ。そして心優しい少女は、例え悪魔でもケガをした者を放つては置けず、その悪魔のケガを治した。それが少女の人生を反転させた。

偶々その光景を見ていた関係者がそれを教会本部に報告すると、少女は『魔女』として恐れられ、あっさり教会から捨てられた。

そしてその時少女が一番ショックを受けた事は、誰も自分を庇ってくれる人がいなかった事だった。それから行き場を失った墮天使達に拾われ、日本までやって来た

「・・・これが『聖女』として崇められた少女、アーシア・アルジェントの過去だよ」

俺は、想像を絶するほどのアーシアの過去をシルさんから聞いて言葉が発することが出来ない。部長達も顔を顰めていた。

「・・・本当に虫唾が走るね」

そう呟いた木場の声には怒気とそれ以上の憎悪が含まれている気がした。

「あの子は、アーシアは、捨てられて私達の所に来てからもそれ以前も神への祈りを欠かしたことは無かったわ。毎日毎日神に祈りを捧げていたの」

「それどころかアーシアは底辺の存在の私達にも優しくしてくれたっす！」

「ああ、だから彼女の様な心優しい子の事を、こんな私達だが救いたいたいと思ったんだ」

レイナーレ、金髪の子、青いロングヘアーの人の順で言葉を発する。

「異質な力を宿した者はどこの世界でも、組織でも爪弾き者。他者と違う力を持っているがゆえにね、人間だつてそう。だから私達は儀式を行って、彼女に宿っている神器を抜き取り、普通の人間として普通の人生を歩んでもらいたかったの・・・でも、ドーナシックは彼女の事よりもその神器が目当てだったの」

「アーシアに宿っている神器は『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』っていつてとっても希少な物でさらには悪魔や墮天使も癒す事の出来る物つす」

「ドーナシックはその神器を自分の物にする為に私達を騙してアーシアから神器を抜き取り、墮天使の中での自分の地位を上げようとしたんだ」

「成程ね、確かに悪魔や墮天使も癒せるほどの力を持っていればその立場は確かなものになるわけね」

部長の言葉に三人の墮天使は頷いた。

「それで、そのドナーシクって奴はどうしたんすか？」

「イツセー君、ドナーシクじゃなくてドーナシクだよ」

「クスッ」

また笑われた!?!しかも今度は二人!

「んんっ!そ、それでそいつはどうなったんですか？」

「誤魔化しましたね」

「誤魔化したね」

「誤魔化したわね」

「もう、そこは普通に流してくださいよっ!」

ただでさえ恥ずかしいんですから!

「まあ、話を戻してそのドーナシクなら僕が消し飛ばしといたよ。その証拠とは言えないかもしれないけど、これがその時に残ったあいつの羽」

そう言ってシルさんはポケットから一枚の黒い羽を取り出して机の上に乗せた。

「いや、君がそう言うならそうなんだろう。悪いね、君にそんな事を押し付けてしまって」

「こっちが好きでやった事だよ。別にお礼を言われるようなことじゃないよ」

「いや、君には一昨日もリアスやリアスの眷属を助けてもらった。魔王としてではなく、一人の兄としてちゃんと君にお礼が言いたかった。本当にありがとう」

「わ、私も。碌にあなたの話も聞かずにあなたに攻撃したりして本当にごめんなさい。それに私達の事を助けてくれてありがとう」

魔王様と部長は揃って頭を下げた。シルさんは少しキョトンとした顔になったが、すぐに微笑んで「どういたしまして」と言葉を発した

「所でその墮天使三人はどうするんだい？」

「それは・・・兵藤君、彼に決めてもらおうかと」

「お、俺っ!?!」

いきなり名前を呼ばれた俺は素っ頓狂な声を上げた。何で俺が!?

「私達は命令とはいえあなたを殺したわ、それは変わらない事実。だからどんな裁きだって受ける所存よ」

「同じく・っす」

「彼女たちがこう言っていてね。だから君に決めてもらいたいんだ。墮天使のトップからもこの件はこちらに任せると言ってくれたよ」

『え?』

い、今またとんでもない事が聞こえたような・・・

「え?ま、まさか君は墮天使の所にも乗り込んだのかい?」

「そうだけど?」

魔王様が頬を引き攣らせながら質問すると、シルさんはなんて事の無い様に答えた。これにはここにいるシルさん以外の全員が顔を盛大に引き攣らせた。あのクールな表情を崩さなかったグレイファイアさんですらだぜ?

「は、はははは・・・君は本当に規格外だね。それじゃあ兵藤一誠君、君の意見を聞かせてもらえるかな?」

うおっ!?!部屋にいるほぼ全員の視線が俺に集まった。部長達の顔を見ても何も言わない。チラツつと墮天使の皆に視線を移せばみんな瞳を閉じてどんな事が言われても覚悟している感じだった

俺の意見は・・・

「・・・許す!!」

「「・・・え?」」

「ふっ」

俺がそう言うのと墮天使の三人は予想外だったのか、呆けた表情になり魔王様とシルさんは笑みを漏らした。

「確かに俺は殺されたけど殺したのはあのコートの奴だ、あんた達じゃない」

「で、でも、私達はあなたを殺す手伝いを・・・」

「でも、結局俺はこうして生きてる。そしてあんた達も反省してる。ならそれで十分じゃないか。だから許す！」

再びキョトンとなつた三人。まあ、そうだよな。殺した相手に許すって言われたらそりゃ訳分かんないよな。俺だって多分そうなると思うもん。でも、俺はこの三人を許すって決めた。だからもうそれでいい。それにこんな美少女三人に罪を与えるなんて俺には出来んっ！それに二人はおっぱいも大きいしなあ。あの青い髪の人、胸元を開けてるから谷間が・・・

「・・・イツセー君、せっかくカツコいい事言った後なのに顔が厭らしくなってるよ」

「・・・はっ！」

「ふっ、リアス。良い眷属を持ったじゃないか。少しスケベな子の様だけどね」

「え、ええ。イツセーはとて面白い子なんですけど、欲望に素直な子なので」

ほ、褒められてるのかな？

「じゃあ、兵藤君もこういつてる事だし、三人はこれからどうする？」
「え、ええつと、特に考えてませんでした。まさか許されるとは思っていなかったのです。でももう戻りたくはないですね。もう命令で誰かを殺すのは・・・」

「うちもつす・私もだ」

「それじゃあ・・・『コンコン』ん、丁度いいね。すみません、入ってもらってもいいでしょうか？」

「ああ、彼女だね。うん、入ってもらって」

「ありがとうございます。入っておいで！」

ガチャッ

「し、失礼します!」

「失礼します」

「お邪魔するにや〜」

入って来たのは全員知ってる顔だった。

一人はこの前俺が教会まで道案内した金髪のシスター服を着たアーシア。おろおろとしている姿が今日も可愛いね

二人目はこの学校の一年生でマスコットの存在。ロリ顔に小柄な体。一見すると小学生のしか見えない様な体型をして一部の人からの人気が絶大な白音ちゃん!

三人目は同じくこの学校の三年生、『二大お姉さま』の二人に負けないくらいのグラマーな体型の持ち主で、大胆に制服の胸元のボタンを開けている。白音ちゃんのお姉さんの黒歌先輩!

アーシアはともかく何でこの二人がここに?

「二」アーシア!」

「あ、レイナーレ様、ミッテルト様、カラワーナ様。ここにいらしたんですね。イツセーさんもお久しぶりです」

俺達に笑顔を向けるアーシア。

「アーシア、この町は色々見て回れた?」

「は、はい!黒歌さんや白音ちゃんが案内してくれてすっかり見て回れました!」

「そう、よかった。二人もアーシアの案内ありがとうね」

「いえ、大したことではありません」

「にゃん!シルの頼みなら当然にや!」

「ありがとう。でも黒歌、何度も言ってるけどちゃんとボタンは閉めなさい」

「ええ〜、だって苦しいんだもん〜」

「ぶふっ!」

「イツセー君!?!」

そう言っつて黒歌先輩は前かがみになって自分の胸元を強調するように寄せる。俺はそれを見て我慢できず鼻血が出ちまった。な、なん

て眼福なんだ・・・！

「黒歌、お願いだからちゃんとボタンを閉じて。このままじゃあ兵藤君が死んじゃうから」

「ぶく、分かったにや。それにその鼻血を出してる子にこれ以上見られるのも嫌だしにや」

「・・・ドン引きです」

「あうう、い、イツセーさんはエツチな人だったんですね」

グサグサグサツ！

「グハツ!？」

「イツセー君!?!すっかりするんだ!」

さ、三人の美少女からのこの言葉はキツイぜ・・・

「はあ、話を戻していいかな」

「あ、ああ。それでそこにいるシスターがアーシアさんだね」

「は、はいいい!あ、アーシア・アルジェントと申しませゆ!・・・

あうう、噛んじゃいました」

「にやははは!アーシアは本当に可愛いにやあ」

「ですね」

「あううう」

な、何なんだこの可愛い生き物は・・・!アーシアは真っ赤になつてプルプルと震えている

「はははははっ、君が言っていた通り可愛らしい子じゃないか。じゃあ早速手続きをしようじゃないか」

手続き?手続きって何だ?

アーシアと後日談

SIDEアーシア

私、アーシア・アルジエントは今日から学校に通う事になりました。私はこの学校、駒王学園の制服に身を包んでいます

「はうう、き、緊張しますう。ちゃんと皆さんにご挨拶出来るでしょうか・・・？」

そして今、教室外の扉の近くで先生に呼ばれるのを待っています。この後皆さんの前で挨拶をする事になっているんですが、とっても緊張してきました

「そんなに心配しなくても大丈夫よアーシア。私も一緒に居るんだから」

そんな私の肩に手を置いて優しく微笑んでくれるのは私と同じく制服を着たレイナー様、いえ・・・

「は、はい。夕麻さん」

「でも、まさか私達まで学校に通う事になるとは思わなかったわ」

「お嫌でしたか・・・？」

「まさか、嫌なんてそんな事ないわ。寧ろ感謝するくらいだわ。アーシアとこうして一緒の学校に通えるんだもの。本当に彼らには感謝してもしきれないわ」

「はい！私もです！」

そう、私と一緒に廊下で呼ばれるのを待っているのは、私を拾って下さった墮天使の一人。今は天野夕麻と名乗っておられる墮天使さんです。夕麻さんは私と同じ二年生として、ミッテルトさんは一年生として、カラワーナさんはこの学校の教師としてこの学校にお世話になる事になりました。

私達がこうして学校に通えたり出来るのもすべてはあの人、シルさんのおかげです。私は自分の首にかかっている小さな袋から中身を取り出して眺めます。赤、青、銀色の三色の模様が入ったシルさんから頂いたこのお守りのガラス球を。



「ふんっ！」

「きやつ！」

「レイナーレ様?!」

「余所見をしている場合か？」

「しまっ!ぐあっ!?!」

「きやつ！」

「レイナーレ様っ!ミツテルト様っ!カラワーナ様っ!」

十字架に張り付けにされている私の目の前で、私の事を助けようとしたレイナーレ様達がドーナシーク様に吹き飛ばされました。

「ふんっ、お前達。そいつ等を取り押さえっておけ」

『了解』

ドーナシーク様の命令で大勢の神父の皆さんがレイナーレ様達を身動きが出来ないように取り押さええます。

「は、離しなさい!アーシアッ!アーシアッ!」

「ふんっ、儀式が終わるまでそこでじっとしている。儀式が終わった時、私は至高の墮天使となるのだ!はははは!」

「ドーナシークッ・・・貴様あ!!」

レイナーレ様達が睨みますが、ドーナシーク様は一人気にせずになんとも笑いを上げていました。そして一頻り笑った後、ドーナシーク様は私の方を向いて、私に何をするのか説明を始めました。私の中に宿っている神器と呼ばれる神様から頂いた治癒の力を抜き取り、自分の物にする為にこの儀式を行う事を、そしてその神器を抜き取られた私は死んでしまう事も、

「お前に宿る神器、『聖母の微笑』を手に入れば私は至高の墮天使となるのだ!喜ベアーシア・アルジェント、お前はその為の生贄となるのだ。これほど名誉な事は無いぞ!フハハハハッ!」

「やめなさいドーナシーク!!その子を殺す事は許さないわ!!」

「アーシアッ!アーシアアア!!」

「クソツ!! 離せ!! アーシアを死なせるわけにはいかんだあ!!」

レイナーレ様達が必死になつて私の元へ来ようとはしますが、神父の皆さんに身動きを封じられてただ声を上げる事しか出来ません。皆さん、私の事をそこまでつ……!!

「ふんつ、さあ儀式を始めるぞ!」

『おお!』

私は死ぬのでしょうか。主よ、これも私に与えられた試練なのですか……?!

「さあ、もうすぐ儀式の準備が完成する! 私が至高の墮天使となる! 今まで見下してきた奴らに! この私の存在を知らしめるのだ!」

それは私の死が来る事と同義でした。レイナーレ様達はずっと私の名を叫んでいます。死が間近に迫った私の脳裏に浮かんだのは、この町に来て初めて出合った、そして私が願った初めての友達の人でした。

『大丈夫?』

その人は、転んだ私に心配そうな顔で手を差し伸べてくれた。その手はとても暖かくて、柔らかかったです。

『はいこれ、君のでしょ。この町には旅行かな?』

その人は、風で飛ばされた私のヴェールを拾っていただきました。

『その教会なら知っているよ。良かったら案内しようか?』

その人は、言葉が通じず、道に迷っていた私に、笑顔で案内を申し出てくれました。

『じゃあアーシア、これからよろしくね。友達として』

『と、友達。い、良いんですか? わ、私とお友達になってくれるんですか?』

『もちろんだよ。今度会ったその時は僕が作ったお菓子を持っていきよ』

その人は、こんな私とお友達になってくださいました。私がずっと

欲しかった私の、初めてのお友達に・・・

死にたくない・・・せつかくあの人とお友達になれたのに、まだ死にたくない。約束だっけしました。一緒にお茶をしようって、また絶対にお会いしましょうって、約束しました。

私はまだ・・・死にたくありません！

ふと、視線を落とした私の視界に映ったのは、首から下がったあの方が下さったお守りでした

『それは君の事を守ってくれるよ。何か辛い事や悲しい事があつたら、そのお守りに向かって助けを呼べば、君の事をきつと助けてくれるよ』

「・・・あい」

「うん？何か言ったかアシア・アルジェント。最後の言葉位なら聞いてやるぞ」

ドーナシック様が何か仰っていますが、私の耳には届きません。

「助けて、助けてください・・・私はまだ死にたくありません・・・」

ボロボロと涙を流しながら私は助けを求めました。

「ふん、何かと思えば命乞いか。お前に助けなど・・・っ!？」

「え?・・・」

そこまで言っただーナシック様の言葉は止まりました。私も驚いています。首から下げていたお守りの袋が光出したのです。その光はドンドン強くなり、部屋一杯を光で満たしました。神父の皆さんやドーナシック様達はその光に目を瞑りました。私も目を瞑り、光が収まった頃、私の目の前には・・・

「し、シルさん・・・!」

「やあ、アシア。ゴメンね遅くなって」

私の目の前に現れたのはさつき頭に思い浮かべた私の初めてのお友達。銀色の髪をなびかせ、ルビーとサファイアの様な左右違う瞳を持ったシルさんでした。

「ぐう・・・っ!き、貴様はあの時のっ!!」

光から回復したドーナシック様が目を開けシルさんの姿を確認すると、物凄い怖い顔になってシルさんの事を睨めつけました。

「ゴメンねアーシア。本当ならもっと早く来る予定だったんだけど、ちよつと用事があつて来るのが遅れちゃったんだ。本当にゴメンね」カシャン

でも、シルさんはそんなドーナシック様を無視して私の手足を固定している枷を外して私に申し訳なさそうな顔で謝ってきます。そして手足が自由になった私はシルさんの胸に飛び込みました

「ううっ、し、シルさん、私っ!」

ありがとうございます、と言おうとしたのに、私の口から洩れるのは嗚呼と安心して瞳から出てくる大粒の涙でした。そんな私の事をシルさんは優しく抱きしめて頭を撫でてくれました

「もう大丈夫だよ。本当にゴメンねアーシア」

「貴様ああ!二度も私の邪魔をしおつてえええ!今度こそ消し飛ばしてくれ!!」

そう言つてシルさんの背後にいるドーナシック様はシルさんに向かって大きな光の槍を投げつけました。

「シルさん後ろです!!」

「大丈夫だよ」

私はシルさんに危険を知らせましたが、シルさんは私を抱きしめたまま動こうとはしません。そしてドーナシック様の槍がシルさんの背中に突き刺さ・・・

パリンッ!

『え?』

「なっ!?!」

「ふえ?」

「ほらね、大丈夫だったでしょ?」

なんと、シルさんの背中に刺さろうとした光の槍はシルさんの背中に当たった途端に砕け散ってしまったのです

「ば、バカな!? 私の槍が砕けるだ!! き、貴様! 一体何もの・・・」
「煩い」

「!?」

たった一言、それだけでさっきまで大声を出していたドーナシーク様は黙ってしまいました。それどころか顔を青ざめて震えているように見えます。

「さて、アーシアを泣かせた罪・・・その身で償ってもらおうか」パチンツ!

『っ!?!』

シルさんが指を鳴らすと部屋にいた神父さん達は一瞬でいなくなっていました。

「さて、残ったのはそこにいる墮天使三人とお前だけになったね」

「ひっ!!」

「『ビクツ!』」

「あ、あのシルさん! あそこにいる三人の墮天使さん達は私の事を助けようとしてくれたんです!! だ、だから・・・」

「そうだったの・・・わかった。あそこにいる三人は何もしないよ」

「ありがとうございます!」

私はシルさんにお礼を言うのと三人の元へと駆け寄りました

「レイナーレ様、ミツテルト様、カラワーナ様、お怪我はありませんか? どこか痛い所はありませんか?」

「アーシア・・・ええ、私達は大丈夫よ。それよりもあなたが無事で本当に良かったわ・・・」

「アーシア・・・ヒクツツ、ゴメンね、本当にゴメンね!」

「無事で、本当に良かった。そして、すまなかった」

三人は私の無事を涙を流して喜んで、そして謝って下さいました。それから私達はシルさんの家に案内されて、そこで黒歌さん、白音ちゃん、アリスさんの三人を紹介されました。三人とも私達にとっても良くしてくださいました。そしてこの間、黒歌さんと白音さんに案内されて一緒に向かったのは黒歌さん達が通っている駒王学園でした。

そしてそこで私は耳を疑う言葉を聞きました。

「手続き？手続きって何の事つすか？」

「それはアーシアに關係する事だよ」

「わ、私に關係する事、ですか？」

「そうだよ。それで、兵藤君、さっきの質問だけど、手続きというのはこのアーシア・アルジェントさんの転入手続きの事だよ。実は、シル君が私の元に証拠を渡しに来た時にその事を頼まれてね」

「え？、え？・・・し、シルさん。それは本当なんですか？一体どうして・・・？」

「本当だよ、それにアーシア言っていたんでしょ？『学校に通つてみたい』って。そこにいるレイナーレ達から聞いたよ。それにアーシアみたいな優しい子の願いを叶える事くらい友達として当然だよ。今までアーシアはたくさん苦勞してきたんだ。これからはアーシアが言っていたお友達だって僕以外にもたくさん出来るよ。そのお友達と一緒に出かけたり、楽しくおしゃべりしたり・・・これからは楽しい事が一杯待つてるよ」

シルさんの言葉にアーシアはボロボロと涙が出てきました

「うう・・・あ、ありがとうございますうシルさん・・・」

シルさんは優しい笑顔を向けながら、私の涙を拭ってくださいました。それから私や夕麻さん達は制服の採寸などをして、後の手続きなどはシルさんがやってくださいました。いつの間にか私や夕麻さんの戸籍を作っていた事に私達は驚きましたが、それ以上に驚いた事はシルさんが男性だったという事でした。部屋にいたシルさんや黒歌さん以外の皆さんが信じられないといった風な顔になっていました。ですが、私は驚くと同時に嬉しく思いました。だって・・・



「ん？どうしたのアーシア？」

夕麻さんが私の顔を覗き込んで聞いてきます。

「い、いえ、何でもありません」

『えー、今日はお知らせがあります。今日からこのクラスに新たな仲間が増えます。二人も』

『先生！それは女子ですか！それとも美少女ですか！』

「それだとどっちも女子でしょ・・・」

『男子どもは喜べ、美少女だ。どっちもな』

『うおおおおお!!マジかああ!!』

「あ、あうう、び、美少女なんてそんな。夕麻さんは美少女ですけど私は・・・」

「アジア、そんな事ないわ。あなたは十分可愛いわよ。あなたはもっと自分に自信を持った方がいいわ」

『じゃあそろそろ二人とも入ってきて』

「さっアジア、行きましょう」

「は、はい！」

そして私達が先生の声に促されて教室に入ると

『おおおおおお!!』

「ひゃわ!？」

クラスの男子の皆さんの大きな声に私はビックリしてしまいました

「本当にどっちも美少女だ！」

「このクラスで良かったあ！」

「金髪美少女と黒髪美少女、良い!!」

「ほら、お前達静かにしろ。じゃあ二人とも自己紹介をお願いできるかな」

「はい。私は天野夕麻といいます。今日からこのクラス転入する事になりました。よろしくお願いしますね。さ、アジア」

「は、はい！あ、アジア・アルジェントと申します。皆さん、どうぞよろしくお願いします」

『よろしく願います!!』

「はい、じゃあ二人とも席についてくれ。天野さんはそこに、アルジェントさんはそこだな」

「はー」

私達はそれぞれ先生の指定した席に座りました。あつイツセイさんもいました。私の席は夕麻さんの二つ後ろみたいです

「アーシア・アルジエントと申します。これからよろしくお願ひしますね」

私は自分の席の隣の席の人に挨拶をして手を差し出しました。その方は私の手をちゃんと握り返してくださいました

「よろしくねアルジエントさん？」

「良かったらアーシアとお呼びください。ええつと・・・」

「私は桐生藍華よ。こっちこそ、これからよろしくねアーシア」

「はい！」

使い魔と龍王

『使い魔?』

「あなたも悪魔ならそろそろ自分の使い魔を手に入れた方がいいわ。悪魔にとつて使い魔とは基本的な物なの。主の手伝いから情報伝達、追跡にも使えるわ」

部室に来た俺に部長がそう言った。へく、便利なもんだなあ

「ちなみに私の使い魔はこれよ」

そう言つて部長が出したのは蝙蝠だった。

「イツセーは会つた事があるわね」

「え?」

ポンツ!と音をたてて変身したその姿は見覚えのある者だった。夕麻ちゃんとのデート前に俺にチラシを配った人だった。

「私のはこれですわ」

そう言つて朱乃さんが出したのは小さな子鬼だった。

「ちなみに僕のは・・・」

「ああ、お前のは別にいいや」

「ふっ、つれないねえ」

速攻で否定した俺に苦笑しながらも木場は肩に白い小鳥を出現させていた

「所でその使い魔つてどこで手に入るんですか?」

「それはね・・・」

『コンコン』

「はくい」

話の途中で部室の扉を叩く音がして朱乃さんが返事をする、「失礼します」と言つてある人物が入つて来た。

その入つて来た人物に俺はビツクリした

「せ、生徒会長・・・!」

そう、部室に入つて来たのはこの学校、駒王学園の三年生にして生徒会長であらせられる支取(しとり) 蒼那(そうな)先輩。冷たく厳しいオーラを放っている知的でスレンダーな校内では黒歌先輩と並

んで三番目に人気がある美人さんだ。勿論、一番と二番は我らが部長と副部長だ。見れば生徒会長だけでなく副会長の三年生 森羅（しんら）椿姫（つばき）先輩や生徒会のメンバーが勢ぞろいしていた。あとその中には確か最近、生徒会入りしたっていう男子も一人いた。名前は確か・・・なんだっけ？

「お揃いで、どうしたのかしら？」

「お互い下僕が増えた事ですし、改めてご挨拶をと思ひまして」

「え？下僕ってまさか・・・！」

驚愕している俺に朱乃さんが説明してくる

「このお方の眞実のお名前はソーナ・シトリー。上級悪魔シトリー家の次期当主様ですわ」

ま、マジで!?!俺はこの学校にまだ上級悪魔がいた事に絶句した。聞けば大昔の戦争でそのほとんどが亡くなった部長と同じ72柱の生き残りの悪魔の名家らしい

「なんだ、リアス先輩。もしかして俺達の事、兵藤の奴に話していなかったんですか？同じ悪魔なのに気が付かないこいつもどうよって感じですけど」

唯一の男子が俺に向かって少し小バカにするように言ってくる。少しカチンと来たぞ

「匙、私達はお互いに干渉しない事になっているの。兵藤君が知らなくても無理はありませんわ」

「あっ、思い出した。お前最近書記として生徒会メンバー入りした確か2-Cの匙 元士郎（さじ） げんしろう）、だったっけ」

「そうです。そして匙は私の『兵士（ポーン）』あります」

「こっちは私の『兵士（ポーン）』兵藤一誠よ」

部長と生徒会長が俺達の事をお互いに紹介する

「おお、お前も俺と同じ『兵士』か！しかも同学年なんて」

俺と同じ兵士がいた事に嬉しく思う俺だったが、そんな俺を見て書記の匙はため息をついた。

「俺としては、変態三人組の一人の兵藤なんかと同じなんてのは酷くプライドが傷つくんだけどな」

「な、何だと！」

「この野郎！こつちがせつかく歩み寄ろうとしたのに！」

「おつやるか？言っておくがお前なんかには負けないぜ。こう見えても俺は駒四つ消費の『兵士』だぜ？最近悪魔になったばかりだが、変態兵藤なんかには負けないぜ」

「え？俺も『兵士』四つだぞ？」

「・・・は？」

挑発するように言う匙だが、俺はこの前部長から聞いたことをそのまま言う。すると匙の奴は表情が固まった

「俺と同じ駒四つ!!・・・ま、まあ同じ駒四つでも、俺の方がお前よりは上だぜ！」

最初は驚きつつも、何とか平静を保って俺に向かって指をさして宣言する匙。しかしそこへ部長の追撃が入る

「残念だけど、それは少し間違いよ。確かにイツセーが消費したのは『兵士』駒四つなのだけど、価値としては『兵士』駒八つ分よ」

「へ？・・・」

「え？」

今度は間抜けな面になる匙。俺も初めて聞いたことに疑問の声を上げた

「リアス、まさかその消費した四つの駒の内にあの駒を使ったのですか？」

「ええ、その通りよソーナ」

「えくと、あの駒って何の事なんですか部長？」

俺は思った事をそのまま聞いてみる

「そう言えばイツセーにはまだ話していなかったわね。あの駒、というのは『変異の駒（ミューテーション・ピース）』と言って、『悪魔の駒』が突然変異した物なの。その駒は、例えば駒一つでは転成出来ない者がその『変異の駒』を使えば一つの駒で済ませる事が出来るのよ。上級悪魔の10人に一人はこの『変異の駒』を持っているわ。私はその変異の駒を二つ持っていたの。一つはイツセーは死にかけていた時にはもう使ってしまったって、その時私が持っていた駒が、『僧侶』

が一つ、『騎士』が一つ、『戦車』が二つ、『変異の駒』を含めた『兵士』が八つだったのよ。そしてイツセー、あなたを転生させるには『兵士』駒八つ分が必要だったの」

『悪魔の駒』もチェスと同じように駒にはそれぞれ『女王』は『兵士』9個、『戦車』は『兵士』5個、『騎士』と『僧侶』は『兵士』3個分の価値があるとされているのです」

眼鏡をクイツッと上げながら説明する生徒会長。

「ソーナの言う通りよ。そこで私は『変異の駒』を含めた『兵士』四つ、私がつけていた『兵士』の『変異の駒』は兵士5つ分の価値があつたから、実質『兵士』八つ分なのよ」

「そ、そうだったんですか。あれ？『兵士』八つ分なら、『戦車』の駒と『騎士』か『僧侶』の駒でもいいんじゃないんですか？」

「いいえ、それは不可能なの。転生させるのには駒の種類は一つでないとならないの。だから今イツセーが言ったような方法は無理ね」

へへ、そうなんだ。

「所でリアス、彼は何故『兵士』八つ分の価値があるのですか？見た所魔力なども少ない様に感じるのですが・・・」

会長の疑問に部長はふふん、と少し胸を張った。その時揺れた部長のおっぱいはしっかりと俺の脳内ファイルに保存したぜ！

「それはこの子に宿っている神器の中でもレア中のレア、神滅具（ロンギネス）の一つである『赤龍帝の籠手（ブーステット・ギア）』だからよ」

『なっ!?!』

生徒会の方々が驚いていらつしやる。

そう、シルさんが部室にやって来た時に教えてくれた事なんだけど、俺に宿っている神器はなんかとんでもない物だったらしい。その話をした時、部長達はおろか、魔王様も驚いていた。俺もまさか自分にそんなもんが宿っていたなんてびっくりだぜ。

「かつて三大勢力を壊滅寸前まで追いやった二天竜の片割れ、『赤い龍（ウエルシュ・ドラゴン）』の魂が封印されていると言われるあの『赤龍帝の籠手』。言い伝えの通りなら人間界の時間で十秒毎に持ち主の

力を倍にしていき、極めれば神すら超える力を持つことが出来ると言われる代物・・・成程、それならば駒八つ消費も領けますね。それと兵藤一誠君、私の眷属が失礼な事を言って申し訳ありませんでした。ですがよろしければ同じ新人悪魔同士、仲良くしてあげてください。――匙。」

「え、は、はい・・・さっきはすまなかつた。これからよろしく」
渋々ながら匙も会長に言われて俺に頭を下げてきた。めっちゃ不満そうだけど

『コンコン』

「はくい、どうぞ」

「し、失礼しますう」

「失礼するわ」

「失礼するっす」

「・・・失礼します」

「邪魔するにや〜」

再び部室のドアがノックされ、入って来たのはこの前この学校に転入して、さらにこの部に新しく入る事になったアーシア、それと新しく部長の下僕になった俺と同じ『兵士』の夕麻ちゃん同じく『兵士』のミッテルトちゃんだった。ちなみにここにはいないけどカラワーナさんも『兵士』だ。

さらには白音ちゃんや黒歌先輩もいる

「来たわね。今日は黒歌達も一緒なのね」

「すみません部長さん、お片付けに時間がかかっちゃって」

「私もアーシアと一緒にです」

「うちも当番でおくれたっす」

「・・・私はアーシア先輩の付き添いです」

「私もだにや〜」

「大丈夫よ、そうだ丁度いいわ。ソーナこちらの五人が・・・」

「大丈夫よりアス。彼女たちの事は私も聞いています。初めまして、私はソーナ・シトリ。シトリ家の次期当主です。学校では支取蒼那と言います、どうぞよろしくお願いします」

「は、はい！アーシアと申します。こちらこそよろしくお願ひします！あつ、人間です」

「私は今は天野夕麻です。元墮天使ですがこちらこそよろしくお願ひします」

「ミッテルトつす。うちも元墮天使つすけどよろしくつす」

「・・・どうも、白音です。あと猫？です」

「ヤッホーソーナたん！同じクラスだから知ってると思うけど黒歌だにや。私も猫？だにや」

「黒歌その呼び方は止めてくださいと言っているでしょう！全くあなたは・・・それにしても今まで一緒に居ましたが全然気がつきませんでしたよ」

「ふふん、そりやあ私も白音も仙術で気配を誤魔化してたからだにや」

それぞれが挨拶を済ませて、話題は使い魔の事になった

「え？あなたの所も使い魔を？」

「ええ、今夜にでも行こうと思っていたのだけど」

「でも、彼は月に一回しか請け負ってくれませんし、困りましたね・・・」

「それなら問題ないんじゃないかな」

『うおお!!・きやつ!!・まあ!』

突然そんな声が聞こえたと思ったら、部室にいつの間にかシルさんがいた。

「あらら、驚かせちゃったかな」

「え、ええ少しね。一体どうやって入って来たのかしら？」

「ん？普通に転移してきたんだけど？」

「全く魔力を感じませんでした・・・流星ですね」

「あら？ソーナ、彼の事を知っていたの？」

「え、ええ。この前態々生徒会室まで挨拶に来てくださいましたの」

ん？なんか生徒会長さん少し動揺してる？それにしてもシルさんが来てから朱乃さんと匙の顔がえらいことになってるな朱乃さんの方は多分この間のあれが原因なんだろうな・・・



「じゃあ私達はこれで。また会おう。リアス、リアスの眷属の皆、そしてシル君とその家族の皆」

「失礼します」

手続きが終わり、魔王様達は仕事があるようで転移魔法で帰って行った。

「さて、じゃあ僕も帰るとしようかな」

「あ、あのっ！」

「ん？」

シルさんも帰ろうとした時、朱乃さんが声を上げた

「あの、私っ・・・」

言葉に詰まる朱乃さんにシルさんはふっ、と笑みを漏らした

「久しぶり、巫女さん。お母さんに似て綺麗になったね」

「っ!!」

その言葉に朱乃さんは手で口を塞いでボロボロと涙を零した

「私っ、あの時、あなたに助けてもらったのに、それなのにあなたに酷い事をつ!・・・ずっと、ずっと、あなたに謝りかった・・・本当に、ごめんなさいっ!」

そう言っつて泣き崩れてしまった朱乃さんの肩に手を置いてシルさんは優しく語りかけた。

「泣かないで、それに僕は全然気にしてないから。それよりも元気そうな君を見て嬉しいよ。お母さんも元気にしてる?」

そう言っつと朱乃さんは泣きながらもニッコリと笑顔を見せ、シルさんに向けた

「はいっ・・・あなたのお蔭で私も母様も無事でした。本当にあなたには感謝しています。私と母様を助けてくださってありがとうございます」

その笑顔はいつもの大人びた笑顔ではなくて、年頃の女の子の様な笑顔だった。



今の朱乃さんの顔も、正に恋する乙女って感じの顔になってるもん
なあ、はあ・・・

それに黒歌先輩や白音ちゃん、さらに最近ではさらにアジアも一
緒に暮らしてるみたいだし・・・まさかのハーレム!!俺の夢のハーレ
ムがこんな所にいたなんて!!しかも全員がとびつきの美少女とき
たまんだ!!!まさに勝ち組じゃないかよつ!!!

でも未だに信じられないぜ。シルさんって本当に男なのか?どっ
からどう見たって美少女にしか見えないんだけど・・・ある意味あの
時皆が一番驚いたのって、シルさんが男っていう事だったしな

で、匙の顔はというと、・・・偉い事になっていた。何かすごい顔で
シルさんの事を睨みつけてる。一体何があつたんだ?なんかブツブ
ツ言ってるし、ちよつと怖いんだけど・・・

「コホン、でシルさん。問題ないとは一体どういう事なんでしょうか
?」

「それはね、どっちも使い魔を探しに行くなら一緒に行けばいいんだ
よ」

あく、確かにそうすれば解決だ。何でそんな簡単な事を思いつかな
かつたんだろう?!

「成程、それは良い考えですね。そういう事ならリアス、匙をあなた達
と同行させてもらえますか?リアス達が一緒に行つて下さるのなら
私達もその間に生徒会の仕事が出来ますので」

「そういう事ね、わかつたわ」

「ありがとう。そういう事で匙、皆さんに迷惑をかけないようにして
くださいね」

「は、はいー!」

そういう訳で匙も俺達と一緒に来る事になった。今回のメンバー
は俺、部長、朱乃さん、アジア、夕麻ちゃん、ミツテルトちゃん、匙、
黒歌先輩、白音ちゃん、そしてシルさんの総勢10名という大所帯と

なった。木場はどうやら悪魔の仕事が入ってしまったようで、今回は欠席だ。カラワーナさんも教師の仕事が残っているようで同じく今日は欠席だ。先生も大変だなあ。

そして俺達は夜になり、転移した先は少し不気味な森だった。俺達に使い魔を紹介してくれる使い魔マスター、っていう人は満月の夜にしか案内してくれないらしい

「部長、ここが？」

「そう、ここが使い魔の森よ」

「まんまですか」

俺と匙の言葉が見事にハマった

「僕達もここで使い魔を手に入れたんだよ」

「そろそろ来るはずなんだけど・・・」

「ゲットだぜー！」

「うお!？」

「きゃっ!？」

突然上の方からそんな声が聞こえてきたと思ったら、木の上に帽子を逆に被って、まるで夏休みに少年が虫取りに行くようなラフな恰好をしたおっさんがいた。

「だ、誰だ!？」

「俺の名前はマダラタウンのザトウジ!人呼んで使い魔マスターだぜい!」

「こ、このおっさんが使い魔マスター?」

「ん、今宵もいい満月、使い魔ゲットに最高だぜ!俺にかかればどんな使い魔だって即ゲットだぜ!」

「彼は使い魔に関してはプロフェッショナルなんだよ」

「は、はあ」

シルさんがそう説明してくれるけど、いまいち胡散臭いんだよな

「で、今日はどんな使い魔をお探しなんだぜい?強いのか?速いの?それとも、毒持ちとか?」

「そうつすねえ、可愛い使い魔とかないっすかねえ？女の子系とか」
そう言うと、ザトウージさんはチツチツチツ、と指を振って不機嫌
そうな顔になった

「これだから素人は・・・いいか、使い魔っていうのは有用で強いのを
ゲットしてなんぼなんだぜい。すなわち個体の能力を把握して、かつ
自分の特性を補う・・・」

「あのか、出来れば私も可愛いのが良いんですけど」

「私もそうね」

「うちもつす」

「わかった！可愛いのだね」

「おいー！」

アーシア達が言った途端にその変わり様は何だ！いや、なんとなく
わかるけども！

「ちなみにザトウージさん、ここらで一番強い魔物って何ですか？」

「おう！それはこいつしかいねえ！龍王の一角で唯一の雌、そして龍
王最強と謳われる伝説級のドラゴン！天魔の業龍（カオス・カルマ・
ドラゴン）、ティアマツト！その実力は魔王クラスだぜ！」

そう言っつて木から降りてきたザトウージさんは俺達全員に見える
ようにパンフレットを広げた。そこには蒼いドラゴンが翼を広げた
姿で載っていた。このパンフレットからもその迫力が伝わってくる。
こ、これがティアマツトか。めちやくちや強そうだな

「赤龍帝・・・ティアマツト・・・伝説のドラゴン同士・・・イツセー、
ティアマツトを使い魔にしなさい！」

「イヤイヤ無理ですつて部長！こんなの会った時点で死んじやいま
すつて！ゲームで言ったらラスボスですよ!？」

「大丈夫よ、伝説の龍を宿したイツセーならきつといけるわ。それに
伝説の龍のタッグも見てみたいしね」

「どこから来るんですかその自身は!!そしてその為に俺に死ねと!!」

「兵藤、ティアマツトは同じドラゴンのお前に譲るぜ。感謝しな」

「お前がティアマツトを使い魔にしるよ!!ビビってんじやねえよ！」

「なっ!?そんなわけないだろうが!!」

「言い争つてるとこ悪いが、ティアマツトを使い魔にする事は不可能なんだぜい」

「それは強いからなのかしら?」

「いや、ティアマツトは・・・」

「シル〜!!」

「ふにやつ!!?」

ドツシャーン!!

ザトウージさんの言葉の途中で森の中から何かが飛び出してきてシルさんに突っ込んでいった。シルさんはめっちゃ可愛い声を上げてそのままその何かに押し倒され、土煙が舞った。そして土煙が晴れると、その何かは腰まである長い鮮やかな蒼い髪をした女性で、シルさんに馬乗りの体制だった。

「シル〜! 態々私に会いに来てくれたのか! やっぱりシルは私の事を大事に思っているんだなっ! よし、早速ここで愛の契りを・・・」

「やめるにやこの万年色ボケ女がっ!!」

バシンツ!

シルさんにそのままキスをしようとした女性に、黒歌先輩がどこから取り出したハリセンでその頭を叩いた。

「〜〜っ!! な、何をするんだ! せっかく私とシルが愛の契りを交わそうとしていたというのに!」

涙目になりながら黒歌先輩に向かって抗議の声を上げたその女性は髪と同じ蒼い瞳の多分俺と同じくらいの年のこれまた美少女だった。しかも胸も結構デカイ! 元浜の様な力が俺にあればサイズが分かるんだがっ・・・!

「何が愛の契りだにや! シルの唇はお前なんかに渡さないにや!」

「なにおう! この淫乱ネコめが!」

「やるのかにやこの色ボケドラゴンが!」

バチツ! バチバチバチ!

二人の間で火花が散った。何? 俺達全然ついていけないんだけど、この人ってシルさんの知り合い?

「はあ、全く二人は。何で顔を合わせたらいつもこうなのかな?」

服に着いた埃を払いながらシルさんは困ったような表情を浮かべた。

「え、えっと、シルさん。この人は誰っすか？」

「この子がさつきザトウジさんが言っていた天魔の業龍、ティアマットのティアだよ」

え？・・・

『ええ!?こ、この人がティアマットオオオ!!』

マジで!?というかドラゴンって人型になれるの!しかもこんな美人に!

「ほら二人とも、喧嘩はいい加減やめなさい」

「だってシル!こいつがっ!!」

「じゃないと、お仕置きだよ?」

「私達とつても仲良し!喧嘩なんてしないよ!」

『変わり身早っ!!』

「お二人はとつても仲良しさんみたいですわね!」

「アーシア・・・」

「・・・バカ二人」

シルさんの言葉に二人は肩を組んで仲良しさをアピールした。心なしか少し震えているように見える。龍王最強と言われているティアマットが恐れるお仕置きって一体・・・

「あらあら、シルさんは私と同じでしたのね。私、シルさんが望むならどちらでも・・・」(ボソツ)

「朱乃?どうしたの?」

「いえ、何でもありませんわ部長」

朱之の呟きは誰にも聞こえていなかった。

「さて、さっきの続きだがご覧の通り、ティアマットはシルの坊主にこんな感じだから、他の奴の使い魔になるって事はないんだぜい」

「当然だ!私はシル一筋だ!」

「私だってシル一筋にや!それもティアなんかよりずっと上にや!」

「なにおう!私の方がずっとずっとお前より上だ!」

「ぐぬぬぬ・・・!」

「はあく・・・全く二人つてば・・・（本当に何でこの二人はこうなっちゃやうんだろう？何時も妙な事で争うんだよねえ。別に仲が悪いってわけじゃないと思うんだけどなあ）」

畜生う！シルさんばかり女の子が集まって羨ましいぜ！俺もシルさんみたいにもテモテになりたいっ！！見れば匙の奴も俺と同じように血涙を出していた。ああ、お前もか匙。そうだ！俺達は仲間だよな！

「夕麻さん、ミッテルトちゃん。どうしてイツセイさんと匙さんは泣きながら握手をしているんでしょうか？」

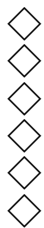
「アーシア、ゴメンなさい。それは私にもちよつと分からないわ」

「うちもつす。ていうか知りたくないっす」

「・・・ここにもバカ二人」

「はあ、みんな早く使い魔探しに行きましょう」

嘆息する部長の一言で俺達は本来の目的である使い魔探しを始める事になった。



そして俺達はある湖の畔まで来ていた。俺達の眼前に広がる湖は、透明度が高く透き通っていて、キラキラと輝いていた。その光景はとても神秘的に感じた。俺、悪魔なんだけどね。

俺達はその湖の傍の木の陰で身を潜めていた

「この湖にはウンディーネと呼ばれる水の聖霊が生息しているんだぜい」

ザトウジさんは声を潜めて説明をする

「おお！水の聖霊！ゲームでもよく名前とか聞くぜ！確かゲームとかではめっちゃ癒し系の美人だったよな！」

「俺もだ！きつと綺麗な水色の髪で透明な羽衣を着こんだスレンダーで美しい美女に違いない！」

小声で叫ぶという器用な事をする匙と俺。そんな時、湖の中央が光

出した

「おつ、ウンディーネが姿を現すぞ」

俺達が躯体する中、湖から姿を現したのは……

キラキラと光る水色の髪をして、透明な羽衣を着た……

「うおおおおおお！」

筋肉隆々のミルたんにも勝らずとも劣らずって感じの勇ましいやつだった。……なあに、あれ？

「あれがウンディーネだぜい」

「なん、だと……!?」

残酷なザトウジさんの言葉が俺達の胸に突き刺さった。

「……いいいやいや！そんなわけないでしょう！だってどう見たってあれ水浴びに来たどっかの格闘家でしょう！」

「そうですよ……あの鍛え上げられた体、間違いなくマスター（達人）クラスだよ！」

「うくん、精霊達も縄張り争いが絶えないそうだからなあ。精霊の世界も実力主義、弱肉強食なんだぜい。でも、運がいいぜ少年達。あれはレア度が高い。打撃に秀でた水の聖霊も悪くないぜい」

「悪いわっ!!」

「打撃に秀でたウンディーネ!? そんなデンジャラスな単語聞きたくないかった!!」

「癒し系っていうよりは殺し系だよ!! そんな精霊なんて欲しくないんだよ!!」

「だが、あれは女性型だぜい? しかもかなりの実力を持った」

「知りたくなかった事実でした!!」

俺と匙は両手で顔を覆って号泣した! そりゃあもう盛大に!!

そんな事をしている間にもう一体现れた同じく巨漢な奴と睨み合い、激しい殴り合いを始めた。さっきまでの神聖な雰囲気は、一転して闘技場と化した。

「へ、へえ、私初めて見るけど、ウンディーネってあんな感じなのね」

「でも、とても清い目をしています。きつと心の清い女の子に違いありませんね。な、名前はウンディーネのディーネちゃんではないんでしょうか?」

「え?!?あ、アーシア。もしかしてゲツトする気満々ですか?」

「アーシア、流石にあれば止した方が良くと僕は思うよ。きつとアーシアにはもつと似合う使い魔がいるはずだよ」

「私もそう思います。アーシア先輩にはもつと可愛いのが良いと思います」

シルや白音は優しく諭すようにアーシアに話しかける

「そうだにや。それにあんなの傍に置いたらそれだけで妊娠しちゃうにや」

「シルさんの子供なら私・・・産みますっ!!」

『ぶふっ!!』

アーシアの飛んでも発言に、全員が吹き出した。

「・・・く、黒歌ああああ!あ、アーシアに何を教えたああああ!!」

「にやにやつ!?わ、私じゃないよ!」

「いえ、きつと姉さまです。この前シルさんがいない時に何か話していましたから」

「黒歌ああ!!」

手に炎を纏わせたシルが黒歌に向かって突っ込んだ

「白音っ!?お姉ちゃんを売るの!?!あの時白音も興味津々だったのに!」

「白音にも何か教えたのかあ!!火竜の・・・!」

「つて待つてシル!それはシャレにならないにやああー!!」

「待ちなさい!避けなくて大人しくお仕置きを受けなさいっ!!お兄さんは黒歌をそんな子に育てた覚えはありません!!」

「何それ!?だつてそんなの喰らつたらひとまりもないにや!」

「大丈夫!一回だけだから!一発だけだからっ!」

「出来ればその台詞は別のシチュエーションで言ってもらいたかったにや!!」

二人の激しい追いかけてこが繰り広げられた。そしてこつちはと

いうと、

「はわわわっ！わ、私つたらなんて大胆な事を……！うう、これが穴があつたら入りたいというものですねぇ。主よ、どうかこの罪深い私をお許しください……」

「アーシア、今更恥ずかしがるのね。あと、祈るアーシアの傍にいと地味にダメージが……」

「でも、恥ずかしがるアーシア可愛いっす！早速写真に撮って保存しとくっす」

「あらあら、アーシアちゃんたら随分大胆な事を言うのですね。これは私も負けていられませんわね」

「そのオナゴ！シルの子を産むのはこの私、ティアマットだ！異論は認めん！」

「何を言ってるんですか全く……シルさんの子供を産むのは私です（ボソツ）」

「なあ匙。俺、ファンタジーに夢を持ってたんだ……でも今日、それが崩れたんだ。あの筋肉野郎によって……」

「わかるぜ兵藤……俺もこんな現実認めたくないぜ……なんだよあれ……」

「滅龍奥義改!!」

「待つて待つてえええ！マジでそれはシャレにならないにやああああ!!!」

「おうおう、なんだかすごい事になってるぜい」

「はあく……どうしてこうなってしまったのかしら？」

◇◇◇◇◇◇◇◇

SIDEシル

僕とティアは皆とは別行動で、翼を広げて森の奥の洞窟まで飛んで来ていた。ここはティアが根城に使っている物なのだ。

「それでティア、話って何？態々二人きりで話したい事なんて」

翼を仕舞い、異空間の倉庫から椅子を二つ取り出して座り、僕の正面にティアも椅子に座る。湖での一件の後、ティアが真面目な顔で「二人きりで話したい」と言ってきたのだ。だから二人きりになれるこの洞窟まで来たのです

「うむ。それはなシル・・・私と子供を・・・」

「帰る」

「待つて待つて！冗談！いや、将来的にはそうじゃないけど今は冗談だ！だから帰らないで！」

速攻で帰ろうとした僕の服の裾を掴んで必死になって謝ってくるティア。

「はあ・・・わかったよ。でも次は無いからね」

「う、うむ。承知した！」

コクコクと頷くティアを見て再び座り直し、ティアの話聞く体制に入る。ティアはコホン、と一つ咳払いをしてから真面目な顔になって話し出した

「シル、どうして蝙蝠の連中と一緒にいるのだ。それにたしかあの蝙蝠共は・・・」

「そうだよ、彼女達は黒歌と白音が通ってる学校の悪魔達だよ」

「・・・という事はシルの正体を明かしたのか？」

「うん」

「なぜだ？今までその姿を隠していたのに今になって正体を・・・もしや白音か？」

おっ、流石ティア

「当たり前。良くわかったね」

「ふふん、当然だ。何と言っても家族なのだからな」

「そっか・・・」

僕はティアその言葉に少し昔を思い出した。あれは、今から大体八、九年くらい前……

◆◆◆八、九年前◆◆◆

藍華の元から去った僕や黒歌達は、色んな所を転々と移動しながら生活を送っていた。一か所に留まっていると、いくら結界を張っていても見つかってしまう恐れがあるからだ。

そしてある日、僕達はある森の中を歩いていた。

「にやゝ、ちよつと疲れたにや……」

「私事です……」

「じゃあ、少し休憩にしようか」

二人はまだ子供なので、こうしてこまめに休憩を入れる必要がある。本当に二人には苦勞をかけてしまうな……。

「あく！シル、今苦勞をかけてるって思ったでしょう！」

「えっ？僕声に出ってた？」

「そういう顔をしてました」

おお、二人がジト目で僕の事を睨んでくるよ

「前にも言ったけど、そんな事は全然ないにや！シルがいてくれたから私達はこうして元気でいられるんだにや！」

「そうです。それに私達はシルさんがいればどんな所だって構いません。だって私達は……」

「家族だから」

「……そっか。ありがとうね二人とも」

「にやーい、いきなり撫でるのは反則にやゝ♪」

「気持ちがいい、です……にやゝ♪」

二人は耳をピコピコさせて気持ち良さそうに顔を緩めさせた。僕はしばらく二人の事を撫で続けた。

そして休憩も終わり、再び歩き出した僕達の目に映ったのは、森の

中に隠れるようにあった大きな洞窟だった。奥まで続いていて、結構広い。

「今日はここで野宿しようか」

「はい・にゃー!」

僕は異空間の倉庫から材料や道具を取り出してご飯の準備を始めた。今日は途中で狩った奴の肉と、倉庫にあった野菜とお米を使ってカレーライスにしようつと。

「シル、今日のご飯は何かにゃ?」

「今日はカレーだよ。すぐに作るから二人はゆつくり休んでね」

僕は倉庫から更に椅子と机を取り出して平らな所に置いた。

「了解にゃ」

「カレー・・・楽しみです」

僕は魔法で地面に炎を作り出して、その上にさつき洗ったお米が入った御釜を乗せ、もう一つ炎を生み出してその上で大きな鍋でお肉を炒めだした。

コトコトコト・・・

「ん、いい匂いがしてきたにゃ」

「美味しそうなカレーの匂いです」

「あと少しで出来るから待っててね」

それから少ししてお米も炊け、カレーもルーも完成した。僕はお皿に炊き立てのご飯をついで、その上からルーをかけて二人に渡した。

「いただきます!」

二人は美味しそうにカレーを頬張った。

「私にも一つくれるか?」

「はいはい、ちよつと待っててね」

僕はすぐにお皿にご飯とルーをよそって渡した。・・・ん?

「ん?」

今、誰の声だった?

恐る恐る、その声があった方を見てみると、そこには見た事がない青

い髪の女の人がいた。その人は美味しそうに多分きつき僕が渡したカレーを頬張っていた。

「モグモグ、ゴツクン。うむ、これはとても美味しいな。気に入ったぞ」
「そ、それは良かったです」

「ふむ、お代わりをもらっても良いか？」
「う、うん。ちよつと待っててね」

僕は渡されたお皿にカレーをよそって青い髪の人に渡す。

「すまん。モグモグ・・・うむ、これならいくらでもいけそうだ」
「・・・私もお代わりです」

「はい、ちよつと待っててね」

「む？私と勝負する気か？」

「・・・負けません」

「ふむ、面白い！ならばその勝負受けてたとう！モグモグ・・・」
「はい、どうぞ白音」

「ありがとうございます。パクパクパク・・・」

「ぬ、中々やるな。ならばこちらもスピードアップだ！」

「パクパクパク・・・」

「二人とも、あんまり慌てて食べると・・・」

「うっ!!」

二人は案の定、のどを詰まらせてしまったようだ。僕はすぐに二人に水が入ったコップを渡した。

「ほら二人とも、お水だよ」

「ソングング・・・はあ、苦しかったあ」

「慌てずにゆっくり食べてね」

「は〜い」

二人はゆっくとカレーを食べだした。

「・・・ってあれ!?何でみんな普通に食べてるの!」

「黒歌はお代わりどうする?」

「あつ、貰うにや、ってそうじゃなくて!!」

「静かにしてください姉さま。行儀が悪いですよ」

「全くだ。うるさい黒猫だ」

「ええ!?私が悪いの!」

「黒歌、取り合えず話はカレーを食べてからにしよう」

「うう、シルがそう言うならそうするにや・・・」

「お代わり!」

「はいはい、ちよつと待っててね」

それからみんなはドンドンお代わりをしていき、カレーは綺麗さっぱり無くなった。僕は一先ず食器類を片付けて全員分のお茶を淹れた。

「「ズズズツ、ふうく」」

そして一息ついたところで話を始めた。

「で、あなたは一体何者なんですか?」

「ふむ、そう言えばまだ名乗っていなかったな」

そう言うと、青い髪の人椅子から立ち上がり、腕を組んで仁王立ちになった

「聞いて驚け私の名は・・・天魔の業龍（カオス・カルマ・ドラゴン）、ティアマツトだ。フフツツ、どうだ怖いか?」

後ろに何か効果音が付きそうな感じで言うティアマツトさん。え、ええつと・・・どつちかかっていうと可愛らしい、かな?

「全然怖くないにや」

「何っ!」

黒歌の言葉にティアマツトさんは驚きの声を上げた

「わ、私はティアマツトなのだぞ!あの龍王最強の天魔の業龍なのだぞ!」

龍王?天魔の業龍?何それ美味しいの?

「全然知らないにや。白音は知ってる?」

「いえ、全く知りません。シルさんは知っていますか?」

「ゴメン、僕も全然知らないや」

「・・・」

ティアマツトさんは口を大きく開けて唾然とした様子だった。その様子からするに、この人ってそんなにすごい人なのかな?いや、

さつき自分の事ドラゴンって言ってたような・・・

「・・・ふ、ふん！知らないなら怖がらないのも仕方がないな。うむ、良かろう！ならば私の真の姿を見せてやろう！」

「別にいいにや」

「・・・ううゝ・・・」(じわあ)

黒歌に速攻で拒否され、泣きそうになるティアマットさん。

「ぼ、僕はティアマットさんの真の姿見てみたいなあゝ！ね？白音」

「・・・私も少しだけ見てみたいです」

白音、ナイス！僕は白音にサムズアップを送ると白音もVサインで答えてくれた

「っ！・・・そ、そうかそうか。どうしても見たいか・・・よし！ならば私の真の姿を見せてやろう！」

僕達が言う元気になるティアマットさん。何だろう、この人見た目は十代後半くらいなのに、子供っぽいというかなんというか

そんな事を考えているうちに、ティアマットさんは僕達から少し離れた場所に移動した。するとティアマットさんの体が光だし、洞窟の中が眩しい位明るくなった。そして光が収まり、僕達の目の前にいたのは・・・

大きな目。その瞳は僕の片方の目と同じくらい鮮やかな青。大きく裂けた口には鋭い牙が何本も生えていた。洞窟の中だけど、その全身を覆う鱗はその一つ一つはまるでサファイアの様な輝きを放っていた。背は洞窟の天まで届きそうな程で、足や腕はまるで巨木の様な大きさで、それぞれに鋭角な鋭い爪がついていた。そして背中には今は閉じられているけど広げれば一層その体が大きく見えそうな翼があった。

その姿はまさしくドラゴンだった

『フフフッ、これが私の真の姿だ。どうだ、怖いだろうか？』

ドラゴンの姿になったティアマットさんが僕達を見下ろしながら口の端を吊りあげた。た、確かに迫力があるけど・・・

「はあ・・・」

黒歌の口から漏れたのはそんなため息だった。

『なっ!?な、なぜため息を吐くのだ!この姿を見て怖くないのか!』

ティアマツトさんが焦ったような声を上げた。ドラゴンの焦った姿って珍しいよね

「だってそういうのはシルで見慣れてるから別に怖くないにや」

「・・・私もです」

『何っ!?そこにいる者は人間なのにドラゴンになれるのか!』

ティアマツトさんが驚愕の声を上げた。まあ、そういう反応になるよね

「はい、僕は一応人間なんですけどそういった能力があるんです」

「シル、せっかくだから見せてあげるにや」

「そうですね。私達も久しぶりにシルさんのドラゴンになった姿を見てみたいですし」

「わかったよ。それじゃあ二人とも少し離れててね」

二人が僕から離れたのを確認して僕は頭の中でドラゴンをイメージする。すると、僕の体は光に包まれ、光が収まると僕は白銀のドラゴンとなっていた。

シルのその姿は、ティアマツトと同じくらいかそれよりも少し大きく、瞳は左右がそれぞれまるでルビーとサファイアの様で、全身を覆う吐く白銀の鱗はキラキラと光り輝いており、洞窟の中が明るくなるほどの美しいドラゴンだった。その姿はまさしく『オッドアイの銀猫』ならぬ『オッドアイの銀龍』だった。

『ま、参りました・・・』

ティアマツトはシルのドラゴンになった姿を見て同じくドラゴンの姿のまま土下座のポーズを取った。

◆◆◆END◆◆◆

◆◆◆現在◆◆◆

それから僕達はしばらくの間ティアマツトと一緒にその洞窟で過ごしたんだよねえ。ティアがいるおかげで洞窟の周辺には誰も近づ

いて来なかったから結構安心して生活が出来たんだよねえ。シルもあの時から僕達に懐いたというかなんというか。まあ、あれからティアも僕達家族の一員になったんだよね。

「む？どうしたのだシル？」

ティアが僕の顔を覗き込んで聞いて来る

「いや、ちよつとティアと初めて会った時の事を思い出してね」

「む？ああ、あの時の事か。私は今でも鮮明に覚えているぞ。全くあの黒猫はあの時からうるさかったものだ！」

ティアは僕の前で頬をプクーつと膨らませて少し怒ったような感じになった。可愛いなあ。

ティアと黒歌は昔から喧嘩や言い争いが絶えなかったんだよねえ。まあこの二人の場合は喧嘩するほど仲が良いって奴だね。でもたまにそこら辺を吹っ飛ばすほどの喧嘩をする事があるからそう言うのは困ったものだけどね・・・

「そう言えばティア、最近は何をしてたの？」

「うむ？最近はこちらと子ドラゴンの世話をしているな。この間羽化したばかりの奴だから私が少し面倒を見てやっているのだ」

「そうだったんだ。ティアはえらいね」

「フフフツ、そうだろうそうだろう。私は偉いだろう！そこで私はシルにナデナデを要求するのだ！」

「はいはい」

そう言って僕に頭を差し出してくるティアに苦笑しながらも、僕はティアの頭を優しく撫でてあげる。ティアの髪はサラサラとしていて撫でている僕も気持ちが良い。

「ふふふ、シルのナデナデは気持ちがいいな。とても癒されるぞ」

「そうなの？」

「ああ。そうだシル、マットか布団を出してくれないか？そしてシルにはその上に座ってほしいのだ」

「？わかった」

僕は倉庫から適当に大きめのクッションを取り出すと、ティアに言われた通りに僕はその上に正座した。するとティアは僕の膝の上

頭を置いて寝ころんだ。これは膝枕かな？

「さあ、いいぞ。ナデナデの続きをしてくれ」

「はいはい。ティアは甘えん坊だね」

「だって最近シルに会えなかったから私は寂しかったのだぞ？今日
は久しぶりに会えたから命一杯シルに甘えるのだ！」

「クスツ、分かったよ」

僕はティアの子供っぽい発言に笑みを漏らしてしばらくの間ティアを膝枕しながら頭を撫でた。

「そう言えばティア。その面倒を見てるドラゴンって……」

「すう……すう……」

「あらら、寝ちゃったか」

僕は眠ってしまったティアの可愛い寝顔を見ながらしばらく頭を撫で続けた

S I D E E N D

◇◇◇◇◇

S I D E イツセー

俺達は湖を後にした後、使い魔を求めて他の場所に移動を開始した。その道中、夕麻ちゃんとミツテルトちゃんは使い魔をゲットした。何か真ん丸でメカっぽい奴だったな。二人ともさつき使い魔契約をして見事契約が完了した。名前は夕麻ちゃんが「ハロ」でミツテルトちゃんが「シロ」だったかな。

あと匙の奴もなんか使い魔をゲットしていた。何かすごい匙に懐いていて、匙も嬉しそうにしていた。なんか首が二つある蛇みたいな奴で、大きくなればどんな奴でも毒殺出来るヒュドラの子供らしい。しかもこっそり聞いたけどそいつは偶に自分の主人も毒殺してしまうらしい……。匙の奴は見つかったから生徒会の仕事を手伝いに行くと言って魔法陣で帰ってしまった。

これで使い魔をゲットしていないのが俺だけになった。

「蒼電龍（スプライト・ドラゴン）？」

そう尋ねた俺に、ザトウージさんは頷いた。

「そう、蒼電龍。その名の通り、蒼い雷撃を使うドラゴンさ」

移動しながら俺達はザトウージさんからレアなドラゴンの話を聞いていた。なんでも現在この森の奥に蒼電龍なる激レアなドラゴンの子供が飛来しているらしい。そしてもしゲットするなら今らしい。何でも大人になると絶対にゲットできなくて、ティアマツトさんみたいな龍王ほどではないけど、ドラゴンの中では上位クラスらしい。

ドラゴンかあく。カッコいいドラゴンもいいけど、俺的には可愛い女の子の使い魔も捨てがたい……！

俺が真剣に悩んでる時、ザトウージさんが「止まれっ！」と声を上げ、ザトウージさんは上を見上げた。俺達も同じように見上げると、オオワシくらいの大きさの蒼いドラゴンが木の枝で翼を休めていた。

「あれが蒼電龍だ！」

ザトウージさんは出来るだけ声を抑えて俺達にそう言った。その声は少し興奮した様子だった。

おお！あれがか！

「私も生で見るのは初めてだわ」

部長も感動するように目を輝かせていた。部長も初だったんですか！よっぽどレアなんだな。

「よし決めた！俺の使い魔は君に決め……」

「キヤッ！」

そこまで言いかけて、背後からアシアの悲鳴が上がった。何事かと振り返ってみると、ネバネバしたゲル状のものがアシアを襲っていた。何だこいつは！

「こ、これは……」

見れば部長や他の女性陣の皆がネバネバに襲われていた。

ベチャッ！ベチャッ！

次から次へとネバネバな物が空から降って来る。ネバネバの物はうねうねと動いている。生きてんのか！生物？それとも魔物か？なんかゲームとかでよく見るスライムに似てるな。もしかして、何か危

険な奴なんじゃ・・・！

俺がそう考えていた次の瞬間、その考えは杞憂に終わった。

「ふ、服が・・・融けてます！」

アーシアの悲鳴の通り、スライムはアーシアの制服を融かし始めていた！女性陣全員の制服が融け、着ている下着が露わになる！

「な、何なのよこいつら！服がっ・・・！」

「うええ、ヌルヌルしててめっちゃキモイっす」

「あらあら、困りましたわね」

ブツ！

鼻血が出るのも構わずその光景を目に焼き付ける俺。匙、お前はとんでもない物を見逃したな！

「な、なんて素敵な展開！」

スライム達はやがて下着すらも融かし始めた！なんて絶景！アーシアの下着は白！部長は紫！朱乃さんは黒！夕麻ちゃんはピンク！ミツテルトちゃんは黄色！白音ちゃんは水色！黒歌先輩は・・・っ！
ブハッ！

更に俺の鼻から血が勢いよく出る！く、黒歌先輩、下着を着けていない、だとおおお！！

「にゃ〜、そう言えば今日は体育の後、ブラジャーを着るの忘れてたにゃ〜」

ご馳走様です！！俺は黒歌先輩に向かって合掌をした。見事なおっぱいでした！

「・・・姉さま、卑猥です。そしてイツセー先輩は死んでください」

ドコッ！

大事な部分を隠しながら白音ちゃんが俺を殴る。

「ぐ〜っ！」

体の芯まで響く良いパンチだった・・・！！

「・・・変態」

変態でゴメンなさい。でもそんな事言っただって俺、健全すぎる思春期真っ盛りな男子高校生だもん。

「こいつは特に名称を持たないやつだが、女性の衣服のみを融かすや

つらなんだぜい」

ちやつかりみんなの姿を見たザトウージさんが俺と同じように鼻血を流しながら説明してくれた。

何その素敵なスライム！

「決めました部長！俺このスライムを使い魔にします！こいつらこそ俺が探し求めていた使い魔です！」

「何を言ってるのイツセー！使い魔っていうのはとっても重要なものよ！もつと良く考えなさい！あんっ！こら、そんな所につ！」

「やつぱり使い魔にします！」

「一秒も考えてないじゃない！ああもう！いい加減にしなさい！」

「あああああ〜!!」

部長は手に纏わりついていたスライムを引きちぎって滅びの魔法でスライムを消滅させていく。他の皆も、夕麻ちゃんとミツテルトちゃんは光の槍でスライムを、朱乃さんは雷でスライム達を黒焦げに、白音ちゃんは次々スライムを千切っては投げ、千切っては投げの繰り返し。黒歌先輩は魔法か何かで生み出した炎でスライムを蒸発させていく。

「やめて！俺のスラ太郎達をイジメないでっ！」

「あらあら、もう名前まで付けているのですね」

楽しげに笑いながらスライムを次々と雷で焦がしながら言う朱乃さん！やめってて言ってるのになんてドSなんだ！

「森の厄介者をここまでここまで渴望する悪魔を見たのは初めてだぜい・・・まだまだ世界には驚く事ばかりだ。本当に世界って奴は広いなグレモリーさん」

ザトウージさんは心底驚いた様子で言う

「ごめんなさい・・・この子、本当に欲望に素直な子だから・・・」

悲哀に満ちた表情の部長。その目はまるでかわいそうな子を見るような目だ。うう、でも絶対に俺はこいつらを使い魔にしてやるんだ！

しかし、スライムはほとんど皆さんに始末され。その姿は見えなかった。でもきつとまだ生き残ってるやつがいるはずだ！俺は辺り

を見回すと……いた!!

皆から少し離れた位置にいたアシアの頭の上に一匹生き残っていた!

「見つけたああ!!」

俺は全力でアシアに駆け寄った!

「っ!?速い!祐斗以上だわ!」

「イツセー君の眠れる力がこんな所で発揮されるなんて!」

部長達が驚きつつも呆れたという感じの声を上げた。すみません!俺は煩惱とエロに生きる男なんで!

「アシアアアア!そこ動かないでえええ!」

「い、イツセーさん?」

そしてもう少しでアシアの頭の上のスラ太郎に触れたその時、

バリバリバリバリバリッ!

俺の全身を激しい電撃が襲った!

「あがががががががっ!」

……パタンツ

俺は全身黒こげになってその場に倒れた。な、なんだ今の電撃

は……あ、朱乃さんか……?

「あ、あの、イツセーさん……?だいじょうぶですか?」

……あ、れ?俺の傍にいたアシアは無事の様だ……なんでだ……

?

「ガー」

その時、アシアの肩にさっきの蒼電龍が乗っていた。体からはビリビリと蒼い電撃が出ているが、アシアは平気な様子だ。

「蒼電龍は外敵とみなした相手にしか電撃のダメージを与えないんだぜい。その娘っ子の事を気に言ったご様子だ。だから飛びかかったお前さんとスライムの事を敵とみなして攻撃したんだろう。それにそいつはどうやらオスの様だ。ドラゴンのオスっていうのは他種族のオスを嫌うらしいからな」

見れば俺の手の中には無残な姿になったスラ太郎があった。

「す、スラ太郎オオオオオ!そんなああああ!!」

なぜだ！何故死んでしまったんだ！スラ太郎オオオ！！
俺は空に向かって悲しみの声を上げた

バサツ！

「ただいま〜…ってこれってどういう状況？」

「…一体ここで何があったのだ？」

その時、シル達は洞窟から帰ってきて空に向かって泣き叫んでいる
イツセーや服が融けてしまっている女性陣の皆を見て混乱したそう
な。

それから結局、蒼龍はアーシアの使い魔となり、名を雷撃を使う
事とシルからもらって「ラル」と名付けられた。

さて、今回を振り返って一言どうぞ！

「…スケベ死すべき」

ありがとうございます！

イツセーが使い魔をゲットできるのはまだまだ先の様だ。

戦闘校舎のフェニックス 決断と藍華

ピピピッ！ピピピッ！ピピッガチャツ

「うくん、朝か・・・んく！」

いつもの様に目を覚ました僕はストレッチの後、いつもの様にベツトから抜け出て洗面所で顔を洗ってから朝食とお昼のお弁当の準備を始める。最近になって数が少し増えたけど、たくさん作るのには慣れてるし、料理は好きだから別に苦という訳じゃないしね。

そして調理が終わる頃、いつもの様にみんなが起きてきた。

「おはようございます・・・ふぁ」

最初に起きてきたのは白音だった。いつも一番に起きるのは白音だったりする。多分匂いにつられて起きてくるんだろうなあ。でも、そう言う所が白音らしくて可愛いよね

「・・・今、失礼な事考えてませんでしたか」

白音がジト目で睨んでくる。おおう、相変わらず鋭いね

「うん？白音は可愛いな、って思ってたただけだけど？」

嘘は言っていないよ？

「・・・顔洗ってきます」

白音はそのまま洗面所に行ってしまった。少し顔が赤い気がしたけど、熱があるのかな？後でちよつと診ておかないとね

「おはよう。ふぁく」

次に起きてきたのは、元墮天使のカラワーナだった。今は他の二人と一緒にリアス・グレモリーの眷属に転生して転生悪魔となっている。つまり半分墮天使で半分悪魔といった感じになるのかな？眷属に転生してからも僕達と一緒に生活をしている。これは本人達の希望で、僕も別に嫌という訳じゃないから別に良いんだけどね。それに彼女達の生活の責任をとると言ったのも僕だしね。

「おはようカラワーナ。コーヒーはいつもののでいいかな？」

「ああ、お願いするよ」

席に座ったカラワーナにすぐにコーヒを淹れて差し出す。カラワーナは朝はブラックが良いらしい。彼女達がここに住みだしてから何気に彼女達の好みなんかも覚えてしまった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう・・・ふう、やっぱり朝はブラックに限るな、おかげで目が覚める。それにシルが淹れてくれたコーヒは美味しい」

「ありがとう。そう言えばカラワーナは先生にはもう慣れた？はい、これ朝食」

ちなみに今日の朝食はトーストとベーコンエッグです。

「ありがとう。まだまだ不慣れな所が多いな。だが、転生悪魔になる以前よりは今の方が断然やりがいというものがある。誰かに何かを教えるというのは本当に楽しいものだ。いただきます」

楽しそうな表情で話すカラワーナはさつさと朝食を食べると、戻つて来た白音と代わって洗面所に向かつてすぐさま仕度を終えた。さつきまでの少し眠そうな表情は消え、今はスーツを着こなしてキラツとした表情になっていた。

「それでは私はそろそろ出るとする」

「うん。あとこれ、いつものお弁当」

玄関で僕はカラワーナにお弁当を手渡す。今日のお弁当にはカラワーナの好きな一口オムレツが入っています。

「いつもありがとう。それでは行ってくる」

「いってらっしゃい」

そして玄関までカラワーナを見送った僕はリビングで朝食を食べている白音の元へと近づき、声をかける。

「白音、ちょっと顔をこっちに向けてくれる？」

「モグモグ・・・ゴックン。はい、何ですかっ!？」

僕はこっちに顔を向けた白音の前髪を上げ、自分のおでこと白音のおでこをくつつけて熱が無いか確かめた。うくん、熱は無いみたいだね。でも、顔はさつきより赤くなってるなあ。

「白音、どこか体調が悪い所はある？」

「・・・」ぽく

「白音？」

「はっ！・・・な、何でもありません。あと、別にどこも悪くありませんよ」

「そう？でも、顔が赤い「気のせいです」えっ、でも、「気のせいです」そ、そう？ならいいけど」

白音の剣幕に押され、僕は思わず頷く。まあ朝食もいつもと同じくらい食べれてるし、本人もこう言ってるし大丈夫かな。

「ふあく、お、おはようございますう」

「ふあああああく・・・うう、眠いつす」

「二人ともしっかりして。おはようシ、ふあく・・・お、おはようシ
ル」

「あ、何事もなかったように誤魔化そうとしたっすね。あ痛っ！」

「余計な事は言わなくていいの！」

「はううう、私もとっても眠たいですう」

今度起きてきたのはパジャマ姿のアーシア、夕麻、ミッテルトの三人だった。内二人は朝から元気が良い。アーシアは眠そうで目をシヨボシヨボさせていた。

「おはよう三人とも。眠たいなら顔を洗ってスッキリしておいで」

「ええ、わかったわ。ほらアーシア、顔を洗いに行きましょう」

「はいいゝ夕麻さん」

「うちも行くっす」

アーシアは夕麻に連れられて洗面所に向かって行き、ミッテルトもその後が続いて行った。

「・・・ご馳走様でした」

「はい、お粗末様」

ちなみに白音が今日食べたトーストの枚数は20を軽く超えていた。それから顔を洗って目が覚めたアーシア達も朝食を食べ、学校の仕度を済ませた頃、学校に行く時間になった。4人はそれぞれ駒王学園の制服に身を包んで玄関に並んでいた。

「それじゃあ行ってきますねシルさん！」

「行ってくるわねシル」

「行つてきます」

「行つてくるっす！それと今日のお弁当の具は何つすか！」

「いってらっしゃい皆。それと、今日のお弁当の具はお昼になってからのお楽しみだよミツテルト」

そして玄関でみんなを見送った僕は食器の片付けをし終わった時に、ふと何かを忘れていたような感じがした。

「あれ？何か忘れていたような・・・？何だっけ？うくん・・・」

『うにやー!?もうこんな時間にやー!!』

「あつ、黒歌の事忘れてた」

二階からそんな声と共に、ドタドタとした音が聞こえてきて思い出した。

バタン！という音をたててリビングの扉が開き、寝癖がついたパジャマ姿の黒歌が入って来た

「もう！何で起こしてくれなかったにや!!」

「あらら、ゴメンね黒歌。すっかり忘れてたよ」

「酷いにや!?!つてもう時間がほとんどないにや！」

黒歌はすごい勢いで仕度を始めて、5分で準備を終えた。でもチャイムが鳴るまであと3分。ここから学校まで普通に歩いて10分程で走って行つて最速で3分くらいはかかると思うから、ちよと厳しいかな？

「うにやー！今から行つても間に合わないにやー！今度遅刻したら、放課後残つて掃除させられるのに！」

「はあく、仕方がない。黒歌、今日は気がつかなかった僕のせいでもあるから特別に転移魔法で送つてあげるよ。でも今日だけだからね？」

「ホント!?ありがとうシルー！」

そう言つて勢いよく抱き付いて来る黒歌。その勢いで僕は少し倒れそうになった

「おととと。もう、いきなり抱きつかないでつて言つてるでしょう？」

「いきなりじやなきや抱き付いていいのかにや？」

「バカな事言つてないでちよつとこつちに座つて。まだ時間があるか

ら寝癖直してあげる」

「わかったにゃ！」

そう言っただけはソファに座って黒歌の寝癖を1分くらいで直した後、転移魔法を発動して黒歌を学校の屋上に転移させた。時間は1分はあったから、多分間に合ったかな

「やれやれ、全く朝っぱらからあいつは喧しいな。おかげで目が覚めてしまったぞ」

そう言っただけはリビングに入って来たのはパジャマ姿のティアだった。その顔は少し不機嫌そうだった。

ティアが面倒を見ていた蒼龍は、この前アシアが使い魔にしたのと、もう大分大きくなったようで、独り立ちするようになったらしい。だからこの前からティアもこの家で再び暮らすようになったのです。

「おはようティア。朝食はどうする？」

「おはようなのだシル。あと、朝食は勿論いただくぞ！」

「わかったよ。ちよつと待っててね」

それからティアの分と僕の分も用意して、僕とティアは一緒に朝食を食べた。

「モグモグ、ん？そう言えばシル、アリスはどうしたのだ？」

「もきゅもきゅ・ゴックン。んとね、アリスは何時もの散歩に出かけてるよ。っていうか昨日アリスが言っただけだよ？」

「あれ、そうだったか？聞いていなかったな。それで、今度はいつ帰って来るんだ？」

「さあ？アリスの事だから適当に飛んだ後帰ってくるでしょう」

「それもそうだな。ん？という事は・・・今日はシルと2人きりなのだな！」

「夕方まではね。だけど、それがどうかしたの？」

「フフフ、それは決まってるだろう・・・今日は一日、シルに甘えまくるのだ！」

ビシツツと指を指しながら決め顔で言うティア。その内容と口の

周りに着いたパンのカスが着いているから台無しだけどね。

「ほらティア、ちよつとジツとしてて。口の周りに着いたパンのカスを拭いてあげるから」

僕はティッシュでティアの口周りを軽く拭く。

「んっ、す、すまないな」

ティアの顔は少し赤くなっていた。多分子供みたいな感じで恥ずかしかったのかな。そして食器も片付け終え、今日は夕方までティアを甘えさせる事になった。まあ、たまにはこういうのもいいかな。最初はこの前、使い魔の森に行った時にやった膝枕＋ナデナデになった。

「ティア、忘れてるかもしれないけど今日は僕夕方には出かけるからね?」

「う、ん?そう、だったか?」

すでに寝そうになっているティアはウトウトとしながらも、僕の話进行を聞こうとしていた。

「そうだよ。だから夕方僕がいなくなっても、黒歌と喧嘩しないでよね。もし、喧嘩したら・・・あとわかるよね?」

「わ、分かっておるさ!だから心配せずとも大丈夫だ!」

僕の膝の上で冷や汗をかきながら頷くティア。本当に大丈夫かなあ

「そ、それよりも、ナデナデを再開してくれ!」

「はいはい」

僕はティアのナデナデを再開しながら、今日の夕方の事を考えたのだった。

「随分かかっちゃったけど・・・今日、会いに行くね」



キーンコーンカーンコーン！

「はい、それじゃあ今日はここまで。今日やった所は各自で復習しておくように」

チャイムが鳴り、先生は生徒達にそう告げると教室を後にした。

「はうう、む、難しいですう〜」

アーシアは授業が終わって、困ったような声を上げた。

「まあ、アーシアはまだ日本語が読めないから大変よねえ〜」

そう声をかけてきたのは、アーシアの隣の席に座る桐生 藍華。藍華の言う通り、アーシアは日本語を聞いたり話したりする事はある程度出来る様になっていたのだが、まだ日本語で書かれた物を読んだり書いたりすることはまだあまり出来ていないのだ。

「はいい〜。日本語って漢字やひらがなやカタカナなどが色んなものあって難しいですう。あ、桐生さん。今日も黒板に書かれている事を教えてくださってありがとうございます！おかげでとても助かります」

「いいのいいの、それくらい大した事じゃないって。それよりアーシア、良かったら今日は一緒にお昼食べない？」

「はい！私で良かったら是非！あつ、あの〜、良かったら他の人も誘ってもいいでしょうか？」

「もちろんよ。大勢の方が楽しいもんね。あ、そうだ、それなら屋上で食べない？アーシア屋上で食べた事ないでしょ？」

「はい！じゃ、じゃあ、すぐに皆さんを呼んできますねー！」

アーシアは藍華にそう言って他の皆を呼びに行った。途中、「はう！」と言ってこけたのはご愛嬌。



そして屋上。ここには現在、アーシア、藍華、夕麻、ミツテルト、白音、黒歌、木場、そしてイツセーの8人がいた。

「うおお！美少女に囲まれて昼食を取れるなんて・・・生きててよかったですあー！」

イツセーは涙ながらに感激した様子だった。

「あははは、イツセー君は大げさだね」

木場はそんなイツセーを見て苦笑を浮かべた

「うるせえ木場！お前には分かんねえだろうよ俺の気持ちなんて！」

「そりゃあ、『変態三人組』のあんたと違って『駒王学園の一のイケメン王子』といわれている木場祐斗がモテないあんたの気持ちなんてわかるわけないわよねえ」

「くそおおお!!やっぱり顔か！顔なのか!!」

「お、落ち着いてイツセー君。号泣してるじゃないか」

「はあ、イツセー君もちゃんとしてたら結構マシなのにね」

「でも、そんなイツセー先輩なんて想像つかないっす」

「変態三人組の兵藤が真面目？うわっ、世界で一番似合いそうにないわねー」

「き、桐生さん！そんな事言っちゃダメですよ！イツセーさんはとっても良い人なんですから！」

「あ、アーシア……」

イツセーは再び感激したような表情になる

「……そんな事よりも早く食べましょう。お昼の時間が無くなってしまします」

「そうだにや。私朝食ベそこなつたからもうペコペコにや」

そしてみんなは、それぞれ昼食をとりだした。イツセーと木場は購買で買ったパンやサンドイッチ。アーシア、ミッテルト、夕麻、白音、黒歌はシルが作ったお弁当。藍華はお母さんが作ったお弁当だった。「うわー、話には聞いてたけどすごい大きさねー。白音ちゃんのその重箱」

「はい、この前新しく買ってもらったんです」

そう、白音お弁当は他のみんなと違い、四段重ねの立派な重箱だった。

「し、白音ちゃん。それ、全部食べられるの？」

「……はい、これくらいどうって事ないです」

イツセーが引き攣った顔で尋ねるも、白音は平然と答えた。それが

らみんなは、輪になって座り昼食を開始した

「それにしても、この場の面子は中々豪勢よね」

弁当を食べ始めた桐生が周りを見渡してそんな事を言った。

「学園三位の人気を誇る三年生黒歌先輩」

「んにゃ？」

黒歌はおかずの海老フライをくわえたまま反応する

「学年一のイケメン王子の二年生木場祐斗」

「あははは、別にそんな事はないと思うんだけどなあ」

木場は少し苦笑気味に笑うが、それでもイケメンだった

「学年のマスコットの存在、一年生白音ちゃん」

「モグモグモグモグ・・・」

白音は一旦食べるのを辞めて桐生の事を見た後、またすごい勢いでお弁当を食べ進んでいった

「転校してきて、最近人気急上昇中の清楚系の黒髪美少女、二年生天野夕麻」

「そ、そうなのかしら？」

少し恥ずかしそうにする夕麻

「同じく最近人気急上昇中の癒し系の金髪美少女、二年生アーシア・アルジエント」

「は、はううう！そんな事はないと思いますう」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にするアーシア

「またまた同じく人気急上昇中、ゴスロリが間違いなく似合うだろうと一年生の白音ちゃんと並ぶくらい人気のミッテルトちゃん」

「え？うちもっすか？」

ミッテルトは自分も言われるとは思っていなかったような反応を見せた

「変態三人組の一人、学園の女子達の嫌われ者、人類のゴミ、二年生兵藤一誠」

「俺だけなんか酷くねえ!?事実だけど!!」

イツセーは一人叫んだ

「しかも二人を除いて全員がああ『学園の二大お姉さま』の二人も所属

しているオカルト研究部所属なんてねえ。最近じゃあ兵藤が何故あそこに入れたのか疑問に思うやつらが兵藤を闇討ちして倒そうとしてるとかなんとか。まあ、別にそれはいいつか」

「良くねえっ!?何だその怖い話は!冗談だよな?冗談なんだよな!!」

「まあ、そんな事はどうでもいいとして……」

「どうでもよくない!マジなの!ねえマジなの!?!グハッ!」

「……うるさいです」

白音はどこから取り出したダンベルをイツセーの頭に投げつけた。……本当にどこから取り出したんだ?

「痛つてええええ!!」

イツセーは頭を抑えて地面をゴロゴロと転げ回った。

「ホント兵藤はうるさいわね。……『悪魔』になってもそこら辺は変わらないって事か」

最後に言ったその藍華の言葉に、全員がその動きを止めた。イツセーも転げ回るのを止め、藍華に全員の視線が集中した

「ん?何よみんなしてそんなに見つめて」

「な、なあ桐生。俺達の聞き間違いか?今、悪魔って聞こえたんだけど……」

「言っただけ?あんだが悪魔つて。あんだその年でもう耳が悪くなってるの?病院行きなさいよ」

今度はその場にいた藍華を除く全員が驚愕に目を限界まで見開いた。

「あ、ちなみにここにいる兵藤一誠、木場祐斗、天野夕麻、ミッテルトの四人と三年生の姫島朱乃先輩と最近アジア達と同じ時期に来たカラワーナ先生が転生悪魔で72柱の一つ、グレモリー家次期当主の上級悪魔リアス・グレモリー先輩の眷属。黒歌先輩と白音ちゃん猫又の上位種族猫?。アジアが神器を宿した人間つて事も知ってるよ」

藍華は淡々とお弁当を食べながらそう述べた。他の皆はいまだ驚きで固まってしまっていた。

そして藍華は自分の分のお弁当を食べ終わると、お弁当箱を端に片

付け、全員の視線が集まる中、みんなに問いかけた。

「それで今日、ここにいるみんなに知ってるなら教えてほしい事があるの……赤と青のオツドアイの銀色の猫の事、知ってる？」

キーンコーンカーンコーン！

昼休みが終わる5分前のチャイムが鳴るも、屋上にいた8人は動くことはなかった。

再会と誓い

どうしてこうなった・・・

今の僕の心情を一言で表すなら、その一言です。

僕の目の前には藍華がいます。直接会うのは約10年振りですね。10年前と比べて、藍華は大きくなって、そして美人になったと思います。髪型に眼鏡、少し垂れ気味の目などは大きくなっても変わっていませんでした。

本来なら、感動の再開。という感じなのですが・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

今の僕達がいるオカルト研究部の部室の空気はピリピリとした感じになっています。その空気の発生源は、僕の目の前にいる藍華からです。これだけのプレッシャーは久方ぶりだなあ。以前、アリスと戦った時以来、いや、もしかしたらその時以上かもしれない・・・

部室には藍華と僕の二人だけ。他の皆は外で待ってもらっています。というか藍華に言われて強制的に二人きりになったんですけどね。リアス・グレモリー達も二つ返事でまるで逃げるように外に出て行った。気持ちはわかるよ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

というかこの空気・・・どうしたらいいんだ！藍華は何も言わず瞼

を閉じて机を挟んで僕の向かい側のソファアに座ったままプレッシャーを送つて来るし……こ、これは僕から話しかけるべきだよね。でも、口を開こうにも何故か金縛りにあつたみたいに口はおろか、指一本動かす事が出来ないんだけど……

どうしてこうなつたのは、今日のお昼過ぎくらいに僕とティアが家でのおんぶりとしていた時、黒歌から魔法で通信が入つた。まだ学校の時間なのに何だろうと思つたその内容は、『桐生藍華が私達の正体やオカルト研究部の部員が悪魔つて事知つていて、オツドアイの銀色の猫、つまりシルの事を聞いてきた』というとんでもない内容だつた。その知らせに僕は思わず大声を出して飛び上がつてしまい、膝枕をしていたティアを床に落としてしまった。本当に信じれないくらい驚いて、心臓が止まるかと思つたよ。

で、学校の授業が終わり、放課後に皆が集まっているオカルト研究部の部室に来たら、藍華が僕と藍華以外の全員を追い出して、今の状態に至る、という訳です。

「……シル、よね」

沈黙を破つたのは藍華だつた。藍華は瞼を開けて真っ直ぐにこちらを見てそう問いかけた。

「……うん」

長い沈黙の後、僕は正直に答えた。すると、藍華は立ち上がったゆっくりと僕のすぐ傍までやって来ました。そして手を振り上げる動作をしたのを見て、僕は叩かれる！と思ひ、咄嗟に目を閉じました。

「え？……」

しかし、そんな僕を待つていたのは叩かれる衝撃ではなくて、何かに包まれる柔らかい感触でした。そして僕のすぐ横からは藍華の泣き声が聞こえてきたのです。

「シルっ！……やっと、やっと会えたっ！」

肩や僕の頬に水滴がボロボロと落ちてきました。僕は突然の事にまた動きが固まつてしまいました。

「あい、か……？」

「バカッ！」

「ひうつ!？」

急に耳元で大声を出された僕は驚いてしまいました。藍華は一旦僕から離れ、お互いの顔が見えるようになった。僕は椅子に座ったままの姿勢で、藍華は僕の膝の上に座っている状態なので、僕は少し見上げる形になっています。藍華の顔は涙で濡れ、眼鏡奥の瞳からはロボロと絶え間なく涙が溢れてきていて、今も膝に頬を伝って涙がロボロと落ちてきた。

「ずつと、ずつと心配してたんだからね!!あんたが家から突然いなくなっただけから私、ずつとずつとあんたの帰りを待ってたんだから!!」

藍華は僕に向かって叫ぶように言います。防音の結界を張っているのに声は外には一切漏れません。

「10年もどこほつつき歩いてたのよ!何で私に黙って出て行っちゃったのよ!!何で近くにいたのに返って来なかったのよ!!!」

「・・・ゴメン」

藍華の叫びに、僕はそれ以外の言葉が出てこなかった。

「バカッ！」

そう言っただけで藍華は再び僕に抱き付いて来た。

「バカッ!バカッ!」

ギュツと、さつきよりも強く僕を抱きしめる藍華。

「ゴメンね、藍華」

僕も藍華を抱き返して、再び謝罪の言葉を述べた。

「バカバカッ!・・・シルの、バカア・・・」

ギュウツと、まるでもう離さないとはかりに僕を抱きしめながら、僕の事を泣きながら怒る藍華。

それからしばらくの間、僕は藍華に怒られながら、そして泣きながら抱きしめられた。だけど僕はそれがとても懐かしく感じた。それは10年振りに、藍華に抱きしめられたからなのかな



「すう・・・すう・・・」

「あらら、どうしよう?」

あれからしばらく経って日が落ちた頃、藍華は叫ぶのと、泣き疲れたので僕を抱きしめたまま眠ってしまった。しかも、眠っていてもその腕は僕を離さないという感じで動かす事も難しそうだ。

「取り敢えず藍華を送って帰らないと、藍華のお母さんが心配するだろうからなあ。」

そう思った僕は、黒歌に魔法で連絡を取り、詳しい話はまた後日改めてみんなに話すって事と、今日は帰れないという事を伝えた。黒歌は特に何も聞いて来ずにそれを了承してくれた。ただし、明日は必ずちゃんと話す事と、明日のご飯は豪勢にする事になった。

僕は藍華を抱え、部屋に置いてあった藍華のカバンと一緒に転移魔法を発動させた。

「ふう、ここに来るのも十年振りだなあ」

転移したのは林の中だった。少し歩いて林を出て道に出ると、少し離れた所に目的地が見えた。道には人がおらず丁度良かった。藍華を抱えたまま少し歩けば、見覚えのある家の前に着いた。明かりはついているので、人はいるようだ。

『桐生』

家の前の表札にはそう書かれていた。腕が塞がってしまったている僕は尻尾を出して呼び鈴を押した。

ピーンポーン!

『は〜い!』

家の中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。そして玄関に明かりが灯り、扉が開いてある人が出てきた。

ガチャツ

「は〜い。どちら・・・様」

扉を開けて出てきたのは十年前、玄関で僕達を見送ってくれた藍華のお母さんだった。エプロンを着ている所から、丁度夕食の支度でも

していたのかな？

「こんばんわ、藍華のお母さん。お久しぶりです」

僕は藍華を抱えたまま、お母さんに挨拶をする。お母さんは暫し固まっていたけど、ハッ！とした後、笑顔になった。

「まあまあ！……お帰りなさい、シルちゃん！さっ、入って入って！」
「……ただいま、です」

そして、僕は藍華を抱えたまま10年ぶりに桐生家の玄関をくぐった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

僕は今、桐生家のリビングで藍華のお母さんが淹れてくれたお茶を頂いています。リビングはいくつか家具が変わっている以外は僕がいた10年前とあまり変わった所はないね

「美味しいです」

「あら、ありがとう」

藍華のお母さんは僕の隣に座りました。ちなみに藍華は今はず分の部屋のベットで寝ています。藍華のお母さんは離れなかつた藍華をいとも簡単に僕から引き剥がしてそのままベットまで僕と一緒に連れて行きました。

「本当に久しぶりねシルちゃん。どれくらい振りかしら？」

「多分、10年振りくらいですね」

「あら、もうそんなに経っちゃったのねえ。シルちゃんも最後に会った時より大きくなったわねえ。あの時はあんなに小っちゃかったのに」

「まあ、流石に僕だって大きくなりますよ」

ちなみに、僕の今の身長は多分160くらいはあるはずだよ。もうちよつと背が欲しいなあ」

「なんだか大きくなったシルちゃんを見てると、私も年を取ったなあ

と思っちゃうわね」

「そんな事ないですよ。10年ぶりに会いましたけど、あの頃と全然変わってませんよ」

「あら、お世辞を言ってもお茶菓子くらいしか出せませんよ♪ちよつと待っててね、今お茶菓子取って来るから」

そう言つて藍華のお母さんは立ち上がつてキッチンの方向に向かつて行つた。スキップで

あと、さつき僕が言つたのはお世辞でもなんでもなくて、本当に『10年前と変わつていない』のだ！

皺やシミなんか一切なくて、肌はとつても若々しく張りがあり、見た目や言動から藍華と同じ10代に見える。制服を着て並んで歩いたら多分100人中100人が姉妹と答えると思うよ。藍華のお母さんつて確かちよつと感が鋭い位の普通の人間のはずなんだけど…：「はい、こんな物しかなかつたけど、良かったら食べてね」

そう言つて藍華のお母さんが持つてきたのは、中々高級そうな箱に入ったクッキーだった。箱の端には有名なお店の名前が書いてあつた。確か、このお店のお菓子はとても人気で中々買えないと評判のお店だつたはず

結構すごいものが出てきたよ！

「あ、ありがとうございます」

「うふふつ、それにしても…」

藍華のお母さんは再び僕の隣に座つて、僕の事を上から下までまじまじと見つめてくる

「ど、どうかしましたか？そんなに見つめられると、結構恥ずかしいんですけど…」

「あら、ごめんなさいね。シルちゃんがあまりにも可愛くなつちやつたから、思わず見入つちやつたわ」

「あの時も言いましたけど、男の僕が可愛いと言われても、微妙なんですけど…」

「まあまあ、いいじゃない。可愛いは正義よ！」

藍華のお母さんは、グツつと握り拳を作つて決め顔でそう言う。そ

んなお母さんを見て、僕は苦笑を浮かべた。

「そうだ、僕聞きたい事があるんです。どうして藍華は・・・」

「おっと、それは私の口からは答えられませくん」

藍華のお母さんは口の前に指でバツテンを作るポーズを取った。相変わらずそういう事が似合うなあ

「その事についてはちゃんと藍華の口から聞いてね。あつ、ちなみに、私は何も喋ってないからね」

「・・・そうですよね。分かりました、今日は藍華がもう寝てしまったので明日改めてちゃんと話をしますね。勿論、ちゃんとお母さんにも話しますから」

「うん、それで良し！あつ、そうだ・・・」

「な、何ですか・・・？」

藍華のお母さんは満足そうに笑った後、今度は何か悪戯っぽい笑みになった。僕はその笑みを見て何か嫌な予感がした。

「じゃあ、ごゆっくり〜」

パタンツ

藍華のお母さんはいい笑顔で扉を閉めた。もう一度言います。いい笑顔で

「どうしてこうなった・・・」

僕は今、藍華の部屋にいます。今日はここで寝る事になりました。何を言ってるか分からないって？僕だって分からないよ。藍華のお母さんが悪戯っぽい笑みを浮かべたと思ったら、あれよあれよという間にここまで連れてこられてここで寝るように言われたんですよ。

ベットの方を見てみれば、藍華が規則正しい寝息を立てて眠っていた。僕は藍華のベット傍に座って、その寝顔を眺めた。

「すう……すう……」

藍華の頬にはあの時、10年前にお別れを言いに来た時と同じように涙の痕があった。

「また、泣かせちゃったな……」

僕は水で濡らしたハンカチで、その痕を綺麗に拭いた。

「んっ……シル……」

「大丈夫、僕はここにいますよ」

僕は藍華の手を握ると、藍華も握り返してくれた。その顔は、少しだけ笑みが浮かんだ。

「もう、どこにも行かないよ。何があっても、僕が藍華を守るからね。だって……」

僕は空いている手で藍華の頭を優しく撫でた。その時丁度窓から、雲の裂け目から出た月の明かりが僕らを照らした。



チュンチュン！

「……んっ」

朝になり藍華は目を覚ました。今日は土曜日で学校は休みなのだが、起きるのは早かった。

「昨日のは……ん？」

藍華は自分の右手に違和感を覚え、そちらを向いた。

「あっ……」

そこにいたのは藍華のベットの傍に座ったまま藍華の右手を握って眠っている。一見すると銀髪の美少女だった

「すう……すう……」

「夢じゃ、無かったんだ……やっと、帰ってきたんだ」

藍華は上半身だけベットから起こした。その時、座って眠っていた

銀髪の美少女に見える者の臉が、ゆつくりと開いて藍華と目が合った。二人は目が合い、暫し見つめ合った後、同時にニツコリと笑みを浮かべた。

「おはよう藍華。それと、ただいま」

「おはようシル。それとお帰り」

パシャ！

その時、聞こえるはずのないシャッター音が聞こえた。二人は同時にそちらを向くと、藍華のお母さんが随分とまあ、可愛らしいパジャマ姿でカメラのスクープ越しに二人の事を見ていた。

「あつ、私の事は気にしないで。どうぞそのままいい雰囲気のまま続けて続けて」

「~~~~っ!!」

藍華のお母さんは楽しそうに笑いながら言った。二人は途端に恥ずかしくなり、揃って顔を真っ赤にした

パシャ！

再び鳴るシャッター音。

「良いわ良いわ！二人ともとっても可愛いわよ！朝早くからスタンバイしたかいがあったわ♪ほら、二人とも、もうちよつと引っ付いて引っ付いて」

「お、お母さん！いい加減にしてよ！てゆうかその撮った画像今すぐ消して！」

「ええ!?そんなのダメよ！これはちゃんと現像して大切に保存するんだもん」

「ああもう！なら私が消す！」

藍華はベットから飛び出して、お母さんのカメラを奪おうとするが、お母さんは見事にそれを躲す

「そうはさせないわよ！お母さんはなんとしてもこの写真を死守して見せるの！」

「いい度胸ね！絶対に消す！」

「いや〜！こつち来ないでえ〜」

「待ちなさいー！」

ドタドタドタ・・・！

藍華達母娘はそのまま部屋を飛び出して行ってしまった。

「あはは・・・」

部屋に取り残されたシルは、そんな二人に苦笑を浮かべたのだった。しかし、その顔は、とても楽しそうに見えた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あれから二人の追いかけてこは、藍華がお母さんからカメラを奪い取り、メモリーカードを破壊する事で決着がついた。

「うう〜、せつかく撮ったのに〜」

リビングに座るお母さんの顔は悲しみに包まれていた。

「はあ、はあ、朝っぱらから何でこんなに走らなきゃいけないのよ・・・」

その隣には藍華が息を切らした状態で座っていた。

「あははは、藍華達は相変わらずみたいだね」

僕はそんな二人を見て苦笑を浮かべていた

そして、藍華の息が整った頃、話を始めた。

「えつと、藍華とはこの姿では初めまして、だよね？」

「ええ、そうね。私も初めて見た時は結構びっくりしたわよ。初めて会った時から不思議な猫だとは思ったけど、まさか人型に、しかもこんなに可愛い姿になれるなんてねえ」

藍華は僕の事をまじまじと見てくる。

「ほらねほらね！やっぱり可愛いんだよシルちゃん！」

藍華のお母さんはさつきまでの悲しみに包まれた表情とは打って変わって、満面の笑みになった。

「あははは・・・藍華のお母さんにも言ったけど、男の僕が可愛いって言われても微妙なただけだなあ」

「まあ、その話はこの辺にしてあんたに聞きたい事があるの・・・何で突然、私達の所からいなくなったの」

直球で聞いて来る藍華。まあ、まずはそれだろうね

「わかった、全部話すよ。実は・・・」

僕は藍華達に全部話した。流石に僕が転生者って事は伏せて話したけど。僕が生まれつき不思議な力を持つてる事と、あの日、偶然藍華に出会った時の事、名前の無かった僕に藍華が名前をつけてくれて、藍華の所で暮らし始めて少して、黒歌と白音という猫？の姉妹の世話をする事になった事や、その二人が悪魔に攫われてその悪魔をぶっ飛ばしたら、その悪魔が僕を危険生物認定にして、藍華達の所にいたら迷惑がかかると思い、あの日藍華達の元から去った事などを話した。

「・・・という訳で僕は藍華達の所から去ったんだ。下手したら一緒に居るっというだけで藍華達にも僕を狙った悪魔達の手が及ぶと思っただけなんだ。でも、何も言わずに出て行ってゴメンなさい！」

僕はすべてを話し終えた後、二人に向かって頭を下げた。

「・・・頭を上げてシル」

藍華の言葉に従い、僕はゆっくりと頭を上げた。藍華の顔は、少し怒った感じになっていた。

「まあ、事情は分かった。シルが私達の事を考えての行動だったって事もね」

でも、と付け加えて藍華は机から身を乗り出して僕の頬を思いつきり抓った。

ぎゅうううううー！

「い、いはいほあひは！(い、痛いよ藍華)」

「うるさい。これは今まで私に話さなかった分のお仕置きな・・・だ。か・らー！」

最後に一段と強く抓った後、ようやく藍華は手を放してくれた

「あうーううう、ヒリヒリするよ」

「それくらいは当然のお仕置きよ。これで勝手にいなくなった事はチャラにしてあげるんだからありがたく思いなさい」

藍華はそっぽを向いて僕にそう言う。あれ？これで許してくれるの

「あらあら、藍華ったらツンデレさんねえ〜つてにやにすりゆの〜！」
「あんたはちよつと黙ってなさい！」

今度はお母さんの頬を抓る藍華。その頬は少し赤くなっていた。

そして一頻りお母さんを抓った（僕の時よりも断然長かった）藍華は少しだけ満足げな表情を浮かべていて反対に、お母さんの方は、涙目で抓られた頬を抑えていた。その姿を見て不謹慎にも、可愛いと思ってしまった。

「うう〜、藍華ちゃん容赦ないよお〜。ほつぺたヒリヒリするう〜」

「それで、シルも何か聞きたい事があるんじゃないの？」

お母さんの事を完全無視した藍華が僕にそう聞いて来る

「う、うん。それじゃあ・・・藍華は何で黒歌達の正体や、オカルト研究部の皆が悪魔って事を知ってるの」

「え？」

そう聞くと、藍華はポカンとした表情になった。あ、あれ？想像してた反応と違う

「何でって・・・シルのお蔭でしょ？」

「え？」

今度僕がポカンとなった。僕のお蔭って？

「ほら、シルがいなくなつた時に私の枕元にビー玉置いて行つたでしょ？あれを持ってると色々『見える』のよ」

「み、見える？」

僕が聞き返した事を、藍華は更に詳しく説明してくれた。

「例えばその人の名前、年齢、性別、身長や体重、が文字や数値として見えるのよ。あとは種族なんかも見えるわね」

え？何それ。僕、そんな能力つけた覚えないんだけど。あれには確か強力なお守りの能力しかついていないはずんだけど・・・？

「で、黒歌先輩達の事はその力を使って分かったの。相手の種族とか

も見れるようになってたから、突然オカルト部に入る事になった兵藤が悪魔になつてたのには驚いたわ」

なるほどね、だから藍華は悪魔って事なんかを知っていたのか。というか本当にそんなの着けたっけな？

「あれ？なら何で藍華はこの悪魔達がいる駒王学園に入ろうと思つたの？悪魔って、普通ならあまりいいイメージがないはずんだけど」

「ああ、それねえ。それは単なる興味本位って奴よ」

「きよ、興味本位？」

「悪魔が学校に通つてるなんてどんな感じなのか気になつただけど、特に何か悪さをしてるって訳でもなくて、普通に学生としているのにはある意味で驚いたわ」

あ、相変わらずだね藍華は・・・そんな理由で入ろうとしたなんて「あらあら、嘘を言っちゃダメでしょ藍華ちゃん」

復活した藍華のお母さんがそんな事を言う

「え？嘘、ですか？」

「ええ、そうよ。本当はそんな理由で入ろうとしたんじゃないわよ」

「ちよつと黙ってなさい、熱つつっ!!」

藍華のお母さんは目にも留まらない速さで藍華の口に熱々のおでんの卵を放り込んだ。一体どこから？そして何でおでん？

「藍華はね、シルちゃんの事を調べようとして今の学校に入ったのよ。悪魔なら不思議な力を持った猫のシルちゃんの事を知ってるかもって思ったからなのよ」

「え？僕を探すために・・・」

「そうよ、藍華はずっとずっとシルちゃんの事を探して、帰って来るのを待っていたの。十年間ずっとね」

藍華・・・

「ちよ、ちよつと！何でお母さんがそれを知ってるのよ！」

「それは〜藍華の日記をコッソリ覗いて・・・は、母親の感よ！」

「今思いつき覗いてって言ったわっ!!何勝手に人の日記覗いてんのよあんたは!!」

「わ〜ん！許して藍華あ〜」

「逃げんな！今日という今日はしつかりO☆H A☆N A☆S H Iするわ!!」

そう言つて二人はまた追いかけてつこを始めた。僕はさっきの事を聞いて、胸があつたかくなつた。

『ずっと、ずっと心配してたんだからね!!あんたが家から突然いなくなつてから私、ずっとずっとあんたの帰りを待ってたんだから!!』

部室で藍華が言つていた言葉を思い出した。

そつか、藍華はずつと僕の事を待っていてくれたんだね・・・

「はあ、はあ、何で家で追いかけてて見失うのよ・・・」

息を切らした藍華が、再びリビングに戻つて来た。

「藍華」

僕は立ち上がつて藍華の傍まで歩み寄る。

「ああ、シル。あのバカこつち来なかつた？今日という今日はとつちめてやらないとこつちの気が済まないわ・・・！シル、あんたもあれを捕まえるの手つっ!!?」

藍華の言葉は途中で遮られた。なぜならシルが正面から藍華の事を抱きしめたからだ

「なつ、ちよ、何でいきなり抱きつくのよ!」

「藍華」

「っ!?!」

恥ずかしいのでジタバタと暴れようとした藍華は、耳元でシルにかげられた声に、その動きを止めた。

「僕はもうどこにもいかない。ずっと藍華と一緒にいるからね」

シルは藍華を優しく抱きしめながら、そう誓う

「あ・・・当たり前でしょ!そんな事!あんたは私達の家族なんだから!そ、それよりも早くあのバカを探すわよ!あんたも手伝いなさい!」

「クスツ、わかつたよ」

「ほ、ほらとつとと探すわよ！」

「はいはい」

シルが離すと藍華は即座にリビングから出て行った。その顔はまるでリンゴの様に真っ赤になっていた。シルも笑いながら藍華の後を追ってリビングを出た。

「うふふ、いいもの見れちゃった♪」

リビングの机の下に隠れていた藍華のお母さんはカメラを持って楽しそうに笑っていた。

「僕は、僕は一体なんでものを渡してしまったんだ・・・！」

その数時間後、僕は過去の自分のした事にこれ以上ない位に後悔した。

夜這いと婚約者

SIDE イッセー

俺達オカルト研究部の皆と黒歌先輩や白音ちゃんは、修羅となった桐生に追い出されて部室の前の廊下で待たされている。そこで俺達は黒歌先輩から桐生とシルさんの関係を聞いていた。

「・・・という訳なんだにや」

黒歌先輩から聞かされた内容は、シルさんが十年前まで俺と同じクラスの桐生のペットだったという事。そして、十年前シルさんはある事があった、シルさんは仕方がなく桐生の元から去ったという内容だった。

「まさか、二人にそんな関係があったなんてね・・・」

「わ、私も初めて聞きました。桐生さんとシルさんのお二人がそんな関係だったなんて」

そういえば薄っすらとだけど、小学生の学校に桐生の猫が来た時があったような気が・・・？多分その時の猫がシルさんだったんだろうなあ

「んにや？シルからにや。はいはいどうしたかにやシル？」

黒歌先輩の耳に多分通信用の小さな魔法陣の様な物が出て、シルさんとなにかを話している。

「・・・分かったにや。あと、さつき言った事守ってよくそれじゃあねえ」

数分後、どうやら話が終わったみたいだ。

「それで黒歌。もう話しは終わったのかしら」

部長が黒歌先輩にそう尋ねた

「んにや。シルが詳しい話はまた後日、みんなに話すからって。今日は悪いけどちよつともう話せないって言ってたにや〜」

「そう…なら仕方がないわね。それに、ちゃんと後日話してくれるって言うならいいわ」

「にや。シルは約束はちゃんと守るにや♪」

「シルは一度も約束を破った事はありません」

「わかったわ。なら今日は後は悪魔の仕事をしましょう。祐斗と朱乃は契約があったらそちらを、イツセーと夕麻、ミツテルトはいつもの様にチラシ配りをお願いね。そう言えばカラワーナは？」

「カラワーナなら先生の仕事が残ってるみたいだから、今日はちよつと無理そうよ」

「そう。ならみんな、いつもどうりお願いね」

『はい、部長』

部長が手を叩くと、みんなはそれぞれ自分のやるべき事をする為に移動した。

「じゃあ白音、アーシア。私達は帰るにや。今日はシルが帰ってこないから、出前でも取るにや」

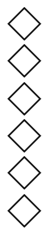
「私は特上のお寿司が良いです」

「はい、わかりました。それでは皆さん、お先に失礼します。お仕事頑張ってくださいね」

黒歌先輩、白音ちゃん、アーシアはそう言って先に帰って行った。

「よおし！今日もチラシ配り頑張るぜ！」

俺は部室からチラシの束を持って、旧校舎の裏側に停めてある自転車の元へ向かった。



「ただいま戻りました！」

深夜、自転車でチラシを配り終えた俺は部室に戻って来た。そこには俺以外の全員が揃っていて、どうやら俺で最後だったみたいだ。

「あらあら、お疲れ様。今お茶を淹れますね」

そう言ってくれたのは副部長の朱乃さんだった。ニコニコ笑顔でお茶の支度を始めた。

「お疲れ様イツセー君。自転車でチラシ配りって言うのも大変そう

ね。私達は飛んで行ってすぐに終わっちゃうから結構楽しだね」

そう言って夕麻ちゃんは俺にタオルを渡してくれた。汗はあんまりかいていないけど、美少女からタオルを渡されるというのは結構憧れだったりする。フッフツ、松田と元浜に明日自慢してやろう

「ありがとう夕麻ちゃん。俺も夕麻ちゃん達みたいに飛んでいけたら楽なのになあ。まあ、これはこれで結構筋トレになるから良いんだけどな。俺ももつと頑張らなきゃいけないし」

「イツセー先輩が真面目な事を言ってるっす!!ど、どこかで頭でも打ったっすか!？」

「相変わらず俺に対して酷い言い草だねミツテルトちゃん!俺って君にどう思われてるの!？」

「え?ド変態っすよ?」

何を当たり前の事をといった表情になるミツテルトちゃん

「間違っていないから否定できない・・・!」

「あははは、まあ、それがイツセー君だもんね」

「お前は黙ってる木場!モテない奴の気持ちなんてお前に分かるか!って報告しなくっちゃ」

イケメンスマイルを浮かべる木場に怒鳴った後、俺は奥のソファ―に座る部長の元へ向かう

「部長。兵藤一誠、ただいま帰還しました」

そう報告する俺だが、部長はボーッとしたまま、別の方向を向いて物思いにふけっている様子だった。深いため息をついているし、何か悩み事だろうか？

「部長。ただいま帰還しました！」

今度は少し大きめの声で言ってみると、部長は気がついたのか、ハツつと我に返ったようだ

「ご、ごめんなさい。少しボーッとしてたわ。ご苦労様、イツセー」

そう言えば最近部長がボーツとしていているのが多い気がする。まあ、部長は俺達の主で学園の人気者だしきつと俺には分からないような悩みを抱えているのかもしれないなあ

「さて、イツセーも戻った事だし、今日の仕事はお終いよ。あと、もしかしたら明日は休日だけどまた召集するかもしれないから、予定は空けておいてね。じゃあ今日は解散よ。みんなお疲れ様」

『お疲れ様でした』

そして俺達は解散した



「ふう、今日も疲れたぜ」

自宅に帰り、風呂から上がった俺は、自分の部屋のベットに寝ころんだ。あつ、そうそう。普通なら深夜に帰って来るなんて両親とかが

心配しそうだけど、俺がオカルト研究部に入った後、部長が俺の家にやって来て両親に話をしていた。その時に少し魔法を使ったらしく、俺が深夜に仕事を終えて帰ってきてても怒るところか、「おー、今日もご苦労さん。風呂入るか？」的な事で済まされる。特に体なんかに悪影響もあるわけでもないらしい。魔法ってすごいね

カツ！

俺がそんな事を考えていたその時、俺の部屋の床が光、魔法陣が現れた。その魔方阵は見覚えのある物ーーグレモリー眷属の魔法陣だった。

何で俺に部屋に魔法陣？一体だれが？

そして魔法陣が一層強く光、魔法陣の中から人影が現れた。女性特有のシルエット。紅の髪をした・・・

「ぶ、部長・・・？」

そう、魔法陣から現れたのはリアス部長だった。なんで俺の部屋に？

部長は何やら思いつめた表情を浮かべており、ベットに寝ころんでいる俺を確認するなり、ズンズンと詰め寄って来た。そして衝撃の言葉を口にした。

「イツセー、私を抱きなさい」

・・・はい？

「・・・はい？」

思ったことがそのまま出てしまった。とうとう俺の耳がおかしくなったのか？

そんな俺に向かって部長はダメ押しの一言

「私の処女をもらってちょうだい。至急頼むわ」

・・・俺、疲れてるんだな。これはきつと幻覚だ。そういえば今日は何時よりチラシ多かつたしなあ。でも、幻覚でも部長からこんな言葉を言われて俺は幸せもんだぜ・・・

軽く現実逃避をしている俺を尻目に、部長は部屋で服を脱ぎだした。

え？ちよ、ちよつと!?いくら幻覚でもそこまで、って！もう下着しか残ってない!?

「ぶ、部長!?これは一体!」

狼狽する俺。そりやあそうだ。いくら幻覚でもいきなりこんな状況になったら煩惱とエロに生きる俺でも戸惑うって!

「私では不満かしら?」

そう言いながら、部長はブラジャーも脱ぐと、その立派な白く豊かな膨らみが露わになり、俺の目を釘付けにした

「い、いえ!決してそんな事は!」

「色々考えたけど、この方法しかないの。既成事実さえ出来てしまえば文句はないはずだし・・・」

何の事かさっぱりなんですけど!? 全く話が見えてこない!

「それにこんな事を頼めるのはあなたしかいないの。祐斗は根っからの騎士（ナイト）。絶対に拒否するわ。それに彼は居場所が分からないうし、身近で情事まで行ってくれるのはあなたしかいない。それに……」

迫り来る部長。俺は部長にベットに押し倒される形になった。そして部長の綺麗な指が俺の頬をそつと撫でた。確かに感触があった。これは幻覚じゃないのか!!

「……まだ足りない部分もあるけど、素質は十分ありそうだものね」

「ぶ、部長……」

「私も自分の体には多少の自信はあるわ。初めてだけれど、あなたを満足させる事は出来ると思うの。ね?」

そう言つて部長は俺の手を自分の胸に持つて行った

むにゅっ

俺の手が、今まで感じた事のない感触が伝わって来た。こ、この柔らかさを例えるならマシユマロ! いや、やっぱりそんなもので語る事なんて出来ない! 出来る訳がないいいいい!!

もう俺の理性がパーン! しそうになった時、部屋の床が再び光り輝き出した。ってまたかい!

それを見て部長が嘆息する

「・・・一足遅かったわね・・・」

そして再び床に現れるグレモリー眷属の魔法陣。誰だ？木場か？朱乃さん？夕麻ちゃん？ミツテルトちゃんとかか？

って誰でもこんな所見られる訳には不味いつて!!

そんな俺の予想とは大きく外れて魔法陣から姿を現したのは・・・

「こんな事をして破断へ持ち込もうという訳ですか？」

銀髪のメイドさん、グレイファイアさんだった！グレイファイアさんは呆れた口調で淡々と言う。おいおいおい！まさかの人物が出てきましたよ!?!これってかなり不味い状況なんじゃないの!?

グレイファイアさんの言葉に部長は眉を吊り上げた。

「こんな事でもしないと、お父様もお兄様も私のいう事を聞いてはくれないでしょう?。」

「だからと言ってこのような形で操を捧げるなど、旦那様やサーゼクス様が知ったら悲しまれます」

「私の貞操は私の物よ。私が認めた者に捧げて何が悪いのかしら?。」

俺の事をほっぽりだして、部長とグレイファイアさんは話を進める。何が何だかさっぱり何ですけど

グレイファイアさんは嘆息しながら部長が床に散らばった部長の服を拾い、上着を部長にかけた。

「何はともあれ、あなたはグレモリー家の次期当主なのですから、無闇に殿方へ肌を晒すのはお止めください。ただでさえ、事の前なのですから」

そう言ったグレイフィアさんの視線が今度は俺に移った。途端に頭を下げた。

「兵藤一誠様。この度は、突然このような事になり申し訳ありませんでした」

「え、ええつと・・・」

ダメだ。全く頭が着いていつてないから言葉が上手く出てこない。

「グレイフィア、あなたがここに来たのはあなたの意思？それともお兄様のご意志？・・・それとも家の総意？」

半眼で口をへの字に曲げた部長。何か年相応の女の子っぽい部長の反応に俺は新鮮さを感じた

「全部です」

そう即答したグレイフィアさんに、部長は諦めたかのように深いため息を吐いた

「そう。お兄様の『女王』のあなたが直々に人間界に来るんだもの、そういう事よね。わかったわ」

部長はグレイフィアさんから服を受け取って、着替える。生着替えなんて、普段の俺なら間違いなくテンションが上がるものだけど、今の俺はもう色々といっぱいっぴいっぴいです

「ごめんなさいねイツセー。さつきまでの事はなかった事にしよう。私も少し冷静ではなかったわ。今日の事はお互いに忘れましょう」

えーと？終わりですか。い、いや、俺も何が何だか分からない状態だったし・・・でもこれだけは絶対確信している。俺は絶対に後で後悔する事は間違いないだろうなあ

「グレイファイア、私の根城に行きましょう。話はそこで聞いわね。朱乃も同伴でいいわよね？」

「勿論です。上級悪魔たる者、『女王』を傍らに置くのは常ですので」

「よろしい。イツセー」

部長が俺を呼んだと思ったら、俺の頬に顔を近づけ・・・

チュツ

頬に部長の柔らかい唇が触れた。

ほ、ほわあああああああああ!!?!!?ぶ、部長にキスされたああああ

!!

「今夜はこれで許してちょうだい。迷惑をかけたわね。明日、また部屋で会いましょう」

「失礼します」

そして俺に別れを告げ、部長とグレイファイアさんはまた足元に魔法陣を出現させ、強い光と共にその姿を消した。

そして、二人がいなくなった部屋で、俺はキスされた感触が残る頬をさすりながらしばらくボーっとしていた。

「……う、うおおおおお!!!お、俺は、なんてもったいない事をしたんだああああ!!!」
「うるさいわよイツセー!」近所に迷惑でしようが!」
俺はその後、少し経ってからベットの上で激しく後悔をした



そして翌日の土曜の朝、俺を含めた部長の眷属は部長から朝に呼び出しを受けた。俺は結局一睡もする事が出来ず、眠い目を擦りながら、疲れた体に鞭を打って学校への道を歩く。何で疲れてるかって? それは、察してくれ……

そして、休日の朝からでも部活で賑わう学校に着き、俺はランニングする運動部の部員を尻目に、旧校舎までたどり着いた。そして部屋の前までやって来た俺は部室の扉を開けた。

室内には部長、朱乃さん、木場、夕麻ちゃん、ミツテルトちゃん、カラワーナ先生、そしてグレイフィアさんがいた。

そして部屋は会話のない張りつめた空気が支配していた。

機嫌の悪そうなオーラを漂わせ、顔を顰めている部長。朱乃さんはいつものニコニコ笑顔だけど、その笑顔からはどこか冷たい印象を感じる

夕麻ちゃん達、元墮天使組は部屋の隅で椅子に静かに座っていて、グレイファイアさんは部長の近くですました顔で立っていた

いつもの様に部活のメンバーに声をかけようとしたけど、それは出来なかった。

木場は壁に寄りかかって、俺に向かっていて俺に「参ったよね」と言った感じの苦笑を向けた。

そして部長は部屋にいるメンバーを一人一人確認すると、その口を開く

「全員揃ったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

「お嬢様、私がお話ししましょうか？」

部長はグレイファイアさんの申し出を、手で制した。

「実はね・・・」

部長がそう口を開いた瞬間、部室の床の魔法陣が光ったり、その形が俺の見た事のない形へと変化した。

「・・・フェニックス」

近くにいた木場がそう呟き、魔法陣から人影が現れると共にボワツ、と炎が巻き起こって、室内を熱気が包み込んだ。

熱っ！火の粉が熱いんですけど！

炎の中で立っていた人影が、腕を横に払うと周囲の炎が消えた。

「ふう、人間界は久しぶりだぜ」

そこにいたのは、赤いスーツを胸元を大きく開けて着崩した見た目は二十代前半くらいのホスト風の男だった。男は部屋を見渡し、部長を捉えるとその口元をにやけさせた。

「よお、愛しのリアス。会いに来たぜ」

い、愛しのリアス？こいつ、部長とどういう関係だ？

「ライザー……」

部長の方は、ホスト風の男を半眼で睨みつけている。その顔はさつきより明らかに不機嫌そうだった

「さてリアス、早速だが式の会場を見に行こう。日取りも決まってるんだ、早め早めがいい」

軽々しい奴だな……。部長にライザーと呼ばれたライザーは部長の腕を掴んでそのまま引っ張って行こうとする

「……離してちょうだいライザー」

低く迫力のある声で部長はその掴んだ腕を振り払った。部長めっちゃ怒ってます！しかし、そんな部長に腕を振り払われた事など気にもせずに、ヘラヘラと笑っていた。

・・・なんかこいつムカつくな・・・

気がつけば、俺は口が勝手に動いていた

「おいあんた！部長に対して無礼だぞ！一体何者なんだよ！」

「あ？誰お前？」

先程までと違い、不機嫌な口調で言う男。その目も明らかに俺を見下した感じの目だった。クソ！やっぱりこいつはムカつく！

「俺はリアス・グレモリー様の眷属悪魔！『兵士』の兵藤一誠だ！」

ふふん、言ってみようぞ！どうだ、ホスト野郎！

「ふーん、あっそ」

ズルツ

男は興味が無さそうな反応を見せ、俺は思わずズッコケる。男には興味ないって事か。そうですかそうですか。俺もですけどね

「つーか、あんた誰なんだよ」

俺の問いかけに、男は少し驚いた表情になった

「・・・あらら？リアス、俺の事下僕に話してないのか？」

「話す必要がないから話してないだけよ」

ている事しか出来なかった。俺を含めた全員が、ライザーに向けて嫌悪の表情を浮かべていた。

「いい加減にしてちょうだい！」

とうとう我慢の限界が来た部長は立ち上がってライザーを鋭く睨むが、ライザーの方は相変わらず気持ちの悪いニヤニヤとした表情を浮かべていた。

「ライザー！以前にも言ったはずよ！私はあなたと結婚しないわ！」

「ああ、以前にも聞いたよ。だが、リアス、君の所の家はそういう訳にもいかないだろう？御家事情とかさ」

「余計なお世話だわ！私が次期当主である以上、婿の相手位は自分で決めるつもりよ！お父様達も皆急かし過ぎるわ！当初は私が人間界の大学を出るまでは自由にさせてくれるはずだったのに！」

「その通りだ。君は基本的には自由だよ。好きな大学に行って、下僕も好きにしたらいい。だが、君のお父様や魔王であらせられるサーゼクス様も心配なんだよ。御家断絶が怖いのだ。ただでさえ先の大戦で、俺達悪魔側は純血の悪魔を大勢失った。いくら戦争は脱したとはいえ、神陣営や堕天使ども達と拮抗状態は変わらない。純血で、しかも上級の悪魔である御家同士が引っ付き、その間に生まれる新生児がどれほど今の悪魔情勢に貴重か、君だって分からない訳じゃないだろう？」

ライザーの言葉に部長は黙り込んだ。ライザーはカップの紅茶に口をつけてから、更に話を続けた。

「新鋭の悪魔 君の下僕みたいな人間から悪魔に転生した転生悪魔

が最近では流行っているが、それじゃあ俺達、古い家系の血筋の上級悪魔の立場が無い。新鮮な血もこれからの悪魔社会には大切だが、俺達のような昔から続く古い血筋を絶やすわけにもいかない。俺の家は上つまり兄達がいるから問題はない。けど、君の所は君を含めて二人だけ。サーゼクス様は魔王として家を出た身だからリアスしかグレモリー家を継ぐ者がいない。婿を得なければ君の代で、今は半数以下しかいない『72柱』の一つであるグレモリー家は潰えるかもしれない。君は長く続いた家を潰す気なのか？この縁談には悪魔の未来がかかっているんだ」

おお、やべー。二人は難しい話を繰り広げている。ええっと、つまりこういう事か？

一つ、部長とライザーは婚約者。ただし、本人たちの意思ではなくて部長達の家が決めた事。

二つ、大昔の大戦のせいで『72柱』の様な純血の悪魔がたくさん亡くなったから、部長みたいに純血の上級悪魔は貴重

三つ、俺みたいな人間から転生させる悪魔も必要だけど、部長の家のグレモリー家みたいに『72柱』の爵位持ちの純血悪魔の血筋は途絶えさせる訳にはいかないから、今回みたいな部長とライザーの縁談は純血悪魔の未来を守る為に必要な事

ど、どうかな？うまく纏められているか分かんないけど、こんな感じで合ってるか？（イツセー＋作者）

「私は家は潰さないわ。婿養子だつて迎え入れるつもりよ」

部長の言葉を聞き、ライザーは満面の笑みを浮かべた。

「おお！わかってくれたかりアス！じゃあ、早速俺と・・・」

「勘違いしないでライザー。婿養子を迎え入れると言ったけれど、それはあなたじゃないわ。あなたとは結婚しない。私は、私が良いと思った人と結婚する。古い家柄の悪魔だって、それくらいの権利はあるわ」

ライザーの言葉を遮って部長ははつきりとライザーに向かって言った。マジザマア、ライザーm9（＾▽＾）プギヤア

俺が心の中でバカにしたライザーは、部長の言葉に目を細めて舌打ちし、機嫌が一気に悪くなった様子だ

「・・・今誰かバカにされた様な気が・・・まあ、いい。それよりもアス、俺もな、フェニックス家の看板を背負ってるんだ。その名前に泥を塗る訳にはいかない。そもそも俺は人間界が嫌いなんだ。この世界の炎と風はあまりにも汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐え難いんだよ！」

ボワツ！

ライザーの体から炎が駆け巡る。火の粉が室内を再び舞った

「俺は君の下僕を全部燃やし尽くしてでも君を冥界に連れて帰るぞ」

ライザーから殺意と敵意が溢れ、室内全体に広がった。これは、あのドーナシークの奴よりも上だ！部長も体から紅いオーラを発して、ライザーと正面から対峙した。

二人から発せられる魔力とプレッシャーが高まり、室内を支配した。

そんな空気の中、介入する者がいた。

「はあく・・・ヤダヤだ。これだからこういう男は嫌になるわ」

その声は、この場にいる俺、木場、夕麻ちゃん、ミツテルトちゃん、朱乃さん、カラワーナさん、部長、ライザー、ましてグレイフィアさんの誰でもなかった。

「自分の要求が却下されたからって、力づくで事を成そうとする奴ってホント見えて嫌悪しか湧かないわねえ」

全員がその声の方を向くが、誰の姿も見えない。一体どうなってるんだ？

「誰だ！」

ライザーは声のした方に向かって怒鳴りつける。すると、さっきまで誰もいなかった場所にぼんやりと人影が見えてきて、段々とその輪郭がはつきりしてきた。さっきの声から、俺の頭にはある人物が浮かんでいた。そして数秒後、現れたのはまさしく俺が頭に思い浮かべた人物だった。

「何者だ！お前は一体誰だ！」

再びライザーは怒鳴りつけた。その現れた人物はため息を吐いた後、眼鏡をクイツと持ち上げた後、その口を開いた。

「人に名前を尋ねる前に、まずは自分から名乗るって習わなかった？そんな事も分かんないの？ますます呆れるわ」

その人物は昨日、俺達に向かって衝撃発言をした桐生だった。しかも頭には猫を乗つけて俺達の前に登場した。

焼き鳥と藍華

「人に名前を尋ねる前に、まずは自分から名乗るって習わなかった？ そんな事も分かんないの？ ますます呆れるわ」

俺達の前に、突然姿を現した桐生はライザーに向かってそう言っただけのけた。言われたライザーはとうとうと、先ほどよりも顔を怒りに染め、目を鋭くして桐生の事を睨んだ。

「なにっ……！ 貴様あ！ 誰にそんな口をきいているか分かってるのか！！」

「あく、もう煩い。室内なんだからもっと声のボリューム下げなさいよ。それともあんたは一々大声出さないと喋れない訳？」

「おいしい！ なに煽ってるんだよ桐生う！！ ほら見ろ！ ライザー青筋立ってるよ！ 誰がどう見たって激怒してるよ！」

「このっ……燃やし尽くしてやる！！」

ライザーは手に炎を集めて、桐生に放とうとした。しかし桐生は、逃げる素振りどころか顔色一つ変えない。そして次の瞬間、ライザーの手に集まったものや体の周りにあつた炎が突然消えた。

「なっ!? お、俺の炎が……!」

ライザーは自分の炎が突然消えた事に、酷く驚いている様子だった。ライザーだけじゃなくて俺達も驚いた。対して桐生はまるでそんな事などに全く気を留めていない様子だ。おいおい、一体どうなってるんだよ！

「貴様あ！一体何をした！」

そう言つてライザーは桐生に近寄つて行こうとするが、その行く手を阻む者がいた。

「ライザー様、落ち着いてください。もし、これ以上やるのでしたら、私も黙つておりません。私はサーゼクス様の名誉の為に遠慮などは一切いたしません」

「っ！」

静かで迫力のある言葉を、桐生の前に立ったグレイフィアさんが口にする、ライザーはその表情をまるで畏怖するかのよう強張らせた。

「・・・最強の『女王』と称されるあなたにそんな事を言われたら流石に引き下がるしかない。運が良かったな小娘」

「はいはい、私はとっても運が良いですね（棒読み）」

思いつきり棒読みで、ライザーに目も向けずに答える桐生。な、なんか今日の桐生変じゃないか？らしくないっていうか、なんていうか。いつもみたいにおちやらけた感じじゃないし

「くっ・・・！」

ライザーはキツと桐生の方を睨んだ後、臨戦態勢を解いた。それを確認すると、グレイフィアさんも桐生の方へ一度視線を向けた後、再び口を開いた。

「こうなる事は、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も

重々承知でした。正直に申し上げますと、この場が最後の話し合いの場だったのです。これで決着がつかない場合の事を予想して最終手段を取り入れる事にしました」

「最終手段？・どういう事グレイファイア」

「お嬢様、ご自分の意思を通すのでしたら、ライザー様と『レーティングゲーム』にて決着をつけるのはいかがでしょうか？」

「っ!？」

グレイファイアさんの言葉に、部長は心底驚いた様子で言葉を失った。

えくと、確か『レーティングゲーム』って、爵位持ちの上級悪魔が自分の下僕同士を戦わせるっていうやつだよな。でも、それって成熟した悪魔しかできないから、部長は参加できないって前に言ってたよな・・・？

そんな俺の疑問を解消するようにグレイファイアさんは説明を続けた。

「お嬢様もご存知の通り、公式な『レーティングゲーム』は成熟した悪魔しか参加できません。しかし、非公式の純血悪魔のゲームは、お嬢様の様な成熟していない悪魔も参加可能です。この場合の多くが・・・」

「身内同士、または御家同士のいがみ合い、よね」

部長は嘆息しながら答え、さらに続けた

「つまりお父様達はこうなる事を予想して、最終的にはゲームで婚約を決めようって事なのね・・・どこまで私の生き方を弄れば気が済むのかしらっ・・・!」

殺気を漲らせ、酷く苛立ったご様子の部長。そこへグレイファイアさんが部長に尋ねる

「では、お嬢様はゲームを拒否すると?」

「いいえ、こんな好機はないわ。いいわ、ゲームで決着を着けましょう、ライザー」

部長の発言に、ライザーはまたあのイラつくニヤけた表情を見せた

「へー、受けちゃうのか。俺は別にかまわないが、いいのか?俺はリアスと違ってすでに成熟していて、公式のゲームにも何度か参加して今の所は勝ち星が多い。それでもやるのか?」

ライザーは挑発的な態度で部長に返した。それに対して部長は、勝気な笑みを浮かべた

「やるわ。ライザー、あなたを消し飛ばしてあげる!」

「いいだろう。そちらが勝てば好きにすればいい。ただし、俺が勝ったら即結婚してもらおう」

激しく睨み合う両者。そんな中、再び介入する者がいた。

「格好悪っ」

その声の主は、またしても桐生だった。

「って何でお前は優雅に椅子に座って猫を愛でてるんだよ!?」
「どっからそんな椅子出した!」

そう、桐生はいつの間にか部屋には無かった椅子に座り、膝にさつき頭に乗せていた猫を乗つけて撫でていた。とういかその猫 통해서もしかしなくてもシルさんだよな? 同じオツドアイで銀色だし

「兵藤、そんな事は今どうでもいいでしょうが。全く、少しは空気読みなさいよ」

「お前が言うな!!」

多分、この部屋にいたほとんどの者がそう思ったはずだ

「おい、その小娘。さつきのは誰に対して言った言葉だ」

「あんたに決まってるでしょう? え、もしかして自分の事だっかわかってなかったの?」

再び煽るように言う桐生。桐生さん!? 今日には本当にどうしちやっ
たんですかあ!?

額に青筋をたてて怒るライザーが何かを言う前に桐生が言葉を続けた。

「グレモリー先輩はゲームを全くした事が無い初心者。対してあんたはさつきも自慢してたように経験者。そんな奴が、素人同然のリアス先輩に婚姻を賭けた勝負を挑むなんてカッコ悪いじゃん」

た、確かに。言われてみれば桐生の言う通りだな。それってめっ

ちやカツコ悪いな

「ならどうしろと言うのかしら？この問題を解決するいい方法を知っているなら教えてくれるかしら、桐生藍華さん？」

部長が座っている桐生に向かつて尋ねた。その顔は少しムツとした感じになっており、多分さつき桐生が部長の事を初心者や素人って言ったからかな？まあ、事実みたいだから仕方がないっちゃあ仕方がないけど

「簡単ですよりアス先輩。せめてゲームをする際、お互いが対等になるような条件を付けなければいいんですよ。簡単に言っちゃえばハンデですね」

桐生は部長の質問に膝の上の猫を撫でながら答えた。つてシルさんも何で呑気に撫でられて・・・

「いや〜♡」

シルさん、滅茶苦茶蕩けていらっしやる!?まさか、それほどのテクニクを有しているのか桐生は！流石、『匠』と呼ばれるだけはあるな
「ふん。確かにその生意気な小娘の言う事も一里ある。どうだリアス、ハンデを付けようか？どうするかはお前次第だぞ？」

「・・・私にハンデを付けろというの？」

「リアス先輩。もう一度はつきりと言いますが、あなたや眷属の皆はゲームに関しては初心者です。勝負は感情だけで勝てるほど甘くありません。まして『レーティングゲーム』というのを私はさつき簡単に聞きましたが、自分の眷属の力を上手く引き出さなければ即敗北だ

そうです。今回はあなたの未来だけでなく、あなたの眷属の未来もかかっている事を忘れないでください」

桐生の言葉を、部長は口をぎゅっと嚙んでいた。

「さらに、この・・・焼き鳥男、だっけ？」

「誰が焼き鳥男じゃっ!？」

『ぶふっ!』

桐生の物言いにライザー以外の者が吹き出した。や、焼き鳥つて・・・ぶふつ

「真っ先に反応するなんて、もしかして自覚あり？」

「き、貴様あああ!!」

「止めなさいよライザー。怒鳴り散らしてみつともないわよ・・・ぶふつ」

「リアス!今笑ったな!笑ったよな!？」

「お止めください、焼きと・・・ライザー様」

「グレイファイア殿!?今焼き鳥と言いかけてませんでしたか!？」

「煩いわねえ。何でそんなに騒いでるのよ」

「もとはと言えばお前のせいだろうが!!」

「うわー、女の子の私のせいにするとかマジ引くわー」

「ライザー、あなた最低ね」

「本当ですわね」

「男としてそれはどうなのかしら」

「最低だな（ツス）」

「引っ込んでいてください」

女性陣から集中砲火を受けるライザーを、ほんのちよっぴりだけどかわいそうだと思った。

「で、どっかの焼き鳥に邪魔されたけど、その焼き鳥はゲームの成績は今の所八勝二敗。ただし、その二敗は懇意にしている家系への配慮でわざと負けたに過ぎません。だから実際の所は全勝。こんな奴だけど、実力はあるってところですよ。しかもリアス先輩と違って、この焼き鳥男は駒を全部消費していて眷属の数は15。つまりフルメンバ―って訳ですよ。数的にも、経験的にも明らかにリアス先輩が圧倒的に不利です」

「そ、そうだ!」

何とか復活したライザーが指を鳴らすと、ライザーが出てきた時と同じ魔法陣が部屋の床に出現した。というかライザー復活速いな。その辺もフェニックスって言う所なのか?というか今更だけど、桐生って何でそんなに詳しいんだ?

そして魔法陣から現れたのは、総勢十五名の猫耳だったり、メイド

だったり、チャイナドレスだったり、着物だったり、騎士っぽい感じ
だったり、e t c . . .

まあ、色々いるが全員美少女だった！

「どうだ、これが俺の可愛い下僕たちだ」

ライザーは自慢するように胸を張って言った。こ、こいつ、まさ
か . . . !

男の夢！ハーレムを実現させやがったのか!!

「お、おい、リアス . . . そこにいる君の下僕君、俺を見てマジ泣きし
てるんだが」

ライザーは引き攣った顔で部長に尋ねる。部長は俺を見て額に手
を当てて、困り顔のため息を吐いた。

「その子の夢がハーレムなの。きつと、あなたの眷属を見て感動した
んだと思うわ」

「はあ、兵藤。こんな時でも、あんたって呆れるほど本当に欲望に素直
よね」

『イツセー（君）（先輩） . . . 』

皆が呆れた目を向けてくる。仕方がないだろう！目の前に俺の目
標が、夢が現れたからついつい涙腺崩壊しちまったんだよ！

ライザーの眷属の悪魔さん達は、俺を気持ち悪そうに見ていた

「ははは！どうだリアスの下僕君。お前にはこんな事出来ないだろう」

ライザーはそう言つて、近くにいた自分の眷属の魔導士っぽい感じの女の人と濃厚なディープキスをしました！うわっ！舌まで絡ませてるよ。部長は酷く呆れた様子だった

「……………本当に最低ね。つてシル、何で顔に引つ付くのよ！」

「ニャー！」

桐生は心の底からライザーを嫌ったような声を出した。その時猫の姿のシルさんは。桐生の顔に飛びついて、桐生は前が見えなくなっていた

「つて言うかお前！一応婚約者の部長の前で、なに他の女の子とイチヤイチャしてんだよ！」

「英雄、色を好む。確か、人間界のことわざだよな？いい言葉だ、まさに俺にぴつたりだな。まあ、これは俺と下僕達とのスキンシップさ。下級悪魔のお前には、一生かかっても不可能だろう？」

「うるせえ！何が英雄だ！お前なんかただの種まき焼き鳥野郎だろうが！お前みたいな奴に部長は不釣合いだ！こいつ！『赤龍帝の籠手・ブーステット・ギア!!』」

もう我慢が出来なくなった俺は怒り心頭で左腕を前に突き出した。そして、叫んだ俺の左腕が光に包まれて、ドラゴンの紋様が刻まれ手の甲の部分には宝玉が埋め込まれた赤い籠手が装着された。

『Dragon booster!!』

甲部分の宝玉が輝き、籠手からはそんな音声が発せられた。瞬間、俺の体に力が流れ込んできた

「お前みたいな奴は俺がぶっ飛ばしてやる！」

『Boost!!』

俺のそんな思いに答えるかのように再び籠手から音声が発せられ、俺の中の力がさらに増した

そして俺がライザーに殴りかかろうとした時、俺の体に異変が起こった。

「なっ!? う、動けない！」

そう、俺の体は突然、まるで金縛りにあったように指一本動かす事が出来なかったのだ

「全く、もう少しはじつとしてなさいよ兵藤。これじゃあ何時まで経っても話が進まないじゃん」

桐生は猫のシルさんを抱えて、そう言った。こ、これもお前の仕業なのかよ桐生!!

「それで、話を戻しますけどリアス先輩。さっきの話、どうしますか？ 良く考えて答えてください」

そして動けない俺を他所に、桐生は話を進めた。部長は桐生の言葉に数刻、瞼を閉じて考えている様子を見せた後、瞼を開け口を開いた。

「……………わかったわ。今回はハンデを付けさせてもらおうわ」

「ではお二方、こういうった感じでどうでしょう」

部長はハンデを付ける事を認め、グレイファイアさんがゲームに関する簡単な内容を提案した。

一つ、俺達は準備期間としてゲームまで10日与えられる。

二つ、お互いが使う眷属は、部長に合わせた駒と同じになる。つまり今回使用できる駒は、『女王』、『騎士』、『兵士』。部長には『僧侶』の眷属が一人いるみたいだけど、訳あって参加は出来ないらしい。

三つ、ライザーはゲームで使う眷属の詳細なデータを提出する事。

「……………と言った感じでどうでしょうか」

「ふむ。まあこれくらいなら俺は全然構わないさ。それにしてもリアス、君の所は人数が少ないようだが、なんなら人数も君の所に揃えようか?」

「結構よ」

ライザーの野郎は条件を聞いても余裕な表情を崩さず、さらにハンデを申し出てきたが、部長は即拒否した。

「承知いたしました。お二人のご意見はこの私、グレイファイアが確認させていただきます。ご両家の皆さんには私からお伝えします。そして、ご両家の立会人として私がゲームの指揮を取らせていただきます。よろしいですね?」

「ああ」「ええ」

グレイファイアさんの問いに、両者は頷いて了承した。

「じゃあ、またゲームでなりアス。少しは俺を楽しませてくれよな」

最後にライザーはそう言っつて不敵に笑い、魔法陣を出して眷属の女の子達と共に部室から転移していった。

「・・・さて、今度はあなたの話を聞かせてもらえるかしら？桐生藍華さん」

ライザーがいなくなり、部室にいたみんなの視線が桐生に集まっ・・・

「ほれほれく、ここか？ここなのか？ここが良いのか？うりやうりや」

「にや、にやく！」

桐生はめっさ猫（シルさん）を愛でていた。

「っってお前は何しとんじやあ!!」

俺はみんなの気持ちを代表して桐生に突っ込んだ！本当に何をしてんの!?

「ん？何って、イラついた心を癒すためにシルを愛でてるのよ。それ以外に何をしてるように見える訳？」

愛でる手を止めずに桐生はそう言ってくる。お前今日は本当に自由だな!!

というか桐生怒ってたのか。だからライザーに向かつてあんな挑発するような感じだったって訳か

「・・・コホン。さて、今度はあなたの話を聞かせてもらえるかしら？桐生藍華さん」

まさかのテイク2つか部長!?

「あ、了解です。えっと、じゃあ聞きたい事を聞いてください」

「それじゃあまず、あなたは人間なのよね？」

「見たまんま人間の女子高生ですよ、リアス先輩」

「じゃあ次に、ただの人間のあなたがなぜ私達の正体や、アーシアの神器の事を知っていたのかしら？シルさんとは昔一緒に居たみたいだけど、あなたには悪魔の事などは教えていないと昨日黒歌達から聞いたわ。教えてくれるかしら？」

「ああ、それですか。シルにも今朝話しましたけど、私、『見える』んですよ」

み、見える？一体何の事だ？って！

「というかもう俺の体を動けるようにしてくれよ！」

俺はブーステット・ギアを出したままの状態で固まったままだった

「あ、そういえばそうだった」

「忘れてたんかい!!」

それから俺はようやく動けるようになり、俺達は桐生の不思議な力の事や最初から知っててこの学校に入った事、昨日聞いたシルさんとの出会いやなんかを聞いた。

「そう、それであなたは私達が最初から悪魔だって事も知っていた訳ね」

「はい。まあ、シルはこの力の事を知らなかったみたいなんですけどね。本当ならお守りのな力しかつけてなかったみたいで、今朝話した時も困惑してましたよ。ね?シル」

「にゃ」

猫の姿のシルさんは桐生に聞かれて、撫でられながら返事をした。その姿を見て、女性陣から「可愛い」とか「うちも撫でたいッス」とか「猫になったシルさん・・・いい」とか声が上がっていた

「というか、何でシルさんは猫の姿なんだ?」

「ああそれ?シルには今までの罰の一環として今日一日は猫の姿でいるように言ったのよ。だから今日はシルを一日中愛でてるの。で、今朝シルに話し終わってリアス先輩達にも説明をしにここに来たら、なんかお話し中だったから、シルの魔法で姿を見えないようにして、ここで待ってたって訳よ。それよりも感謝しなさいよ兵藤、シルがあんたの事を止めなかったらあんた今頃火炙りにされてたのよ」

「え、あれってシルさんの仕業だったのか。で、でも!何で止めたんで

すか！あんな野郎、俺がぶっ飛ばして・・・」

「バカじゃないの」

俺の言葉を遮って桐生がそう言った。

「バカって何だよ！お前は知らないかもしれないけど、俺の『赤龍帝の籠手・ブーステット・ギア』があれば神様だってぶっ飛ばせるんだぞ！あんな焼き鳥野郎なんかボコボコにしてやる！」

ライザーの事を思い出して、怒りで頭に血が上った俺は桐生に向かって怒鳴った。そんな俺に真っ直ぐに目を向けて口を開いた

「それは知ってる、シルにさっき聞いたから。でもそれは倍加していけばでしょう？一回の倍加をするのにかかる時間は10秒、あいつを超えるまで一体どれだけの時間がかかると思ってるんよ。相手はあんたが倍加完了するまで悠長に待ってくれると思ってるわけ？ハッ、その前にあの焼き鳥に秒殺されるのがおちよ。それどころかあいつの眷属悪魔で一番弱い子にも呆気なく負けるのが目に見える」

「っ！」

「あんたは確かに悪魔になって力や体力は人間の私よりはずっとある。それに『赤龍の籠手・ブーステット・ギア』っていうレアな物も持ってる。でも、それだけ。戦闘経験もない、その神器の扱いも全然未熟、つい最近人間から悪魔になりたてのあんたが、あいつに敵う訳ないでしょ」

「でもっ！」

俺が反論しようとしたら、桐生は手で俺の言葉を制した

「わかってる。あいつを許せないって気持ちも。でも、その気持ちはゲームであいつにぶつけなさいよ。その為に十日間の時間があるんだからさ。ね？リアス先輩」

ふられた部長は頷いて俺に向き合った

「ええ、イツセー、彼女の言う通りあなたは弱いわ。今のままでは確実にゲームですぐにリタイアしてしまうのがおちよ。レーティングゲームは一応死にはしないようになってるけど、稀に事故死というものもあるの。だから色々しつかりと準備をしないとね」

「・・・はい、わかりました」

いくらか冷静になった俺は部長の言葉に頷いた

「桐生藍華さん、あなたにお礼を言うわ。私も冷静ではなかったわ。あなたが言ってくれなかったら、私はそのままライザーに挑んでいたかもしれない」

「あー、別にお礼なんて言わないでください。私はただあの◆◆で◇◇が■■しかないナルシな焼き鳥がムカついて言ったってだけですから」

ピシッ!!!

桐生の発言に、どこからか何かにか罅が入るような音が聞こえた気がする。というか相変わらず平気でそういう事言うなあ。それよりライザーってそうなの？マジで？いや、あの『匠』の桐生が言うんなら、マジなんだろうけど・・・

「それよりも、一つリアス先輩にお願いがあるんですけど・・・」

「え、ええ、何かしら？」

部長はさっきの桐生の発言に、少し顔を引き攣らせながら答えた

「実はですね・・・」

その桐生の言葉を聞き、俺達はまた驚くのだった

「ん？ってシル!?どうしたのよ!あんな血が出てるじゃない!」

「にやフツ・・・」

「ち、血を吐いたぞ!」

「にや、にやにやにやにやにやにや・・・」

「し、シルしっかりして!あんな目が虚ろよ!」

「な、なんか壊れたみたいに笑ってるみたいツス」

「朱乃!すぐに治療を!」

「は、はい!しっかりしてくださいシルさん!」

「にや・・・にやあああ!!」

「シル!? 落ち着いてっ! シル!!」

最後にそんな騒ぎがあったそうなの

みんなと修行

SIDEシル

今日の空はどこまでも青く、雲一つない快晴だ。周囲には自然豊かな木々が生い茂り、小鳥たちの声や、ちらほらと山道の脇に生えている小さな花。まさに山の景色

僕は今、オカルト研究部のみんなと山に来ている。何で山に来ているかって？じゃあ、僕が簡単に説明するね

あのライザー・フェニックスとの十日後のレーティングゲームに向けて、リアス・グレモリーさんが今朝、突然山に修行をしに行くと言いだしたんだ。悪魔でも修行と言えば山なんだね。何だかちよつと昔を思い出しちゃったよ。僕も一時期、山に修行をしに行ってた時期があつたからなあ

で、オカルト研究部の皆は修行場となる山の上の別荘を目指して今朝早くから山道を登っているという訳です。え？何で転移で行かないのかって？それは修行の一環らしいです。現に、兵藤君なんかあり得ないくらいの大サイズのリュックサックを背負い、肩にまで荷物をかけて、汗をボロボロと流し、ひーひー言いながら僕達より結構後方の山道を歩いて、さらにその荷物の上にリアスさんも乗っているし。あれは中々きつそうだね。木場君も、今は姿が見当たらないけど、兵藤君と同じくらいの量の荷物を背負っていたよ

対して、リアス・グレモリーさんを除いた女性陣はというところ――

「ヤッホー！」

『ヤッホー！』

「おお！本当に声が帰ってきたツス！アーシアもやってみるツスよ！」

「はい、やってみますね！・・・や、ヤッホー！」

『や、ヤッホー！』

「わ、私のも帰って来ました！」

「面白いっすね！じゃあ今度は二人でやってみるツスよ」

「はい！」

「ヤッホー！」

とまあ、ご覧の通りアーシアとミツテルトの二人は、仲良く山彦で盛り上がっていた。そして夕麻とカラワーナは――

「あら、こんな所に一輪だけ咲いているわ」

「それは・・・一輪草か？いや、姫一華か？どっちだ？」

山道に生えた花の話をしていた。女の子らしいね。まあ、兵藤君達みたいに荷物持っていないしね。

まあ、説明はこんな感じでもいいかな？さてと・・・

「どこから飛び降りようかな・・・」

『例えばその人の名前、年齢、性別、身長や体重、が文字や数値として見えるのよ。あとは種族なんかも見えるわね』

つまりだ。身体の値が数値化されて見えるという事は、女性のスリーサイズや男性のアレのサイズも数値化できるという事なのでは、と。じゃないとあの発言は言えないはず。つまり、

藍華があんな発言をした原因

←
お守りとして渡したあのビー玉の力

←
ビー玉を渡したのは僕

←
僕のせい

その事が頭に浮かんだ後の事を、僕は覚えていない。最後に見たのはリアス・グレモリーさんの髪と同じ真っ赤な紅だった。後から聞いた話では、僕は血を吐いて壊れたように笑っていたらしい

「シル、元気出してにゃ」

「クッキー、どうですか？ 食べると元気が出ますよ」

僕の事を心配してくれる黒歌と白音。そうそう、この二人も藍華に続く形で昨日、オカルト研究部に入部する事になった

「シルさん、何か私に出来る事があつたらおっしゃってください」

同じく心配そうな表情で僕の顔を覗き込んでくるのは姫島さ……。じゃなくって朱乃さん。何でか知らないけど、本人から名前と呼んでくれるように頼まれたんだよね

「し、シル、私にも出来る事は何かないか！」

ワタワタと少し慌てたよな様子なのは、龍王最強と言われている僕らの家族、天魔の業龍・ティアマトことティア。お留守番はイヤだと言つて、一緒に着いてきたのだ。まあ、ティア一人を家に残して行くわけにもいかないしね

「し、シルさん！どこが悪いんですか!?すぐに私の神器で治療を！」

神器で僕の事を癒そうとするアーシア。暖かい淡い光が僕を包んだ

「し、シルさん、顔色が少し悪そうツス！」

「シル、やっぱり休んでいた方が良いんじゃないの？昨日もあれだけ吐血していたんだし」

「あの量は、人間のお前にとってかなりの量だったはずだ」

上から順に、ミツテルト、夕麻、カラワーナ。みんな僕の事を心配してくれている。いけないいけない、みんなを心配させちゃった。ここは皆を安心させないと

「ありがとう皆、僕はもう大丈夫だよ。ただちよつと死にたくなつただけだから」

『全然大丈夫じゃないっ・です!!!』

皆から総突っ込みを頂きました。その中にはいつの間にか戻ってきていた木場君も混じっている。手に持つてるのは山菜かな？兵藤

君と同じくらい荷物を持つてるのに余裕だね。凄い！木場キョン！カツコいい！

「……少しおかしくなってるみたいだ。それほどまでに昨日のダメージは凄まじかったみたいだね」

「シル、大丈夫？原因の私が言うのもなんだけどさ」

藍華まで心配そうに声をかけてくる。その顔を見てると、僕の胸がきゅうつと締め付けられるような感じがした

「そうだ。例え藍華の口からあんな言葉が出たからって、そんな事は関係ない。まあ、ちよつと……いや、かなり、今までの人生で間違はなく一番驚いたけど。藍華であることに何ら変わりはないんだ。今も昔も変わらない、藍華は優しい女の子なんだから。今更ながらそんな当たり前の事に気がついた僕が恥ずかしいな」

「……ゴメンね、心配かけちゃって。でも、もう大丈夫。あと藍華、藍華は何にも悪くないよ。ただちよつと驚いただけだから」

「そう言うと、みんなは心配した顔から安心したような表情になった。」

「じゃあ、いつまでもこんな所で止まっていなくて、早く別荘に行こ。別荘がどんな感じか私、結構気になってるのよね」

「ぜえ、ぜえ……ま、待ってくれ」

後ろの方から兵藤君の声が聞こえてきた。汗だくの兵藤君に比べ、上に乗っているリアスさんは涼しい表情だった

「ほら、頑張りなさいイツセー。男の子でしよう?」

「は、はいいー!」

・・・頑張って、兵藤君

◇◇◇◇◇

それからみんなで一緒に山道を登り、二十分くらいで森の中に建っている別荘までたどり着いた。別荘は立派な木造の造りで、グレモリー家の所有物らしい。それと、普段は魔力で風景に隠れ、人前には姿が現れないようになっていて、今回みたいに使う時だけ姿を現しているみたいだ（朱乃さん説明

「おお、流石は公爵家の別荘、立派ねえ」

「と、とても大きいですう!」

中に入ると、木造独特の木の匂いがした。中も広く、しばらく使っていないと聞いていたけど、埃とかは無く、綺麗にされていた

「二階は寝室、一階にはキッチン、リビングダイニング、トイレ、などです。家具もテレビ以外は一式揃っていますのよ。あとお風呂は、一階にあるものや外にある温泉になりますわ」

朱乃さんの言う通り、リビングにはソファやみんなで座れそうな大きな机があった。

「なんだか、シルが最初に建ててくれたウッドハウスを思い出すにや」

「懐かしいです」

あ、そういえば最初に黒歌達の為に建てた家もこんな感じのウッドハウスだったなあ。確かに懐かしいね

『え?』

僕達三人が懐かしんでいる時、他の皆は少し驚いたような声を上げた

「シル、あんた家建てたの?」

「うん、昔ね。流石にこれよりは小さいけどね」

といつても、二階建ての4LDKだったけどね。でも、使っていない部屋もあったなあ。今の家も僕が魔法で結構広めに建てたやつだけど、今は部屋が一杯になってるしなあ。そろそろ改築した方が良いかな?

「す、すごいですシルさん!お家を建てちゃうなんて!」

「流石っす!」

アジアとミッテルトがキラキラと尊敬した眼差しで僕の事を見てくる。ちよつと照れるなあ

「も、もう、ダメだあ」

どうやら兵藤君も着いたようだ。見れば、兵藤君は入口の傍の床で倒れ込んでいた。

「お疲れ様イツセー。それじゃあ私達は着替えてくるわね」

「兵藤く、覗くんじやないわよ〜って流石に無理っばいか」

リビングに荷物を置き、兵藤君の上に乗ってきていたリアスさんや藍華達女性陣の皆は、着替えの為に二階に上がって行った

「それじゃあシルさん、イツセー君。僕も着替えてきますね」

青色のジャージを持って、木場君も一回の浴室に向かった

「覗かないでね」

浴室のドアから、顔をひよっこりと覗かせた木場君が冗談っぽく言ってくる

「マジでそのイケメンフェイスぶっ飛ばそうか!？」

『兵藤く！女子の着替えが覗けないからって、男子の着替えを覗くのはどうかと思うわよ〜?』

「違うわ桐生!!んな訳あるか!」

おお、兵藤君疲れてるせいで余裕が無くなってよ。取り敢えず落ち着かせる為に兵藤君にお水とタオルを渡してあげたら、涙ながらに感謝された。そこまでの事はしてないと思うんだけどね

そして十分ほど経って、女性陣も着替え終わったようで、二階から降りてきた。リアスさんは笑みを浮かべながら言う。

「さあ、早速外で修行を始めましょう」



レッスン1 木場君との剣術修行

「はっ！」

木刀を持った木場君が僕に向かって斬りかかってくる。流石『騎士』、中々速いね。でも……

「当たらないっ……！」

僕はすべての攻撃を紙一重で躲す。『騎士』のスピードとレベルの高い剣術で戦うのが木場君のスタイルっぽいね。木場君の攻撃を躲しながら、僕は木場君の事を分析していく

そして躲し続けて十五分が過ぎた頃、木場君の剣筋やスピードが最初の頃と比べて明らかに落ちてきた。まあ、当然か

「よつと」

「なっ！」

僕は木場君の持っている木刀の柄の部分を蹴り上げた。木刀はそのまま木場君の手を離れ、彼の後ろの方へ落ちた。木場君も疲れたのか、そのまま地面に座り込んだ。

「お疲れ様、そろそろ休憩にしようか」

「はあ、はあ、さ、流石ですね。僕の攻撃がごとごとく躲されて、一太刀も当てる事も出来ませんでしたよ」

「まあ、僕も10年間色々な修行をしたからね」

今回、この修行に僕が来る事になったのは、藍華達の付き添いって
いうのと、リアスさんに皆のコーチを頼まれたからだ。まあ、僕も断
る理由が特に無かったからOKしたんだけどね

「ところで木場君、君の剣術は誰かから習ったものなのかな？」

「はい、僕の剣術は師匠から習ったものです」

師匠か、多分かなりの腕の持ち主なんだろうなあ。それにしても木
場君はレベルが高いな。スピードや剣術なら下級悪魔の中ではいい
所にいるんじゃないかな。木場君はこのままそのスピードと剣術を
伸ばしていけばいいと思う

ドコーン！

休憩している時にそんな大きな音が聞こえた。僕達のいる所から
少し離れた山の方から、青い火柱が上がっているのが見えた

「・・・大丈夫なんでしょうか？」

木場君が心配そうな声を上げた。まあ、やり過ぎないように言っ
てるから大丈夫『ドコーン！ドコーン！ドコーン!!』・・・。

連続して衝撃音が響き渡り、それに連動して青い火柱が次々と上
がっていた。

「・・・」

人選間違えた、かな・・・？

◆◆◆◆◆◆◆◆

SIDEイツセー

突然だが俺は今、命の危機に瀕している。何を言ってるかって？そのまんまの意味だよ!!

「ほらほら、もっと素早く動かないと跡形もなく消し飛ぶぞ！」

そう言いながら青い魔力の塊を俺に向かって投げつけてくるティアマット（人型）さん

「のわあっ!?!」

俺が全力で飛びのいた直後、さつきまで俺がいた場所に周りの木の高さを超える程の大きな青い火柱が上がった！マジであんなの喰らったら跡形もなく消し炭になっちゃおう!!

今回の修行、俺はまず体力や筋力といった基礎能力を上げる為にシルさんのアドバイスの元、トレイルランニングという舗装されていない山なんかを走るといふトレーニングをする事になったんだけど、それを何故かティアマットさんの提案でケイドロでやる事になったんだ。勿論俺がドロで、ケイはティアマットさん

「はははっ！狩りをするのは久しぶりだな！しかもその相手があいつの宿主とくればテンションが上がるというものだ！」

「ちよつとお!?俺は狩りの獲物っすか!?!」

「ほら、喋っている暇があったらもつと早く動け！」

「うわあああ!!」

ドーン!!

やばい、さつきから威力が上がってきてる気がする

「あいつらはいつともいつも喧嘩ばかりかして。周りの迷惑も考えたらどうなんだ・・・あの時もあいつらは私がせっかく気持ちよく寝ていたのに邪魔をして・・・!」

お、おい、なんかティアマツトさんの機嫌が悪くなってない? それにあいつって俺に宿ってるドラゴンの事か? 何やってんだよ! じゃあ、あれか? 現在進行形で俺が死にそうになってるのはお前のせいかよ! 何でお前の代わりに俺がこんな目に合わなきゃなんねえんだ!! お前が出て来てやられやがれやこん畜生おお!!!

「今度は連続で行くぞ! 避けろよ!」

「止めてっ! 俺はもう限界です!!」

「限界は超える為にある。シルが前に言っていた言葉だ。・・・あの時のシル、カツコ良かったなあ〜」

頬を薄く染め、うつとりとした表情を見せるティアマツトさん。その顔に思わず立ち止まって見惚れそうになるが、そんな状態でも俺への攻撃の手は止めていないので、そんな事をすれば即、滅殺されちゃう!! というかマジで俺限界なんですけど!?

「ほら、スピードが落ちてきているぞ！死にたいのか！」

「ひひひひひひ!?!」

ドーン！ドーン！ドーン！ドォーン!!

ん
・・・父さん、母さん、みんな。兵藤一誠、今日死ぬかもしれませ

みんなと修行2

SIDE 藍華・アーシア・白音・黒歌

イツセー達が修行をしている頃、眷属ではない藍華、アーシア、白音、黒歌のオカルト研究部の部員達は、別荘から少し歩いたところにある川に夕食用の魚釣りに来ていた。川の水はとても澄んでいて、泳いでいる川魚も見える。川に向こう岸は高い崖になっていた

「おお、中々いい感じじゃん」

「はい、とても綺麗な場所ですね」

「あつ、魚が見えるにや！」

「沢山釣って、シルに調理してもらいましょう」

四人は早速、持ってきた釣り道具で釣りの準備を始めた

「おっさかな沢山釣りたいなあ〜♪」

「・・・」カチャカチャ

鼻歌交じりに釣竿の準備をする黒歌と、黙々と準備をする白音。白音の表情は真剣なものだった

「ここはね、こうやって・・・」

「えっと、こんな感じでしょうか？」

「ん、大丈夫大丈夫。ちゃんと出来てるわよ」

アーシアは、桐生にサポートされながら準備をしていた

「アーシア先輩、桐生先輩。私は向こうの方で釣ってきます。私がない間、姉さまの事よろしくお願いします」

「ちよつと白音！お姉ちゃんは子供ですか!？」

白音は早々に準備を終えると、藍華達にそう言つて釣竿とバケツを持ち、別の場所へと向かつて行つた

「なんか白音ちゃんヤル気満々って感じねえ」

それから準備が終わつた藍華達は、川の傍にある三つ並んでいる丁度いい大きさの岩に座つて釣り糸を垂らし、釣りを開始した。

「アーシア、こうやって靴を脱いで足を水につけると気持ちいいわよ」

「ひやうっ！っ、冷たいですけど気持ちいいですう」

「私もするにや〜」

それから三人は、のんびり水に浸かり竿に魚がかかるのを待ちながら、お喋りをしました。

「へえ〜、シルつて料理も出来るんですか」

「そうにや、シルの作る料理はどれもとっても美味しいんだにや！それはもうほつぺが落つこちちやうくらいにねえ」

「私もシルさんの料理を食べましたけど、どれもとっても美味しかったです！」

「へえ、そういえばアーシアや黒歌先輩はシルの所に住んでるのよね？」

「だにや。私と白音や最近一緒に暮らすようになったアーシアや夕麻達も一緒にや。あとは他にもいるんだけど、出かけてる事が多いから家にいない事が多いかになや」

「家って、どの辺なんですか？」

「えっと、○○○○の近くにや」

「ああ、あそこですか。家とは丁度学校から反対ですね」

ドーン！

「きやつー！」

大きな音が聞こえて、アーシアはビックリした声を上げた。藍華も、声には出していないが驚いた様子だった。それとは反対に、黒歌はああく、という表情になっていた

「な、何ですか今の大きな音は」

「何か、向こうの山に青い火柱が見えた気がするんだけど」

「ティアの仕業にや」

驚いている二人に黒歌が説明をした

「多分、あの茶髪のツンツン頭の特訓をしてるんじゃないかになや？」

「だ、大丈夫なんでしょうか・・・？」

「まっ、兵藤なら心配ないでしょう。あいつ、結構頑丈だし」

「そうにや。ティアだってシルにちゃんと手加減するように言われ・・・」

ドーン！ドーン！！ドォーン！！

「・・・」

「はわわわわっ！さつきより大きな音ですう！」

「・・・黒歌先輩」

「・・・シル、言い忘れたのかにや？」

「・・・」

ドーン！ドドーン！ドォーン！！

二人の視線の先では、次々と青い火柱が上がっていた。アーシアはワタワタと一人慌てていた

少しすると、音も止んで、落ち着いていた三人（主にアーシア）は、釣りを再開した

ピクッ、ピクピクッ

「あつ、黒歌先輩引いてますよ」

「おお、来た来たあ！うりやあく！」

ザパア！

黒歌が勢いよく竿を上げると川の中から魚が大きく宙を舞った。宙に舞った魚は、太陽の光を浴びてキラキラと輝いた

ぴちぴちぴちっ！

釣り上げられ、岸にあげられた魚は十センチ程の大きさだった

「おお、立派なもんじゃないですか」

「すごいです黒歌さん！」

「にやははは！私にかかればざつとこんなもんにや」

得意げな様子の黒歌は、魚を針から外してバケツの中に入れた。そしてまた針に餌を付けて川に垂らした。

「にやふふ、この調子でドンドン釣るにや」

「これは私達も負けられないわね」

「はい！私も頑張ります」

気合を入れたアーシアは小さく頑張る、といったポーズをとった。その姿を見て、二人はほっこりとした気持ちになった。そしてその姿を、某ゴスロリ堕天使がこの場にいたら、真っ先にカメラに写してい

ただらう

そしてそれからアーシアや藍華も魚を釣り上げ、魚がかかるまで待っている間の三人の話題は、またしてもシルの事についてになった

「んにゃ？シルが十年間何をしてたか？」

「はい、私のところからいなくなって何をしてたのか気になりました」

「あつ、わ、私もシルさんがどんな事をしてたか気になります」

アーシアもおおずおおずとしたように手を上げた

「うくん、何から話せばいいかにゃ〜？」

腕を組んで、むむむつといった感じで悩んでいる様子の黒歌。そして何かを思いついたような表情になり、手をポンツとついた

「主婦にゃ」

「・・・はい？」

藍華とアーシアは二人そろって首を傾げた

「主婦にゃ」

「いや、黒歌先輩聞こえてますよ」

「えつとね、シルは大体家の掃除、洗濯、スーパーに買い物、私達の食事やお弁当を作ってくれてるにゃ」

「ああ、確かに主婦だわ・ですね」

二人も納得した様子になった

「私達も、掃除とかは手伝うんだけど、料理はシルが圧倒的に上手いつていうのと、シル自身が料理が好きだから料理は完全にシル任せにや。あとは何年か前まではティア達に手伝ってもらって修行をしてたね。でも最近じゃしてないみたい。あと、よくシルも出かけたりしてるにや。偶にティア達みたいに長い事返つて来ない時があつて、何をしてるかとかまでは分からないにや」

「へえ」

「駒王学園に私達やアーシア達を通えるようにしてくれたのもシルのおかげにや。ね？アーシア」

「はい！シルさんは私の夢を叶えてくれました。お友達も沢山出来ましたし、今のこの幸せな生活が送れるのも、シルさん達のおかげです。それにあの時、私の命も救っていただきました・・・シルさんや皆さんには感謝してもしきれません」

手を胸に当て、祈るように目を閉じるアーシア。その姿は、まさしく聖女だった

「私も白音も、シルに助けられたにや。もし、十年前シルに会ってなかったら、私達は多分野垂死でたにや。シルが私達の事を家族って言ってくれた時は、嬉しくって涙が止まらなかったにやあ」

黒歌はそう言いながら頬を緩ませていた

「そっか、シルは皆の事も助けてたのね。私もアーシア達と一緒に」

そう呟いた藍華に、二人の視線が向いた。藍華は、空を見上げながら言葉を続けた

「私がおね、シルと最初に出会った時は私がおと少しで死ぬ所だった。怖くて震えてる私に、あと少しで鋭い牙が突き刺さろうとした時、私を助けてくれたの」

藍華の話をアーシアと黒歌は静かに聞いていた。川の音だけが響く中、藍華はさらに続ける

「猫の姿だったシルは体を張って傷だらけになりながら自分より大きくて強そうな怪物相手に立ち向かっていった。鋭い爪や牙が体を掠めて傷ついても、シルは逃げたりしなかった。そしてその後、私が気絶して目が覚めたら怪物はいなくなっていて、目の前には傷だらけのシルがいた。それからシルを家に連れて帰って手当てをして、シルつて名前をつけて一緒に暮らしたのよ。あの頃はシルと少しでも一緒に居たくて、学校が終わったらすぐに家に帰ってたなあ。だからシルがいなくなったら時は、すごい泣いた記憶があるわ。しばらくは食事もおんまりとれなくて、親に心配されたっけ」

藍華の表情はその時を思い出して懐かしんでいるようだった

「シルがいたから今の私がいる。私もシルには感謝してるのよね……ってなんかこういうのらしくないわね、今のはシルや他の皆には言わないでね」

そう言って少し気恥ずかしそうに頬をかきながら笑う藍華

「そんな事ないですよ桐生さん！」

「なるほどにや、だから十年もシルの事を探してたんだにや」

「そうそう・・・ん？」

ゆつくりと顔を黒歌に向ける藍華

「・・・黒歌先輩、私ってそんな事話しましたっけ？」

「んにや、これは昨日会いに行つた藍華のお母さんから・・・ってこれは言つちやダメって言われてたんだつたにや」

しまったあ、という表情を見せる黒歌。

「き、桐生さん・・・？」

ゴゴゴゴツ！

そんな効果音が付きそうな感じになる藍華。バケツの魚たちが、藍華から発せられるプレッシャーにバシヤバシヤと勢いよく暴れる

「何ペラペラ喋ってんのよあのバカは・・・！帰ったらキツチリオ・ハ・ナ・シ、シナイトネ。フフフフ・・・」

「ひいっ！」

アーシアと黒歌は、藍華の黒い笑みを見て、お互いに抱き合つてガタガタと震えた

キュピーンツ！

「……はっ！何か怒られそうな予感がする！」

某主婦は、自らの危険を察知した。しかし、それを逃れられるかどうかは……微妙だ

その頃、白音はというと……

「……っ、HIT！」

ザパア！

白音が釣り上げた魚は、黒歌達が釣ったものよりも大きかった。そして、白音は慣れた手つきで魚を針から外し、バケツに放り込んだ。バケツの中には魚が一杯入っており、今ので丁度バケツ4杯分になっていた

「……次を釣り上げたら終わりにしましょう」

そう言って、白音はポイントを狙って竿を振った

ポチャン！

狙った所をピンポイントで針は落ちた

「今日は大漁です。一杯シルに美味しい物を作ってもらいましょう……きつとシルも褒めてくれますね。ナデナデでしょうか？それともハグ？はっ！りよ、両方とか……！」

かかる魚を待ちながら、白音はそんな事を考えていた



太陽が真上に来た頃、午前の木場君との修行を終え、みんながお昼休みに別荘に帰ってくるまでの間に、僕はおにぎりを沢山作っていた。木場君はその間、別荘の前の地面に倒れ込んで休んでいた。ちよつとやりすぎたかな？あと、おにぎりを作ってる時に、キッチンにバケツが転移されてきた。釣りに行っていた藍華達が帰りに重い物を持たなくてもいい様に、バケツに転移の術式をかけていたものだ。バケツの中には魚がたくさん入っていて、大きな魚が多かった。今日は大漁だったみたいだね。藍華達ももうすぐ帰って来るだろう

それと兵藤君だけど・・・虐めだったねあれは。あの火柱が上がった後、すぐに僕がティアを止めに入ったから大丈夫だったけど、最後に撃っていた魔力弾は今の兵藤君にとってはシャレにならないレベルのやつだった。兵藤君なんかもう体力もゼロに等しい状態だったね。取り敢えずティアにO☆H A☆N A☆S H I（肉体言語）で大人しくさせた後、疲れ果ててる兵藤君と気絶したティアを背負って別荘へ戻った。帰ってきた僕らを見て木場君の顔が引き攣っていたのは印象に残ってる。兵藤君も体力をかなり消費していたので、木場君との修行の間はずっと寝ていた。ティア？ティアは起こしてずっと正座させてますけど何か？

「はあく、もうクタクタっす」

「しつかり歩けミツテルト」

「ただいまシル」

リビングで待っていると最初に帰ってきたのは、夕麻達元墮天使組の三人だった

「お帰り三人とも。特訓の方はどうだった？」

「きついっスー！」

いの一番にミツテルトが口を開いた。三人の特訓内容も、僕が決めただんだんだけどやっぱりきつかったかな？

「ミツテルト、お前はもう少し体力をつけろ。最近は何ゲームばかりしているから鈍ってしまってるんだぞ」

そういえばミツテルトの祖父母は天使だった頃、人間界の遊びに魅かれて墮天使に堕ちたつて前に言ってたな。その影響か、ミツテルトはかなりのゲーム好きだ。最近も家では白音と一緒によくゲームをしている。白音も何年か前からゲームを始めてて、結構なゲーマーだ。その事もあって、二人の仲は結構いい。最近は何ゲームとかよくやってるなあ

「体力バカのカラワーナに言われたくないっす！うちはカラワーナと違ってか弱い女の子なんすよー！」

「誰が体力バカだ！教師にそんな口をきいていいと思ってるのか！」

「ふふん、そんな事言っても怖くないっすよー」

「このっ！・・・帰ったらお前の担任に課題を倍にしてもらおう様に言っておこう」

「ちよっ!?そ、それは職権乱用っすよ!」

「何を言う。これはお前の為を思っ言っているのだぞ」

「なにおうっ!」

「やるか?」

「ぐぬぬぬっ!」

「はあ、全く。二人とも喧嘩はよしなさいよ」

嘆息しながら夕麻がそう言った。この二人は時々こうして言い争う事がある。まあ、黒歌達に比べたら全然少ないけどね

「シル、特訓の方はとても充実した内容よ。だから心配しなくても大丈夫よ」

「そう言ってくれると嬉しいよ。もうすぐみんなも帰ってくると思うから、汗を流してきたらどう?」

「わかったわ。ほら二人とも、行くわよ」

「グエツ!」

夕麻は二人の襟を掴んでそのまま浴室へ引きずって行く。あと、女の子が出していい声じゃないよ・・・

「ゆ、夕麻先輩!?!襟を引つ張らないでくださいよ!締まってる、締まってるっすからあ!」

「く、苦しいっ!」

夕麻、二人を引きずっていけるくらい力があるんだね。今後はあの二人のストッパーは夕麻に任せようかな?

「戻ったわよ」

「シルさん、ただいま戻りましたわ」

次に帰ってきたのは、リアスさんと朱乃さんだった。

「お疲れ様二人とも。どうでした?特訓の方は?」

「ええ、それは・・・」

「それはもう、シルさんが考えてくださった特訓メニューはとても為になるものでしたわ♪」

リアスさんの言葉の途中で朱乃さんがずいつ、と身を乗り出し、僕の手を握ってそう言ってくれた。良かった、そんなに僕がたてた訓練メニューに喜んでくれて。でも、ちよつと距離が近いような気が・・・

「コホン、あくお取込み中の所悪いけど、私がいる事忘れてないかしら?」

わざとらしく咳を吐いたりリアスさんが少し頬を膨らませてそう尋ねてくる。いや、全然忘れたわけじゃないですよ?ただ、朱乃さんの

行動に疑問を抱いてただけですよ？でも、そういった表情も可愛いね。普段はこう、大人っぽい感じだけど、そういう年頃の女の子らしい反応を見ると何か込み上げてくるものがあるね・・・吐き気じゃないよ？

『シル、今帰ったわよ』

そんな事を考えてると、玄関の方からそんな藍華の声が聞こえてきた。どうやら釣りに行ってた藍華達が返って来たみたいだ。朱乃さんの手を離して、声のした玄関の方へ向かうと、そこには・・・

「ふふふつ、今回は今までみたいに手加減はしないわ。昨日よりも更に・・・フフフツ・・・」

「こ、怖いにや藍華」

「あわわわわっ！」

「シル、今日は大漁でした。ほとんど私が釣ったんですよ」

黒い笑みを浮かべる藍華に、それを見て震えている黒歌にワタワタとしているアシア。そして、少し胸を張って得意げに言ってくる白音。玄関はカオス状態だった

「・・・一体何があったのさ」

誰か僕にこうなった経緯を説明してください



「お、俺、生きてるんですか・・・？そんな訳ないか。ははっ、じゃあここは天国かな？いや、悪魔なら地獄か・・・」

黒い藍華がもとに戻り、リビングに集まった僕達。そして先程目を覚まし、リビングのソファーに横たわるイツセー君はそんな事を口にした

「しっかりしてイツセー！あなたはちゃんと生きてるわ！」

そんな兵藤君の手を握って、リアスさんが必死に呼びかける

「部長・・・俺、頑張りました。迫り来る魔力弾を必死になって避けましたよ。だって一発でも当たったら消し飛んじゃいますもん。それなのにドンドン威力も上がって、数も増えてくるんですよ。最後なんか眼前には魔力弾で一杯だったんですよ？やめて！俺はもう限界よっ！状態なのに。もう笑っちゃいますよね、はははは・・・」

「イツセー！お願い戻ってきてイツセー！」

乾いた笑いを上げる兵藤君の目からはハイライトが消えていた。そして僕の前にはその原因が正座している

「・・・で、何か申し開きはあるティア？」

「い、いや、最初はちゃんと手加減をしたのだぞ！でも、途中からあいつの事を思い出して、ムカムカしてきて、その・・・ごめんなさい」

最初は言い訳っぽい事を言っていたけど、最後にはちゃんとごめん

なさいが言えたティア。反省してる様子なので、これ以上は僕からは何も言わなくても大丈夫だろう

「それは僕じゃなくって兵藤君に言っておいて」

「うむ・・・ドライブの宿主よ、すまなかつ・・・」

ティアの言葉が途中で止まった。僕はそんなティアに首を傾げつつ、ティアの視線の方へ顔を向けると・・・

「うう、部長に膝枕されてるなんて、俺！感激っす！これが受けられるならあの厳しい修行だつてやってやります!!」

「本当にあなたの言う通りにしたらいつものイツセーに戻ったわ」

「でしょ？こいつ単純なんですよ」

何故かリアスさんに膝枕されている兵藤君は、涙ながらに感激している様子だった。今の会話から藍華がそうするように言ってみたみたいだけど。兵藤君、君さつきまで屍状態だったよね？

「・・・なあ、シル。あいつもそう言ってる事だし、午後もあれやってもいいだろ？」

「・・・ちゃんと手加減してね」

「ああ、勿論わかっているのだ。なに、ギリギリを狙い続けてやるだけだ」

・・・頑張つて兵藤君、僕から言えるのはそれだけだ



それからみんなと一緒にお昼を食べながら、それぞれに訓練の事について詳しく聞いた。ちなみに訓練内容は木場君と兵藤君はいわずかな、夕麻達は最初に基礎鍛錬と光の槍の事を、朱乃さんとリアスさんは主に魔力の扱いについても。アーシアはゲームには参加しないけど、午後からは神器の扱いの練習をしてもらう事になっている。今回の修業期間を利用してアーシアには自分の神器の扱いについてちゃんと慣れてもらおうと思う。

聞けば、まずミッテルトは体力は、少ないけど光の槍を投げる遠距離からの攻撃が得意らしい。反対に近接での戦闘は苦手。カラワーナは僕が提案した基礎鍛錬のメニューを全てこなしてまだ体力に余裕があったらしい。ミッテルトは半分くらいでダウンだったみたいだけど。それとカラワーナは長い光の槍を使った近接戦闘が得意で、反対に遠距離攻撃で的を使った練習での命中率はミッテルトの半分以下。そして夕麻近接戦闘と中距離からの投槍も得意らしい。体力はミッテルト以上、カラワーナ以下といった所で、

- ・ 体力 カラワーナ<夕麻><<ミッテルト
- ・ 近接戦闘能力 カラワーナ<夕麻><<ミッテルト
- ・ 遠距離戦闘能力 ミッテルト<夕麻><<カラワーナ

という感じになる。ミッテルトはこれから体力をつけるメニューを追加していくとして、カラワーナはこのまま近接戦闘と体力を上げていく感じがいいかな。夕麻はバランスのいいオールマイティって所だから、バランス良く伸ばしていく感じでもいいだろう。

次に朱乃さんとリアスさんだけど、二人は主に魔力を使った攻撃を得意としてみたいだったので、魔力を制御して自由に操れるようにする特訓にした。具体的に言えば、同じ大きさの魔力の塊をいくつか

作ってそれを自由自在に操るといふものだ。午前の時点でリアスさんは5つ、朱乃さんは7つらしい。リアスさんの話では、朱乃さんは妙に張り切っていたそうだ。それだけ今回のゲームに意気込んでるという事だろう。でも、あまり張り切り過ぎて無理はしないように、と言ったら素直に頷いてくれた。ただ、そう言った後、妙に嬉しそうだったのは何だったんだろう？

それと藍華達は途中まで釣りを楽しんでたみたいだけど、ある事があったから今は戻ってるけど藍華がブラック藍華になったらいい。何があったかは教えてくれなかったけど。それと白音には頑張ったご褒美でナデナデをしてあげたら、アーシアや黒歌もナデナデを要求してきたので、二人も撫でてあげたら、悪乗りしてきた藍華と何故か朱乃さんもナデナデする事になった。いや、何でさ

まあ結局自分もしてもらいたそうにしてたティアも合わせてみんなの頭を撫でてあげたけどね。ただ、撫でてる時の皆の表情は可愛かったです。まる！なにこれ作文？

まあ、それはさておき、お昼も済んだ事で午後の修行は木場君、夕麻、カラワーナは模擬戦を、朱乃さんとリアスさんは引き続き魔力の制御の練習などを、ミツテルトは体力アップ中心のメニューを、兵藤君は午前と同じでティア（今度はドラゴンバージョン）と山で追いかけてっ。藍華とアーシアと白音はティアの背中に乗って楽しむらしい。まあドラゴンに乗れるなんてほぼ出来ない事だしね。アーシアは兵藤君が怪我をしたら治療を、藍華は追いかけてまわされてる兵藤君を見て楽しみ、白音はティアのストッパーにだそうだ。

で、残った僕と黒歌だけど。僕はそれぞれの特訓の様子を見て回るつもりで、黒歌は別荘の部屋でお昼寝だそうだ。

レッスン2 朱乃さんとリアスさんと魔力修行

みんながそれぞれ自分の午後の特訓に向かった後、簡単な夕食の下拵えを終えた僕が最初に向かったのは、リアスさんと朱乃さんが特訓している森の中だった。

バチバチバチツッ！パアン！

朱乃さんの手から放たれた雷が木々を避けるようにして進み、奥にある的に命中して破壊した

「ふう」

「流石ですね朱乃さん」

大きく息を吐いた朱乃さんに声をかけると、こちらを向いてばあっ、という音が付きそうな感じで朱乃さんの顔が笑顔になった

「シルさん！見ていてくださっただんですね！」

「はい、朱乃さん達の特訓の様子を見に来ました、順調そうですね」

「はい！あっ、そうですね！シルさん、こちらの方も見てくださいますし」

そう言っただけで朱乃さんは瞳を閉じ、手を前に突き出して集中しだした。朱乃さんは手から魔力の塊を作り出していった。一つ、二つ、三つ・・・そして最後には同じ大きさの魔力の塊が8つ、朱乃さんの周りを浮かんでいった。さっき聞いた時は7つだったのに、もう一つ増えている事に驚いた。朱乃さんはそのまま魔力の塊をゆっくりと動かして行った。

「あっ」

と思つたら、魔力の塊は霧散してしまつた

「はあ、はあ、す、少し失敗してしまいましたわ。やはり完全に自由自在に動かす事が出来るのは7つまでみたいですね」

動かす事は出来ないが、同じ大きさの魔力の塊を8つまでは作れるようになったみたいだ

「それでも十分凄いですよ。朱乃さんは才能があります」

「そう言っていただけで嬉しいです」

朱乃さんは恥ずかしいのか少し頬を染めて、はにかむ様に微笑んだ

「そういえばリアスさんはどこに？」

「部長でしたらあちらの方に・・・」

朱乃さんが指した方を見れば、リアスさんは紅い魔力の塊を自分の周りに漂わせて、それを規則的に動かしていた。魔力の塊の数は朱乃さんよりは少ないけど、6つ。リアスさんも一つ増えていた。リアスさんは「滅びの力」というのを受け継いでいる事もさることながら、悪魔としてのポテンシャルは高い。このまま特訓していけばそんなに遠くないうちには最上級悪魔になれるだろう

「ふう、」

一息ついてリアスさんは魔力の塊を霧散させた。そんなリアスさんに近寄って声をかける

「お疲れさまリアスさん」

「あら、来ていたの？少し集中していて気がつかなかったわ」

「リアスさんも数が増えましたね」

「ええ、まだ朱乃には負けてるけどね。それにしても、魔力をこうやって制御するのって大変ね。今まであまりこうやった事はしたことが無かったから新鮮だわ。そういえばあなたはどのくらいの数を制御できるのかしら？」

「えっと・・・こんな感じですかね」

そう言っつて僕は片手を上にかざして魔力の塊を空に生み出す。その数は・・・多分千は軽く超えてると思う。それを僕はそれぞれがぶつからないように動かす。それはまるで昼間に出来た星空のようだった

「・・・」

二人は空を見上げて、啞然とした表情を見せた。

「・・・流石あの『オッドアイの銀猫』と言った所かしらね。あれだけの数・・・」

「すごいですわシルさん！あれだけの数の魔力の塊を制御できるなんて！」

「つて朱乃！私のセリフを遮らないでよ！」

少し涙目になりながら叫ぶリアスさん。これでセリフが遮られた

のは二回目ですね

それから僕は二人の特訓にしばらく付き合っ、段々激しくなってきた山の方へと向かって行った。案の定、兵藤君は虫の息でアーシアから傷の治療を受けていて、ティアと藍華は何故かイイ笑顔で握手、白音は手に持っていたスナックを食べていた

そして時は過ぎ、修行一日目の夕食が食べ終わった頃

「シルと一緒に風呂なんて何年振りかにや〜」

「本当ですね」

「し、シルさん！お背中お流ししますね、日本には裸の付き合いがあると聞きました！」

「あらあら、私もお流ししますわシルさん♪」

「勿論私もするぞシル！」

「温泉なんて久しぶりだわ」

「おいミツテルト、お前温泉にまでカメラを持ち込む気か？」

「当然っすよ！ここで撮らなくていつ撮るんすか！」

「ほらシル、さっさと温泉に行くわよ」

「・・・どうしてこうなった」

露天風呂とドライブ

チーン・・・

午後の修行（という名の虐め）が終わった兵藤君は、そんな効果音が付きそうな感じになっていた。気のせいかもしれないけど、彼の口から魂的な何か出かかっていた気がする。今度は膝枕でも復活しなかった。そんな兵藤君は寝ている間に疲れが取れるように術をかけて部屋に寝かせておいた。筋肉痛は残るだろうけどね。ちなみに兵藤君扱きで扱れた山は、スタッフが直しときました

そして、木場君が取って来た山菜や白音達が釣って来た魚、途中で僕が狩った猪で作った夕食を食べ終えた皆は満足そうにしてくれた。今回の夕食も僕が作ったんだけど、みんなに喜んでもらえて良かった。でも、リアスさんや朱乃さんが複雑な顔をしてたのは何でなんだろう？

そして夕食を食べ終えたリアスさんが一言

「さて、素晴らしい食事も終えた事だし、お風呂に入りましょうか。ここは温泉だから素敵なのよ」

温泉かあ、そういうえばしばらく入ってないなあ。朱乃さんが確かここは露天風呂って言ってたから風情がありそうだね。ここに来てからの密かな楽しみの一つだったんだよね

そんな僕にグレモリーさんから信じられない一言

「そうだわ、良かったらあなたも一緒に入らない？」

「・・・は？」

あ、あれ？僕耳がおかしくなったのかなあ？今、とんでもない言葉が聞こえた気がしたんだけど

「・・・もう一度言ってもらえるかな？どうやら僕の耳がおかしくなつたみたいなんだ」

「一緒にお風呂に入らない？」

・・・。

「木場君、リアスさんもそう言ってる事だから僕に構わず一緒に入っておいでよ。僕は男湯で一人でも大丈夫だから」

「シルさん、部長はあなたに向かって言ってるんですよ」

・・・。

ふあっ!?

一拍空いて心の中で驚きの声を上げる僕。そりやあそうだよね！いくら僕の見え目があれだからって、男の僕と一緒に風呂に入らない？って聞かれたらそういう反応になると思うよ!?!それも黒歌達みたいに長い付き合いでもなくて、知り合ってる間もない人に言われたら驚くよ！兵藤君なら絶対喜んでるだろうけどね！

そんな混乱中の僕を無視してリアスさんは他の人にも尋ねる

「朱乃はど「勿論構いませんわ」・・・」

またもやリアスさんのセリフに被せて言う朱乃さん。というか即

答ですか！ここは普通断るんじゃないの!? 君って常識人だと思ってただけど!?

「・・・コホン、じゃあアーシアは？」

「わ、私もシルさんなら・・・ゴニヨゴニヨ」

小さくコクリと頷いた後、顔を真っ赤にして俯いてゴニヨゴニヨと言うアーシア。恥ずかしいなら断ってもいいんだよ？その方が僕にとっては嬉しいから！というかミツテルト、アーシア撮りすぎです

「じゃあ、黒歌は？」

「愚問にや、そんなの良いに決まってるにや。勿論白音もね」

「シルと温泉、楽しみです」

まあ、黒歌は予想通りだ。というか白音はもうお風呂の準備を始めていた

「じゃあティアマツトはどうかしら？」

「勿論良いに決まってる！」

胸を張って言うティア、まあこちらも予想通りだ。というか皆最初の頃はティアに馴染めてない感じだったけど、今は普通に話せるようになったよね。まあ、流石にあの二人に会ったらそうはいかないと思うけど

「じゃあ夕麻達は？」

来た！この三人ならきつと断ってくれるはず！特に家で僕を除いて一番常識人の夕麻ならきつと断ってくれるはずだ！！

「わ、私は別にいいわ。カラワーナは？」

と思つたら、まさかのOKでした。あ、あれ？おかしいな、君なら断ってくれると思つただけどお？

「同じくだ。ミッテルトはどうだ？というかお前、カメラを持ち込む気か？」

「勿論OKに決まつてるじゃないですか！アジアとシルの全」
「それは止めろ」

元墮天使三人組もOKだった。あとミッテルト、なんか目が危ないんだけど。というか本当に一緒に入るの？冗談ですよ？そうだよ？そうだと言つてください！

「じゃあ最後に藍華はどうかしら？」

もうこうなつたら藍華に頼るしかない！藍華、君に決めたあ！藍華は普通（一応）の女子高生だ、君ならきつと普通の女の子の反応（断る）をしてくれると僕は信じてるよ！！

そういうメッセージを込めたアイコンタクトを藍華に送る。すると藍華は笑顔で頷いてくれた。や、やった、伝わったよ！これで助か・・・

「勿論OKです。さつ、シル、温泉に行こ」

らないかったああああ！！伝わってなかったのか！いや！それでも

普通の女の子なら断るはずなんだけどお!?それとも最近の女の子はそんなのか!?それか本当に僕が男だと思われてないのか!

「・・・コホン、皆忘れてるかもしれないが、僕はこんな見た目だが男なんだけど」

務めて冷静に、内心の動揺を出さないように言う

『知ってる』

・・・絶対おかしい。いや、それとも間違ってるのは僕の方なのかってそんな訳あるか!!助けてください神様あ!!

『・・・プルルルルル、プルルルル、ガチャ。ただいま留守にしております、ご用件のある方はおかけ直すか、ピーという電子音の後に、メッセージをお入れください・・・』

まさかの留守電!?神様!僕の人生で間違いなくトップクラスにやばい状況なんですが!ある意味アリスと戦った時よりも危険な状況なんですけどお!!

「ほら、とつとと行くわよ」

藍華は僕の手を引いてそのまま歩き出そうとする。待って待って!お願いだから待って!

「き、木場君、「すみません、無理です」

全部言い切る前に即答ですか。まあ、僕も木場君の立場だったらそうなると思うけどね!

「い、いやちよつと待って、男女が一緒にお風呂はまずいと思うんだ」
「別に気にする事じゃないでしょ？それに昔はよく一緒にお風呂入ってたじゃん」

いやいやいや！それはなんか違うでしょ!?

「さあさあシルさん、参りましょう♪」

左手を藍華に、右手を朱乃さんに掴まれて、そのまま脱衣所まで引きずられた。最後に見えたのは、木場君が僕に向かって笑顔で手を振っている光景だった

◇◇◇◇◇

露天風呂は石造りの西洋的な感じで、端の方からは絶え間なく温泉が湧き出ていた

「うわあ、流石に大きいわね」

藍華が感嘆の声を漏らす。まあ、確かに大きいよね。立派な露天風……

「リアス先輩達の胸」

そっちかい！

あれから結局僕は女湯の方に連れていかれ、そのままみんなと一緒に入る事になった。勿論、女性陣の皆には体にタオルを巻いてもらってる。何とか頼み込んでそうしてもらった。アーシア達があんなに焦った感じの僕は初めて見たって言っていた

タオルを巻いた僕は、なるべく女性陣に目を向け無い様にさつさと体を流して脱衣所に戻・・・

「ちよつとちよつと、どこ行くのよ」

れなかった。藍華に腕を掴まれてしまったからだ

「い、いや、もう十分に堪能したから出ようと・・・」

「湯に浸かってもいけないのに何言ってるのよ。それにちゃんと洗わないとダメでしょうが」

言ってる事は正しいけど、この場においてはおかしい!というかニヤニヤしてるって事は僕の反応を見て楽しんでるよね!?

とそこへタオルに身を包んだアジアがやって来た。アジアはまだ湯に浸かっていないのにその白い頬が赤くなっていた。僕の視線はなるべくアジアの顔だけ見るようにする。絶対に下には向けない

「し、シルさん。私、日本でのお風呂のルールを教えてくださいました。日本では、は、裸の付き合いがあると聞きました。お風呂で背中を流し合ったり、一緒に湯船に浸かる事でお互いの親睦を深めて仲良くなるものと・・・」

おい誰だ、この純粋な娘にそんな事を教えたのは!確かにそれは間違ってるけど、それは同性同士のものだよ!黒歌か?また黒歌なのか!!



「にやにやつ!?な、なんか今、寒気がしたにや」

「大丈夫ですか姉さま?」

脱衣所にいた黒歌はブルツと身を震わせた



「あ、ちなみにそれアーシアに教えたの私ね」

WHAT!?何をやっていらつしやるんですか藍華さん!!つて、取り敢えず先にアーシアの誤認を解かないと!深呼吸をした僕は、アーシアの顔を真つ直ぐに見て言葉を発する

「アーシア、そういうのは同性同士の話であつて・・・」

「桐生さんから、た、大切な関係になりたい人と深めるべきだと言われました。わ、私、シルさんと深め合いたいです。だ、だから、その・・・私と裸のお付き合いをしてくれませんか・・・?」

グハッ!

「ぐっ!?!」

「ブハアアア!?!」

アーシアの攻撃!ダイレクトアタックをもらった!シル、夕麻、カラワーナに8000のダメージ!ミッテルトはおまけに16000のダメージ!ミッテルトはダウンした!

な、なんという威力……！これは前に猫耳を出した白音の『にやん♪』と同じくらいだ。もし、遊戯王だったら即負けだった。取り敢えず倒れたミッテルトには治療をかけておいた。というか藍華、さつきよりニヤニヤが深まってませんか!?笑ってないでこの状況をどうにかしてください！

ふによん

そんな時、僕の背中から感じた事のある感触が伝わって来た

「……黒歌、何をしてるのかな？」

「にやにや、流石シル。よく私だってわかったにや」

肩からひよっこりと顔を出して、そんな事を言ってくる黒歌。そりやあいつもあれだけ抱き付かれたらわかるよ

「私もシルと裸の付き合いをしに来たんだにや。シルとこうして一緒にお風呂に入るなんて、いつも断られてたから、今まで無かったにや。せつかくのこの機会を無駄にしないにや♪」

ピトッ

「私もです」

ムニユッ

「私もお背中お流ししますわ」

今度は僕の右腕に白音、左腕に朱乃さんが引っ付いてきた。前にはアーシア、後ろは黒歌……逃げ道は無くなった

「良かったわねシル、美少女たちに囲まれて」

「本当ね。それにしても、あんな朱乃は初めて見るわ」

全然良くないよ藍華、さつきから僕の中でもものすごい勢いでゴリゴリと何かが削られて行ってるんだけど！そろそろ平静を保つのが厳しくなってきたよ！というかりアスさん、こうなった原因はあなたにもあるんですが！

「私っ！参上！」

脱衣所から飛び出してきたのはティアだった。って……！

「タオルを巻きなさいっ！」

それからも、僕の中の何かがゴリゴリと削られながら、露天風呂での時間を過ごした。風呂から上がった時、僕はこれまでにない位に疲れていた。お風呂で何があったかは……僕の精神の保全の為に伏せさせてもらいます。でも、いくつか言わせてもらえば、藍華は人の胸を揉まないでください、どこのエロオヤジですか。それと僕は男だからそんなものはありません。というか引っ付かないでください。背中に当たってるんで。あとミツテルトはカメラで撮るのを止めなさい、後でデータは消させてもらいます。ティアはタオルを巻きなさいいいいい！！

……もうこんな事は勘弁です……なんだか嫌な予感がする。具体的にはまたありそうなそんな予感が……

そして久しぶりに（精神的に）疲れたので、早々に寝ようとしたんですが……

「わあ、とつてもフカフカです！」

「でしょ？で、ここをこうして優しく撫でてあげるのがシルは好きなのよ」

猫モードになってアーシアと藍華に撫でられています。今日はこの二人と一緒に部屋で寝る事になったみたいです

どうしてこうなった!!

結局、夜遅くまで二人に撫でられ続けて最後はそのまま気持ちよかったのと疲れてたので猫の姿のまま寝てしまいました。朝起きたら、同じベットに藍華とアーシアに挟まれる形になってた

「むにやむにや・・・」

「すう、すう・・・」

・・・二人の可愛い寝顔が見れました。それだけで、昨日の疲れ（精神的な）が無くなった



・・・何だか物凄くおいしい場面を逃した気がする

何を言ってるんだ俺は。とうかここはどこだ？真つ暗で何も聞こえないし、どっちが上でどっちが下かも分かんねえ。えっと、確か部長達と修行に来て、それで・・・ティアマツトさんに扱かれた。

まさかここは死後の世界!?俺死んじゃったの!一度は逃げ延びたけど、流石に二度目は無理だったかの。これで俺が死んだのは二回目か・・・最後に部長のおっぱい揉みたかったぜ

『お前は死んでいないぞ、クソガキ』

——ツ!?

突然、聞いたこともない声が聞こえてきた。低く、迫力のある声が響いた。だけど、何故か俺はその声の主を知っているような、それも身近にいるような気が・・・

『そうだ、俺はいつもお前の傍にいる』

誰だ!

そう思って周囲を見渡すが、何も見えない。見えるのは闇だけ。さっきの声は一体・・・

『俺だ』

ボワツ!

うわっ!?

突然、辺りは真っ暗だったのに、炎が舞い上がった。そして俺の前にそいつは姿を現した

『やっとこうして話す事が出来たな。俺はお前にずうっと話しかけていたんだぞ』

俺の前に姿を現したのは、ティアマツトさんとよく似た体、赤い怪物——まさしくドラゴンだった。いや、そんな事よりも今はこいつに聞きたい事がある

「・・・なあ、一つ質問だ」

『ほう、何だ?』

目の前のドラゴンは、興味深そうに聞いて来る

「お前は、俺の左腕に宿ってるドラゴンか?」

『ああ、そうだ。俺は《赤い龍の帝王・ウエルシュドラゴン》、ドライグ。お前の左腕に宿る者だ』

「そうか・・・」

こいつが俺に宿ってるドラゴンで間違いないのか、そうかそうか、こいつが・・・

『これから共に戦っていく相棒に挨拶をしたかった。よろしくな「お前の・・・」?何か言ったか?』

「お前の・・・お前のせいかああああ!!!」

『っ!?!』

俺は目の前のドラゴンに向かって殴りかかった。しかし、体が滅茶苦茶硬くてビクともしなかった。畜生、硬えなこの野郎!

『・・・驚いた、まさかこの俺にいきなり殴りかかって来るとはな。そ

んな奴は今までで初めてだ』

目の前のドラゴンは驚いた様子だった。でも、んな事は関係えねえ！

「お前の、お前のせいで俺なあ!!ティアマツトさんに追いかけてまわされたんだぞこの野郎!!何でテメエの代わりに俺が殺られなくちやいけないんだよお!滅茶苦茶怖かったんだからなこん畜生おおお!!!」

本当に怖かったんだからな!掠っただけでもやばい攻撃が雨の様に次々と襲い掛かって来る怖さが分かるか!?あれ?何か熱いものが頬を伝ってくるぞ。はははっ、思い出したら止まらなくなって来たぜ

『・・・なんというか、すまん』

そんな俺の気迫に押されたのか、目の前のドラゴンードライグは何とも言えない表情で謝って来た。その時、意識が遠のいていく感覚が襲ってきた

『そろそろ、現実のお前が目覚める頃だ。重ねて言うが、すまなかつた・・・またな、相棒』

「・・・う、ん?・・・知らない天井だ」

目を開けると本当に知らない天井だった。横に視線を移せば、俺の寝ているベットの隣のベットにすやすやと木場が眠っていた。寝顔もイケメンだなこいつ

そして俺は昨日の修行で気絶してここに寝かされたんだと予想した。というか本当に俺生きてたんだな。あいつが言ってた通りだ。

時計を見てみれば朝の四時半。みんなが起きるまでまだまだ時間がある

ぐうううううく！

信じられないくらい盛大に俺の腹が鳴った。そういえば昨日は昼は食べたけど、夕食は食べた記憶がない。まあ、気絶してたんなら当たり前か

ぐううううううく！

というか腹が減りすぎて死にそうだ、今は取り敢えず何か食べたい。俺はベットから起き上がり、部屋の扉を開け、外に出た

「ん？・・・いい匂いだ」

部屋の外に出ると、廊下にはいい匂いが漂っていた。

「キッチンの方からだ。誰かいるのか？」

俺はキッチンの方に歩を進めると、まな板の音や、匂いが強くなってきた。そしてキッチンにはある人物が立っていた。その人物は近づく俺に気がつくど、振り向いて笑顔で挨拶をしてくれた

「あつ、兵藤君おはよう」

「お、おはようございますシルさん。随分早いですね」

そう、キッチンに立っていたのはエプロンを着たシルさんだった。その姿を見て、真っ先に新婚ほやほやの新妻を想像した俺は悪いのだろうか

「まあね、でもそういう兵藤君も随分早いね。体の方はどう？どこか痛い所とかある？」

「えっと、少し筋肉痛がするくらいですね。昨日あれだけ動いたのに意外と体が軽いです」

「それは良かった。そうだ、昨日夕食抜いてお腹すいたでしょ？もうちよつとで出来るから机に座って待ってて」

「は、はい。ありがとうございます！」

シルさんに言われた通り、机に座って待っているとキッチンから漂う匂いで空腹が最高潮になって来た。マジで美味しそうな匂いだ。そろそろ我慢の限界と言う所で、キッチンからシルさんが両手いっぱい料理を持ってきた

「お待たせ。さっ、遠慮なく食べてね」

机に並べられたのは、肉、魚、野菜など、色んな食材を使った料理が、これでもか！つというほど並べられた。その料理に関連する事は、どれも減茶苦茶おいしそうだって事だ

「い、いただきます!!」

シルさんの作った料理はどれも、とにかく美味しい！マジで！というかそれ以外の感想を頭の悪い俺では表現できない。机一杯に並べられた料理も、自分でもびっくりするくらいの勢いで料理は減つていき、数分で無くなってしまった

「ご馳走様でしたあ!!」

手を合わせて作り手に感謝の気持ちを伝える。いやあく、食った食ったあ。こんなに食ったのは生まれて初めてだぜ

「お粗末様。喜んでもらえて何よりだよ」

「いや、本当に美味かったす！今まで食べてきた中で一番美味かったですよ！」

シルさんは俺の言葉に微笑んで「ありがとう」と言った。

・・・マジでシルさんが男なのか分からなくなった。というか、今の姿を見て男っていえる奴はいないと思う。俺、今のシルさんの微笑を見て、男って聞いててもドキッとききたぞ

「はい、お茶どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

そんな事を考えてる間に、シルさんは俺にお茶を淹れてくれた。言っちゃあ悪いけど、朱乃さんが淹れたのよりも美味しかった

シルさんも俺の正面に座り、少し二人での静かな時間が過ぎた。そういうばシルさんところうして二人きりでのつて初めてだな。俺が初めてシルさんと会ったのは俺が襲われてる時だったなあ。いや、正確的には小学生の時に会ってるけど、その時は猫だったし

そういうえば、シルさんって木場が前に言ってたけど、なんか指名手配的な感じらしいんだよな。でも、こうして一緒に居ると、全然そんな感じはしない、何でなんだろう？俺の事や、アシアの事も助けてくれたし、悪い事をするような人じゃ絶対じゃないと思う。聞いてみ

たいけど、知り合って間もないのにそういうのを聞くのはどうかと思うしなあ

「ん？どうしたの兵藤君。僕の顔に何かついてる？」

「い、いえー！そういう訳じゃないです」

つい無意識にシルさんの顔を見つめてたみたいだ。というかシルさん、俺の気のせいかもしれないけど、疲れてるように見えるんだが？

「そ、そうだ！シルさんって人間って聞きましたけどそうなんですか？」

咄嗟に思いついたことを聞いて、さっきの事を誤魔化す

「うん、そうだよ。ただ、普通の人間と違ってちよつと力を持ってるけどね」

魔王を超える力をちよつとつて・・・シルさんって少し感ズレてないかな

「シルさんのあの猫になれるのも『神器』の力なんですか？」

「いや、あれは神器の力じゃないんだよ。まあ、僕も一応神器は持っているけどね。ちなみに君も見た事があるよ」

そう言ったシルさんの首元に、見覚えのある白いマフラーが現れた

「これが僕の神器だよ。君のみたいにカッコ良くはないけどね」

あのマフラーが『神器』だったのか。あつ、そうだ！

「来い、ブーステット・ギア！」

赤い光が俺の左腕を包み、赤い籠手が装備された。シルさんは、俺が神器を出したのに不思議そうな顔になった

「おい！聞こえてるかドラゴン！聞こえてるんなら返事しろ！」

『・・・なんだ？俺に用か？』

俺がそう呼びかけると、籠手の甲の部分にある宝玉から、あの時夢で聞いたのと同じドラゴンの声が聞こえてきた

「・・・驚いた。もう会話が出来る様になったんだね。ん、昨日のテイアの扱きの影響かな？」

シルさんは人差し指を頬に当ててそう言う。それはなんか素直に喜べないな、俺死にかけたし。というかその仕草、めっちゃ似合ってます

『・・・なあ、相棒。本当にこいつは男なのか？』

頭の中にドライグの声が響いた。その気持ちは痛いほどわかるぞ

それから少しドライグも交えて話をした後、俺も一緒にシルさんの朝食の手伝いをした。といっても野菜の皮むきしかできなかったけどな。はあく、この野菜も魔法とかでちやちやつと剥けないだろうか？でも、俺の魔力って、かなり少ないんだよなあ

その考えが、後に俺の必殺技を産む切っ掛けになるのは、もう少し

先の話だ

イツセーと悩み

ども、イツセーです。山に修行に来て早くも一週間が経ちました。あれから俺は毎日ティアマツトさんに山で追いかけてまわされています。最初の三日くらいは朝から晩までも死ぬ気で追いかけてまわされるだけだったけど、四日目からは格闘技や魔力の特訓も始めるようになった

俺には木場みたいに剣術とかの才能は無いみたいだ。一度、木場と木刀でやったけど、全く相手にならなかった、当たり前だけど。『視野を広げて、相手と周囲を見ろ』と言われたけど、中々そう簡単には出れない。それと、シルさんが言うには俺には剣術よりも、格闘技の方が合ってるらしい。別に格闘技が得意って訳じゃない、だって俺、喧嘩とかした事ないし。その方が俺の神器に合ってるからだそうだ

格闘技の特訓の方はシルさんや、シルさんが他の人に教えに行ってる時は白音ちゃんが相手になってくれる。白音ちゃんはその可愛らしい見た目と違い、メチャメチャ強い。あんな小柄な体で俺の事を何度も吹っ飛ばした。単純な力だけじゃなくて、俺の力を利用したりしてだ。小さい女の子に吹っ飛ばされるのって、男の俺的には結構ショックだった。というか、特訓を見てた桐生と黒歌先輩、ティアマツトさんとミツテルトに、俺がぶっ飛ばされて木にぶつかってる所を爆笑された。何が空飛ぶ兵藤だ！アーシアはぶっ飛ばされた俺のケガを治して、心配してくれた。アーシア、マジ天使。俺、悪魔だけ

シルさんの方は、手加減してくれたから白音ちゃんみたいにぶっ飛ばされるって事はなかったけど、一発でももらうとスゲー痛かった。体の芯に響くって感じだ。俺の方は一発当てるところか、掠りもしなかった。二人が言うには、『打撃は体の中心線を狙って、的確かつ抉り込むように打つ』らしい。と言っても、俺の場合は当ててる事すら難しいんだけど・・・

んで、魔力の特訓の方だけど、こっちはもつと酷かった。朱乃さんや、部長と一緒にそれぞれシルさんの指導の元やったんだけど、俺は

米粒程度の魔力の球体が出来るのがやっとだった。『魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めて、意思を集中させて、魔力の波動を感じればいい』という事らしい。朱乃さんとシルさんがそう説明してくれたけど、魔力の球体は米粒より大きくする事は出来なかった。というか朱乃さん、修行中にイチヤイチヤするのは・・・正直、朱乃さんに引っ付かれてるシルさんが羨ましかったです。

ま、まあ、俺って悪魔の子供よりも魔力が少ないらしいしな・・・それは俺に宿ってるドライブにも同情された。畜生う。でも、魔力を使ったある修行は結構順調なんだ！朱乃さんに俺が思いついた事を話したら、少しポカン、とした後「うふふ、イツセー君らしいですね」と微笑まれた。部長とシルさんには言えない。特にシルさんに言ったら、なんだかともない事になりそうだから言えない。でも、これをマスター出来れば俺は無敵になれるかもしれないんだ！

それと、俺に宿ってる赤龍帝・ドライブだが・・・ティアマトさんに無茶苦茶怒られてた。俺の左腕に出した籠手に向かって、怒鳴るわ、引っ張るわ、殴るわで・・・というか殴るのは止めてください。俺にも衝撃が来るんですけど・・・

ドライブの奴はティアマトさんに殴られた辺りから神器の深層深くに逃げやがった。あれから俺が呼びかけても反応がない。多分、ティアマトさんが近くにいる間は出てこないと思う。その後のティアマトさんとの修行は何時もより厳しかった

そして、初日は俺がぶっ倒れたせいでやらなかったけど、夜には夜で更に修行があった。というか俺達は悪魔は夜の住人だからな。こつちも主に筋トレで、岩を背負って山を登ったり、岩を背負って腕立てだったりとか。まさかこんなドラグ・ソボールみたいな特訓をする事になるなんて思わなかったぜ・・・

そして修行が終わった別荘での夜、中々眠れなくて俺はベットの上で天井を見上げながら考え事をしていた

山に籠って一週間が過ぎた。改めて分かった事だけ・・・眷属の

中で俺が一番弱かった。木場や夕麻ちゃん達は俺よりもずっと強い。魔力は米粒程度の塊を作るのがやっと。アジアや桐生みたいに特別な力もない。修行して、強くなっていく他の皆を見てると・・・俺は弱くて、役に立ちそうにないって事を思い知らされた。俺は――っ！

俺はそう思うとたまらなくなり、ベットから起き上がり部屋から出た

そして、台所で水を一杯飲み干してると――

「あれ？兵藤君？」

声のした方を見ると、そこには白いジャージ姿のシルさんがいた。悪魔になってから灯りが無くても夜目が利くから、暗闇でもハッキリとシルさんの顔がよく見える

「あつ、こんばんわシルさん」

「どうしたの、こんな夜遅くに？もしかして眠れない？」

「え、ええ、ちよつと」

「そっか、実は僕もなんだよね（まあ、本当は違うんだけどね）」

「シルさん、どうかしたんですか？」

「いや、何でもないよ・・・そうだ、良かったら少し話さない？ジュースでも飲みながらさ」

「は、はい」

俺はシルさんに誘われるがままに、リビングの机に向かい合わせに座った。机の上には、シルさんがどこからか持ってきたキャンドルを置いて、蝋燭の淡い小さな炎がシルさんの銀髪を照らしていた。俺は、シルさんからもらったペットボトルのジュースを一口飲んだ

「それで兵藤君。君、悩んでるよね？」

「っ！」

突然そんな事を言われ、危うくジュースを吹き出しそうになるのを何とか抑える。シルさんはそのまま続ける

「戦いへの不安、強くなっていく皆に対する焦り、弱い自分に自信が持てない、違う？」

シルさんは、俺が思っていた事を的確に突いてきた。ははっ、流石シルさんだな。俺の考えてる事はお見通しか。俺はそれに対して無言で頷き、ポツポツと今まで胸にしまっていた弱音を零した

「シルさん、俺ダメなんです。自分が弱すぎる事に気が付かされて・・・他の皆はドンドン強くなっていったのに、自分は全然で・・・強くなってる気はするんですけど、それ以上に・・・差を感じちゃって」

少ししかしてないけど、木場との修行でも木場の凄さが分かった。やってみて『ああ、俺じゃあ木場みたいな剣士にはなれないな』って。夕麻ちゃん達も同じ『兵士』の俺なんかよりずっと強いし・・・

魔力の修行をすれば、朱乃さんや部長の凄さや、格闘技の修行をすれば白音ちゃんの凄さと同時に自分の才能の無さを痛感して・・・

アーシアも順調に『神器』の扱いも上手くなってるみたいだし。桐生は・・・ずつと遊んでたけど。でも、桐生も便利な力を持つてるし「・・・俺には『赤龍帝の籠手・ブーステットギア』があるから大丈夫だって、強がってましたけど・・・正直、あの時桐生が言ってた通りです。ブーステット・ギアを持ってても、俺なんかじゃあいつに歯も立ちそうにありません・・・俺は、弱くて、才能もなくて・・・」

気が付けば俺はボロボロと、目から涙を零していた。悔しくて、悔しくて、情けないくらい俺は涙を溢れさせていた。鼻水だって出て、多分今の俺の顔は酷い事になってる。膝に置いた手は、手のひらが切れそうになるくらい力が入っていた

スツ

ーっ!?

俯いた俺の頭に、何かが触れる。顔を上げれば机から身を乗り出したシルさんが、俺の頭に手を置いていた。シルさんはそのまま俺の頭に置いた手で、俺の事を優しく撫でた。すぐ近くにあるシルさんの瞳には、涙と鼻水で汚れ、クシャクシャになった俺の顔が映っているのが見えた

「兵藤君、確かに君は他の皆と比べたら弱い」

「ーっ!？」

でもね、とシルさんは続ける

「それは当然の事なんだよ？だって君はつい最近まで普通の人間だったんだ。弱くて当たり前だよ。それに木場君達は君よりずっと前から悪魔をやってるんだ。強いのは当然だよ」

その言葉に、俺は再び俯きそうになるが、シルさんは俺の頬に手を添え、真っ直ぐに俺に目を向ける

「それと、さつき君は自分が弱くて才能が無いと言っていたけど、そんな事はない。君には、誰にも負けない強さ、才能があるよ」

「お、俺に・・・？」

「うん。それは、諦めない事、どこまでも真っ直ぐな所、頑張り屋さんな所、だよ。現に、君はついこの間まで普通の人間だったんだよ？それなのに君は今回の厳しい修行に耐え、ひたすら頑張って修行してたじゃないか。普通だったら龍王のティアに追いかけられるなんて修行、逃げ出さずに今まで続けるなんて出来るもんじゃないよ？どうして君は逃げ出したり放り出したりしなかったの？どうして頑張れたの？」

「そ、それは・・・」

『じゃあ、またゲームでなりアス。少しは俺を楽しませてくれよな』

「・・・あいつに・・・ライザーに勝ちたいからです」

「それだけ？」

「ライザーに勝って・・・部長との婚約を解消させる為です。あんな奴に部長は渡しません。勝って、部長に笑ってもらいたいからです！その為に絶対にあいつに勝ちたい、いや、勝ちます!!」

深夜という事も忘れ、俺はシルさんに向かって大きな声で宣言する。さつきまでの沈んだ声とは大違いだ。そんな俺を見て、シルさん

は満足そうに微笑んだ

「そうやって、誰かの為にどこまでも真っ直ぐに頑張れることは凄い事なんだよ？そんな努力を継続出来る事も君の強さであり才能なんだ」

シルさんはそう言って、再び俺の頭を撫でた。いつの間にか、俺の涙は止まっていた

「今回の修行で一番努力していたのは、他の誰でもない。君なんだよ。そして、努力は絶対に無駄にはならない。明日、君の努力の成果を証明しよう」

「俺の努力の成果、ですか？」

「うん、君自身が思ってる以上に、君は強くなってるんだよ？だから今は少しでも休んで。それと、もし眠れないなら・・・君が眠れるようになるまで枕元で子守歌でも歌ってあげようか？今ならおまけで一緒に頭も撫でてあげるよ」

「ええっ!?!い、いや、それは・・・」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、俺にそう言ってくるシルさんに、俺は思わず慌ててしまった。そんな俺を見て、シルさんは笑い声をあげた

「あははっ、勿論冗談だよ」

「じよ、冗談ですかあ」

焦ったあ、というかシルさんも冗談とか言うんだな。でも、少し残念・・・って俺は何を考えてるんだ！



兵藤君が寝にリビングから出た。その顔は、先程までのどこか追い詰められた表情から随分変わったと思う。明日には、きっといつもの兵藤君になってるだろう。それに自信もつくはずだ

それと。兵藤君の異変に気が付いたのは実は僕じゃない、藍華だ。正直、藍華に言われるまで僕も気が付かなかった。曰く、『無理してるあいつを見てると、なんか調子狂うのよ。あいつはいつもエロい事考えてる方が似合ってるわ』だってさ。藍華によく見られてる兵藤君が、少し羨ましいと思った

「さて・・・もう出て来てもいいですよ？」

「やっぱり気が付いていたのね」

そう言っただけで物陰から出てきたのは、手に分厚い本を持ち眼鏡をかけたリアスさんだった。そういえば少し前に、リアスさんは眼鏡をかけると集中出来るって言っていたな

「もしかして盗み聞きですか？」

「そ、そういう訳じゃ・・・ってその顔はわかってて聞いているわね？」

慌てた様子から一転して、ジト目で僕の事を見てくるリアスさん。あらら、ばれましたか。さっきの兵藤君といい、今日はよくからかうな、僕。最近、藍華にからかわれてるからそれが移ったのかな？

「まあ、いいわ。それよりも・・・ありがとう」

いきなりリアスさんからお礼を言われました。リアスさんってよ

く端的に述べるから分からないよね

「それは、兵藤君の事かな？」

「ええ、それもあるけど、今回の修行の事に関してもよ。こんな事に付き合ってもらってありがとう」

そう言っけてリアスさんは頭を下げた。魔王との話し合いの時も思ったけど、彼女も最初に会った時とは随分変わったな

「それにイツセーの事、本来ならあの子の『王』である私の役割なのに・・・あの子があんな風に思いつめていたなんて気が付かなかったわ。これじゃあ『王』失格ね」

「そんな事はないよ。それに多分、君には言いずらかっただろうしね」

「それは・・・私が頼りないからかしら？」

「いや、そうじゃないですよ・・・リアスさん、男の子っていうのはね、女の子にカツコ悪い所を見せたくない者なんですよ」

「そうなの？」

「そうなんですよ」

「それはあなたもなのかしら？」

「まあ、そうかもしれないね」

「男の娘なの？」

「そう、ってそれは違います！」

確かに性別男の娘だけど、僕はそれを認めてません！僕は男です！リアスさんはふふっ、と笑った後、さっきまで兵藤君が座っていた席に座り、持っていた本を机に置いた

「ねえ、正直今回のゲーム、あなたから見てどう思うかしら？」

腕を組んだリアスさんは、そう問いかけてきた

「それは君たちの勝率かな？」

「ええ、遠慮なく正直に聞かせてちょうだい」

リアスさんは僕に向かって真っすぐに見てくる。だから僕も彼女の言う様に、正直に答える

「わかった。君たちの勝率は・・・良くて精々三、四割って所かな」

「・・・そう、そうよね」

「眷属の皆も、君も皆レベルは高い、この短期間でもみんなかなり力を上げてきた。単純な戦闘力なら向こうにも負けてないと思う、実戦経験もあるしね。兵藤君は、悪魔になつて日が浅いけど、彼には可能性がある。ゲームで化ける事が出来れば、大きく戦況を覆す事も可能になると思う。けど、君達はゲームは今回が初めて、向こうは公式のゲームの経験もあるからね」

ライザー・フェニックスの眷属はレーティングゲームというのをよく知っている。それに戦闘力はこちらが上でも、彼女達もそれなりに強い。決して油断は出来ない

「それと・・・」

僕は机に置かれた本のページを捲っていき、あるページを開いて指を指す。そこには雄々しく炎の翼を広げている火の鳥が描かれていた

「相手の王、ライザー・フェニックスはその名の通り、フェニックス。不死鳥フェニックスの涙は、あらゆるものの傷を治すとされる。そして・・・不死身。攻撃されても、何度でも炎の中から再生して復活する」

「そう、不死身。ほとんど無敵ね。レーティングゲームが悪魔の中で流行してきてから、一番台頭してきたのがフェニックス家だった。今まで悪魔同士で戦うなんて、したことはほとんどなかったわ。『王』も参加するレーティングゲームで、フェニックスの強さは浮き彫りになったわ」

まあ、確かに不死身っていうのは結構厄介だね。どれだけ攻撃しても傷は再生するし、反対に相手は攻撃されれば傷を負う。何度でも回復出来る奴を相手にするのは結構きつい。それはゲームじゃなくてもだ

「まあ、倒せない事もないのだけどね」

「魔王や神クラスの圧倒的な力で倒すか、精神的に限界まで倒し続けるか、だね」

正直どっちも今のグレモリー眷属には厳しい。まず、魔王や神クラスの力は不可能だろう。彼女達にそこまでの力は無い。そして、何度も倒し続ける方だけど、それはライザー・フェニックスの精神がどれ

だけ持つかと、グレモリー眷属達のスタミナ、魔力、精神力がどこまで持つか、だ。

ライザー・フェニックス以外の全員を倒して、全員で攻撃してかかって、可能かどうかは・・・正直微妙な所だ。でも、勝負は何が起こるか分からない。リアスさん達が勝つ確率だつてゼロじゃない、正直、修行前だつたらもつと低かつたんだ、これは凄い事だ。彼女達の頑張りの成果と言える。兵藤君については、赤龍帝の籠手のもう一つの力に目覚めれば、かなり大きな力になる。それに、諦めない方に勝利の女神は微笑むって言うしね、悪魔だけど

「婚約相手がライザーと聞かされた時、嫌な予感がしたの。今思えば、お父様達は私が断る事を見越して、否応無しに結婚させるようにライザーを結婚相手に当てたんだわ。こうして身内同士のゲームになつても、ライザーが、不死鳥と言われるフェニックスが相手なら、勝てるはずがないと踏んでいたんだわ。断つても、断らずとも、どちらにしても結婚させる。これじゃあ、まるでスウインドルね」

嘆息しながらリアスさんはそう言う。スウインドル、チェスで相手を嵌め手にかけるという意味を持つ。

悪魔は貴族社会で、今回の様な高い地位の者の政略結婚はざらだ。人間界でもよくあった事だ、今でも一部では残っていると聞く。当人同士の意思など関係なしに決められる結婚。本来なら、親という者は、子の幸せを何よりも願うはずなのに、それを無視してまでする結婚に意味はあるのだろうか？今はないけど少なくとも、僕の、もうほとんど覚えていないけど、前世の両親は、僕の事を・・・

「でも、私は負ける気なんてないわ。イツセーや皆だつて頑張つてくれているんですもの、私が諦める訳にはいかないわ。勝つて、この縁談は終わらせる。そうすれば、お父様達も何も言えないはずよ」

そう息巻くりアスさんの瞳には、強い光が宿っていた

「そっか、ならあと二日、頑張らないとね」

「ええ」

10日の内、最終日は疲れを残さない為に特訓は無い。明日で8日目だから明後日で合宿は最後なのだ。明日は修行に入ってから使用を禁止していた兵藤君の神器の解禁だ。神器に耐えられるだけの器はこの一週間で大分出来たからね

と、そんな事を考えていると、目の前に座ったリアスさんが表情を引き締めて何やら真剣な顔になった

「・・・ねえ、あなたは一体何者なの？」

「何者と聞かれても、ね」

ちよつと返答に困るんだけどなあ。ここでいきなりのそんな直球に思わず苦笑いになってしまった。リアスさんはそのままつらつらと述べていく

『オツドアイの銀猫』。10年前、冥界の外れにある、とある上級悪魔の屋敷に侵入し、その上級悪魔と眷属に重軽傷を負わせて屋敷も半壊させ、その重傷を負った上級悪魔の報告によって「危険生物認定」とされた。特徴は、白銀の一部が少し跳ねた髪に、赤と青の左右がそれぞれ色の違った瞳の人間の少女。人間でありながら、討伐しようとした悪魔、墮天使、エクソシスト、天使をたった一人で下した。討伐しようとした悪魔の中には、時に上級クラスの悪魔もいたり、討伐チームを組んで挑んだ者もいたけど、その人間には傷一つつける事すら出来なかったとか。それから幾度となく討伐の為に動いたらしいけ

ど結果は変わらず」

「ああ、確かに結構の数が来た時もあったね」

中には僕の事を変な目で見てくるのや、奴隷とか言ってくるのもいたから・・・ううつ、思い出したら鳥肌が。ちなみにそういう奴は容赦なく、丸焦げ、氷漬け、感電させたけどね★

反対に、ちゃんとした使命感を持つてた感じの人達は気絶させるだけで済ませたよ

「さらに、討伐不可能と言われた、この間私達の前に現れたようなSS級のはぐれ悪魔を何体も討伐したらしいけど、それも本当なの？」

「そうだよ」

クリコットの様に、狂気じみた戦闘狂も多かった。中には口から酸や毒を吐いて来るのもいたなあ

「やっぱり本当だったのね・・・SS級のはぐれ悪魔といえば、上級悪魔クラスやそれ以上の実力者もいるっていうのに。それもあって、彼女、つまりあなたは冥界、天界、さらには他の勢力にも名を轟かせた。人間でありながら、魔王や神と並ぶとされる実力を持つとされる『オッドアイの銀猫』という名を」

そうなんだよねえ、なんか有名になっちゃったんだよな。そういえば、いつの間にかそんな名前がついてたけど、一体誰がつけたんだろう？結構恥ずかしいんだよな、通り名とかかって。ただでさえ目とか厨二っぽいのに。あと、未だに僕って女だと思われてるんだよ・・・

「二部の噂では『オッドアイの銀猫』は強大な力に溺れた危険な者、残

虐な行為や殺しが好き、と言われていたりするわね」

ああ、それってあのヒキガエルが流したやつらしいよね。全くあのヒキガエルは・・・あいつの事思い出してたらちよつとイラッとしてきた

「でも、この一週間あなたと一緒にいて、そんな事は感じなかったわ。あなたは親身になって私達の指導をしてくれていたし、さつきイツセーの悩みを聞いてる時や、黒歌達と一緒にいるあなたはさつき言った様な人には思えないわ。聞けば、イツセーやアーシア、この間の私達だけでなく、黒歌達や朱乃の事も昔救ったとか。噂の中にも、あなたに命を救ってもらったという者が大勢いるというものがあるらしいし・・・本当のあなたは一体どちらなの？世間や噂に聞くあなた、それとも黒歌達と一緒にいるあなた、どちらが本当のあなたなの？」

・・・。

「・・・さあ、どちらでしょう?..」

僕は少しおどけた様に言ってみた。今日の僕は普段しない事をよくやるなあ

「・・・バカにしてるの?..」

すると案の定、リアスさんは怒りからか、額に青筋を立てて少し体から紅い魔力が出ていた。はい、僕のせいですね

「だって僕がどう言った所で何もここでそれを証明するものはないですもん。それともあなたは僕が言った事を全て信じられますか?..」

「そ、それは・・・」

リアスさんは魔力を収めて言い淀む。僕はこの一週間、彼女が僕に

対して少し警戒の眼差しを向けていたのを感じていた。まあ、『オツドアイの銀猫』という存在の事を知っていたら当然だよ。この前会った魔王の方も、口ではああ、言ってたけど最後まで僕から視線を外さなかったし

アーシアとかなら一切疑わずに言った事を信じちやいそうだけどねえ。あの子、詐欺とかだったらすぐに騙されちゃうタイプだからなあ。それに一般常識にも疎い所があるから、今度しっかりと教えておかないと。黒歌達にその辺を任せると、とんでもない事を教えそうだからね。それと、証拠というのも黒歌達がそんな事はないって全力で否定するだろうけど。あの子等が一番長く、僕と一緒にいるしね

「まあ、一つ言える事は僕は藍華や黒歌達の家族のシル、ただそれだけです」

それは僕の命に誓って断言するよ、と心の中で付け加える

「・・・それって答えを言ってるようなものじゃないのかしら？」

「さあ？どうでしょう」

とまあ、ここら辺でこの話はお終いにして、っと

「さて、そろそろ寝ないと明日に響きますよ？僕もそろそろ寝る事にします」

それだけ言って僕は席を立った。取り敢えず、今日はどこか空いた部屋にでも、なくても屋根の上でもいいや。今日のティアの寝相はかなり酷いからなあ

「ええ、そうね・・・ねえ、最後に一つ聞いていいかしら？」

扉に手をかけて出ようとした僕に声がかかり、動きを止めた

「僕に答えられる事なら」

振り向いて半身だけ体を向けて、そう答える。リアスさんは少し迷ってから口を開いた

「」

リアスさんの言葉に、少し考えてから僕も口を開いた

「そうですね。僕は・・・」

次の日の朝、オカルト研究部の皆は別荘の前の広場で行われた模擬戦で、兵藤君が修行で使っていた山を一つ吹き飛ばすのを見た。何を言って（ry

行われた模擬戦で兵藤君は、強くなった木場君にガードが遅れて何発か攻撃を喰らうも、ほとんどダメージを受けておらず、兵藤君が八回の倍加で打ち出した魔力弾は、ブーステット・ギアにより岩位の大きさになり、避けた木場君の横をそのまま通り過ぎて、山一つを消し飛ばした。あの魔力弾は、上級悪魔に迫る程の威力だった

兵藤君は、自分がやった事に酷く驚くと同時に、自分の力を自覚し、昨日の悩みも吹っ飛んだご様子だった。藍華も、そんな兵藤君を見てやれやれ、といった表情になっていた。僕の視線に気が付くと、すぐに顔を反らされたけどね

そして残りの修行期間も終わり、僕達はそれぞれ解散した・・・んですが

「という訳で今日は私ここに泊まるから」

「いや、どういう訳なのさ・・・」

何故か藍華が家に泊まる事になりました。まあ、ちゃんと藍華のお母さんには許可を取ってるみたいだけど。ちなみに今夕麻とカラワーナは用事で出ている

「さあ、シル。まずはこれに着替えて」

そう言つて、藍華がカバンの中から取り出したのは、一着の服だった。でもそれは・・・

「ねえ藍華、これってどう見ても女の子物だよね？スカートついてるし」

そう、藍華が持っているのは明らかに女の子物の服だ。藍華の私服かな？

「だってあんた、いつもパーカーかシャツに、ジーパンじゃない。偶には違った物も着てみなさいよ」

「だからって何で女の子物なのさ！僕は男なんだってば!!」

「だって似合いそうだから」

『うんうん!』

アーシア達も一様に頷いていた。というか今、僕皆に囲まれた状態で逃げ場がありません。皆の目が獲物を狙った物になってるのは僕の気のせいだと思いたい。思う。というかそうであつてなくちゃ困る!!

「さあ、シル。観念して着せ替え人形になりなさい!」

ビシツ！と服を突き出してくる藍華。僕の答えは決まってる！

「だが、断る！」

僕は皆の隙間から駆け出した

『逃げた！』

「者どもー！であえであえく！！」

『了解！』

「何でこうなるの!?!」

その日は一日中、妙に息があった皆と家の中で追いかけてここになった。でも、最後には結局捕まってしまった。グスン、もうお婿に行けません（；；）

「じゃあ、私がお嫁にもらってあげるにや」

「・・・」パシヤパシヤ！

「心を読まないで!?!あとミツテルト、無言で写真撮らないで!!血走った目が怖いです!!」

「ふむ、次はメイド服とか・・・」

「いや、次はちやいなどれすが良いと思うぞ」

「し、シスター服なんてどうでしょう?」

「わかってませんね。次は猫耳装備の・・・」

「私の知り合いにコスプレショップをやってる人がいるから今度色々持ってくるわ」

「何の話し合いしてるのさ!?!あと、まだ着せる気なの!?!」

そして騒がしい一日が過ぎ翌日の真夜中、リアスさんとライザー・フェニックスのゲームの日になった

開始と序盤

SIDE イッセー

――深夜十一時四十分頃。

俺と部員達は、旧校舎のオカルト研究部の部室に集まっていた。それぞれ一番リラックス出来る方法でゲームまでの時間を過ごしている。

木場は着ける手甲と脛あてを入念にチェックしていた。カラワーナさんは、瞳を閉じて壁に寄りかかって瞑想してる。朱乃さんと部長はソファに座り、優雅にお茶を口にしていた。夕麻ちゃんとミツテルトちゃんは、応援に来てくれたアジアや桐生、黒歌先輩、白音ちゃん、ティアマツトさんと談笑していた。うん、そこまではいいんだけど……

「え、えつと、シルさん？何で執事の格好をしてるんですか？」

そう、ここにいる皆はスーツ姿のカラワーナさんを除いていつもの学生服姿なのだが、シルさんは何故か執事の格好をしているのだ。普段と違った格好をしていて、新鮮に感じる。あと、凄い似合ってます

「あははは、深くは聞かないで無視してくれるとありがたいよ……」

「りよ、了解つす」

シルさんの少し疲れたような笑みを見て、俺はそれ以上聞けなかった。というかよく見ればさつきから朱乃さんがシルさんの事をチラチラ見てるな

そして、開始時間の十分前になった頃、部室の魔法陣が光だし、グ

レイファイアさんが現れた

「皆さん、準備は御済になられましたでしょうか？開始十分前です」

レイファイアさんの言葉に、皆が立ち上がった。皆を一通り確認して……

「……っ！」

レイファイアさんはシルさんの所を二度見した。あのクールなレイファイアさんが僅かに目を見開いていた。シルさんはレイファイアさんに向かって、「何も言わないで」オーラを出すと、レイファイアさんは頷いた。そしてその時俺は見た。桐生の口元が僅かに、にやけていた事を。俺はそれで察した。

一つ咳払いをして、レイファイアさんが口を開く

「開始時間になりましたら、ここの魔法陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は今回の為に異空間に作られた使い捨ての物なので、思う存分に力を発揮してください」

へえ、凄いな。悪魔ってそんな事も出来るのかあ。空間も作れちゃうのか

「今回の『レーティングゲーム』は両家の皆さまも、他の場所から中継で戦闘をご覧になります。さらに、魔王ルシファー様も今回の一戦を拝見なされております。それをお忘れなきように」

み、見られながらやるのか。しかも部長のお兄さんの魔王様にもか。こりゃあ、無様な姿は見せられないな

「え？マジで魔王とかっているの？ゲームとかに出てくるラスボスのなあれ？」

桐生は驚いてる様子だった。そういえば、この前魔王様が来た時は桐生いなかったな。そんな桐生に、隣にいたシルさんが、部長が魔王の妹という事を教えると、更に驚いた様子になった

大昔の大きな戦で魔王様達が亡くなり、強大な力を持つ者に『ルシファー』『レヴィアタン』『ベルゼブブ』『アスモデウス』という名を受け継がせた。部長のお兄さんを含めた現四大魔王は、そうして生まれたそう。だから、『ルシファー』というのも、役職名に近いらしい。サーゼクス様が魔王としてグレモリー家を出た為に、部長が家を継がなければならなくなったんだ

「そろそろ時間です。皆さま、魔法陣の方へ。なお、一度あちらへ移動しますと終了するまで魔法陣での移動は不可能になります」

帰ってくる時は、勝敗がついてるって訳か。グレイファイアさんに促され、俺達グレモリー眷属の皆は魔法陣に集結する

「み、皆さん！頑張ってください！私、精一杯応援してます！」

「・・・頑張ってください」

「にやはは、頑張れ〜」

「あんな焼き鳥野郎なんてぶちのめしてやんなさい」

「私が直々に稽古してやったのだから、負けるなよ」

「皆、頑張ってね」

アーシア達にエールを送られ、俺達は魔法陣の光に包まれた

光が収まり、目を開けるとそこは部室だった。でも、さつきまでいたアーシア達の姿は見えなかった。どゆこと？と、俺が首を傾げていると・・・

『皆さま。この度グレモリー家、フェニックス家のレーティングゲームの審判を担う事になりました、グレモリー家の使用人グレイフィアでございます』

取り付けられたスピーカーから、グレイフィアさんの声が聞こえてきた。これって校内放送？

『我が主、サーゼクス・ルシファアの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。どうぞ、よろしく願います。早速ですが、今回のバトルフィールドはリアス様とライザー様のご意見を参考にし、リアス様の通う人間界の学び舎「駒王学園」のレプリカを異空間に再現しました』

マジで!?!じゃあ、ここにあるのって全部作り物なのか？まんま同じじゃん！再現度高すぎでしょ！あ、でも空の色はなんかいつもと違った感じになってた。マジで悪魔の力ってスゲーな

『両陣営、転移された先が「本陣」となっております。リアス様の本陣は旧校舎のオカルト研究部部室。ライザー様は新校舎の生徒会室が「本陣」となっております。「兵士」の方は「プロモーション」する際、相手の「本陣」の周囲まで赴いてください』

グレモリー眷属で『兵士』は、俺と夕麻ちゃんとカラワーナさんと

ミッテルトちゃん。俺達の駒の特性上、『プロモーション』は必須！

『プロモーション』レーティングゲームはチェスと同じルールで、『兵士』が相手の本陣に駒を進める事で『王』以外の駒に昇格が出来る。木場と同じ『騎士』になれば、速度が上がる。うちにはないけど『戦車』になれば攻撃力と防御力が上がり、『僧侶』になれば魔力が上がる。そして、朱乃さんと同じ『女王』になればその全ての特性を得られる。俺が目指すのは勿論、最強の駒『女王』だ！

「皆、これを耳に着けてちょうだい。戦場ではこれで味方同士のやり取りをするわ」

渡されたのは、小さなイヤホンの様な物だった。言われた通り、俺達はそれを耳に着ける

「さて、私の可愛い眷属達。準備はいいわね？敵はライザー・フェニックス。でも、私達は負けない！絶対に勝つわよ！」

『はー！』

威勢よく全員で返事をする、再びスピーカーからグレイファイアさんの声が響く

『開始の時間になりました。なお、このゲームの制限時間は人間界の夜明けまで。それではゲームスタートです』

キーンコーンカーンコーン！

！
開始のチャイムが鳴り、俺達の初のレーティングゲームが始まった

SIDE OUT



SIDEシル

兵藤君達がバトルフィールドに転送され、残った僕達はソファアームに座って机の上に出したいくつかのモニターを眺めていた。モニターには、リアスさんや対戦相手のライザー・フェニックスの様子が映っていた。リアスさん達の方は、やはり初めてのゲームという事で少し緊張した面持ちだったが、ライザー・フェニックスの方は余裕そうに自分の眷属の女王と、その・・・い、イチャイチャしていた

キーンコーンカーンコーン！

そして兵藤君達が転移されて数分後、ゲーム開始の合図が鳴った！

ゲームが始まったが、グレモリー眷属の皆はすぐには動かず、机の上で地図を広げて作戦会議を開いていた

「ねえシル、何でリアス部長達は動かないの？もうゲームって始まってるんでしょ？」

と、ここでレーティング・ゲームを知らない藍華が僕に疑問を投げかけてきた。アジアも知らないの、頭に疑問符を浮かべて首を傾げていた

「それはね、二人とも。レーティングゲームっていうのは基本的にボードゲームのチェスと同じ様に、すぐに決着が着くものじゃなくて、長時間かけてやるんだよ。まあ、偶に短期決戦（ブリッツ）って

言う場合もあるけどね」

と、二人に説明しているとグレモリー眷属が初めに動き出した。と言っても、敵地に攻め入る訳ではなく、木場君と朱乃さんと夕麻、ミツテルト、カラワナーナがグレモリー眷属の「本陣」近くの森にトラップを仕掛けに行った様だ。ライザー陣営の方は……まだ動いていなかった。特に何をしているという訳でも無く、ただ時間を潰しているように見えた。完全にあれは慢心しているようだ

カツ！

と、そこへ部室の床の魔法陣が輝きだした。この魔法陣は——
フェニックス家？

魔法陣から光が溢れ、そこから何名かの人影が現れた。そして光が止むと、そこには見覚えのある顔の者達がいた

「ぎげんよう」

その中の一人、金髪の縦ロールのお嬢様の様なドレスを着込んだ娘が一步前に出て、スカートの裾を持ち上げて上品に挨拶をしてきた

『誰（にゃ）（でしょうか）？』

僕以外の皆が、頭に疑問符を浮かべて首を傾げた。その反応に、あいさつした娘はズコツとこけた。アーシア達はともかく、藍華は会ってるんだよ？まあ、あの時はライザー・フェニックスに目が行ったから覚えてないんだろうけどね

「この方はレイヴェル・フェニックス。今ゲームをしておられるライザー・フェニックス様の実の妹君だ」

とそこへ、ドレスの娘の後ろに控えていた顔の半分だけに仮面をつけていた女性が前に出て、代わりに説明をした。確かこの人はライザー・フェニックスの『戦車』だったな。他にも、この人と同じ『戦車』のチャイナドレスを着た人と、『僧侶』の十二重を着た女性がいる。つまり、ハンデとして今回のゲームに参加しなかった者達だ

「んで、こんな所に何の用？」

藍華が直球で尋ねる。すると、さつきこけたレイヴェルさんが、身なりを正し、咳払いを一つして口を開く

「コホン、こちらにあの龍王最強の『天魔の業龍』ティアマツトがゲームを観戦していると聞き、一目見ようと来ましたの。それで・・・そちらにいらっしやる青髪のあなたがそうでしょうか？」

レイヴェルさんはティアの方に顔を向けて尋ねる

「ほうだ、わはひがひあはつとだぞ」

ティアは僕が用意したお茶菓子のクッキーを口に咥えたまま答えた。そんなティアに近づき、頭に手刀を落とすと、ティアは頭を押さえて痛みを悶えていた

「ティア、口に食べ物を咥えたまま喋るのは行儀が悪いよ、っていつも言ってるでしょ？」

「うう、わ、悪かったのだ」

「にやははははっ！怒られてるにや」

黒歌はそんな様子を見て、指を指して笑い声をあげていた

「姉さま、煩いです。モグモグモグ・・・」

「私も、これくらい美味しいお菓子を作ってみたいです」

白音は自分の前にあるお皿に積まれたクッキーを休まずに口に運んでいた。それでもちやんとモニターから目は離していない。アシアも作ったお菓子を気に入ってくれたみたいだ。今度一緒に作るかな？

と、ライザー眷属の方に目を移してみれば、全員が啞然とした表情になっていた

「龍王最強に説教をしている、だと・・・!」

「しかも、あの暴れん坊と言われていた『天魔の業龍』が素直に従っているわ」

ああ、そういえばそうか。ティアって昔は結構いろんな所で暴れたみたいだしね。そんなのを相手に説教とかしている光景は知らない人から見たら異常だよな。リアスさん達も最初は凄い驚いてたし

「あなた、何者ですか？見た所執事の様ですが、リアス様の家の者ですか?」

レイヴェルさんが代表して僕に向かって尋ねてくる

「いえ、僕はここに居らせられる藍華お嬢様の執事のシルという者でございます」ニコリ

手を胸に当てて、軽く頭を下げる。昨日、藍華達に着せ替え人形にされた後、今朝藍華が自分の家に帰ったと思ったら、数十分後色々な衣装を持って、再び家に訪れて来た。藍華が持ってきた衣装は今僕が来ている執事服や、メイド服、巫女、ポリス、教師、e t c . . . とまあ、様々な種類の物だった。どうやら昨日言ったように本当に衣装を借りて来たみたいだ。取り敢えず、前日の事があった僕は、逃げる事を諦め、その中で一番マシだった執事服を取った。そして衣装がたくさんあるという事で、他の皆もそれぞれコスプレする事になったんだ。藍華もノリノリで衣装を勧めたり、アジアのコスプレを見て、ミツテルトが暴走したので、夕麻達で止めるのが大変だった。そして夕方までコスプレをした後、執事服のまま僕は夕食の準備をしていたら、何故か皆に新鮮だけど違和感がないと言われ、しばらくこの格好で皆の執事でいる事になって今に至るという訳だ。今日は順番で藍華が僕のご主人様。 説明しててなんだけど、何でこうなったんだろう？

『~~~~っ!』

おや?なんか目の前のレイヴェルさんを含めた皆の顔が赤い?どうしたの?

「今日のシルは何時もと違って、カッコいいにや〜。何か胸がドキドキしちゃうにや〜」

「(. . . いけませんね、頬が熱くなってるのがよくわかります。家では我慢できましたが、今みたいに不意打ちは反則です!)」

「(き、流石シルだ! カッコ良さがいつもの倍以上なのだ! 明日は私のご主人様の番だな!)」

「(はわあ〜、シルさん、いつもよりずっとかっこいいですう。はっ!)」

い、いえ、いつもカッコ良くて綺麗ですけど、今日はそれとはまた違ったものというかですね。って私は誰に言い訳をしているんでしょうか?」

「(自分がやらせといてあれだけど、これは中々の破壊力ね。しかもお嬢様って・・・わ、悪くないわね)」

「(か、カッコいいですわ・・・良い条件を持ち掛ければ家に引き抜けないかしら?)」

「(何だ、この胸の高鳴りは?・・・っ!まさか、この私が女相手につ!?)」

「(はう〜)」

え〜と、皆どうしたんだろう?何かぼうっとしてるけど。と思つていたら、グレモリー眷属とライザー眷属が動き出した。それから僕は、レイヴェルさん達にどうせなら一緒に観戦しませんか?と問うと、快く承諾してくれた。僕は異空間の倉庫から新しく人数分の椅子と机の上にお茶菓子と飲むのに丁度いい温度に淹れた紅茶を出した。どちらも好評だったようで、その顔には笑顔が浮かんでいた。でも、何故かレイヴェルさんはクッキーを食べた後、シヨックを受けたような表情になっていたけど、どうしたんだろう?聞いても「何でもないですわ」と返されてしまったので、それ以上は聞けなかった

そして、皆が見つめるモニターに映っているのは、兵藤君が一人で両陣営の中間、つまり「センサー」に位置する体育館に向かっている所だった。そして兵藤君がたどり着くとそこにはライザー眷属の『兵士』が三人いた。ゲーム前に渡された資料によれば、棍棒を持った白音位の身長が娘がミラ。ライザー眷属の中では一番弱い子だけど、棍の腕前はそこそこある。そして残りの二人は体操服を着た双子。武器は手に持ったチェーンソーで、双子ならではの息の合ったコンビ

ネーションで敵を追い詰めるのが得意、と。というか、女の子が持つていい武器じゃないと思うよ？

『解体しまーす♪』

『バラバラバラバラ♪』

『怖っ!?滅茶苦茶物騒だなおい!』

『行きます』

一対三という数的には兵藤君的に不利だけど、モニターの中で兵藤君は三人からの攻撃を躲し、時には腕で今棍をガードして三人相手に立ち回っていた

『ガードが崩せない・・・』

『あー、もう!何で当たらないのよ!』

『ちよろちよろ動き回ってムカつくう!』

相手は攻撃が当たらない事にイラついている様子だった。そんな三人から一旦距離を置いて、兵藤君は三人に指を指して宣言する

『俺はな!今回のゲームの為に毎日死ぬような特訓を受けてきたんだ!龍王最強のドラゴンに山で追いかけて廻されながら攻撃される怖さがお前達に分かるか!?一発一発の攻撃が即死級の威力を持つてるんだぜ!一発でも当たるか掠るだけでも即消滅だ!そんな攻撃に比べたら、お前達の攻撃なんか遅く見えるし全然怖くないわああああ!!』
途中から涙を流しながらそう言う兵藤君に、何とも言えない気持ちになった

『そ、そこまでの特訓を行っていたなんて・・・』

『・・・ねえ、お姉ちゃん。私、何かあの人かわいそうに思えてきたよ』

『・・・あの時は厭らしい目で見られたけど、許してあげましょう』

ほら、敵の三人も攻撃の手を止めて憐憫の眼差しで兵藤君の事を見るよ。で、その原因のティアというと・・・

「全く、あれくらいで泣くとは、男として情けないぞ。おつ、これは私の好きなクツキーなのだ!」

と言う感じだった。なんというか・・・ゴメンね兵藤君

『来い!ブーステット・ギアア!』

そしてここで初めて兵藤君は、その左腕に【赤龍帝の籠手】を出し

た

『Boost!』

『行くぜドライブ!!』

『Explosion!!』

籠手から音声が鳴り、兵藤君の力が倍増された。気を取り直した三人が兵藤君目掛けて攻撃を仕掛ける

『バラバラバラバラ!』

双子の娘は、チェーンソーを地面に当てて傷を作り、火花を散らしながら左右から同時に迫る

『なんのお!』

兵藤君は振り上げられたチェーンソーを籠手でほぼノータイムで同時に殴り飛ばし、武器を失った二人に反対の手で殴り飛ばした

『そー!』

間髪入れずに、兵藤君の背後からミラという少女が棍を突き出す

『あまい!』

兵藤君はそれを体を捻る事で躲し、突きを繰り出して隙が出来た少女の棍を手刀で破壊し、同じく獲物を失った娘を突き飛ばした

「へく、兵藤の奴意外にやるじゃん」

「す、すごいです!相手の方が人数が多いのに!」

藍華達も、兵藤君の活躍を純粋に褒めていた。対してレイヴェルさん達の方は驚いている様子だった

突き飛ばされた三人は立ち上がり、再びその手に武器を握る。と、ここで兵藤君が画面の中で不敵な笑みを浮かべた

『フフツ、息巻いてるようだが、俺の必殺技の条件は整った。この勝負、俺の勝ちだ!』

自信満々にそう宣言する兵藤君。青の表情は嘘をついているようには見えない。でも、必殺技つていつの間にかそんなものを?

「す、すごいですイッセーさん!なんだかカッコいいです!」

「・・・必殺技、少し気になります」

「は、はったりに決まっていますわ!」

「一体何をするつもりなんだ?」

それぞれの反応を見せる中、兵藤君は背中から悪魔の翼を出して、何かの構えを取る。妙に様になっていた

『・・・お姉ちゃん、何かやばそうだよ』

『ええ、よくわからないけど、さっきよりプレッシャーが上がってるわ』

対峙する敵の三人も、兵藤君から発せられる気迫に押されている様子

『・・・何をするつもりか分かりませんが、その前に倒します！』

『絶対解体してやる!!』

再び三人が兵藤君目掛けて突進する。兵藤君は籠手を天井に向かって掲げる

『行くぜ！俺の新必殺技！【洋服破壊・ドレスブレイク】!!』

パチンツ、と兵藤君が掲げた指を鳴らすとー

バリバリバリツ!!

兵藤君に向かって突進していた三人の服が弾け飛んだ

『・・・え?』

目の前のモニターで起こった事に思わずそんな声が漏れた。それはここにいる者全員の声だけでなく、モニターに映っている三人もだったと思う

『『い、いやあああゝゝゝ!!』』

一拍空いてモニターから響く悲鳴。下着まで弾け飛んだ三人は、その場にしゃがみ込み、大事な所を手で隠そうとしていた

なんだこれ は!?

『フハハハハッ!どうだ!見たか!これが俺の新必殺技、その名も【洋服破壊・ドレスブレイク】!発動条件は相手に手で触れる事。その際にイメージで高まった魔力を相手に流し込む事だ!俺は脳内で女の子の服を消し飛ばすイメージだけを延々と、そう延々と妄想し続けた結果、魔力の才能をこの為だけに使ったのさ!!』

な、なんちゆう事を・・・

部室で観戦していた女性陣に目を移せば、ほとんどが嫌悪の表情を浮かべていた。ま、まあ、当然の反応だね

「・・・最低です」

ボソツ、と呟いた白音の言葉に他の女性人達も頷いていた。さつきまで評価が上がってたのに。兵藤君エ

『最低！』

『変態！性欲の権化！』

『ケダモノ！女の敵！』

「フムフム、兵藤は年下の美少女の服を引ん？く鬼畜野郎。近づくと女子は服を剥ぎ取られないように要注意、つと。明日、学校に流したら面白い事になりそうねえ」

藍華、君は兵藤君を社会的に抹殺する気ですか？でもゴメンね兵藤君、流石にこれはフォロワー出来ないよ。と、ここで僕の視界が真っ暗になった。気配から誰なのか察知する

「アーシア、どうしたの？」

「み、見ちゃダメです！」

背中にピットリと張り付いたアーシアが手で僕の目を塞いでいるようだ。まあ、確かに男の僕が女の子の裸を見るのはいけないよね。でも、そうなる僕と僕はアーシアから男の子扱いされてるって事だよね。何かちよつと嬉しいかも

取り敢えず僕はそのままで指を鳴らす

パチンツ！

『あつ、た、タオルが』

『で、でもこれで体を隠せるわ！』

『・・・よくわからないけど感謝です』

モニターからそんな声が聞こえてくる。すると、アーシアは僕の顔から手を退けてくれた。モニターには大きめのタオルにスツポリ身を包んだ三人が映っていた

『ナイス（ね）（です）（だな）（にや）（ですわ）!!』

部室にいたみんなからサムズアップを頂きました。アーシアもキラキラと尊敬の眼差しを向けてくる

と、ここでモニターで残念がる兵藤君がタオルに身を包んだ三人を置いて突然体育館の出口に向かって駆け出した。そして兵藤君が体育館を出るのと同時に……

カッ！ドオオオオオオオオン！！

一瞬の閃光のすぐ後、轟音と共に巨大な雷の柱が体育館に降り注いだ。そして雷が止んだ時、モニターから体育

館が消滅している様子が映った

『撃破（テイク）』

巫女姿の朱乃さんが体育館があつた場所の上空で翼を広げ、撃破宣言をして微笑んでいた。その手には先程放つた雷の残りがバチバチと迸っていた

「あの笑み……Sの感じがするわね」

藍華がポツリと呟く。S？SってなんのSの事？

『ライザー様の『兵士』三名、リタイア』

と、そんな事を考えてる内に、グレイフィアさんの撃破アウンスが入る。それにしても、重要拠点である「センター」に位置する体育館ごと敵を撃破するなんて、いい考えだね。人数的に敵に取られるかもしれないのなら、それごと消してしまおう。初めてとは思えない発想だね

「流石、あのリアス様の『女王』ですわね。先程の雷の威力は下級悪魔のそれを超えていますわ。それに、まさか重要拠点ごと『兵士』を倒すなんて。それに引き換え、あの『兵士』の方は……」

眉間に皺を寄せ、はあ、と嘆息するレイヴェルさん。もしもここに彼が居たら、心が持たなかったと思う。いや、そういえば兵藤君は学校でもそんな感じだつてアーシア達が言つてたな。何か聞いた話では、平気で教室でエッチな本とかを読んだり、女子の着替えを覗いてるとか。……やっぱリフォローのしようがないね。でも、悪い子じゃないんだけど、一体どこでああなつてしまったんだろうか？小学校の時は既にもうおっぱいを連呼してたけど。そのまま真っ直ぐに育つ

たみたいだね、エツチな方に

そして画面の兵藤君は耳に手を当てて連絡を取っている様子だった。そんな兵藤君に黒い影が迫っていた・・・

中盤と終盤

イツセーSIDE

『ライザー様の「兵士」三名、リタイア』

グレイファイアさんのアナウンスがフィールド全体に響き渡り、敵のリタイアが知らされた。これで一気に三人倒したぜ！部長の作戦通りだ！空に浮かんでいる巫女姿の朱乃さんは、俺に向かつていつものニコニコ顔で手を振って来る。俺も朱乃さんに向かってサムズアップを送る。それにしても、朱乃さんの雷、直で見たの二回目だけど、あの時よりもずっと凄い威力だな・・・朱乃さんは絶対に怒らせないようにしよう。うん、絶対怒らせちゃダメ

『皆、聞こえる？朱乃の派手な一撃が決まったわ。これで最初の作戦は成功ね』

耳に着けた通信機から部長の声が聞こえてくる。その声は嬉しそうに少し弾んでいた。最初の作戦は、俺がある程度敵を体育館に引き付けておいて、上空に待機している朱乃さん準備が整ったら、俺は体育館から離れ、体育館ごと敵を朱乃さんが撃破する、だ。出だしは見事に決まったぜ！

『三人撃破したけれど、まだ相手の方が数は上よ。もう少ししたら次の作戦に移るわ。次の作戦に向けて各自、動き出してちょうだい』

「はいー」

元気よく返事をした俺は、次の作戦の為に移動を開始しようとしたその時――

ゾワツ！ っ!?

嫌な予感がしたのと同時に、俺は全力でその場から飛びのいた！そしてその直後――

ドオンツツ!!

突然の爆発! さっきまで俺がいた場所が爆発し、爆発によって舞い上がった土煙が晴れると、そこには地面が抉れてクレーターが出来ていた

あつぶねえー! もうちよつとでダメージ喰らう所だったぜ。ティアマットさんとの修行のお蔭だな

「・・・よくあの攻撃を避けられたわね」

声のする方に視線を向ければ、翼を広げて空に浮遊している者がいた。フードを被り、魔導士の様な格好をしているいる女性、ライザーの【女王】がいた! さっきは【兵士】で、今度は最強の眷属登場かよ!

確か渡された資料によれば、名前はユーベルーナさんで、【爆弾王妃・ボムクイーン】って二つ名が付くくらい強力な火や炎の魔法が得意って書いてたな

「俺は修行でティアマットさんに死角からの攻撃も何度もやられてるんだ! そのお蔭で危機察知能力が格段に上がったんだよ!」

本当にあの人が、いや、ドラゴンさんは容赦が無かった。いきなり姿を消したと思ったら、真後ろから魔法弾を撃って来るし、いつの間にか山にヤバめなトラップなんて仕掛けてるし。本当に俺ってよく生きてたよな・・・いい、いかん! あの時の恐怖が蘇って来るううう! な、何か、他の事を考えなければ!!・・・そ、そうだ! そんな厳しい修行の中でも、空いてる時間を見つけては【洋服破壊】の特訓を欠かさずにやって来たんだ! そして、今日! ついにその技を完成&お披露目させた!! あの厳しい修行を頑張れた要因一つだもんな! 勿論、一番は焼き鳥を倒すためだ。ぐへへへ、さっきの子達は少し発育が足りないけど、あれはあれで中々・・・おっと、思い出したら鼻血が

「・・・怒ったり、泣いたり、震えたり、笑ったり、と忙しい子ね。と
いうかその笑みは気味が悪いわ。さっさと倒させてもらおうわ」

敵の女王が手に持った杖をこっちに向けてくる。と、そこへ敵の女王のすぐ目の前を雷が横切った！

「あらあら、イツセー君はやらせませんわ。あなたのお相手は私がしますわ【爆弾王妃】さん？」

俺を庇う様に敵の【女王】と俺の間に入る朱乃さん。その体には、バチバチと雷が迸っていた

「イツセー君、ここは私に任せて早く行きなさい」

俺に背中を向けたまま朱乃さんはそう言う

「はい！頼みます朱乃さん！」

俺はすぐに返事をして、次の目的の場所、運動場へと走る

「っ！行かせなっ!？」

「あらあら、イツセー君の邪魔はさせませんわ」

イツセーに攻撃しようとしたユーベルーナは、またもや朱乃の攻撃によつて邪魔された

「・・・まあ、良いでしょう。どちらにせよ結果は変わらないのだから。それにあなたとも戦ってみたかったものね」

ユーベルーナは、標的を朱乃に移し、戦闘態勢をとる

「うふふ、私は負けませんよ？なんたって、あの人が見ているんですから♪」

「惚気か!？」

朱乃は微笑み、頬を少し赤らめながら、体に纏っている雷の勢いを増していく

空中で二人の女王はお互いに睨み合い、そしてその後、激しい炎と雷がぶつかり合った



朱乃さんと別れ、俺が目的地である運動場へ移動している時だった

『ライザー様の【兵士】三名、リタイア』

さっきと同じアナウンスがバトルフィールド全体に響き渡る。俺はすぐに誰がやったか分かった。あいつがやったんだな、やるじゃん！

これで相手はライザー、今朱乃さんと戦っている【女王】に【騎士】が二人に、同じく【兵士】が二人の計六人！数的にはこっちが勝ってるけど、まだまだ油断は出来ない状況だ！

「—!?!」

俺は背後に気配を感じ、咄嗟に身構える。敵かと思ったが、それは杞憂に終わった

「な、なんだ木場かよ」

「あはは、驚かせちゃったかな」

そこにいたのは、相変わらず爽やかなスマイルを浮かべる木場がいた。その表情からは、一切疲れが見えなかった

「それより、大丈夫なのかイッセー君？」

心配そうに聞いてくる木場に向かって、俺はドンツ、と胸を叩いて言う

「おう！俺は特に疲れやダメージもないぜ！」

修行のおかげで、体力も格段に上がってるからな！その辺は木場にだって負けない自信があるぜ！

「い、いや、その事じゃないんだけど」

「うん？じゃあ、何の事なんだよ？」

俺は木場の言ってる事が分からず、首を傾げると、木場が俺に通信機のチャンネルをオープンチャンネルに変えるように言われたので、その通りしてみると・・・

ピシャーーン！ピシャーーン！

『アバババババババババツ
!?!?!?!?』

『あらあら、まだまだ元気ですわね。では、今度は修行で身に着けたこれでどうでしょう?』

バチバチバチッ!

『か、雷が追尾してッ!? きやああああ!?!』

『うふふつ、次はどの技にしてみましようか? ふふふつ』

通信機から聞こえてきたのは、何度も鳴り響く雷の音に、感電した声を上げる声、そして非常に楽しそうなDSの声だった。音や声だけでも、朱乃さんが敵の女王を雷で攻撃しているという場面が容易に想像できた

木場の言っていた事の意味が分かったわ。こんな場面を見てたら軽くトラウマになりそうだもん。というか、今のを聞いたら俺もテイアマットさんに追い掛け回された修行の時の恐怖がガガガがガガガガッ!?

「い、イツセー君!?! しつかりするんだ! 目から光が消えてるよ!」

「だ、大丈夫だ木場。俺は大丈夫だ。何もモンダイハナイサ」

「最後カタコトになってるよイツセー君!?! こんな時は、桐生さんから渡されたこの紙を見るんだイツセー君!」

「桐生から?」

そう言う木場から渡された紙を広げて読んでみると、そこには……

【♡割引券♡ 会計の際、この券を使えばどの作品も、50%OFF!!

この機会を見逃すな！」

な、なんと！お宝DVDが全部半額になるという、素晴らしい券だったのだ!!!

「こ、これで俺は戦える!!!!」

さつきより力が湧いてくるようだ！桐生、感謝するぞ!!

「あ、あはは。本当に元のイツセー君に戻ったみたいだね」

木場が苦笑しているが、今の俺には目の前のお宝割引券に意識が行っていた

そして落ち着いた俺達（というか俺）は校舎の物陰から運動場の様子を窺っていた。運動場には敵の【騎士】二人に【兵士】二人。残りの眷属達が勢ぞろいしていた！

『Boost!!』

左腕の籠手から頭の中に倍加の音声が鳴る。少し前から倍加を開始して、今ので丁度十回目目の倍加が済んだ。俺が今倍加出来るのは、シルさんから教えられた回数、限界で二十五回までだ。それ以上は俺の体が持たないらしい。更に、限界まで倍加は三回までしか行えない。でも、倍加の回数を抑えれば、その分多く使用できる。俺は制服のポケットに入っている物を確認し、その中身が漏れていない事を確認して再び運動場にいる敵に目を向ける。これが今回、ライザーに勝つ為の秘策だからな！

俺達は合図が来るその時を物陰から敵を見張りながら、待っていた時、木場が俺に向かって声をかけて来た

「イツセー君、随分落ち着いているようだね？緊張してないのかい？さっきの桐生さんからの贈り物のお蔭かい？」

と、木場は意外そうに言ってくる。流石にそれは失礼じゃないか？まあ、あれのお蔭も少しはあるけどさ。疑問を浮かべる木場に、俺は敵から目を離さずに答える

「そんな事ねえよ。こちとらお前と違って戦闘経験なんて無いに等しいんだぞ。修行したって、いきなりの本番なのに緊張しない訳がないだろ。それに俺は今回の中で一番弱いつて事は修行をしてわかってるんだ。でも、俺は部長や俺達の為に手を貸してくれたシルさん達の為に、負ける訳にはいけねえんだ。だから俺は、今の俺に出来る事、部長の指示を精一杯、全力でこなす。その気持ちが緊張より勝ってるっただけさ」

もし、倒れることになっても、俺はただでは絶対に倒れない。倒れる時はあの焼き鳥野郎も一緒に道連れにしてやる。例え、この身がどうなるうとも、だ

『ほう、少し見ない間に随分マシな面になったじゃないか、相棒』

不意に、頭の中にドライグの声が聞こえてきた。ようやく出てきやがったみたいだな。ティアマツトさんが近くにいないからか？

『・・・・・・・・・・』

黙り込むドライグ。でも多分、今こいつは顔を背けてると思う。伝説のドラゴンでも、やっぱり怖いんだな。女の人の怒りって

と、ここで木場に目を向けてみると、目をパチクリとさせていた。どうしたんだこいつ？

「・・・ごめん、君は本当にイツセー君かい？まさか敵の変装とかじゃないよね？」

「いきなり失礼な事言うなおい！俺は俺だっつーの！」

「じゃあ、君が一番好きなものは何だい？」

「そんなのおっぱいに決まってるだろう」

「ああ、良かった。間違いなくイツセー君だ」

即答した俺に安心したようにうんうん、と頷く木場。なんだよ！俺が真面目な事言っちゃあおかしいのか!?

『相棒の場合、今までの発言のほとんどが卑猥な事ばかりだったからな。仕方がないだろう？宿っている俺でも一瞬、「本当に相棒か？」と思っただけだからな』

お前もかよ！でもな、俺だって何時も何時もエロイ事ばかり考えてるわけじゃ・・・いや、結構考えてるけど。それでも偶には真面目な事も考えてるんだぞ！

「そこにいる者！隠れていないで出てこい！」

やっべ！さっき大声出したからバレちゃった！ど、どうしよう、まだ合図が来てないのに

「・・・イツセー君、たった今部長から合図が来たよ」

マジか！ナイスタイミングだな！

「じゃあ、遠慮なくいきますか!!」

「うん!」

俺と木場は堂々と運動場に躍り出た

「俺はリアス・グレモリー様の【兵士】!兵藤 一誠!!」

「同じく、【騎士】の木場 祐斗!」

俺達が名乗りを上げると、頭にバンダナを巻き、西洋風の鎧を身に着けた敵の【騎士】の一人、確か名前はカラーマインが何やら嬉しそうに笑みを漏らす

「ふっ、まさか本当に、しかも堂々と出て来るとはな。正気の沙汰ではないぞ。だが、私はお前達の様なバカが大好きだ!」

貶されてるのか褒められてるのかよく分からんお言葉を頂きました!!

「騎士同士の戦い、尋常じゃない斬り合いをしたいものだね」

木場は、好戦的な笑みを浮かべてその手に一振りの剣を握って構えた

「よく言った!グレモリーの【騎士】よ!!」

そのまま、木場とカラーマインは【騎士】のスピードで、普通なら目に見えないくらいの速さで斬り合いを開始した。おいおい、もう始めちゃったよあの二人

「あーあ、さっそく始めちゃったよカーラマイン。まったく仕方がないにや」

敵の【兵士】の猫耳の娘がやれやれ、といったポーズを取る。あつちも同じか

「まっ、別にいいじゃん。それよりさっさと残ったこいつをやっちやおうにや」

もう一人の【兵士】、こっちもさっすきの娘と同じ様に猫耳を生やした娘が、俺に視線を向けながらそう言う。猫耳の二人は体術が得意だったっけな。さらに、残った【騎士】の人が、その手に大きな大剣を持って構えを取る。あの人は剣から衝撃波を飛ばしてくる。パワーよりの【騎士】だったな。だけど、俺は構えも取らずにただ不敵な笑みを浮かべるだけだ

「どうした？この人数差に諦めたのか？」

【騎士】の人が、俺に向かってそう言って来るが、俺は返事もせず、そのままだった

そして今にも、三人が俺に向かって襲い掛かろうとしたその時、

ドオオオン！

「にやにや!?!」「っ!?!」

大きな衝撃音が響き、三人は驚いて動きを止める。そして、音の発生源の方へ目を向ければ、新校舎の屋上に煙が上がり、人影が二つ見えた。その二人とは……

「ら、ライザー様とリアス様！」

そう、煙が晴れ、姿を現したのは敵のキングのライザーと、俺達の王である部長だ！ライザーのすぐ近くで煙が上がっている事から、さっきの衝撃音は部長の攻撃で起きたということがわかる。でも、ライザーの方は無傷で、相変わらずムカつく笑みを浮かべ、手をポケットに突っこんだまま部長を見てるだけだ。多分、攻撃が外れたか、当たったけどフェニックスの力で治したかのどっちかな

「ええ、キング同士の一騎打ち？じゃあ、もう勝負決まったにや」

「だね。まあ、さっきは驚いたけど、とつとどこいつ倒しちやおうにや」

そう言っつて、【兵士】の二人は再び俺に向かって構えを取り、今度こそ向かって来た。だけど忘れてないか？

「……………俺達にはまだ他にも仲間がいるって事を

さ

「っ!?ニイ、リイ！その場を飛び退け!!」

【騎士】の人が二人に向かって叫ぶが、もう遅い

ザシユツ！

「にや？」

俺のすぐ近くまで来た二人は間の抜けた声を上げてその動きを止めた。そして、二人は視線をゆくりと下に下げると、二人の体に光の槍が突き刺さっていた。猫耳の二人はその場に倒れ、光に包まれてその場から消えた

『ライザー様の【兵士】二名、リタイアです』

グレイファイアさんのアナウンスがバトルフィールドに響き渡る。

「狙いより少しずれたか・・・まあ、撃破出来たから良しとするか。また修行をすればいい」

「ナイスタイミングだったみたいねイツセー君？」

そんな声とともに、空から二人の人物が俺の傍に降りてきた

「ホントにナイスタイミングだったよ夕麻ちゃん、カラワーナさん」

俺は二人にそう言うと、二人とも「修行のおかげ」と答えた

「くっ、構えを取らなかったのはこの為だったのか・・・！」

大剣を持った【騎士】の人が、悔しそうな表情を見せる。さつきとは逆の状況になった。

「しかも、それだけじゃないぞ、シーリス！その二人は昇格してるぞ！」

「余所見をしているのかな！」

ガキインツ！

「くっ！」

木場と戦っていたもう一人の【騎士】の人が大剣の【騎士】の人に
向かって叫び、そこへ木場が容赦なく斬りかかる。見た所、木場の方
は息切れもダメージも見られず、対してその相手のカーラミンさん
は、大分息も上がり、ダメージも大きいようだ。あの調子ならあと少
しで片が付きそうだな

そして、カーラミンさんが言っていたように、この二人は「昇格」
をしている。

「ちなみに私は【女王】に昇格したわ」

「私は【戦車】だ。魔力やスピードは変わらないが、その代わりに攻撃
力と防御力は女王より高いらしい。今の私には色々な物より、一つの
事に絞る方が合っているそうだからな」

と、いう事はこれで【女王】と【戦車】が増えたって事か。頼もし
いな！

「さて、では次があるのでとっとと終わらせてもらおう！」

バリンツ！

「グアツ!？」

カラワーナさんはその手に大きな光の槍を持って、敵の【騎士】に
突撃し、相手の大剣のガードの上から攻撃を加えて、それを破壊し、そ
のままの勢いで攻撃を与えて倒してしまった

『ライザー様の【騎士】二名、リタイア』

敵の【騎士】が光に包まれて消えると、アナウンスが鳴った。でも、二人って事は――

「やあ、どうやら同時に片付けたみたいだね」

見れば、木場が爽やかな笑みを浮かべて俺達の傍にやって来ていた。ここまでは作戦通りだ。俺達は視線を新校舎の屋上に向ける。あとは……

「ライザーの野郎をぶっ飛ばすだけだ!!」

今から行きます、部長！

S I D E E N D

◇◇◇◇◇

S I D E シル

『ライザー様の【騎士】二名、リタイア』

たった今、モニターでカラワーナと木場君が相手の【騎士】二人を倒した場面が映っていた。木場君の方は終始優勢のまま、兵藤君の方は仲間の事を信じ、自ら囿になって敵を油断させ、その結果手は出していないが【兵士】二人の撃破に貢献した。そして、カーラマインは【戦車】の攻撃で敵をガードごと打ち破った。そして、その二人を昇格させるために、【王】自ら前に出て、敵の【王】を一騎打ちという形で自身の陣地から引きずり出した。修行の成果か、リアスさんも魔力の扱いが上達し、母親から受け継いだ【滅びの魔力】の密度が高くなっている。単純な実力でなら、ライザー・フェニックスを超えてい

るだろう

朱乃さんは・・・相手を圧倒してる。それも、全力を使っている訳ではなくてだ。確かに今の朱乃さんの実力なら相手の「女王」を超える実力があるけど、ここまで一方的になるとは思わなかったよ。というかわざと威力を弱めて引き延ばしてる気がするんだけど僕の気のせいかな？相手の女王が「フェニックスの涙」という如何なる傷をも治す回復アイテムを使う間に隙があったのに、攻撃してなかったし。それに、表情が妙に楽しそうな風に見えるのも気のせいだよね？・・・ね？

そして、今度はモニターに新校舎の屋上の様子が映し出された。屋上は既に辺りがボロボロになっていた。そしてその屋上で対峙している二人の【王】

一方はフェニックス家の【不死】という特性を受け継ぎ、レーティングゲームで白星を多く挙げているフェニックス家三男、ライザー・フェニックス。攻撃を喰らっても、その特性からすぐに傷は何事もなかった様に癒えていた。しかし、その息は上がっており、魔力も消費している様子だった。リアスさんの【滅びの魔力】による攻撃が効いているようだ

そして、もう一方はフェニックス家と同じく72柱の一つ、グレモリー家の次期当主、【紅髪の滅殺姫・ベにがみのルインプリンセス】の異名を持つリアス・グレモリー。目立った傷は無いが、服の所々が破けており、息も上がっていた。が、それでも攻撃の手を止めてはいなかった。

画面の中で両者はお互いに強力な炎と滅びの魔力弾を撃ち合う激しい戦いを繰り広げていた

「流石はルイン・プリンセス。実力は噂通りですわね」

ライザー・フェニックスさんの実の妹であるレイヴェル・フェニックスさんが画面に映し出される戦いを見てそう言葉を漏らす。あと、さっき本人から聞いたけど、この子はライザー・フェニックスの【偕侶】らしい。何でも、特別な方法で眷属になってるけど、バトルでは殆ど観戦してるだけだそうさ。何で眷属になったかというのと、ライ

ザー・フェニックス曰く、

『妹をハーレムに入れる事は、世間的にも意義がある。ほら、近親相姦っていうの？憧れたり、羨ましがったりする奴多いじゃん？まあ、俺は妹萌えじゃないから形として眷属って事で』らしい

それを聞いたアーシアは近親相姦の意味が分からずに藍華に聞いて、意味が分かると顔を真っ赤にして頭から煙を出し、藍華達はそれを聞いてライザー・フェニックスに呆れ、馬鹿にし、レイヴェルさんに向けては憐憫の眼差しを向けていた。それを受けたレイヴェルさんも自分の兄に酷く呆れていると言っていた。イザベラさん達も苦笑気味だった。僕も、そういうのはどうかと思う。まあ、レイヴェルさんは、いい勉強になってるそうだし

そしてモニターに映る屋上に、新たな人達が現れる

『部長！お待たせしましたああああ!!』

屋上の扉を勢いよく開けて飛び出して来たのは兵藤君を始めとしたグレモリー眷属の皆だった

『イツセー！皆！』

『チッ！ドラゴンの小僧どもか』

兵藤君達の登場にリアスさんは歓喜の声を上げ、反対にライザーは舌打ちをして苦々しい表情になった

『俺の可愛い下僕達を倒してここまで来たようだが、俺にはまだ《ライザー様の【女王】、リタイアです》何!?ユーベルーナがやられただど!』
『あらあら、私が最後だったようですね。少し遊びすぎましたわ』

翼を広げて屋上に舞い降りたのは、巫女姿の朱乃さんだった。特にダメージを負った様子は見られなかった。まあ、あれだけ圧倒してたもんね

何はともあれこれでグレモリー眷属は勢ぞろいした！対するライザー側は後は【王】であるライザーただ一人

グレモリー眷属は、それぞれ手に【赤龍帝の籠手】を出し、剣を構え、光の槍を作り出し、雷を纏わせライザー・フェニックスを取り囲んだ。そして、ライザー・フェニックスの正面に立つリアスさんが、不敵な笑みを見せる

『あなたの眷属はここにいる私の可愛い眷属達が倒し、あとはあなただけね。リーチェックメイトよ、ライザー』

そう宣言するリアスさんに、ライザーは手で顔を覆った。そして――

『・・・ははっ、ははははははははははっ!』

突然、酷く可笑しそうに笑いだした。その様子に、モニターに映る兵藤君達と僕達は怪訝な表情を浮かべた。その中でレイヴェルさんは口を開いた

「まだお兄様は余裕なのですわ。確かに眷属は皆倒されてしまいました。私達はフェニックス、不死なのですわ!どんなに絶対的な力を持っていても、不死が相手ではどうしようもありませんわ」

と、「ホホホ」と口に手を当てて笑った。確かにレイヴェルさんの言う通り、不死のフェニックスならば、今の状況でも逆転する事も厳しいけど、不可能ではない。でも、あの笑いは、そういうのとは、何か違うような気がする

「・・・なんか嫌な予感がする」

藍華がモニターを見てそう漏らす。そして――

『ははははっ、俺が、この俺が追い詰められる?負ける?』

手を顔から離れたライザーが、ゆっくりと取り囲んでいるグレモリー眷属を見渡す

『不死鳥とされるフェニックスの俺が?ゲームでも負け無しこの俺が?』

そして視線をリアスさんに移す。

『これを見ても、そんな事が言えるか?リアス?』

――僕達の嫌な予感は当たってしまう

ライザーが、自身の近くに魔法陣を出現させる。それに対して、画面に映る皆は警戒するが、魔法陣から現れたものは、画面の皆だけで

なく、モニターを見ているレイヴエルさんを含めた僕達をも凍りつかせるものだった

そして、その数分後

『……リアス様がリザインなされました。この勝負、勝者ライザー様』

決闘と逆鱗

SIDE イッセー

・・・レーティングゲームから数日経ち、俺達グレモリー眷属は一部を除いて冥界にあるパーティー会場に来ていた。パーティー会場は、かなり広く、大きなシャンデリアが高い天井にいくつもある絢爛豪華な内装をされており、俺達の他にも名立たる貴族の悪魔の人達が多く集まっている。そして、今日の主役達が登場するのを、今か今かと待ち望んで、それぞれ笑顔で談笑していた。会場には何台もカメラも入っており、冥界全土に放送されるそうだ。でも、俺達はそれとは真逆の気持ちだった。俺を含めたみんなの表情は、暗かった。

俺達は、勝てなかった。いや、あのまま行けば勝てた。しかし、ゲーム終盤に俺達の誰しもが予想しなかった事が起き、負けを認めざるほかなかった。あの時の俺達の内を占めていたのは、ライザーに対する激しい怒りと悔しさだった。そしてゲームが終わると部長はすぐに今回の準備の為に冥界に連れていかれた

そんな俺達の元へ、複数の者達が近づいて来た。その先頭に立つ、見覚えのある金髪のツインテールのお嬢様風の子が、俺達に向かって軽くお辞儀をする

「グレモリー眷属の皆さん、こうしてあなた方とお話するのは初めてですわね。まずは自己紹介をさせていただきます。私の名はレイヴェル・フェニックス・・・ライザー・フェニックスの妹ですわ」

ライザー、という名を聞いて、俺達の怒りが一気に膨れ上がる！が、そんな俺達に向かって、目の前のレイヴェルさんは先程よりも深く頭を下げた。突然の行為に、俺だけじゃなくて他の皆も驚く。レイヴェルさんは、頭を下げたまま、言葉を続ける

「兄の、ライザーの所業について、あなた方に謝罪致します。本当に申し訳ございません！あなた方のお怒りは御尤もです。ですので許してくれ、とは申しません。ただ、フェニックス家の者として、どうしてもあなた方に謝りたかったのです」

レイヴェルさん達の後ろに従っていた他の人達も同様に頭を下げた。よく見れば、レイヴェルさんの手は固く握られ、震えていた。それを見て、俺達の怒りは変わらないが、少なくとも今のこの子の前では抑える事にした

「頭を御上げ下さい、レイヴェル様、眷属の皆さん」

朱乃さんのその言葉に、恐る恐る、といった様子で顔を上げるレイヴェルさん。その顔からは本当に申し訳ない、という思いが伝わってくる。着物姿の朱乃さんが、先ほどまでの表情を変え、いつものニコニコ笑顔で言う

「あなた方が謝罪する必要はありませんわ。ですが、身内の者がしでかした事をあなた自らが代わりに謝罪する、というのは、その歳で出来る事ではありません。きっと、あなたは将来素晴らしい人になるでしょうね」

その言葉に、レイヴェルさん達は僅かに安堵した様子を見せ、再び頭を下げた。あいつとは違って、この子はとてもいい子の様だ

「と、ところで、『あの方』のご容態はいかがですか？」

心配そうに聞いて来るレイヴェルさんに、朱乃さんが答える

「心配しなくても大丈夫ですわ。今は治療も終えて、容体は安定しています。ですが、大事を取って今日は自宅で休んでいます。私共の間も付き添っているのです、ご心配せずとも大丈夫ですわ」

それを聞いて、レイヴェルさんは大きく安堵の息を漏らす。レイヴェルさんが言っていた『あの方』は、シルさんやアーシア達のお蔭で傷も完治したけど、体力や精神的な消費が激しかった様で、今はシルさんの家で安静にしている。夕麻ちゃん達はその付き添いで、ここにはいない

そんな時、会場の前の方に赤い魔法陣が現れ、そこから大きく派手な炎が上がる。それと同時に姿を現したのは、忘れもしない、あいつだった！

「冥界に名立たる貴族の皆様！御参集下さり、フェニックス家を代表して御礼申し上げます！」

両手を広げ、会場全体に響き渡るように大きな声でライザーはそう

挨拶する。それに対し、会場に集まった貴族の人達は、盛大な拍手を送った

「ライザー……っ！」

俺は奴の姿を見て、さつきまで抑えていた怒りが抑えられないくらいに沸き起こり、無意識のうちに奴に向かって足を進めていた。が、それは肩を掴まれることで止められた

「我慢するんだイツセイ君。その気持ちはよくわかる、僕達も同じ気持ちだから。でも『今は』我慢するんだ」

今、という言葉強調する木場の言葉に、俺は力を抜いた。というか木場、お前肩を強く掴み過ぎだよ、全く

「すまねえ、サンキュ」

俺がそう言うと、木場は肩から手を離してくれた。

「本日皆様に御出で願ったのは、この私、ライザー・フェニックスと名門グレモリー家の次期当主、リアス・グレモリーの婚約という、歴史的な瞬間を共有して頂きたく願ったからであります」

芝居かかった口調のまま焼き鳥野郎は続ける。何が歴史的瞬間だよ、黒歴史の間違いだろうが

「それでは、ご紹介いたします！我が妻、リアス・グレモリーですー！お前の妻じゃねえよ！と怒鳴りたい気持ちを必死に抑える。我慢だ、今はまだ我慢するんだ！後で思いつきそれを爆発させるんだ！そして、ライザーの隣に魔法陣が出現し、そこから新たな人が現れる

魔法陣から現れたのは、純白のまるでウエディングドレスの様な格好をした部長だった。部長の登場に、会場から歓声や、拍手が舞い起きる

その部長は、俺達を見つけると笑みを向けて来た。しかし、それは何時もの様なものではなく、悲しみの中で無理やりに作ったものだった

ギリッ！！

壊れそうな程奥歯を噛みしめ、手も皮膚が切れそうなくらいに力が入る。耐え、ろ！耐えろ！耐えろ！耐えろ！！もうすぐだ！『あの人』が

言っていたんだ！

『兵藤君、君や君達の怒りや、悔しい気持ちはよくわかる。でもそれは「その時」が来るまで抑えて。君のその思いは、「その時」に思う存分にあいつに向かって解放するんだ。君がそれを出来る様に、君を邪魔する者は僕が払おう。約束する。だからそれまで耐えてほしい』

ゲームが終わって、治療を終えた俺にその人はそう言った。だから今は耐えるんだ！「その時」が来るまで!!!

そして、俺が待っていたその時はやって来た

『グオオオオオオオ!!』

突然、体の芯まで響くような咆哮が聞こえて来た

「な、なんだ今のは!?!」

「一体何事ですの!?!」

「まさか、今の咆哮は・・・!」

その咆哮に、集まっていた貴族の方達は騒ぎ出す。そんな中、今度は天井が綺麗さっぱり無くなり、冥界の紫の空が露わになった。そしてそこには、冥界の空だけではなく、大きな影が見えた

「あれは、間違いない! 【天魔の業龍】ーティアマツトだ!」

「何故龍王が!?!」

貴族の方達は更に騒ぎ出す。そんな中、取り乱していないのは俺達くらいだった。そして蒼きドラゴンはこちらにゆっくりと降下していき、その途中でその背から、1人の人影が落ちて来た。その人影は、まるで羽の様にふわりと会場のだ真ん中に舞い降りた。それは、俺が、俺達が待っていた人だった

天井が無くなり、遮る物が無くなった影響で風が会場に入り込み、その人の白銀の髪と口元を隠すマフラーを揺らす

「な、なんだ貴様は!」

ライザーが突然現れたその人物――シルさんに向かって叫ぶ。しかし、それを無視するようにしてシルさんは部長の方に顔を向け、軽くお辞儀をする

「これはこれは、どうも『初めまして』リアス・グレモリー嬢。あなたのお噂はかねがね。噂通り本当にお美しい方ですね」

「え、あ……」

突然自分に向かって声をかけられた部長は、言葉を上手く発する事が出来ないようだ。でも、何で『初めまして』なんだ？

「き、貴様あ！無視するとはいい度胸だな！衛兵、奴を始末しろ!!」

ライザーは激高してそう命令すると、槍を持った甲冑姿の衛兵の人数が現れ、シルさんを取り囲んで襲い掛かろうとする、が

「……誰に向かって刃を向けているのだ、お前達は」

『っ!?!』

シルさんの隣に舞い降りた蒼い髪の女性、人型になったティアマトさんが低い声を出して衛兵を睨みつける。それによって、衛兵は尻込みし、後ずさる。俺達まで震えてきそうな程の殺気だ

「これはこれは、一体何事かね?」

そこへ一番奥にいた紅髪の男性が歩み寄って来た。

「サーゼクス様!」

そう、その人こそ部長のお兄さんにして四大魔王の一人である【紅髪の魔王】サーゼクス・ルシファー様だった。その後ろには、メイドのグレイフィアさんもいる。魔王様の登場に、会場にいた貴族の方達は幾分か落ち着きを取り戻したようだ

「何故君がこんな所にいるのかな、ティアマト?」

「何、私はただの付き添いだサーゼクス」

サーゼクス様の問いかけに、ティアマトさんは特に表情も変えずにそう答える。そういえばティアマトさんって魔王クラスって言われてるんだったな

「それで君は、何をしにこんな所に来たのかな?」

今度はシルさんに向かって魔王様はそう尋ねる

「僕はただ、噂に名高いリアス・グレモリーの婚約パーティーが開かれ

るというので、見に来たのと・・・少し私的な事ですね」

「私的な事、とは何かな？」

魔王様の質問に、シルさん続きを話す

「実は僕、先日行われたそこにいるリアス・グレモリー嬢とライザー・フェニックスのレーティングゲームを拝見させてもらったんです。あのリアス嬢との婚約を賭けたゲームというのと、リアス・グレモリー嬢の眷属にいるあの二天竜、【赤い龍】ウエルシュドラゴンの宿主がいると聞いて興味を持って見ていたんですよ。途中までは楽しめたんですが、最後のあれはねえ」

と、言いながら焼き鳥野郎にチラリ、と視線を向けるシルさん。

「確かに勝利に貪欲であるというのは大切ですが・・・その手段、そして婚約を賭けたゲームで『人質』を取り、盾に使う。ここにいらつしやる方達であのゲームをご覧になった方々もそう思ったのではないのでしょうか？」

シルさんがそう言うと、会場にいた貴族の人達がザワザワと騒ぎ出した。ああ、そうだ。奴は、あの糞野郎はーーーーー

ーーーーミツテルトちゃんを人質に取ったんだ

ゲームで俺達が奴を囲んだ時、奴の隣の魔法陣から出て来たのは、体のあちこちに火傷を負い、血を流しているミツテルトちゃんだった。奴は、降参しなければミツテルトちゃんを殺すと脅して来た

作戦では、俺達が敵と交戦している間に、夕麻ちゃん、カラワーナさん、ミツテルトちゃん達は、各自が姿を隠しながらバラバラになっ

て敵の『本陣』である新校舎に向かい、プロモーションを行い、合流する、というものだった。ミッテルトちゃんは、隠密行動が得意で、今回の作戦でも一番に昇格して見せると張り切っていた

しかし、ミッテルトちゃんは張り切りすぎたのか、部長が新校舎にいるライザーを屋上に誘い出すよりも大分早く本陣に着いてしまった。そして運悪くライザーに隠れている所を見つかってしまった。元々ミッテルトちゃんはアウトレンジからの攻撃は得意だけど、近距離は苦手。修行はしたけれど、一週間では限界がある。更に相手は上級悪魔のライザー。悪魔の苦手とする光の槍での攻撃も、すぐに回復するライザーには効かなかった

そして、ミッテルトちゃんの奮戦も虚しく、ライザーに敗れた。そして、一定以上のダメージを負い、戦闘不能になったミッテルトちゃんはリタイアとみなされ、転移されそうになった時、ライザーがあらえない行動をとった

なんと、自身が持っていた回復アイテムであるフェニックスの涙をミッテルトに使ったのだ。フェニックスの涙の効果で、リタイアするほどだったミッテルトの傷は癒えた。そして、ライザーは更にありえない行動を取る

フェニックスの涙で傷が癒えたミッテルトを再び攻撃しだしたのだ。それも、ワザと威力を落として、まるで甚振るようにツ！ミッテルトは逃げようとしたが、

そして部長が新校舎にやって来てライザーは部長の挑発に乗って屋上で戦った。その際、ミッテルトはライザーが異空間に閉じ込められていたそう。本当は後でボロボロになったミッテルトを俺達に見せて嗤ってやろうとしてたらしい。どこまでもゲスな野郎だ・・・っ！「確かに、私もあれについては少しどうかと思っていたんだ。リアス達は初心者ながらも素晴らしい立ち回りをして正々堂々と戦い、良い勝負を見せていたというのに、最後のあれは、ね」

魔王様は含みのある笑みを焼き鳥に向ける

「ま、魔王様はゲームの結果を否定なさるのですか！」

焼き鳥が狼狽した様子を見せる。こいつ、あんなことをしておいて

よくそんな事が言えるな・・・！怒りが殺意に代わって体がどうにかなりそうになるのを抑える。まだだ、まだ溜めるんだ！

「いやいや私が口を挟めば、レーティングゲーム自体が存在意義を失う。それに事情が事情だ。旧家の顔も立たないだろう？」

と、相変わらず笑顔で話す魔王様。でも、やっぱり魔王様もあのゲームには不満っぽいな

「おっと、話が逸れてしまったね。それで君の私用とは何なんだい？」
「実は最近、酷く退屈をしております。何か面白い事を求めていたんですよ。どうでしょう、魔王サーゼクス・ルシファー殿・・・僕と賭けをしませんか？」

『っ!?!』

再びざわつく会場。そんな中、シルさんに向かって貴族の一人が叫ぶ

「貴様！魔王様に賭けを持ちかけるなど、一体何様のつも・・・」
「黙れ」

しかし、ティアマツトさんの殺気のこもった言葉と睨みに、言葉を詰まらして、顔を青くした。他も皆さんも同様に黙り込んだ。今のティアマツトさんは、修行の時よりも怖いな

「賭け、とは一体どんな事をするのかな？」

「それはそこにいるライザー・フェニックスと・・・あそこにいるリアス嬢の眷属であり、今代の赤龍帝であるゲームで見られなかった直接対決、一騎打ちをしてもらい、どちらが勝つかを賭けるというものです」

シルさんが俺に目を向ける。これがシルさんが言っていた「その時」か!!

それを聞いて魔王様は顎に手を当てる

「ふむ、確かにそれはいいかもしれないね。ドラゴン対フェニックス、可愛い妹の婚約パーティーの最高の催しになるだろう。皆さんはどうですか？私は見てみたい、ゲームでは見られなかった伝説の者同士の戦いを」

その言葉に、否定の声は上がらなかった。魔王様は再びシルさんに

目を向ける

「それで、賭けというのだから何かを賭けるのだろうか？君は何を賭けるというのだい？」

魔王様の質問に、シルさんは驚くべき答えを返した

「そうですね。では、僕は自分の……『オッドアイの銀猫』の首を賭けましょう」

『っ?!?!』

シルさんの言葉は会場にいるほぼ全員を驚愕させた！

『オッドアイの銀猫』だど?!』

「あれが魔王や神クラスと称されるあのシルバーキャット……!」

「しかも本当に人間だったのか!」

他の皆さんはシルさんの正体が『オッドアイの銀猫』という事に驚いているが、俺達は自らの首、つまり命を賭けるといふ事に驚いていた

それはシルさんの隣にいたティアマツトさんも同様だった

「お、おい！聞いてないぞそんな事はシリゆ!?モガモガッ!!」

「少し黙っててねティア……それでしようか、魔王殿？伝説の者同士の一騎打ちに、自分で言うのもなんですが、魔王や神クラスと名高いこの僕の首を賭けての大勝負。これ以上ない程の催しになるのではないかな？」

シルさんは騒ぐティアマツトさんの口を塞いだままそう尋ねる

「……良いだろう。その賭けに乗ろうじゃないか」

魔王様は笑顔でOKした。会場は今まで一番ざわつく

「ふむ、では私は何を賭ければいいかな？賭けなのだから『オッドアイの銀猫』の首に釣り合うような対価が必要だろう？それと、君はどちらに賭けるのだい？」

「僕はそこにいる赤龍帝君にですよ。連れもドラゴンですし、何と言っても、あの伝説の二天竜の片割れ何ですから。それと、賭けの対価ですが、そうですね……では、僕が賭けに勝った場合は僕が賭けた赤龍帝君の願いをあなたが叶えてもらえますか？」

「それで良いのかい？君の方が損をしているのでは？」

「いえいえ、伝説の者同士の対決を見られるのですから、僕の方はそれで満足です。それに今回の話はこちらからお願しているのですし。ですので、頑張った赤龍帝君にご褒美をあげた方が良いでしょう」

っ！し、シルさん！あなたは・・・！

「・・・分かった、ならば私の賭けるのもはそれにしよう。そして私はライザー君の方に賭けさせてもらうよ。そういう訳でライザー君、私達の前でその力、今一度見せてもらえるだろうか？」

魔王様の願いを聞き、焼き鳥は気持ちが悪く不敵に笑う

「いいでしょう。魔王サーゼクス様に頼まれたら断る必要はありません。魔王様に勝利を捧げます！そしてこのライザー、身を固める前の最後の炎をお見せしましょう！」

奴は俺の事を見下した目で見て鼻で笑う。でも、そんな事は今はどうでもいい。それよりも俺はシルさんに向けて感謝の言葉を述べたかった。俺達の為に修行をつけてくれただけでなく、俺達の屈辱を晴らす為に自らの命まで賭けてここまでしてくれただ。いや、いくら感謝の言葉を告げても足りない。だから、せめて俺は――

「さて、赤龍帝君。君の力、そしてその身に宿る伝説のドラゴンの力を『存分に』見せて、僕達を楽しませてね」

シルさんは俺に向かって笑顔でそう言う。ええ、見せてやりますよ、シルさん。あなたにも、部長にも、朱乃さん達にも、ここにいる全ての人達に！

――全力で、必ず勝って来ます!!

俺は心の中でそう誓った



会場に急遽作られた空間。その周囲を会場にいる多くの悪魔の人達が好奇の視線で見守っている。しかし、ここにいるほとんどの人は、俺じゃなく焼き鳥の方が勝つと思ってるようだ。部員メンバーは部長と共に席に座っていた。部長の隣には魔王様もいらっしやる。シルさんは、そこから少し離れた所にティアマツトさんと座っていた。二人が座っている周りは人がおらず、他の人達は離れた所から二人の事を見ている

そして俺と焼き鳥は作られたバトルフィールドの中央で対峙していた。俺は既に【赤龍帝の籠手】を出している。ライザーは、その顔に嘲笑を張り付けていた

「開始してください」

バトル開始の合図が告げられる。もう引き返す事は出来ないし、これで誰も邪魔は無い。ははっ、シルさんの言う通りになったな

炎の翼を広げ、俺を見下す様な目をした焼き鳥は、俺の籠手を指さした

「お前の能力は既に割れている。自分の能力を倍にしていく【神器】セイクリッド・ギア、【赤龍帝の籠手】。極めれば神や魔王に匹敵する力を持っている十三種の【神滅具】の一つ。だが、お前には宝の持ち腐れだ。倍加する前にさっさと倒せばいい」

焼き鳥が何かほざいてるが、よく聞こえない。というか聞きたくない。皆、もういいんだよな？もう我慢しなくていいんだよな？

部長達の方へ顔を向ければ、俺の思ってる事が伝わったのかしっかりと頷いてくれた

「とんだ所でパーティーの邪魔をされたが、まあいい。俺が勝てば魔王様に勝利をもたらすという栄誉が・・・」

焼き鳥がベラベラとしゃべり続ける。俺はそれを無視してシルさんに目を向ける

顔を向ける俺に、真っ直ぐ目を向けたシルさんのその口が動いた

「……あとは君に任せたよ、兵藤君」

ドクンッ!

それを受けた俺は体の芯から震えてくる。な、何だ、この震えは? 「ん? どうした震えているのか? ははははっ! 怖気づいたのか! まあ、仕方がないな。俺は上級悪魔で不死鳥と称えられるフェニックス! 貴様の様な虫けらが、絶対なる力を持つこの俺を前にして恐怖を抱くのは仕方のない事だ」

恐怖? . . . いや、違う。これが恐怖から来る震えじゃない。この震えは一体――

『それは武者震いだ、相棒』

震える手を見つめている時、ドライグの声が頭に響き渡る

武者、震い?

『ああ、相棒はシルという者に言われてから、その怒りをずっと溜め込んで来た。そして、今その怒りをぶつける相手が目の前に現れた事で、歡喜に体が打ち震えているという訳だ』

歡喜 . . . ああ、そうだな。言われて分かったぜ。俺は今、怒りだけじゃなくて嬉しいんだ。あいつをぶっ飛ばせる事に! それに、体がすごく軽い。あと、力がドンドン溢れてくるみたいな感じがする

『相棒が奴に向ける怒りが、相棒の力を引き出しているんだ。純粹な怒りは、ドラゴンの力を引き出す真理の一つだ。そして、その強い思いはセイクリッド・ギアの力の糧となる』

なるほどな . . . じゃあ、そろそろあのベラベラクツチャベってる野郎をぶっ飛ばすか。なあ、ドライグ!!!!

『応! 俺もティアマットにさつきから色々と言われているからな!』

そうかよ! じゃあ行こうぜ相棒!!

『プロモーション【女王】!! そして . . . !』

【Explosion!!】

さつき部長から昇格の許可をもらった俺は、最強の駒である【女王】に昇格し、バトルフィールドの準備をしている五分間の間と、奴がベラベラ喋っている間にしておいた四十回の倍加の力を開放する！俺の全ての能力が膨れ上がった！

「行くぜ焼き鳥野郎おお!!」

俺は全力で目の前の焼き鳥野郎に向かって突進した。その速度は、修行の時なんかよりも遥かに速かった。焼き鳥は、そんな俺の速度に反応できず、その場に立ち尽くしたままだった。そしてその勢いのまま俺は奴の顔面を殴りつけた

ゴキツ!!

「う、おおおおおおらああああ!!」

籠手越しに、何かが碎ける感触が伝わるが、そんな事お構いなしに千切れるくらいに腕を全力で振りかぶる！

ドオンツ!!

奴はそのまま吹き飛んでいき、フィールドの端までぶっ飛んで行き、大きなチエスの石像にぶつかってそれを破壊した！こんなもんじゃ終わらせねえ!!

「グッ、よくもやってくれたグアツ!」

瓦礫の中から立ち上がって来た焼き鳥に今度は飛び蹴りをかます！そして再び吹っ飛んだあいつに向かって、手のひらに集めた魔力の塊を殴り飛ばす!!

「ドラゴン・ショットオオオオ!!」

ギユオオオオン、ドカアアアアンツツ!!

打ち出した魔力弾は巨大な帯となって奴に襲い掛かり、着弾するとバトルフィールド全体を震わせるほどの凄まじい爆発が起きた！衝撃波と爆風が俺の所まで来る

やった、とは思わないし、終わらせない。こんなもんじゃ全然足りない!!

そして、爆発で起こった煙が晴れると、バトルフィールドの三分の一がボロボロになっていた。そして、奴は・・・

ボワウツ!

奴を探していた時、崩れた瓦礫の山が吹っ飛び、大きな炎柱が上がった。そして、その炎の中から奴が姿を現す

「この糞ガキイイイ!!!よくもやってくれたなあああ!!!」

その顔を憤怒に染め、俺を睨む焼き鳥。流星にあれじゃあ、まだ倒れないか・・・なら、今度はあの時使えなかったもう一つの力を使う!

俺はゲームの時にもポケットに入れていた、物を取り出す。それは、中に透明な液体が入った小瓶だった

「死ねえええ!!」

奴は怒りのままに俺に向かってその体にやばい位の炎を纏わせて突進してくる。速い、けど!

「木場の方が全然速いんだよ!」

俺は奴の突進をその場から上に飛び退く事で躲す。そして空中で小瓶の蓋を開け、その中身を奴に振りかけるのと同時に、修行で身に付けた新たな力を開放する!

「【赤龍帝の籠手】第二の能力! 【赤龍帝からの贈り物・ブーステツトギア ギフト】!!」

『Trans fer!!』

宙に浮いた液体に向かってその力を発動する!液体は輝き、奴の全身に降りかかった

ジュワアアアアア!!

水が高温の熱で蒸発した時に出る音を最大にしたような音が響き渡る。だがそれは、焼き鳥の炎で先程の液体が蒸発した音ではない

「うがあああああああツツ?!?!」

奴は全身から煙を立ち昇らせながら地面をのた打ち回る。焼き鳥の全身は、まるで焼け爛れた様になっており、体から炎が上がるが、それはぐにやぐにやとうねり、傷は中々回復しない。周りで見えていた悪魔の人達はそんな奴を見て悲鳴をあげる

何故奴がこうなったのか、それは俺がさつきかけた小瓶の中身が原因だ。その中身は聖水。悪魔が触れると火傷を負った様になるが、上

級悪魔にはあまり効果が無いとされてる物だ。なら何故奴はあそこまであんな事になっているかは、修行で新しく解放された左腕の【赤龍帝の籠手】の力のお蔭だ

【赤龍帝からの贈り物】その力は、倍加した力を他の者、もしくは物に譲渡することが出来るというものだ。俺はそれを奴に振りかけた聖水に使い、その効果を倍増させた。上級悪魔でも無視できないほどにな!

『相棒、効果を高められた聖水が、奴の体力と精神力を著しく消耗させた。いくら灰の中から復活出来るフェニックスでも、一度に大量の体力と精神を失えば・・・精神だけはそう簡単には回復出来ない』

精神、心までは不死身じゃないって事だ。修行の時、シルさん達に教えてもらったな

『不死鳥と言われるフェニックスを倒すためには、神や魔王クラスの圧倒的な力で倒すか精神の限界まで倒し続けるか』

ああ、だから俺達は奴を倒す為の秘策として、新しい力と聖水を使って奴を倒そうとしたんだ。ようやく使う事が出来たぜ。聖水はアーシアが作ってくれた。帰ったらお礼を言わなくちゃな

シユウウウウウ・・・

焼き鳥の体から上がる煙が徐々に弱まっていた。そして、後に残ったのは服も体もボロボロの奴のみ。さっきの状態より幾分かマシになったが、奴はちゃんと回復が出来ていなかった

奴はボロボロのまま立ち上がり、俺に向かって殺気を放ちながら睨みつける

「このっ、糞餓鬼がああああ!!!」

そう言っただけは体から勢いよく炎を噴き上げる。まだこんな力が残ってるのか。クソッ、腐っても上級悪魔って事かよ

『相棒』

どうしたドライグ?

『お前が油断をしなければ奴に勝てるだろう。だが・・・』

何なんだよ・・・まさか、もしかしたら俺が負けるかもって言うの

か？

『いや、そうじゃない。相棒、さっき言っていたフェニックスを倒すもう一つの方法だ』

魔王か神クラスの力か？でも、俺じゃそんなのは……

『出来る』

っ!!

『今の相棒ならば……短い時間だが、一度だけ使う事が出来る。だが、それを使えば魔王や神と同等の力を出せる。が、その力を使わずとも、勝つ事は出来る……どうする、相棒』

んなもん決まってるじゃねえか！俺はさっき誓った、『全力で、絶対に勝つ』と!!俺は、俺の全てを出して奴を倒す!!だから力を貸してくれ、相棒!!

ドライグの問いかけに、俺は即答した。俺の言葉に、ドライグは嬉しそうな声色を発する

『はははっ！よく言った！ならばここに居る全ての者達に見せつけてやれ。お前と俺の、「ドラゴン」って奴の力をな!』

応ッ!!

「行くぜ！輝きやがれ、オーバー・ブーストオオオ!!」

俺は【赤龍帝の籠手】を天高く掲げた

『Welsh Dragon over booster!!』

掲げられた籠手の宝玉が赤く輝き、俺は真紅のオーラに包み込まれた。そして、俺の体は籠手と同じ真っ赤なドラゴンを模した全身鎧に覆われていた

お前の力が流れ込んでくるぜドライグ!

『ああ、ただし十秒だ。それ以上はお前の体が持たない』

ああ、それだけあれば十分だ!

「鎧!?何なんだそれはっガッ!」

驚愕している奴が全てを言い終える前に、俺は背中についているブースターを吹かし、奴に一瞬で近づいて殴りつける。十秒しかないんだ。一秒も無駄には出来ない!

『X』

制限時間のカウントが鳴る。俺は殴りつけた奴の胸倉をつかんで地面に叩き付ける。

「カハッ!」

奴は口から血を吐き出すが、お構いなしに顔面を殴りつける

『IX』

「うおおおお!!!」

俺はとにかく殴って、殴って殴りまくった。一切の容赦なく殴りつけた。みんなが受けた怒りの分も俺が奴を殴りまくった

「ち、調子にのるなあああ!!」

焼き鳥は殴られながらも俺に向かって特大の炎を放ってくる。俺は腕をクロスする事でそれをガードする、が少し吹き飛ばされてしまった

『VIII』

鎧のお蔭か、あれだけの炎を喰らってもダメージは無く、鎧にも傷一つ付いていなかった。反対に奴はさっきの攻撃でボロボロ、顔なんて酷い事になっていた

「お、俺の攻撃をあれだけ至近距離で喰らったのに、傷一つないだ?! 一体何なんだ! その鎧は!!」

「答える義理はねえが、特別に答えてやる。これは龍帝の力! 『禁手・バランスブレイカー』【赤龍帝の鎧 ブーステット・ギア・スケイルメイル】!! お前をぶっ飛ばすための力だ!! 止めたきや魔王様にでも頼むんだな!!」

『VII』

そう言いながら、奴に向かって再び突進する。

「くっ、嘗めるな!!」

奴はいくつもの炎を打ち出してくるが、俺はそれに構わず突っ込む!

『VI』

「そんなチンケな炎で俺がやられる訳ねえだろうがアアアア!!!」

背中ブースターを限界まで吹かし、奴の体のど真ん中を深く殴りつける

「ゴハッ!？」

体をくの字に折り曲げ、さつきより多くの血を吐く

『V』

「白音ちゃんが言っていた、打撃は体の中心線を狙って、的確かつ挟り込むように打つんだと！」

今度は反対の手で顔面を殴り飛ばす

「糞餓鬼があああ!!」

鼻血を吹き出し、吹き飛ばされながらも俺に向かって炎を飛ばしてくる焼き鳥

『IV』

「木場が言っていた！視野を広げて、相手と周囲を見ろと！」

俺は最短距離で奴に向かって再び突進する

「朱乃さんが言っていた！魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めて、意思を集中させて、魔力の波動を感じればいいと！こんな俺でも感じられましたよ朱乃さん！」

至近距離で体から集めた魔力を奴にぶつける。

ドオオオン!!

奴はそれをもろに喰らって地面に叩き付けられ、作られたフィールド全体に壊れるくらいに大きく罅が入る

『III』

気が付けば、カウントは残りあと少しまでになっていた。修行でみんなに習った事を奴にぶつけた。でも、まだ全部じゃない

俺はゆつくりと地面に降下し、奴を見る。先ほど出来たクレーターの真ん中にもう立っているのがやっとの焼き鳥がいた。もう炎も上からず、傷も治っていないかった

俺は構えを取り、最後の一撃を与える為に力を溜める。俺が奴への照準を定めると、焼き鳥は慌てふためく

「ま、待て！わ、分かっているのか!?!この婚約は悪魔の未来の為に必要……」

「うるせえ」

俺が低い声で奴の言葉を遮り、そのまま続ける

「お前は・・・卑怯な手を使って仲間を傷つけ、悲しませた」

『うちの事は・・・いいつす、から。こいつを・・・倒し、て・・・』

ボロボロになりながらも、自分に構わずライザーをうてと言う。その時のミツテルトちゃんの顔、涙が脳裏に焼き付いている。夕麻ちゃん達から聞いた話では、ゲームが終わり目が覚めた後も、ミツテルトちゃんは自分の事を責め続けているそうだ。そんな事はない！ミツテルトちゃんは、修行で何だかんだと文句を言いながらも、キチンとメニューをこなしていたし、今回のゲームでも、勝つ為に張り切っていた。その頑張りを台無しにしたのは、全部目の前の層のせいだ！

「そしてお前は部長も泣かせた！泣いていたんだよ!!あの時も、そしてさつきも!!俺は、俺達はあの人を泣かせ、仲間を傷付けたお前を絶対に許さない!!俺がためえを殴る理由はそれで十分すぎるんだよオオオオ!!!」

ドコンッ!!

俺の渾身の一撃を奴の顔面に叩きこむと、焼き鳥は吹っ飛んで壁に叩きつけられた。それと同時に、俺が纏っていた鎧は赤い粒子となって消えた

奴はメリ込んだ壁から崩れ落ち、ピクリとも動かなくなった

『そこまで、勝者、兵藤一誠!』

俺は皆に向かって腕を高く掲げた

やりましたよ、部長、皆、シルさん。俺、やりました!

銀猫と正体

顔に吹き付ける冷たい風が、心地良い

人間界の夜頃、僕は冥界の空を飛んでいた。いや、それは少し間違
いかな

『シル、あと十分ほどで着く。丁度パーティーが始まる頃には着けそ
うだぞ』

「そっか。でも態々ついて来なくても良かったのに、ティア」

そう、僕は今ドラゴンの姿になったティアの背中に乗っている。僕
が一人で行こうとしたところに、ティアが強引に自分も一緒に行く、
と言って聞かなかったからこうなりました

『今のシルを一人で行かせたらいけない気がしてな』

そんなに心配しなくても大丈夫だよ・・・多分、きっと

『ゲームが終わった時は怒りがあるというのは分かったが、抑えてい
た。だが今日、シルが少し出かけて帰って来た時、怖い顔をしていた。
今も殺気が少し漏れているし・・・なあ、一体何があったのだ？』

何があった、か。そうだなあ・・・

「・・・一言、言わせてもらおうとしたら・・・彼には報いを受けてもら
う、って事かな」

ブルリッ!?

シルから発せられた冷たい声と強大な殺気で、ティアマットはその
大きな体を震わせた。冥界の空に向けるシルの瞳の色は、怒りに燃
え、凍てつくような色だった

『む、見えて来たぞシル。あそこがパーティー会場だ』

それから少しして、ティアが下の方を指さす。その先には大きな建
物が見えた

『さてと、まずは派手にかますぞ』

ティアはそう言つて、大きく息を吸う。僕はそれを見て慌てて耳を塞ぐ

『グオオオオオオ!!』

大気がビリビリと震えるほどの咆哮。せめて予告はして欲しかったよ・・・まあ、気を取り直して、と

パチンツ

僕が指を鳴らすと、パーティー会場の屋根が綺麗さっぱり無くなった。見れば、ティアの姿を確認したパーティー会場の人達が慌てふためいている。それを見て、ティアは嬉しそうに笑った。全くティアは・・・

ティアがゆっくりと天井が無くなった会場へとゆっくりと降下していく。そしてある程度の高さまで来た時、僕はティアの背から飛び降りる

地面に着く前に、風を操つてゆっくりとパーティー会場の丁度ど真ん中に降り立った。それにしても、凄い人だなあ。まあ、上級悪魔同士の婚約パーティーでも、花嫁（一応）の方は魔王の妹だから、貴族達が来るのは当然か。あ、カメラまで来てる。何気に僕ってテレビに映るのってこれが初めてだったりするんだよねー

「な、なんだ貴様は!」

ライザー・フェニックスが僕に指を指してそう叫ぶ。が、僕はそれを無視してその隣にいるリアスさんに挨拶する。リアスさんは純白のまるでウエディングドレスの様な格好をしており、一見するととても綺麗だった。その顔に憂いの色が無ければ

「これはこれは、どうも『初めまして』リアス・グレモリー嬢。あなたのお噂はかねがね。噂通り本当にお美しい方ですね」

「え、あ・・・」

突然の事に、リアスさんは理解が追い付いていないのか、上手く言葉が発せていなかった。まあ、丁度良かったかな・・・というか、今の発言をしてから何か上からどこぞのドラゴンさんの言いようもない視線を感じるんだけど

「き、貴様あ!!無視するとはいい度胸だな!!衛兵!奴を始末しろ!!」

つと、囲まれてしまった。取り敢えず、気絶させよう・・・としたら僕の隣に人型のティアが舞い降りた

「・・・誰に向かって刃を向けているのだ、お前達は」

ティアの殺気を受けて、衛兵の人達は尻込みをする。というかティア、少し殺気を抑えて。近くに兵藤君達がいるんだからさ

「これはこれは、一体何事かね?」

と、そこへリアスさんと同じ紅髪を持った魔王サーゼクス・ルシファーが僕達の元へ歩み寄って来た

魔王の登場に、会場にいた貴族の者達は幾分か落ち着きを取り戻し、事の成り行きを見守る事にしたようだ

「何故君がこんな所にいるのかな、ティアマツト?」

「何、私はただの付き添いだサーゼクス」

ティアは魔王の問い落ち着いた様子で答える。つて逆の気もするけどね

「それで君は、何をしにこんな所に来たのかな?」

今度は僕に向かってそう尋ねてくる魔王様。今日来たのは僕の『私情』だ

それから僕は先日のゲームの事をここにいる者達に聞こえるように話していく。やはりあのゲームでライザー・フェニックスが行った事にはここに集まった者達も不満だったようで、口々に話した。そして魔王サーゼクスも、不満そうにとれる発言をしたところで、いよいよ本題に入る

「おっと、話が逸れてしまったね。それで君の私用とは何なんだい?」

さあて、いっちょ驚かせてみようか

「実は最近、酷く退屈をしております。何か面白い事を求めているんです。どうでしょう、魔王サーゼクス・ルシファー殿・・・僕と賭けをしませんか?」

『っ!』

僕の発言に、周りの者達が騒がしくなる。まあ、それはティアが殺気+睨みを効かせる事で静かになったけど
「賭け、とは一体どんな事をするのかな?」

興味深そうに聞いて来る魔王に、僕は2人の人物に視線を向けながら説明する

「それはここにいるライザー・フェニックスと・・・あそこにいるリアス嬢の眷属であり、今代の赤龍帝であるゲームで見られなかった直接対決、一騎打ちをしてもらい、どちらが勝つかを賭けるというものです」

その内の一人、兵藤君に視線を向ける。彼の瞳はヤル気に満ちていた

そして魔王もそれに対して肯定的な言葉を漏らし、会場にいる者達の興味をそそるような発言をする。それに異を唱える者はいなかった。それに満足したように、魔王は僕に視線を向ける

「それで、賭けというのだから何かを賭けるのだろうか？君は何を賭けるといふのだい？」

「そうですね。では、僕は自分の・・・『オッドアイの銀猫』の首を賭けましよう」

『?!?!』

僕の発言に、会場にいる僕を除いた全ての者達が驚愕する。それは目の前にいる魔王も同じようで、少しばかり目を見開いていた

殆ども者達は僕の正体が『オッドアイの銀猫』という事に驚いており、対して一部の人は首を賭けるといふ発言に驚いているようだ。そして、それは隣にいる僕の連れも同様だったようで・・・

「お、おい！私はそんな事聞いてないぞシリゆ!?モガ、モガモガッ!!!」
騒がしくなったティアの口を塞ぐ。そう、ティアや皆には賭け等の事は告げていない。こうなるから一人で行こうとしたんだけどねー

「少し黙っててねティア・・・それでしようか、魔王サーゼクス・ルシファー？伝説の者同士の一騎打ちに、自分で言うのもなんですが、魔王や神クラスと名高いこの僕の首を賭けての大勝負。これ以上ない程の催しになるのではないかな？」

こう言えば、娯楽に飢えている悪魔達は否定するなんて選択肢は無くなるだろう。それどころか、逆に乗り気になる。現に、集まっている貴族達の多くの目はそんな感じだった。まあ、もし反対する者が出

てきても手はあるけどね・・・あいつの逃げ道をドンドン塞いでいく
「・・・良いだろう。その賭けに乗ろうじゃないか」

少し考えてから魔王は僕との賭けを承諾する。そしてそれを聞き
一層沸き立つ会場

そして僕は兵藤君が勝つ方に賭け、僕が賭けに勝った場合は魔王が
兵藤君の願いを叶える、という物にしてもらうようにした。それから
すぐに、魔王の指示で両者が戦うフィールドの準備が進められた

そして五分程して作られたバトルフィールドの中央で、ライザー・
フェニックスと兵藤君は対峙していた。僕達はフィールドの外から
これから起こる戦いを見守る。先程からチラチラと離れた所にいる
リアスさん達や悪魔の貴族の視線が僕達に向けられる。カメラも
フィールドを映す物を除いた数台はこちらに向けられていた
「むう」

ティアが頬を膨らませ、怒った様子で横目に僕の事を少し睨む。
さっきの僕の発言からずっとこんな調子だ。まあ、後でちゃんと謝ろ
う

『開始してください』

そして数多くの視線を浴びる中、いよいよ勝負の幕が切って落とさ
れた

しかし、いきなり両者が激突する訳ではなく、ライザー・フェニッ
クスが一方的にペラペラと喋りだした。その様子や言葉から、完全に
兵藤君の事を嘗めきっているのか、フェニックスの力を過信している
のか。それとも両方かな

「やはりこの勝負はライザー殿の勝ちでしょうな」

「左様、いくらあの伝説のドラゴンの力を宿していると言っても、どう
やらあのリアス殿の【兵士】はついこの間転生したばかりと聞きまし
たぞ」

「しかも、あの【兵士】はゲームでは殆ど困しかしておらんかった」

「それならば勝負は決まったも同然ですな」

と、観客の貴族達は口々にそんな事を言い合う

だが、彼らは知らない。彼がどれほどの怒りを買ったかという事を。そして、彼はこの戦いで身を持って知るだろう。決して触れてはいけない、逆鱗に触れた代償がどれほどのものかを

さあ、役者も舞台も共に整った。もう君を邪魔するものは何もないその時、兵藤君が僕の方に顔を向けて来た

「あとは君に任せたまよ、兵藤君」

呟くような僕のその言葉が届いたのか、いよいよ兵藤君が動き出した

始まった戦いは、この会場にいる全ての者達を震撼させた

一方的、蹂躪、ワンサイドゲーム。そんな言葉がピッタリの展開だった

誰もが予想しなかった展開に、多くの者達は言葉を失っていた。僕もかなり驚いている。兵藤君は、限界を超えた力で彼を終始圧倒し続けた

さらに、まだ未完成のようだけど、禁手化に近い力を見せ、最後に一瞬だけ最上級クラスの一撃で不死と謳われるフェニックスを沈めた。その前に喰らった聖水の攻撃などで疲弊していた所にあんな攻撃をもらえば、立つ事は不可能だろう。現に彼は、最後の一撃をもらって地に伏せたまま気絶しているようだ

流石主人公。見せてくれるね。もう一つの方も十分見させてもらったし

「ま、まあ奴にしてはよくやったものだな。私の特訓のおかげだが、す、少しは褒めてやろう」

腕を組んで観戦していたティアがそう言葉を漏らす。ツンデレですか？まあいつか

「さて、それじゃあとつとこのパーティーを終わらせようか」

僕は席を立ち、魔王の元へと向かった

「という訳で、賭けは僕の勝ちですね魔王サーゼクス・ルシファー？」
「ああ、そのようだね」

勝負が付き、僕はティアと共に魔王の元へ来ていた。そこへ、バトルフィールドから戻って来た兵藤君もやって来た。意識のないライザー・フェニックスは、そのまま担架で医療室へと運ばれて行った。——その時、誰にも気がつかれない様にある事をしてにおいて「赤龍帝君、先の勝負は本当に素晴らしかった。僕もとても楽しめたよ。さて、勝った君には魔王に好きな物を要求できるよ。ですよ、魔王殿？」

僕はそう言うと、サーゼクス・ルシファーは頷いて兵藤君へ目を向けた

「では、賭けの清算をしなければいけないね。さて、ドラゴン使い君君は何を望むんだい？爵位、それとも絶世の美女かい？さあ、言ってみたまえ」

会場中の全ての視線が集まる中、兵頭君は真つ直ぐに魔王に目を向けた

「俺の願いは部長を、いえ……リアス・グレモリー様を返してください」

魔王を前にしての迷いのない兵藤君の願い。だが、それを聞いて周りが騒がしくなる

そんな中、二人の人物が人ごみの中から前に出て来た。一人はリアスさんや魔王と同じ紅髪の男性。もう一人は金髪の男性だった

「その願いは聞き入れられない。この婚約は、我がグレモリー家とフェニックス家の間で正式に取り決められたものだ。パーティーの余興のゲームの賞品で我々貴族同士の契約を白紙にする訳にはいかない」

紅髪の男性、現グレモリー家当主で、リアスさん達の父親であるグレモリー卿がそう言葉を発すると、兵頭君達の顔が曇る。さて、それじゃあそろそろ最後の締め括りに入ろうかね

「先日行われたレーティング・ゲームで、リアスが勝った場合は婚約を破棄、ライザー君がゲームで勝った場合、婚約という事にリアスも承認しているのだ。それを覆すなど・・・」

「へえ、それじゃあ可笑しいですねー」

ワザとらしく声をあげてグレモリー卿の言葉を遮る。それに対して、グレモリー卿は眉を顰め、こちらに顔を向けた

「おっと、失礼。つい思った事が口に出てしまいました」

「一体何が可笑しいというのだ、シルバーキャット」

そう聞いて来るグレモリー卿だけでなく、全員に聞こえるように僕は少し声を張って言う

「今、貴方はこう仰いましたよね？リアス・グレモリー嬢とライザー・フェニックス殿の両者でレーティング・ゲームを行い、リアス・グレモリー嬢が勝った場合は婚約を破棄、ライザー・フェニックス殿がゲームで勝った場合は婚約、と」

「ああ、その何処が可笑しいというんだ」

グレモリー卿だけでなく、会場にいる者達の殆どが、僕が何を言いたいのか分からずに怪訝な表情になる。そんな中で、兵頭君達は何かを期待するような表情になっていた

「もうじき分かりますよ。ここにいる全ての人達に、ね」

さて、そろそろなんだけど・・・

そう思いながら、僕は会場の扉へと視線を向けた

ドオオン！

『!?!』

シルがそんな事を思っていたその直後、突然会場にある一つの大きな

な扉が吹っ飛んだ。そしてそこから出てきたのは……

「クソガキイイイイ!!!」

全身から炎を滾らせ、これ以上ない程の憤怒の表情を浮かべたライザー・フェニックスだった。

「お兄様?!」「ライザー!?!」

会場にいたレイヴェルさんと金髪の男性、フェニックス卿がその姿を見て驚きの声を上げる。ライザーの眷属の者達も、声は上げていないが、同じく驚いていた

ライザー・フェニックスはシル達の方、正確にはイツセーの姿をその瞳に捉えると、憤怒の表情のまま全身に炎を纏い、歩みを進める。そんなライザー・フェニックスを見て、周りにいた貴族の者達は距離を取る中、一人彼の前に立ち塞がる者がいた。両手を広げ、ライザー・フェニックスの前に立ったのは、その実の妹レイヴェル・フェニックスだった

「お兄様!先程あれだけダメージを受けたのですから、すぐに動かれません……」

「邪魔だ、どけ!」

「キャッ!?!」

「おっと」

ライザー・フェニックスは心配する妹を無理やり退かす。それによってレイヴェルはバランスを崩し、倒れようとした所をシルが優しく支えた

「大丈夫?」

「あつ……え、はい!」

顔を覗き込んで、そう問いかけられたレイヴェルは、何とか声を絞り出す事が出来た。シルはそれを確認すると、レイヴェルをちゃんと立たせ、イツセーに向かって行っていったライザーの前に移動する

「全く、女の子に対してきつきみみたいな仕打ちはどうかと思うよ?それと、一応聞いておくけど一体何をするつもりなのかな?」

立ち塞がるシルに対し、ライザーは眼光を鋭くし、体に纏う炎の勢いを増した

「どけ、お前に用はない！俺はあのクソガキをぶっ殺してやる！邪魔するならお前から消し炭にしてやるぞ!!」

殺気を出して威嚇するライザーに、シルは笑顔のまま口を開く

「へえ、それは面白そうだ。じゃあ、やって見せてよ・・・もつとも、『君ごとき』の炎で火傷を負う事が出来るかどうかも怪しいけどねえ」
ピキピキピキッ!

ライザー・フェニックスは、笑顔で言うシルの言葉に額に青筋を浮かべる

「ならば、貴様から死ねえええ!!」

「止めろライザー!」

そう言ってフェニックス卿の制止の声を無視してシルに殴りかかるライザー

炎を纏ったライザーの拳が構えも何も取っていないシルに直撃し、大きな火柱がシルを包み込む。周りにいる者達は、即座に防御魔法陣でその火柱から生じる熱風から身を守る。

「ははははっ！何が『オッドアイの銀猫』だ。所詮は人間、この業火では骨も残っていないだろう!」

火柱を見て高笑いを上げるライザー。周りにいる殆どの者達もライザーと同じ様な事を思っていた。フェニックスの業火は、全てを燃やし尽くす程強力だ。それをもろに喰らえばただでは済まない。いくらあの魔王クラスと言われている『オッドアイの銀猫』といえど、人間では生きてはいないだろう、と。それとは反対に、イツセー達はジツと黙ったまま、いまだに上がり続ける火柱に目を向けていたそんな時、

ゴクンッ

まるで水を飲むような音が会場にいる者達の耳に聞こえてきた

ゴクン、ゴクン

さらに鳴る音。誰もが何の音かと思い始めていた時、異変に気が付いた

「お、俺の炎が小さくなっているだど・・・！」

ライザーの言う通り、音が鳴る度に激しく上がり続けていた火柱が一回り、また一回りと小さくなっていった。そして、とうとう人型程の大きさまで火柱、とは言えないほどになった炎。その炎が、何かに吸い寄せられるように少し上に向かって集まっていき、それによって炎に包まれていたものが見えるようになる。順に、足、膝、腹、胸と見えていった。そして、炎はマフラーに隠れている口元へと消えていき、その人物の姿が露わになる

ゴックン

「ふう、ぐちそうさま」

そう言ったシルの体には、火傷どころか服に焦げ目すらなかった。

「無傷だど!?馬鹿な!?しかも俺の業火を食べただど！」

「フェニックスの炎を食べたのは初めてだけど、あんまり美味しくないね。やっぱり食べるなら、ティアの業火が一番かな？」

驚愕の声色を発するライザーに対して、シルはずれた事を言う。それを聞いたティアが、頬に手を当てて照れていた事には、視線がシルの方に向いており、誰も気が付かなかったのは余談です

「さて、それではグレモリー卿。先ほどの答えですが、その答えは僕の、そしてあなた達の目の前にありますよ」

「ど、どういふことだね」

いきなり話を振られたせいで、少し言葉に詰まりながらもそう尋ねるグレモリー卿。シルはライザーに視線を向けて続きを話す

「そうだよね、ライザー・フェニックス。いや・・・はぐれ悪魔グロミー」

「っ!?!」

その名前に、ライザー・フェニックスの顔が目を見開くが、すぐに大きな声をあげて言い返す

「な、何を馬鹿な事を！俺はライザー・フェニックスだ！」

と、そこへフェニックス卿がライザーの隣に立ち、シルに顔を向け

る

「はぐれ悪魔グロミーは1月前にライザーが討伐している。変な言い方がかりはよしてもらおうか、シルバーキャット」

フェニックス卿もそう述べる通り、はぐれ悪魔グロミーは二か月前に主の元から逃げ出してはぐれ認定され、とある冥界の廃墟に潜伏していたところを一月前にグロミーの主の家と懇意にしているフェニックス家のライザーが討伐しているという報告がライザー自身から上がっていた

「それに、ここにいるのは間違いなくライザーだ。親である私が見間違えるはずがない」

フェニックス卿のその言葉に、ライザーはどうだ、とばかりにふんつ、と鼻を鳴らした。対してシルはというと・・・

「そうですね。確かにそこにいるのはライザー・フェニックスですよ」

と、笑顔を崩さずに言つてのけた

「・・・ふざけているのか」

そう言うのも仕方がない事だろう。つい先ほどライザーの事をはぐれ悪魔と言っていたのに、今度はまるで手の平を返す様に自分の言つた事を否定したのだ。誰もがシルが何をしたいか理解できなかった・・・シルの次の一言を聞くまでは

「体はね」

『っ！』『っ?!?』

本日何度目かの驚愕を会場の者達は感じる。皆の視線がその人物、ライザーに集中すれば、先ほどは何か取り繕っていたが、今のシルの発言に大量の汗を流していた

「ま、まさか・・・!」

そんなライザーを見て、隣にいたフェニックス卿は信じられないようなものを見る顔になる

「ち、違う！出鱈目だ！奴は俺を陥れようとしてるんだ！俺は正真正銘ライザー・フェニックスです！それとも、俺の言葉より犯罪者の言葉を信じるというのですか!？」

「犯罪者っていう点なら、君もだと思っけど？はぐれ悪魔だし」

「黙れ！そもそも証拠もないのに貴様は何を言って・・・」

「証拠ならあるよ？」

ライザーの言葉を遮ってシルは当たり前前の様に言う。その時、ライザーの体が大きく脈打った

「ぐう!? な、なんだこれは!? な、何をした銀猫!!」

自身の体の変化に、ライザーは狼狽した声を上げ、シルに向かって叫んだ

「あれ？気が付いてなかったの？赤龍帝君に負けて気絶した君が運ばれて行ってる時に、君の術式を解いたんだよ」

説明を続けている間もライザーの体は脈打ち続け、それはドンドン大きくなっていく。周りの者達は、シルを除いてライザーから距離を取る

『ば、馬鹿な、あれを解いたつ!? こ、声が・・・!』

『お・・・俺の・・・』

ライザーの口からライザーとは違ったくぐもった様な声と、小さなライザーの声が聞こえてくる。そしてライザーの体から炎が上がり始める

『ク、クソツッ！出て来るな！この体は既に俺の・・・』

『だ、まれ・・・この、体は・・・俺のだああああ!!』

頭を抱えて唸る中、ライザーの力強い声と共に、激しくその体から炎が上がった

「俺の体から出て行けえええええええ!!」

『グオオオオオオ?!?!』

ライザーの咆哮と共に、その体から何か黒い物が勢いよく飛び出す。すると、ライザーは力尽いたようにその場に膝をついて肩を上下させていた

「わあ、術を解いたとはいえ自力で追い出すとはやるねえ」

ライザーの近くにいたシルが、少し感心したような声で言う。それに対し、ライザーは呼吸を整えながら不敵に笑って答える

「はあ、はあ、あ、当たり前前だ。俺を誰だと思ってる。俺はフェニックス家のライザー・フェニックスだぞ・・・まあ、あの術が解けていな

かかったら俺はあのままだったかな」

術が解けたお蔭と言うライザーに対して、シルはニコリと笑った後、視線を別の者に移す。その先には、先ほどライザーから飛び出して行った黒い霧の塊があった。そして、その黒い霧は段々と薄くなっ
ていき、そこには気味の悪い恰好をした男がいた

「お前は！はぐれ悪魔グロミー！」

グロミーの姿を知る者が叫ぶ。この男こそ、まさしく討伐されたと思っていたはぐれ悪魔グロミーだった

「・・・俺は一月前、ある森の中の小屋にグロミーが潜伏しているという情報を得て、その場所へ向かった。そこでグロミーの罠にまんまと嵌り、術で体に乗っ取られていたんだ」

ライザーは苦虫を食い潰したような表情でそう語る。ライザーの元ヘレイヴェルを含めた眷属の者やフェニックス卿が駆け寄り、そこからそっと離れたシルはグロミーの前に立つ

グロミーは、それに気が付かずにその場で頭を抱えて叫んでいた
「何故だ、何故だ何故だ何故だ!?俺の術式は完ぺきだったはずだ!あれは一度発動すれば解除は不可能の忘れ去られた古の禁術なんだぞ!?あの術を知っているのは俺だけだ、解ける訳がない!!」

「でも、実際にここに解いた者がいるんだけど?」

ようやくシルに気が付いたグロミーは、キツとシルを睨み上げる

「どうしてあの術を解けたと思う?それは君が赤龍帝君と戦っている時に、術を解読させてもらったんだよ。確かに強力なものだったけど、あの術には一つ弱点があったんだ」

「弱点だ?!そんなものは文献のどこにも記されていないかった!!」

「そこは知らないけど。まあ、簡単に言えば術者の精神状態。乗り移った者の精神状態が疲弊していると、その術は脆い物になる。赤龍帝君と戦ってる最中にそれを確認したんだ。そして、脆くなった所に、僕が力を加えて解いた、という訳さ」

シルの説明にグロミーは心底悔しそうな表情になる

「クソッ!お前さえ、お前さえいなければ!!全て上手く行っていたんだ!!」

「それは残念だったねー」

全くそう思っていない口調のシルに青筋を立てるグロミー。が、突如その顔に笑みが浮かんだ

「ならば、今度はお前の体に乗っ取ってやる！」

そう言つて両手を目の前のシルに突き出して魔法陣を展開しようとするグロミー。だが、それは叶わなかった

「は……?」

呆けた様な声を上げたのはグロミー自身。一体何故か、それは：

「お、俺の手があああああ?!?!」

叫び声を上げるグロミー。彼の言った通りグロミーの肘から先が無くなっていた。一瞬、シルがやったものだと思つたが、よく見ればグロミーの腕だけでなく、体のあちらこちらから粒子が舞い、その体が消えて行つていた

「ど、どういうことだ!?今度は何をしたシルバーキャット!!」

「それは僕じゃないよ。恐らくあの術の影響。禁術に手を出した代償じゃないかな。君という存在が消滅していつている。ちなみにもう手遅れ、君は消えゆくのをただ待っただけだ」

狼狽した声を上げるグロミーに、シルは淡々と答えると、グロミーは絶望した表情になり俯く

「……だけど、そうはさせない」

シルの言葉に、その顔を上げるグロミー。だが、すぐにその事に後悔する。シルの顔は何時ものものと違い、酷く冷たいものだった。既に手足が消滅していたグロミーの胸倉を掴み上げ、グロミーにしか聞こえない声量で告げる

「お前は先日、殺し屋を雇つて僕の家族を殺そうとした。その報い、受けてもらう」

殺気を込めながら言われたグロミーは顔面蒼白になる。そんなグロミーをシルは空に向かって投げ上げた。天井が無くなった冥界の空にグロミーが舞う

「モード雷炎龍……」

ボオツ！ バチバチツ！

静かにシルが呟くと、シルの体に激しい炎と雷が纏った。シルは上空のグロミーを睨みつけ、その場から天井があつた高さまで飛び上がる。そして、

「雷炎龍の……咆哮!!!」

瞬間、とてつもない雷炎の柱がシルから発せられた。そんなものを直に喰らったグロミーは、既に半分程消滅していたが、一瞬でその全てが消滅した。グロミーが消滅しても、その雷炎の柱は少しの間冥界の空に上がり続け、たつぷり三十秒ほどしてようやく消えた

そして、モード雷炎龍を解除したシルは、再び会場に着地した。会場にいる者達は体中にびっしりと冷や汗をかいていた。それは先程のシルの放ったものの威力が原因だろう。そんな事を特に気にした様子も見せないシルは、

「ふう……ちよつとやりすぎた、かな？」

「ちよつとじゃなくて普通にやりすぎだ!!オーバーキル過ぎるぞ!?次元に穴を空ける気か!!」

小首を傾げそう言ったシルにティアが思いつきりツツコンだ。それに対しても特に気にした様子を見せないシルはグレモリー卿に顔を向ける

「グレモリー卿。まあ、先ほど見ての通りで、あのゲームに参加したのは体はライザー・フェニックスであって中身は別人。これではライザー・フェニックスが勝ったとは言えないのではないのでしょうか？」

「グレモリー卿」

と、そこへフェニックス卿とレイヴェル達に肩を貸してもらいながらライザーがやって来た。ライザーは目配せをし、自分の足で真っ直ぐに立った

「俺は、あのゲームを微かですが覚えていきます。あの時、俺が感じていたのは憤りです。俺の体を使い、あんな無様なゲームを行った事を。俺もあんなゲームで勝ったと思いたくありません。俺は、俺自身の力で、フェニックス家のライザー・フェニックスとして勝利したいのです。それに……」

ライザーは視線をイツセーに向けた。視線を向けられたイツセーは真つ直ぐにライザーを見返す。それに対し、ライザーは不敵な笑みを見せる

「そこにいる赤龍帝、兵藤一誠を倒さない限り、俺にリアス・グレモリーの夫となる資格はありません。どうか」

そう言つてライザーは頭を下げる。ライザーだけでなく、レイヴェルを含めた眷属も者達も同様に頭を下げていた

「・・・」

グレモリー卿はフェニックス卿に目を向けると目だけで何かを伝えあつたのか、数秒瞑目し嘆息した

「・・・ライザー君はグロミーによつて精神や体力を消耗している。一度治療の為に時間が必要だ。ゲームはそれからとする」

その宣言に、また騒がしくなる会場。そんな中、シルとティアの姿が見えなくなっているのに気が付いたのは少し経ってからだった

会場からいなくなったシルとティアは、再び冥界の空を飛んでいた

「あー、ティア。えっと、その今日の事は皆には・・・」

「もう遅い。少し前に伝えた。『帰ってきたら話がある』だそうぞ。勿論、私もだ」

「oh・・・ち、ちなみに皆つて」

「白音、黒歌、夕麻、ミツテルト、カラワーナ、アーシア、藍華だ」

「オワタ・・・きよ、拒否権は」

「あると思つてるのか？」

「デスヨナー」

そして家に着いたシルが玄関を開けると、そこには修羅がいました。その後、シルは朝まで正座させられた状態で御説教をもらいました。ちなみにアーシアは全く怖くなかったそうです

『ライザー様、リタイアです。よってこのゲーム、リアス様の勝利です』

そして、一週間後再び行われたゲームで見事、リアス達は勝利した

後日談2と羞恥

SIDEシル

リアスさん達がレーティングゲームで見事勝利した週の休日、僕や藍華達は駒王学園近くの大型ショッピングモールに来ていた

「んー、アーシア元が良いから色々着せてみたくなるわねえ」

「そ、そうでしょうか？」

「アーシア、アーシア！次はこんなのはどうすつか!？」

「ふむ、これも良いが、こっちのも捨てがたいな。夕麻、どっちが良いと思う？」

「カラワーナ、あなたさつきからスーツしか見てないじゃない・・・」

「む？少し胸が苦しいぞ」

「同感にや。白音く、胸元が緩い服って無いかにや？」

「・・・もげればいい」

今は、ショッピングモール内の洋服屋でそれぞれ服を見ていた。なんだかんだあつて今まであまり買えていなかったアーシアや夕麻達の服や生活用品諸々を買いに来たのだ。皆、とても楽しそうに洋服を選んでいる。白音は目のハイライトが消えてるような・・・気のせいだね、うん。

ちなみに今日の僕は荷物持ち兼支払いです。まあ、荷物は異空間の倉庫に入れておけばいいし、お金の方もそこそこ持つてるからね。でも・・・

ガヤガヤガヤ

「はあ・・・」

先ほどから店の前の通りにあるベンチに座っている僕の周りが騒がしい。まあ、僕の姿が原因なんだけどねえー

「な、何で執事？」

「銀髪オツドアイって・・・なんかのレイヤーか？」

「カッコいいけど可愛い」

「そして綺麗、っていうより可愛い！」

「・・・はあ」

再び漏れるため息。周りの人達の言う通り、今の僕の格好は「また」執事服です。しかも今は認識障害の魔法をかけていません

パーティー会場に乗り込んで家に帰り、玄関を開ければそこには修羅が沢山いました。それから正座ですとお説教を受け、二度とあんな事をしない事を約束させられました(強制)。うん、もうゼツタイ勢いでやっちゃダメ。

と、まあ、お叱りを受けた僕はそのあと皆に心配をかけたお詫びとして「僕に叶えられるお願いをそれぞれ叶える」という約束をしたんですが……

白音……今月は好きなリクエストをしたお菓子をいつもの十倍作る。

まあ、白音らしいお願いだったね。ちなみに今日はシュークリームだそうです。いつもが五十個くらいだから……あとで食料品も買わないと

アーシア……自分も一緒に寝たい

今までアーシアは別室で寝ていたけど、どうやらアーシアも黒歌達と同じ様に一緒に寝たかった様で……黒歌達は理由があるから仕方がないようなものだし、流石に断ろうと思ったけど断れませんでした。

『ダメ、ですか……?』と少し顔を伏せて悲しそうな表情での上目遣いは無理だ。うん、ごめんなさい。またベット新調しないとなあ

ミッテルト……新しいカメラと、メモリーカード×50

一応皆にはお小遣いとしていくらか渡しているんだけど、ミッテルトはそのほとんどをカメラ、残りをゲームと言った感じで使っている。というかメモリーカードそんなにいるの? って聞いたたらそれでも足りないって言ってた。一体どれだけ撮る気なんだろう?

夕麻……取り敢えず保留

夕麻は今特に欲しい物やしてほしい事等が無いらしく、何かあったらその時言うそう。まあ、夕麻は常識を持ち合わせてるからどっかの誰かさん達みたいに無茶な事は言わないでしょう。

カラワーナ……書斎

カラワーナは家でも仕事が出来る様に、という事でそれだった。まあ、書斎自体は直ぐに用意できてカラワーナは喜んでいた。本当に仕事熱心だなあ。そういえば悪魔のお仕事はしてるんだろうか？あまり聞かないけど

そして藍華が・・・今月いっぱいを執事服で過ごす（認識阻害の魔法禁止）

はい、藍華のお願いは完全に罰ゲームです。最初はメイド服だったけど、流石にそれは死ぬる（精神的に）。もし兵藤君達に見られたら女装好きの変態野郎って引かれるだろう。それなら執事のコスプレの罰ゲームの方が何倍もいい。だから何とか藍華に頼み込んで、また執事服に譲歩してもらい、その代りお願い事が一つ増えた。今日何をお願いするかを言うって言ってたけど、何だろう？

え、黒歌とティア？知らない子ですなー（棒）
「シルー、ちよつとこつち着てー」

と、店の中から藍華が僕を手招きしながら呼んでいる。お会計かな？と思いい、僕はベンチから腰を上げて店の中にいる藍華の元へと向かった。・・・何の疑いも無く

SIDE OUT



「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」

「やう、いい買い物したわねえ」

と、店員に見送られ店から出て来た藍華が満足げな顔でそう言った。その両手には先程買った物が入った紙袋が握られていた

「はい！とても素敵なお洋服がいっぱいでした！」

そう言うアーシアの両手には、藍華より多い紙袋が握られていた。まあ、アーシアの場合は今着ているワンピースを含めて、ほとんど私服を持っていかなかった為、藍華やミツテルトが色々選んだ結果だ。

「色んな可愛いアーシアが見れて、ウチは大満足っすー」

ミツテルトは試着で藍華と共にアーシアをコーディネートし、一回

につき何十回もその手に持つ新品のゴツい一眼レフのカメラのシャッターを押す程だった。こちらも満足げで、ほくほく笑顔だった。ちなみに今日一番のお気に入りには自分と同じゴスロリを着たアーシアの物だ

「三着セットで買うと安くなるのは、素晴らしい物だな！」

「結局全部スーツなのね・・・」

ホクホク顔のカラワーナに対し夕麻は呆れ顔だ。結局カラワーナはこの店ではスーツしか買わなかったので、次の機会では普通の服を選ばせようと密かに決意していた

「私は中々サイズが合う服が無くて苦労したのだ」

「私はやっぱり着物にしたにゃん。これなら調整が効くし、楽だからね。それに合わせて新しい帯も買った♪」

「ふむ、ならば私も着物にしてみようか？」

「・・・大丈夫、大きい小さいは関係ないって言ってたし（ポツリ）」
白音はティアと黒歌の一部分と、自身の一部分を見て自分に言い聞かせるように小さく呟いた

そして残ったシルはというと・・・

「・・・」

何故か物陰に隠れ、顔を半分だけちよこんと出していた。その顔は、恥ずかしそうに頬を薄く朱に染めている。

「何やってんのよシル。そんなとこに隠れてないでさっさと出てきなさいよ」

そんなシルに対して、藍華が腰に手を当てながらそう言うが、シルは渋って中々出て来ようとしなない。そこで藍華は荷物を任せて隠れているシルの元へと向かった

「ほら、さっさと出てきなさいよ」

「ま、待って藍華。やっぱりこんな格好で出るのは・・・」

「いいからいいから」

藍華はシルの手を掴んで店の外に待っている皆の元へ引っ張って来る形で連れ出して来た

『おお・・・』

通りを歩いていた人達が、シルの姿を見て思わずそんな声を漏らして足を止めてしまう。

シルの格好は先程までの執事服とは変わっていた

上から順に、ワークキャップ、白のキャミソールの上にジャケット。下はデニムのホットパンツにニーソックス、スニーカーという物だった。勿論全てレディース

「うう、何でこんな事に・・・」

非常に恥ずかしそうに両手でつばを抑えながらシルはそう言う。そんなシルを見て女性陣や、周りの通行人達の胸がキュンキュンしているのは、帽子を深く被って恥ずかしがっている今のシルのあずかり知らぬ事だ

「だ、大丈夫ですよシルさん！とつてもお似合いですから！」

グサツ！

「ぐはっ・・・ッ！」

「アーシア、それはフォローになってないわ」

「なんだか清々しいくらいにとどめを刺したつすね」

「ほうほう、アーシアも中々やるわねえ」

「ふえ!?だ、大丈夫ですかシルさん！」

アーシアの言葉にシルはガックリと項垂れ、それに対してアーシアが慌てる。場はちよつとした事となっていた



店の前での一件で何とかシルを慰めた後、藍華達一向はデパートから少し歩いた所にある喫茶店に来ていた(ちなみにシルの格好はそのまま)

なんでも、藍華が小学生の頃からちよくちよく通っているお店らしい

落ち着いた雰囲気のお店で、四人かけのテーブル席が三つにカウンター席が五つあった。丁度お客が少ない時間帯だったのか、店内には藍華達以外の客の姿は無く、藍華達はそれぞれ適当に分かれて席に着

いた

「いらつしやい藍華ちゃん。今日は大所帯だね」

「あつ、こんにちはマスター」

席に着いた藍華達の元へ、この店の制服を着た白髪の温厚そうな男性がメニューを持って話しかけて来た

「皆に紹介するわね。このお店の店長のマスターよ」

「どうも初めまして。気軽にマスターと呼んで欲しいね」

マスターは柔らかい笑みを浮かべる。それに対し、他の皆もそれぞれ自己紹介をした。みんなの自己紹介が終わり、最後にシルが挨拶する事になった

「は、初めましてマスター。シル、です。よろしく願います」

まだ恥ずかしいのか、若干言葉に詰まりながらも自己紹介を終えた「おやおや、これまた随分と可愛らしい子だね」

そんなシルを見て、マスターは変わらず笑みを浮かべたままそう言う。それに対して藍華は眼鏡をキラリと光らせながら口を開く

「ふふふ、似合うでしょ？さつき私がコーデしてみたのよ」

誇らしげに言う藍華に、マスターは眉尻を少し下げあははは．．．と少し苦笑気味の表情になった

「確かに可愛らしいけど．．．藍華ちゃん、あんまり悪戯しちやダメだよ？いくら可愛くたって男の子なんだから」

『っ!』

マスターの言葉に、藍華を除く全員が驚いた。その中でも一番驚いたのはシルだった

「わ、分かるんですか？僕が男だつて．．．?」

「長い事この店でやってるからね。色んな人を見て来たから、人を見る目はある方だよ」

「さつすがマスターね。やっぱりわかっちゃったか」

ニツコリを笑って答えるマスターに、藍華が称賛の言葉を送る

「は、初めて初対面の人に分かってもらえた！嬉しいんだけど、今の姿だと素直に喜べないツ．．．!」

「何とも複雑にや」

「・・・ただただビックリです」

それから一同が注文を終えると、マスターはそれをメモをして店の奥へ行き、僅か五分ほどで全員分の注文を両手に器用に乘せて戻って来た。「今日は可愛いお客さん達にサービスだよ」と言つて、値段を半額にしてくれた。藍華によれば、昔からかなりモテたそうで、今もマスター目当てに来店するお客さんが絶えないそうだ

それから喫茶店で休憩を終えた一同は再び買い物に繰り出し・・・
「ねえねえシル。もうこの際だから、下も買っちゃおう?」

「え・・・ま、まさか下つて」

「ふっふっふっ、多分今あんたが考えてる通りよ」(?▽?)ニヤリ

「そ、それは絶対にダメ!流石にそこまでやっちゃダメだよ!」

「おっ、丁度あそこにランジェリーショップが」

「やめてえええ!!」

・・・まだまだシルの受難は続きそうだ

SIDE OUT

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

SIDE イッサー

「イッサー、その机をこっちに運んでくれる?」

「はい部長!」

俺達は今、旧校舎のオカルト研究部の部室でパーティーの準備をしている。今日のパーティーは先日行われた再試合で見事勝利したお祝いだ

再試合で俺達グレモリー眷属が勝利し、部長とライザーの縁談は破断になった。にしても、ライザーにはビックリだぜ。まさか、体を乗っ取られてたなんてなあ。その乗り移った奴はシルさんの手で術を解かれた後、ありえないくらいに攻撃で文字通り跡形もなく消し飛ばされたし。あれはマジでやばかった。あれを見ただけで足が震え

て立ってるのがやつとつてくらいだつた

そしてライザーマジで強かつた。何回倒しても復活してくるし。正直勝てたのはかなりギリギリだった。ありや本当に戦いたくない……

あと試合が終わった後何故かお礼を言われた。お前のお蔭で自分を取り戻せたつて言つてたけど、俺何にもしてないんだけど……正体を見破つて術を解いたのシルさんだし。それでもつて言われて何かむずかゆかつた。最初会つた時とホントに別人だつたからつていうのもあるのかもなあ

ただ、ハーレム持ちなのは許せんがな！全く持つて羨まけしからん！俺も早くハーレム王になりたいぜ！

「ほらイツセー、手が止まつてるわよ」

「は、はい！」

いかんいかん。つい考え込んでしまった。俺はすぐに指示された場所に机や椅子を並べる為動く。部長や朱乃さん、木場も部屋に飾り付けをしたり、飲み物を持ってきたりと動いている

そして数十分程して、準備が整つた。怪しい魔法陣だらけの部室が華やかに彩られてる。大分慣れたけど、やっぱり魔法陣だらけの部屋よりこういう風に明るい感じの方が良いよなあ。模様替えとかしなかなかな？

「さて、もうそろそろ時間ね」

部長の言う通り、もうそろそろ時間だ。今日の参加者はここにいる俺達以外にもいるんだ

「あつ、来たみたいですよ部長！」

扉の向こうからここに近づいて来る足音が聞こえてくる

コンコン、ガチャ

「お邪魔します」

桐生を先頭に、続々と部室に皆が入つて来た。桐生に続いてアーシア、夕麻ちゃん、ミッテルトちゃん、カラワーナ先生、白音ちゃん、黒歌先輩、ティアマツトさん、そしてシルさんだつた。皆私服姿だつた。いやあ、普段の制服姿もいいけど、こつちも素晴らしいなあ

って、またシルさんは執事服なんだな。朱乃さんは喜んでるけど・・・シルさん、執事服ハマったのかな？

「兵藤君達。先に断っておくけど、僕は別に執事服にハマったわけじゃないからね？」

『！』

か、考えてる事を読まれた！まさか、ニュータイプとでも言うのか!?

「あれあれえ〜？でもシル、執事服が良いって言ってなかったっけ？『執事服が良いです！』って私にお願いしてきてたくらいだし」

「もう藍華、誤解を招く説明は止めてよ。それに罰としてメイド服を着て過ごすよりは執事服の方が良いに決まっていますっ」

っ!?し、シルさんのメイド服、だど・・・ッ!!

『えへへ、ご主人様♪』

『ご主人様、何かしてほしい事はありますでしょうか？』

『も、申し訳ございませんご主人様！大切なお皿を割ってしまいました』

『この不出来なメイドにお仕置きを。た、例えどんなお仕置きでも構いません！』

『どうぞ、ご主人様の気が済むまで私をお好きに・・・』

「ふんっ!!!」

ドンッ!!!

「ひよ、兵藤君!?!どうしたのいきなり壁に頭を叩き付けて」

「いえ、ちよつと蚊がいたので」

「ち、血が出てますよイツセーさん！」

「大丈夫だアーシア。これは蚊が吸った血だから」

「いや、イツセー君。明らかに量が違うわよ」

「デツカイ蚊だったんだよ夕麻ちゃん」

いかんいかん。つい素晴らしゲフンゲフン・・・けしからん妄想をしてしまった。恩人のシルさんに対して何てことをしてるんだ俺は

「朱乃？あなた鼻から血が・・・」

「何か仰いましたか部長？」

「い、いや、だから鼻から何か仰いましたかリアス？」・・・ナ、ナ
ンデモアリマセン」

「部長、顔が青いですけどどうかしましたか？」

「キニシナイデ、ユウト。ワタシ ノ キノセイダツタ ミタイダカ
ラ」

部長が震えてらっしやる。きつと寒いんだな、うん。部長の隣にい
る人のせいじゃない

◇◇◇◇◇

それから俺の額をアーシアが治してくれた後、部長の号令の二元、
パーティーが始まった。机の上には見るからに美味しそうなご馳走
やケーキ等が並べられており、好きな物を各々が皿に取って和気あい
あいと話し合いながら食べていた。

途中、シルさんからパーティーでの戦いを褒められた。その時、な
んだか、こう、なんて言えればいいか・・・嬉しかった、な。うん、素
直にとても嬉しいと感じた。思わず頬が緩んでしまった

その緩んでいる俺の顔が、皆にニヤけているように見えた様で何か
エロい事を考えてると勘違いされた

違うんだ！誤解だああああああ!!

そしてパーティーの途中、桐生の提案であるビデオを見る事になっ
た。なんでも、面白いビデオらしい。その時の笑顔が妙に引つかかる
んだが

「ありやりや、どうやら映像は映らないみたいねー」

「おいおい、それじゃあダメじゃないのか？」

「まあ、音だけでも十分わかるから大丈夫よ。それじゃあ始めるわ
よーポチっと」

全員を見渡して桐生がビデオを再生した。と言っても、桐生の言う
通り画面は真っ暗のまんまだったけど

『シル、あんたには今回皆を心配させた罰を受けてもらおうわよ?』

『あ、藍華？一体何をする気なの・・・？』

聞こえてくるのは桐生の声とシルさんの声だった

『ふっふっふっ。そんな事言って、本当はもう分かってるんじゃないの〜？』

『・・・っ！ま、まさか!?!』

『そのま・さ・かっ！』

『ひゃああっ!?!』

『っ!?!』

な、なんだああ今の可愛らしい声は!!一体何をやったんだ!?!

『あ、藍華っ、い、今そこっはにやあああああ!?!?!』

『ここが、なあに?』

S気たつぷりの桐生の声と、シルさんの可愛らしい嬌声(誤字にあらず)が聞こえてくる。

おいおいっ！マジでナニやってんの!?!じよ、冗談だよね!まさか、本当にそんな事を・・・

「な、あっ・・・っ!?!」

シルさんが驚嘆した面持ちになってるううううう!!?!何か顔真っ赤にして金魚みたいに口をパクパクさせていた!めっちゃ可愛いですご馳走様!!ってそうじゃなくってええええ!!!

え、これマジなの!?!シルさんの反応見る限りもうほとんど確信に近いと思うんだが!?!やっちゃってるの?ヤッちゃってるのおお!?!

「(ニヤニヤ)」

桐生に視線を向ければ、そんなシルさんを見て面白可笑しそうに笑みを浮かべている。おのれ桐生!貴様、そこまでエロエロだったのか!!皆の前でこんな事をして羞恥に悶えるシルさんを見る為にこんな事をしたというのかああああああ!!!

『たっぷり時間をかけたから、すごい敏感になってるわねえ』

『も、もうやめてっ・・・!』

「ぶっ!?!」

とうとう限界を超えて俺の鼻から赤い液体が吹き出す

や、やばい。声だけが聞こえるせいとか、何か映像があるよりもエロ

い！頭の中で自然と場景を思い浮かべてしまっ……！

「というか皆何も言わないけど、良いのか!?止めなくていいのか!?

そんな事を思い、鼻を抑えながら部長達に視線を送れば、皆顔を赤くしていた。何名かは俺と同じように鼻を抑えているぞ！俺も松田や元浜達とエロDVDとかを見る事はあるけど、女子と一緒にエロDVDを見るなんてそんな事あるのか!?!しかも女子は皆美少女ばっかだぞ!!

『ほらほら、あんたが好きだった猫じゃらしよ』

『もうっ、限、界い……』

「はあ、んはあっ……」

「というか朱乃さんがやばい。何か熱っぽい視線をシルさんに送りながら股を擦り合わせてる！メツチャ艶っぽい表情を浮かべている今の朱乃さんを、ファンクラブの奴等が見たらぶっ飛ぶんじやないか？理性が

俺？何か一周回って逆に冷静になってますけど何か？じやなきや今頃発狂してんじゃないの？多分あれだな、驚きすぎて冷静になると同じで、エロ過ぎて冷静になったって感じなんじやね？（投げやり）ぼふんっ！

「ぎゅうう……」

あ、アーシアが頭から煙を出して気絶した。無理もない。アーシアこういうの全く耐性無いだろうしな。いや、寧ろ今までよく持ったという方か。ん？そもそもアーシアはナニをやってるかわかったのか……？もしや桐生が……シルさんの心労が増えそうだ

あと木場。お前顔を背けてるけど、映像じゃなくて音声だから全く意味ないからな。俺の方からでも耳が真っ赤になってるの見えるからな

そして室内にいる皆さんの息が上がってきて熱っぽくなってきている。黒歌先輩はちよつとずつ服を着崩しながらシルさんに近づいて行ってるし、シルさんの膝の上に乗ってる白音ちゃんも白い肌を赤く染めて潤んだ瞳でシルさんの事をチラチラと見上げてる

ティアマツトさんは同じく顔を赤くして、視線を忙しなく動かして

ワタワタしてた。意外とこういうのダメなのか

夕麻ちゃん達は顔を赤くしながらも気絶してしまったアシアの介抱をしていた。というかアシアの顔が赤を通り越して紅になってるけど大丈夫か？目なんかグルグルになってるじゃん

部長は何も映っていない画面を見つめたまま視線を外さない。綺麗な顔が髪と同じく真っ赤ですよ部長

あと、誰かティツシユをくれ！さつきから血が止まらない！

「ち、違うよーこれは違うの!!」

と、フリーズから再起動したシルさんが立ち上がって声を上げた。白音ちゃんはいつの間にかシルさんの横に移動してるな。若干涙目になってるシルさんに意識がぶっ飛びそうになるのを根性で堪える！

パタンツ

あ、木場がぶっ倒れた。まあ、それはいいか。朱乃さんは・・・なんか身悶えてゾクゾクしてるな。というか誰かこの冷静でいられる俺を褒めてくれ。いや、マジで（切実）

「こ、これは皆が想像してるのと全く違うから！そういうのじゃないから!!」

「そういう想像ってどんな事かなくシル〜?」
「~~~~つ!!」

おお、シルさん顔真っ赤ですよ。というか桐生なんかめっちゃくちゃ楽しそうだな

「と、とにかく！これは藍華が僕のお『ふあああああ?!?!?』ああああつ!!?」

パタンツ

ああ、今ので白音ちゃんもリタイアか。これで残ったのは俺、部長、朱乃さん、黒歌先輩、夕麻ちゃん、ミツテルトちゃん、カラワーナ先生、ティアマットさんはギリで、桐生つて所か。ティアマットさんはもういつ倒れてもおかしくなさそうだけど

というか俺もさつきから意識が・・・ふっ、血を流し過ぎたな。さつきから視界の端に花畑がチラチラ見えてきやがるぜ

『相棒！しつかりしろ！鼻血の出し過ぎで死ぬなど聞いた事が無いぞ！』
「というか俺も宿主がそんな事で死ぬなどイヤだからな!?!」

馬鹿野郎、んな事不可能だ！だって見ろよ、お前と同じドラゴンの
ティアマツトさんだって鼻血出て死にそうになってるぞ。龍王最強
がああなんだ、俺が持つかなんて保証はない!!

『ティアマツトオオオオ!?』

「というか同じドラゴンなのに何でお前は平気なの？同じドラゴン
なのに」

『俺を、奴と一緒にするなあああ!!』

ドライグが頭を抱えているのが容易に想像できる。伝説のドラゴ
ンが頭を抱えるって結構シユールだよな

「というかシルさんがさつきから桐生に弄られてる姿が可愛すぎて、
生きてるのが辛いです。なんかシルさんの新たな一面を見れて良
かったと思う反面、これ以上は俺達がマジで持ちそうにありません司
令

『誰が司令だ!』

「だってお前、司令声じゃん？」

『知るかああああ!!』

「あ、藍華！これ、テレビの入力が違うよ!!」

「ああー、だから映像が映らなかつたわけだったのねー(棒)」

「棒読みだよ！もしかしてワザとですか!?!」

「っと、ドライグと話し合ってる間に、こっちでも話が進んでたみた
いだ。」

「ん？という事は・・・」

「入力を変更して・・・よし、皆って何で皆顔を反らしてるの!?!」

「いや、なんでって。そりゃあ、声だけでもう既に死にそうなのに、映
像なんか見たら確実にお陀仏ですよシルさん(真剣)」

「だから違うんだよ！本当にそういうのじゃないから！見てくれたら
すぐにわかるから!!」

「なんか必死なシルさんの声がもう泣きそうな感じになっている。
俺は、同じく顔を背けてなおかつ生き残っている人達とアイコンタク

トを交わす

「(ど、どうします部長？なんかシルさんの声在必死なんです)」

「(ど、どうするも何も、私ももういっぱいっばいっばいよ！これ以上は色んな意味で持ちそうにないわ！)」

「(わ、私達はアーシアの看病があるのでパスです)」

「(同じくっす)」

「(あ、あなた達！それはズルいわよ!?)」

「(はあ、はあ、も、もう我慢の限界(にゃん)・・・!)」

「(止めろおおおお!!あの二人を止めるんだああああ!!シルさんが危ないいいいい!!)」

今にもシルさんに襲い掛かろうとしていた二人を取り押さえるは、ライザーより厄介だったと記述しておく

そしてあのビデオだが・・・正座して痺れているシルさんの足を桐生が突いているという物だった。俺達はまんまと桐生に引っかかってしまったというわけだ

言い訳をさせてもらうが・・・あれは絶対にわかるかああああ!!!

月光校庭のエクスカリバー 電話と神様

「ふう．．．．．」

「どーも、ただいま精神ダメージがやばい事になっているシルです。なぜそんな事になっている理由は勿論、先日の藍華が用意したあのDVDが原因です。」

まさか、撮影していたなんて．．．あの時は足が物凄く痺れてそんな事に気が付く余裕も無かったとはいえ、もし気が付いていれずすぐにでもあれを破壊したのに．．．．ッ!

何も映っていないテレビから音だけ聞こえて来た時、一瞬で頭の中が『!』や『?!』や『くあwせd r f t g y ふじこーp?!』で一杯になったし。おかげでまともに状況を理解する事も出来なかった。

しかも．．．あの声は何さ! 僕ってあんな声出したの!!
あの時は藍華に痺れている足をツンツンされて思わず声を上げちやつたのは覚えてるけど、あれじゃあまるで．．．．

「——あああああああつ!」
手で顔を覆って床をゴロゴロと転げ回って悶えた。ちなみにこれは今回で七回目になる。

「すう．．．．．はあー．．．．よしッ」

十分程悶えていたけど一先ず落ち着いた。うん、もうこの事については極力触れないようにしよう。あのDVDはもう破壊したんだし。皆もいざれ忘れるさ、きつと。

．．．．いざとなれば頭に強い衝撃を与えて記憶を．．．．ふふふつ。

——だがシルは知らない。実はシルがテレビごと破壊したあのDVDのオリジナルを藍華が密かに持っている事を。そして後にその存在を知った者達がそのコピーを求める事を——

うん？ 何だが寒気が……？

プルルル、プルルル、プルルルツ！

「あ、電話電話つと」

感じた寒気に首を傾げていると、家にある固定電話が鳴った。今日は平日なのでもう既に皆は学校へと行っているし、ティナは用事があつて出ているので、家には今僕しかいない。すぐに電話の元まで行き、受話器を手に取る。

「はい、もしも『ヤツホー、シル兄！元気かー？元気だよなー！俺も元気だぜー!!』」

僕の言葉を遮って電話越しでも元気な様子が分かる位の大きな声でほぼ一方的にあいさつする声に、受話器を耳から遠ざける。毎度の事ながら、そんな電話の相手に思わず苦笑してしまう。

「久しぶり、そっちも相変わらずみたいだね」

『おう！つてかシル兄！最近こっちに來ねえじゃんかあー。チビ達も寂しがってるぞー』

「あはは、ごめんね。最近ちよつと色々とあつてね。他の皆も元気なのかな？」

『元気だぜー！あ、シル兄！そーいやあ、メルとジャレットがな……』

それから数十分程ここ最近の出来事や皆の様子なんかを話し、皆も変わりなく元気そうで安心した。

『……それでな、その後ティナの奴が体重計に乗って叫んでたんだぜ！その時もう顔が真っ青になっててよお、クククツ。シル兄にも見せてやりたかったゴハツ!』

話している途中で鈍い音とドツシャーンという何かにぶつかった様な音が受話器から聞こえてきた。な、何が起きたの？

「も、もしもし？ もしもーしっ？」

『あ、シルー？私、ティナよ、元気にしてた？』

さつきまで話していた相手とは別の声、会話に出て来ていたティナ

の声が聞こえてきた。

「う、うん。こっちは元気だよ、ティナも元気そうだね」

『ええ、私も元気よ』

「と、ところでジンはどうしたのかな？」

『なんだか気分が悪くなったって言ってどつか行っちゃったわ』

「さ、さっきまで元気が良かった気がしたんだけど……?」

『そういう事もあるのね』

……とても優しい声なのになぜか背筋に冷たいものが走る。しかも会話の最中に僅かに呻き声が聞こえてくるんだけど……

「そ、そうなんだ。まあ、そういう事もあるよね」

「ごめん、ジン。今のティナは僕でも怖いんだ。君の事は忘れないから……!」(注 多分死んでません)

『あ、そうそう。シルに伝えなきゃいけない事があるのよ』

伝えたい事? 何だろう。ティナは一つ大きく溜息をつけてその内容を話してくれた。

『実は二週間前に「あの馬鹿」がまた置手紙だけ残して勝手に出かけて行ったんだけど、まだ帰って来てないのよ』

ティナから聞いた内容に思わず「あー、またか」という言葉が出てしまう。いつも気まぐれでふらりとどつかに行ってしまう「あの馬鹿」の顔が僕の脳裏に浮かぶ……なんだろう、思い浮かべるとイラツとくる様な顔しか浮かばない。今すぐ殴り飛ばしたい

『今回はいつもより長いから皆もちよつと心配してきてるの。まあ、あの馬鹿の事だから無事だろうけど』

結構しぶといからねえ。なんていうんだろう……Gみたいな? 大抵の事があっても大丈夫そうなんだよね、殺しても甦りそう。何とも妙な信頼だ。まあ、それがあいつらしいんだけど。

「わかった、一応僕の方でも探してみるよ。ティナ、皆には心配しないように言っておいてくれる?」

『わかったわ。それとシル、そろそろこっちにも会いに来てよね。私も皆も会いたがってるから』

「了解、じゃあまたね」

『ええ……さあてジン？ちよつとオハナシしましょうか★』

電話を切る直前、何とも怖い発言が聞こえてきた様な……いや、僕は何も聞いてない。うん、そうしよう。

あ、そういえば神様とも連絡とつてなかったなあ。ちよつと連絡しようつと現実逃避ー。魔法式、起動！

prrr. prrr. pii!

『ただいま留守にしております、ご用件のある方はおかけ直すか、ピーという電子音の後に、メッセージをお入れください——』

あれ？留守電だ。そういえばこの間の合宿の時も留守電だったな、神様忙しいのかな？まあ、今回は一言留守電を入れておこうかな。

pii!

「神様、シルです。えつと、特になにという訳じゃないんですけど、神様の様子が気になって連絡させてもらいました。お元気ですか？

またお仕事のし過ぎで疲れが溜まっていませんか？くれぐれも無理はしないでくださいね。辛い時はいつでも連絡下さい。僕はいつも話を聞いたりする事くらいしか出来ませんが、少しでも何か出来るなら神様の力になりたいです。あ、それと、お酒も飲みすぎちゃいけませんよ。お酒はほどほどに、です。また連絡します、では」

pii!

つと、一言のつもりがちよつと長くなっちゃった。でも、今まで神様には数えきれないくらい色々と助けてもらったしね。恩を返せるとは思ってないけど、それでも僕が神様に何かしてあげられるならしたいし。

……正直、神様から聞く（腐）女神様達の要求はちよつとあれだけど。あの人達に大分苦労してるみたいだからなあ。あの女神様達の事も何とかしてあげたいんだけどね。なんというか、あの辺はまさに人知の及ばない領域だからなあ……

「つと、そろそろ買い物行かなきゃ」

時計を見て思い出した僕はお財布とエコバックと認識阻害の魔法

がちやんとかかっているかどうかをチェックし、戸締りを確認しているの様に買い物に出た。今日はミンチが安くなってる日だから、夕飯は餃子かハンバーグにしようかなあ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ただいま、と言ってもまだ誰もいないけど」

一時間程して買い物から帰り、買った物を冷蔵庫に入れていく。ちなみにこの冷蔵庫、僕特製の物で僕の異空間倉庫の能力を使っているのです（三話参照）だから冷蔵庫なのに熱々の物を入れて置いたり出来るから「冷」蔵庫とは言えない代物だね。

今日は白菜も安かったからやっぱり餃子にします。羽根付きとか作ってみようかな。

「ん、通信だ」

丁度買って来た物を全部冷蔵庫に入れ終えた所で魔法を使った通信が入って来た。相手は……あ、神様からだ。留守電を聞いてかけ返してくれたのかな。そう思った僕はすぐに通信を繋いだ。

「もしもし、神様ですか？」

『……あー、俺は神だけどお前が言う神様じゃねえな』

しかし聞こえてきたのは神様の声ではなく、聞いた事が無い声だった。俺って言うてるけど声から判断して女の人だと思ふ、多分。というか今神って言ったよね？

「え、えっと、どちら様ですか？」

『ああ、わりいわりい。俺はお前が言う神様の同僚の神だ』

「あ、そうなんですか」

何だか同僚の神様ってすごい言葉だね。でも、その神様の同僚の神様がどうしたんだろう？

「えっと、それでどうかしたんですか？」

『おっと、そうだった。えっと、今更だがお前がシルって奴で合ってるんだよな？』

「あ、はいそうです。僕がシルです」

『……成程、噂通りだな』

「はっ？」

『あ、いや何でもない。んんっ！それでお前に聞きたい事があるんだが、お前の神様と最後に話したのはいつだ？』

何でそんな事を聞くんだろうという疑問は一旦飲み込んだ。えっと、最後に話したのは確か……そうだ、バイサーの一件の後に僕の夢の中で会った時だ。その事を伝えると少しの間会話の相手の神様は何やら唸り始めた。

一体神様がどうしたのか、と聞いてみれば驚く回答が返って来た。

『実はな、お前が最後にあいつと会ってから少ししたくらいからあいつ行方不明なんだよ』

異変と逃走（必死）

昼休み、藍華達は教室で机を引っ付けて昼食を食べていた。

「へえ、じゃあそれってアーシアさん達の手作りなのね」

「とつても美味しそう」

同じクラスの村山（むらやま）と片瀬（かたせ）がアーシアと夕麻のお弁当を見て感想を述べる。アーシアは嬉しそうにはにかみ、夕麻は微笑んだ

それだけでホント絵になるわねえ、この二人は。と向かい側に座る藍華は思っていた

「ありがとうございます！」

「ふふつ、良かったら食べてみて。今回はちよつと自信作なの」

「ホント!? じゃあ御一つ……んっ！ 美味しいっ！」

「うん！ あ、じゃあ藍華のお弁当も自作なの？」

「うっ、い、いや私は……」

村山からの問いかけに藍華が詰まっていると、夕麻はクスリと笑う。

「ふふつ、朝がすごく弱いのは藍華は、ねえ？」

訂正、これはからかう様な悪戯の笑みを浮かべていた。それを聞いた村山と片瀬は「あー」と言う何かを思い出したような表情に。

「そう言えば藍華って朝かなり弱かったよね」

「そうそう。ほら、修学旅行の時も中々起きなかつたし」

「桐生さん、今朝中々起きてきませんでしたね」

「それに、起きても寝ぼけてフラフラだったものね」

「しよ、しょうがないでしょ。昔から朝は弱いだよ」

皆から言われ、藍華は少し不貞腐れた様にそっぽを向く。

「あれ？何で二人とも今朝の事を知ってるの？」

先ほどの発言に疑問を抱いた村山がそう尋ねる。その疑問に対し、藍華達の脳裏に昨日の事が過った。

◆◆昨日◆◆

「……では、すみませんが僕が留守の間、皆の事をよろしく願います」

「あら、全然気にしないでいいのよシルちゃん。寧ろ頼ってくれてうれしいわあ」

シルの家の地下、少し広めの部屋にシルと藍華、藍華のお母さんとこの家に住むアーシア達が集まっていた。

「それで？ 帰りはどれくらいになるのよシル」

藍華が尋ねると、シルは少し困ったような表情のまま数秒考え込む。

「うくん、今回はちよつと特殊な用事だからね、ちよつと分からないけど……最低でも一週間以上はかかるかな」

「ふくん……」

「な、なに？」

シルの返答に藍華はジト目になると、シルは若干たじろいだ。しかしそれは、藍華の続く言葉により変わった。

「ねえ、シル。また何年も返って来ないって事は……ないわよね」

ジト目から少し伏目がちになりながら問われ、シルは目を見開く。その後、優しい笑みを浮かべ藍華の頭にポンツと手を置き、そのまま撫でた。

「大丈夫、もうそんな事はないから。約束するよ」

「あつ、う……」

至近距離でシルの微笑を受けながら撫でられる藍華は、顔に熱が集まっていくのが自分でもよく分かる程だった。

パシヤ！パシヤ！パシヤ！パシヤ！

「ん？」「っ！」

若干二人の世界に入り込んでいた所へ、聞きなれた音が鳴った。

「いいわいいわ！二人とも！とつてもいい感じよ！」

「あつ、うちの事は気にしないでくださいっす！どうぞそのまま続

「けちやってくださいいな！」

見れば、若干興奮気味の二人のカメラマンが絶え間なくシャツターを切っていた。一体どこからカメラを？ とは考えてはダメだろう。

「お、おかしいわね、ちよつと暑いわ私。カラワーナ、ここつて暖房入ってたかしら？」

「いや、そもそもこの部屋にはそんなものは無いぞ……というより私は今、何故か淹れたてのコーヒーが欲しくなっているのだが」

夕麻は暑そうに手をパタパタと扇いでおり、カラワーナは首をかしながらげている。

「うう、いいにやあ、いいにやあ。藍華ちゃんいいにやあ」

「あう、わ、私も桐生さんが羨ましいですう」

「……ズルいです、藍華先輩」

黒歌達は羨望の眼差しを撫でられている藍華に向けていた。皆の存在を忘れていた藍華はポンツと音を立てて一気に真っ赤になった。そして藍華が次に取った行動はというと……。

「そ、そのカメラをよこしなさい！！」

それからひと騒ぎあった後、当初の目的であったシルを送り出す事になったが、藍華の顔はまだ若干赤いままだった。

あの後、アーシア達も藍華と同じように頭を撫でられ嬉しそうに緩んだ表情になっており、それとは対照的に床に手をついている藍華のお母さんとミッテルトは悲壮感が漂っていた。そのすぐ傍には無残な姿になったメモリーカードが散らばっている事を見れば、説明はいらないだろう。

皆はシルから離れた位置に立っており、シルの足元には光り輝く魔法陣が展開されている。

「それじゃあ皆、行ってきます」

『行ってらっしゃい』

「お土産期待してるっす」

「……ぜ、善処します」

若干言葉に詰まりながらも、シルは魔法陣の光と共に転移して行っ

た。

見送りの済んだ後、部屋に戻る途中で、黒歌が思い出したようにぽつりと漏らした。

「そう言えばあの転移魔法陣、かなりの長距離用のだったけど……シルは一体どこに転移して行ったのかにゃ？」



「藍華どうしたの？ 顔赤いよ？」

「べ、別になんでもないから」

藍華は誤魔化すように、そして自身の熱を冷ますように水筒の中身を呷った。

「まあ、ちよつとした訳があつて家に藍華とそのお母さんも一緒に住んでいるのよ」

「このお弁当も桐生さんのお母様に教えてもらいながら作ったんです」

「へえ〜」

「そうだったんだ」

二人の説明に片瀬と村山は納得の声を上げた。

「おーい！ 藍華ちゃん、アジア、夕麻、ついでに変態君〜。そろそろ部屋に行く時間だけでもう食べ終わったかにゃあ〜？」

「名前じゃない!? しかも俺はついんですか!」

教室のドアを開け、声をかけるのは三年の黒歌だった。その横には白音とミツテルトの姿も見える。同じく教室で昼食を取っていたイツセーは声を上げて立ち上がった。そして何故かは知らないが、イツセーの近くにいる松田と元浜が床に手をついて悲壮感を漂わせていた。まあ、どうせ下らない事だろうから別に無視で良い。

「あつ、りょーかいです。二人は食べ終わった？」

「あつ、はい。私は大丈夫です」

「私も丁度食べ終わったから大丈夫」

「ん、じゃあ行きますか。そういう訳だから、また後で〜」

「これからリアス先輩達と今度の球技大会の練習かあ、いいなあ」
「あのリアス先輩と一緒になんて羨ましいいわねえ」

羨ましがっている片瀬と村山に別れを告げ、藍華達は席を立ち黒歌達の元へ向かう。

「ほら兵藤ー、じゃなくなつて変態ー。さつさと行くわよー」

「態々言い直した!?!」



数日後、球技大会当日となった。クラス対抗戦の部は終わり、部活対抗戦の部。そこでオカルト研究部の一同、いや、イツセーはというと……。

「狙ええええ！ 兵藤を潰せええええ!!」

「お願い！ 兵藤を倒して！リアスお姉さまの為に！」

「そして朱乃お姉さまの為に！」

「黒歌先輩を魔の手から救うんだ！」

「奴を殺せええええ！ 死ねええええ!!」

「イツセー!! お前はここで終われえええ!!」

「ロリコンは俺だけで十分じゃああああ!!」

対戦相手、そしてギャラリーからも集中砲火を受けていた。部活対抗の演目はドッチボール。ボールは何故か執拗にイツセーに集中しており、イツセーは必死に避けている。理由はとっても単純な話だった。

リアス—— 駒王学園のお姉さま。大人気のアイドル的存在。当てられない。

朱乃—— リアスと同じく駒王学園のお姉さま。当てられない。

黒歌—— 学園ナンバースリーの人気を誇る。当てられない。

アーシア—— 二年生ナンバーワンの癒し系金髪美少女。可愛そう、危ないからという全員の共通の認識で事で外野にいる。

夕麻—— 同じく二年生の清楚系黒髪美少女。当てられない。

藍華—— オカルト研究部に入れたのは謎だが、誰かさんの様に恨

む事はなし。アーシアと同じく外野にいる為当てられない。もつと情報k w s k。

白音——学園のマスコットの存在。当てたらかわいいそう。寧ろ当たってあげたい。

ミッテルト——白音と同じく最近マスコットの存在に。当てられない。

木場——全男子の敵だが、当てられたら女子に恨まれる。当てられない。

イツセー——なぜか美男美女達ばかりのオカルト研究部にいるのか分からない。当てても問題なし、と言うか当てるべき。畜生！あいつを狙え！ ヘッドショットだ！ 慈悲は無い！ 野獣を倒せ！！

究極の消去法だった。故に全校生徒からその想いを一心に受けているのである。

「皆！ イツセーにボールが集中しているわ！ 戦術的には『犠牲（サクリファイス）』って所ね！ 頑張ってねイツセー！」

「クソオオオオ！ こうなりや意地でも全部避けきってやる!!」

イツセーが必死になって避け続けている中、外野にいる藍華が敵の内野の選手達に何やら耳打ちをしていた。その数秒後……。

『許すまじいいいいいい！ 兵藤オオオオオオ!!』

「ふあ!？」

相手の内野陣の選手が天に向かって吠える。そしてかれらから発せられるプレッシャーが倍に増加した。それだけでなく、イツセーに投げられるボールの速さもキレも、そしてボールに乗せられる殺意の波動も激増した。

「お、おい桐生!!? お前一体何言っただよ!!?」

「ん？ 特別何かって訳じゃないわよ？」

「そんなニヤリと笑ってて説得力皆無だわツ!!」

「おのれ、おのれ兵藤おおおお!!」

「くたばりやがれええええええええええ!!」

「こん畜生があああああああああ!!」

「本当に何言ったんだよ!? 血涙流してんぞ!？」

イツセーが避け続ける中、1人の剛腕な野球少年が木場に標準を定めた。

「クソオー! 女子に恨まれても良い! イケメンめええ!!」

イケメンに対する憎悪が大きかったのか、女子からのブーイングの中、イツセーでなく木場に向かってボールを撃ち出した。

「……」

何故か木場はブーツとしており、避ける素振りを見せない。

「何やってんだ木場!」

そんな木場の元へイツセーが庇う様に前へ出た

「……あ、イツセー君」

呆けた声を出す木場を背に、イツセーは向かって来るボールを受け止めようとしたが、まるでフォークボールの様に急激に降下して丁度イツセーの下腹部辺りへ行き……。

ドバンツ!!

「!?——~~~~ツツ?!?!」

「うわあ、兵藤のボールにボールが直撃」

「? 桐生さん、イツセーさんはボールを持っているんですか?」

「ええ、兵藤だけじゃなくって男ならだれでも二つ持ってるわよ」

「そ、そうだったんですか。桐生さんは物知りですね」

直撃したイツセーは声にならない悲鳴を上げ、直撃した箇所を抑えたままその場に倒れ込んでしまった。外野で藍華がアジアに教授している間に、同じ内野の部員達がイツセーに駆け寄る

「大丈夫イツセー!」

「ぶ、部長。た、玉が……」

「ボールならあるわ! よくやったわイツセー 後は私達に任せておいて!」

「そ、そっちじゃ、ない、です……」

「さあ、皆! イツセーの弔い合戦よ!」

『はい!』

死んだ事になっているイツセーを置いて、リアスの気合の入った声

が響く

そしてその数分後

『オカルト研究部の勝利です!』

ちなみに試合後、人目に付かない場所でイツセーの患部の近くの腰の辺りをアジアの神器で癒してもらったとき。



大会も終わり、片付けもほぼ終わった頃。外はすっかり雨模様となっていた

パンツ!

雨音に混じって乾いた音が響く。その音の発生源は木場の頬からだった

「どう?少しは目が覚めたかしら?」

木場の頬を叩いたりアスが怒りを込めた音色で木場に問うが、叩かれた木場は何故か無表情で無言。いつもの木場とは違った様子に、オカルト研究部の面々は戸惑いを覚えていた

と、木場は突如何時ものニコニコ笑顔になる。が、それはどこか寒々としたものを感じさせるものだった

「…もういいですか?球技大会も終わりましたし、練習もないのでもう何もないですよね?今日の部活動は少し疲れたので夜の方も休ませてください。今日は申し訳ありませんでした、どうにも調子が悪かったみたいです。僕はこれで失礼します」

「ちよ、ちよつと祐斗!話はまだ終わってないわよ!」

「お、おい木場!」

バタンツ

木場はリアス達の制止の言葉も聞かずに、そのまま部室を出て行ってしまった

「・・・ねえ、兵藤。木場君、一体どうしたのよ。何か最近らしくないけど。木場君と同じクラスの子達もよく木場君が物思いに更けてい

るのを見るって聞くし」

「ああ、それがな……」

イツセーの話によると藍華達が部活を休んだ日、旧校舎は清掃する為に仕えなかった為、イツセーの家を代わりに利用させてもらっていたとの事

その時、イツセーの母親が持ってきたイツセーのアルバムをみんなで楽しそうに見ていた時、木場がある写真を見て表情を一変させたそう
うだ

「で、何が映ってたのよ、その写真には」

「いや、特になんたって訳じゃねえぞ？ 昔近所に住んでた奴と一緒に映ってるってくらいだし……あつ、そう言えば」

イツセーは思い出したように手をポンと着く

「木場がその写真を見た時に、そこに映っている物を見て言ってたんだ。これは『聖剣』だって。その時の木場の目がすごく冷たかったな」



土砂降りの雨の中、傘もささずに木場はあてもなくただ歩いていて思い出すは先程の行為。自分を救ってくれた主であるリアスに対し始めて反抗してしまった

だが、自分には何よりも大切な事がある。そんな基本的な事を学園生活を送っている間に蔑ろにしてしまっていた

仲間も出来た、生活を得た、名前も与えられた

けれど、本当は僕にはそれらを得る資格なんてない。復讐の為に僕は生きているのだから。僕が幸せを願う事なんてあっちゃいけないんだ

パシヤン

雨音とは違った水の音を耳が捉える。見れば、僕の少し前の路地の入口に人が倒れていた。その恰好にはよく見覚えがあった。いや、あ

りすぎた

「神父……」

ポツリと出た言葉に自分でも分かるくらいの憎悪が籠っていた。神父の近くには十字架が転がっている。憎き神の元に仕えし者

エクソシストならば牽制、あるいは始末しても構わないだろうと思っていた時、異常な気配をその近くから感じた

「ツ！誰だ！」

僕は瞬時に自身の神器で手に剣を作り出して構え、路地の入口を睨みつける

「あーらら、ばれちゃいましたか。流石悪魔君だ」

路地の陰から出て来たのは倒れている聖職者と同じ格好、神父。同い年程の白髪の青年はふざけた口調でこちらに顔を向ける

「……こんな所へ何の用かな？ここが魔王の管理する土地だと知って入って来たのかい。悪いけど、今の僕は至極機嫌が悪くてね」

「んー、まあそうっすねー。知ってて入って来ちゃってますけどお？それと機嫌が悪い事については俺っちの知った事じゃないんすけどねえ」

殺気と怒気を含んだ口調で言ってみるが、目の前の神父はふざけた口調のままだった。全く、神父っというだけで憎いのに、余計に腹が立つよ

斬りかかろうと剣を持つ手に力を込めた時、彼の背中、その背中から覗かせている剣から発する聖なるオーラを感じ取った

「ツツ！その剣、そのオーラは！」

忘れもしない、誰が忘れるものか！

「ん？知っちゃってる感じっすか？ご名答！これが最強にしてあの有名な聖剣、エクスカリバーっすよ」

「ツ！」

——僕はエクスカリバーを許さない。



「ほわあああああ!?!」

「はっはっはー! 走れ走れ! じゃないと捕まっちゃうぞおー」

「わ、分かってますよおおおおー!」

どうも皆さん、シルです。突然ですが、現在僕はミノタウロスに追われる某兎少年の様に死ぬ気で走っています! でも速さは段違いで、音が遅れてやって来るくらいの速さだよ!

「あつ、その角左な」

「おおつと!?!」

無理やり方向転換をして何とか曲がる事に成功。この人、いやこの神様、さつきからギリギリで言うからひやひやするんだよね!

僕の隣を比較的余裕そうに走っているのは比較的露出度の高い動きやすそうな服装に身を包んだ女性。この神物が神様の同僚の神様、リュウさん（本人からそう呼べと言われた）

そして僕達が何故こんな走っているか、それは後ろにいる――『待つてええええ!! シルきゆううん♡』

物凄い数の女神様達から逃げているからです!!

「はははっ、人気者だな。しかも全員が女神ときたもんだ、そんな奴今までお前くらいじゃないか? 良かったな（棒）」

「いや、絶対そんな事思っていないでしょ?! 棒読みになってますよ!!」

『シルきゆううん!!』

と言うか怖いです! 皆笑顔なんだけど、何か目が怖い! まるで獲物を狙う肉食獣の様だよ! 僕の本能が捕まったらヤバいつて警報を鳴らしています!

ちなみにさつきから僕とリュウさんが逃げている場所はまるで迷宮の様に入り組んだ場所。ここはリュウさんや神様達の世界。あの世、または神界と呼ばれる場所。僕が最初に神様と出会った世界です。あの日、神様がいなくなったという知らせを受けた僕は、リュウさんに僕も一緒に神様を探す手伝いをしたいと願い出た

結果、その願いは叶う事となった。そして、僕がない間家の事が心配な為藍華と藍華のお母さんに皆の事を頼んだんだ。料理は白音

はそこそこ出来るけど、最近人数が増えたから流石に白音だけじゃあ大変だしね。他にも僕がいない間掃除とか洗濯とか色々心配だったから、快く承諾してくれた藍華のお母さんには感謝だ

そしてリュウさんから教えてもらった神界への転移魔法を教えてください、藍華達に見送られ一旦月まで転移した後、ここへ来てリュウさんに会い、一緒に神様を探し始めたんだけど・・・

途中、すれ違った女神さんが僕の事を見つめる事数秒。その女神様がどこかへ連絡を取ったと思ったたら大勢の女神様達に追われる事となった。正直自分自身言つてて意味が分からないー(白目)

「まあ、お前の噂は色々聞いてたが、まさかここまでとはなあ。どうりでここへ来る事も許可されたのかあ。いやあ、納得納得」

「なに呑気な事言ってるんですか!?というか僕の噂って何ですか?」

『銀髪猫耳オッドアイボクっ子しつかり者のお姉さん系かと思いきや、実は甘えたがりというのを隠してふとした時に見せる年相応の笑顔マジ萌え女神殺しのシルきゅん』って言うのが一番有名だな
「何それ!？」

その長い名称は僕なんですか!?というかもうそれ文章だよ!

『シルきゅんうううううん♡♡』

ああ、もう!まだ追つて来・・・ふ、増えてるううう!?さつきより明らかに増えてるよ!?

「おーおー、さつきの倍くらい増えてるんじゃないか?スゲエなあお前」

「だから呑気な事言っていないで何とかしてくださいよ!?!捕まったらヤバいつて僕の本能が警報鳴らしまくっているんですから!!」

「いや、別に捕まっても・・・た、多分大丈夫だろう(震え声)」
「声が震えてますよ!?!あと目を逸らさないでください!」

「大丈夫だ、命の危険はないはずだから。命は」

「そこだけ保障されても安心できませんよ!?!それ以外はなんですか!!」

「聞きたいか?」

「ごめんなさいやっぱいいです。というか知りたくないです」

『シルきゆうううん!!!』

ふええええええ！お家帰りたいよおおお！

「神様ああああ！どこですかああああ!？」

僕の叫びが木霊する。こういう時、人はこう言う

どうしてこうなった！

おまけ♪

とある人物の日記から抜粋

○がつ○にち はれ

きょうも、しるといつしよにいつぱいあそんだ。

しるはもふもふでふわふわしててとってもかわいいの！

しるはあたまをなでてあげるとうれしそうになくの

わたしはそれがうれしくて、きょうはおかあさんによばれるまで
ずっとしるをなでてたよ

ねるときもしるといつしよ。だつてずっといしよにいたいもん

それはわたしがしるのことがだいすきだから！えへへ

きょうはこれでおしまい。つづきはまたあした。あしたもおこし
てね、しる

エクソシストと聖剣

「カラオケかあ」

「久々に行かねえ？」

「駅前なら挿入歌はおろか、キャラソンまでフオローしているぞ」

休み時間、松田と元浜からカラオケに誘われた。そういえばこしばらくこいつらとどっかに遊びに行ったりしてなかったなあ。何かと忙しかったしな、主に悪魔関連で

「挿入がなんだってえ？」

「「おわっ!?!」」

会話している俺達の元へ突然桐生が現れた

「やだやだあ、朝からまたエロトーク？」

「失敬な！俺達はカラオケ行こうって話してただけだ」

ニヤニヤとした表情でそう言ってくる桐生。俺達だっけいつもエロトークばかりしてる訳じゃ・・・ふゆ、ふゆーふゆー

元浜の言葉に桐生は眼鏡を光らせた

「カラオケ！良いじゃん、私も行こうかなあ。ね、二人とも？」

「はい、行きたいです」

「行った事が無いから、私も興味があるわね。ミッテルト達も一緒に誘ってみようかしら？」

「「なにいいいいいいいい!!」」

問いかける桐生の後ろにいたアシアと夕麻ちゃんが肯定的な返答が返って来た。松田と元浜が俺でもちよつと引くくらい興奮した様子で驚いている

「我がクラスの美少女二人が来るだっけ!？」

「うおおおおお！アシアちゃんと夕麻ちゃん！この二人が来るだけでもテンション上がるというのに、更にミッテルトちゃんも加わったらもう言う事なしじゃないか!!」

「悪かったわね、私も一緒で!」

叫ぶ元浜に、涙を流す松田。よほど女子とのこういう機会に飢えて

いるんだな・・・まあ、俺も少し前までそうだったけど。環境で言えばハーレム状態だし。木場？イケメンは数には入れん！

桐生に頭を叩かれた松田がふっ、と鼻で笑う。何だ、とうとうMにも目覚めたのか？

「・・・なんか今失礼な事を思われていたような・・・コホン。桐生、お前は所詮アーシアちゃん達のオプションにすぎんのだよ。眼鏡属性は元浜で間に合っているがまあ、良いだろう」

「何よ、エロ坊主その態度は？それにそこの変態眼鏡と一緒にしないで、属性が穢れるわ」

不機嫌そうに眉根を寄せる桐生。あと松田、お前シルさんの前でそれ言ったらどうなっても知らねえぞ。魔王様達の遙か上に行くシルさんを相手にしたら、俺より酷い事になるぞ？俺ですら合宿で何度も死にかけて、死にかけて・・・蒼いドラゴンが、火の玉が追いかけて来る。逃げてても逃げてても追って来る。逃げられない、逃げられナイ、ニゲラレナイ、ニゲラレナイ。アア、シカイガアオニソマル：

「こいつめ！元浜の眼鏡は女子の体のサイズを数値化出来る特殊能力を持っているんだぞ！」

「ふっ、俺の眼鏡にかかれば、雑誌でも数値化出来るのだよ」

——ハッ！お、俺は今何を。なんだか滅茶苦茶嫌な事を思い出していたような・・・やめよう、これ以上考えるのは。って、いかんっ

「——ダメだ元浜。お前のそれは桐生のものに勝てない」

「!？」

俺がそう言うと二人は振り返って驚愕の表情を向けて来る

「な、なにを言うんだ、イツセー？お前だって知ってるだろう？元浜の素晴らしいこの能力の事を！」

「ああ、勿論知ってるさ。俺だって長い事近くでそれを見てきたんだ」
震える声で言葉を発する松田に俺はすぐに肯定の言葉を返す

「な、なら何故そんな事を言うのだイツセー！」

「それは・・・」

言ってもいいのだろうか？これを言ったら最後、エロメガネの代名

詞である元浜の能力は本当はどんなものなのかというのを知ってしまおう事になつてしまう。そんな事になったら元浜は、元浜はっ……!

「……ダメだ、俺の口からは言えないっ」

二人から顔を反らして俺は拳を握りしめる

「な、何故なんだイツセー!?!」

「友である俺達に言えないのか!?!」

「友だからこそなんだよ!」

「!?!」

そんなやり取りをしている俺達の元へ、桐生が割り込んできた

「じゃあ兵藤が言えないんなら、私が言うわ」

松田と元浜の肩に手を置いた桐生がにやりと悪魔の様な笑みを浮かべる。悪魔は俺だけど

「つて! 止せ、桐生!!」

俺が止めるも遅く、桐生は二人の耳元で何かを呟いた

ピキリッ

「ぐはああああああああ!!?!」

「元浜ああああああああ!」

その直後、元浜は吐血した様に呻き、床に倒れ込んだ。俺はすぐさま元浜の上半身を抱え起こす。元浜の自慢の眼鏡は罅が入っていた

「しっかりしろ元浜!」

「い、イツセー……」

近くにいてようやく聞き取れるくらいのか細い声。眼鏡に罅も入っている事から相当なダメージな様だ

「俺の、俺の唯一無二の能力は、劣化版だったんだ。ふふっ、なんて無様何だろうな……」

くっ、やはり元浜には酷だったようだ!俺がもつと早く止められていけば……!

「すまねえ、元浜。俺がお前を推したばかりにっ!」

松田は自分の行いを悔いるように地面に膝を着いた。お前だけのせいじゃねえんだ松田

そこへ桐生が更なる追撃の言葉を口にする

「ああそれと、あんた達がメモしてたこの学校の女子のスリーサイズが書かれた「マル秘帳」の内容だけど、あれ結構間違ってるから」

「なにに!?!」

俺達は二重の意味で驚きの声を上げる。何であれの事を桐生が知ってるんだ!あとそれが間違っているだど!?

「ば、馬鹿な事を!あれは我々が苦心して取ったデータだぞ!?!間違っているはずがない!」

「そうだ!いくら何でも元浜のスカウターで調べた数値が間違っている事なんで事はありえない!」

二人が揃って抗議の声を上げる。正直俺も信じられない。いくら桐生の劣化版とはいえ、元浜の能力は確かなものはずだ...が、二人のように強く否定できない自分がいる事も確かだ

詰め寄る二人に桐生の眼鏡がキラリとひかり、不敵な笑みと共に最後の言葉を口にした

「あなたの眼鏡で見たのは『服越し』ででしょ?私は『直接』見るだけじゃなくて触る事も出来るのよ」

ピシャーんと、二人は雷に打たれた様な衝撃を受ける二人。崩れ落ちた二人は、まるで魂の抜けた抜け殻の様になっている

「お、おれのスカウターは、スカウター(笑)?フハ、ハハハ!」
「俺達がやってきた事は、無意味だったのか...」

今の打ちひしがれている二人に俺はかける言葉が見つからない...: というか声をかけるにも、二人に近づく恐ろしい目をした女子達がいるから無理だな

二人とも、骨は拾ってやるからなッ!

いつの間にかいなくなっていたアーシア達に続いて俺もその場からとんずらした。その数秒後、遠くから断末魔が響いて来たのを俺は聞こえないものとした

そう言えば桐生に何で松田達みたい在意気消沈してないのかって聞かれたけど...なんでだ?ちよつと前の俺だったら絶対にあいつ等みたいになつてたろうけど。思い当る節は...ううーん?

自分に対する疑問が残った日・・・そして思いもよらない人物に十年振りに再開した日だった



放課後の駒王学園生徒会室。ここに生徒会長と副会長のソーナ、椿。そしてリアス、朱乃の四人の人物達が集まっていた。両者がソファーに向かい合う形で座る中、椿が口を開く

「今朝、教会の関係者が接触してきました」

「まあ・・・!」

椿の報告に朱乃が口に手を当てて目を見開く

「この町に入って来るのは久しぶりね。ソーナ、その二人の目的は分かるかしら?」

「ええ。彼女等の目的はこの町の管理をしている悪魔、つまりリアス、あなたとの会談を願い出てきたのです」

「教会の関係者が!」

今度はリアスが目を見開いた。自身達悪魔と敵対している神の信徒である彼等から接触してくる、まして会談を望むなど一体なんの冗談かと思う。リアスは嘆息し、眉を寄せた

「かなり厄介事なのは間違いなさそうね」

「ええ、しかも接触してきた二人はそれぞれ聖剣を携えていました」

「更に、この町に入ってきている神父達が次々と何者かに襲われ、重傷を負っているようです」

全員が難しい表情で沈黙する中、目を細めたリアスが呟いた
「・・・嫌な予感がするわね」

一体この町で何が起きようとしているのか、集まった四人の不安は拭えなかった



「見つかったっ？」

「ダメ、こつちにはいないわ！」

「でも、まだそう遠くに行っていないはずよ！」

「ええ、なんとしても見つけるのよ！」

『当然！』

――

――

――

――

「……行つたか？」

「……みたいですわね」

足音が遠ざかっていき、周囲に誰もいないのを確認した僕達は、カモフラージュに使った白いシーツを仕舞って隠れていた通路のくぼみから出る。ふう、やつと一息着けそうだね……

あつ、どうも皆さん、シルです。神様を探しに神界にやって来たはずの僕は、リユウさん（神様の同僚の女神様）と未だに（腐）女神様達相手にリアル逃走中をやっています

「しっかし、あいつらも粘るなあ。まさかぶっ続けで追って来るとは、しかも数もちよいちよい増えてるし」

「もう恐怖しか感じませんよ……」

正直本当に怖い。どこまでも追ってきて、どんどん数が増えていくし。一人に見つかったら一気に三十人が出て来るって、大変失礼だけでもうGとしか言いようがないよお

しかも、最初の方はただ追いかけて来てただけけど、段々と包囲網とかを張り巡らせて追い詰めて来るし。お蔭で逃げるのが段々と難しくなっていく。体力はまだまだ大丈夫だけど、精神的な方がキツイです

「それにしても、本当に広いですね（こ）」

「まあ、神界だしな」

「納得です」

今僕達がいるのは、初日からずっと逃げ続けているあの迷路のような所。リュウさんが言うには、地球の何倍もある場所なんだとか。いつ、誰が作ったかも定かではないみたいだけど、かなーり昔からあるみたいです。迷子になったら大変そうだよねーとか思っていたら実際、過去におつちよこちよいな女神様が迷子になっちゃった事があったとの事。しかもその迷子になった女神様はリュウさんの神友。ちよつと会ってみたいかも、と思った僕は悪くないと思います。多分、アーシアっぽい感じの女神様じゃないかな？なんかこう、何も無い所でこけてそうなそんな感じ

「にしても・・・いねえなあいつ」

「ですネ」

口を尖らせるリュウさんに相槌を打つ。今の会話から分かる通り、僕達の探し人ならぬ探し神である神様も恐らくここにいらっしゃるんだよね。他の場所はもうリュウさんが探したらしいし。リュウさんも流石にいないだろうと思つてここは探していなかったみたいだ。というか好き好んでこんな所に来る神様はいないって・・・まあ、今は大勢のご腐神達（誤字じゃない）がいるけどね！（懐）

「まあ、まだ半分も回ってないですし、きつとどこかにいますよ。だから落ち込まないでくださいリュウさん」

「だ、誰が落ち込むかっての！別にあんな奴の事なんか知るかってんだ！」

ぶつきら棒な返事をしてそつぽを向くリュウさん。こちらに向けている耳が若干赤くなつてますね。さてさて、もうお分かりの皆様もいらつしやるのではないのでしょうか？そうなんです、実はリュウさん神様に「惚」の字なのです

逃走中、まだちよつと余裕があつた時に神様との事を聞いてみたんですが、明らかに動揺というか、言葉に詰まったり、神様の事を話す時なんか口では「あいつはどんくさい」とか「軟弱な奴だ」とか色々言つてたけど、表情が柔らかかったというかなんというか。話し始めたら結構続いたお蔭で何度か追い詰められそうになつたけどね。い

やあ、あれは冷や汗ものだった。寿命が縮んだ気分似てたよ

「た、ただ、誰かが探してやんねえといけねえだろ？あいつがいないと仕事も溜まっていくし・・・そ、それにもしかしたら普段はしつかりしてんのに、偶にどっか抜けてるあの・・・んんっ、あいつの事だから何か困ってるかもしれないし・・・だから付き合いが長い俺が仕方なく、そう、し・か・た・が・な・く！探してやってんだ！勘違いしてんじゃねえよ、バーカ、バーカ！」

・・・なにこの可愛い女神様。最初に会った時と印象違い過ぎるでしょ。この女神様、見た目僕より年上っぽい感じなのに、つい撫でたくなる衝動に駆られるんだけど。くっ、鎮まれ僕の左手！（中二っぽい）

「いたわ！こつちよ!!」

「こちら18班！シルキゅん発見しました！」

っ?!しまった！可愛いリュウさんに気を取られ過ぎたか！

「走りますよりリュウさん！」

「わ、分かっているっつーの！いいかつ、さつきも言ったけど別に俺はあいつの事なんとも思っていないからな！本当だからな!」

ツンデレご馳走様でした！

『シルキゅーん♡♡待ってえ♡♡』

「っつて早っ?!もうこんな集まって来たの!?!」

今日も逃走の日を送っているシルだった

シルは迫り来る腐女神達から逃げ切る事が出来るのか？

行方不明になった神様は一体どこに？

そしてリュウの可愛さゲージはどこまで上がるのか？

答えは次回以降に持ち越しだー!!

「何この予告!?!」

END



ソーナ達から報告を受けた翌日の放課後、アーシア達を除いたグレモリー眷属はオカルト研究部部室に集められていた。例によって、カラワーナは教職の仕事の為欠席である

そしてリアスと向かい合う形で座るは、白いローブを身に纏い、首から十字架が下げている二人のイツセー達と同年くらい少女達

一人は紫藤^{しどう}イリナ、長い栗毛をツインテールにしている明るい印象の少女

もう片方はゼノヴィア、蒼い髪に緑のメッシュを入れており鋭い目つきをしている

ピリピリと緊張した空気の中、挨拶もそこそこに栗毛の少女、イリナが口を開く

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に管理、保管されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」

いきなりの衝撃発言に、グレモリー側が目を見開いた。イツセーはエクスカリバーという単語に驚いているようだが

大昔の三大勢力の大戦で折られて四散し、その欠片を元に錬金術師の手によって新たに七本の作られ、行方不明の一本を除いて各教会で二本ずつ管理していた聖剣エクスカリバー。悪魔に対して絶対の威力を誇る聖剣の一つだ

話の途中で二人がそれぞれ布に包まれた『破壊の聖剣』とミサンガの様に巻き付いた『擬態の聖剣』を見せると、剣から発せられる聖なるオーラに悪魔側の者達の顔が強張り、一部で殺気が膨れ上がった

話は続けられ、各協会から一本ずつエクスカリバーを奪った者はこの日本に逃れてきた。その犯人は『神の子を見張る者(グリゴリ)』と呼ばれる墮天使の組織の幹部であり古の大戦を生き抜き、聖書にもその名を記されている墮天使コカビエル

教会側は盗まれたエクスカリバーを取り戻すべく、彼女達以外に何人も神父やエクソシスト達がこの街に送り込まれたが、幸い命の危険はないようであるもののどれも重症を負っている

彼女達はその奪われたエクスカリバーを奪還すべくこの地に派遣

されてきた。そして、この件は自分達協会側の問題である為この地に
住む悪魔は一切手を出すな、と

突然やってきての傲慢ともいえるその物言いに、リアスも眉を寄せ
る

「・・・それは牽制のつもり？　なら随分と見当外れな牽制ね。私達が
コカビエルと手を組んで聖剣をどうにかするつもりだとも？」

「上はそう考えてるよ、魔王の妹。もしもあなた達がコカビエルと手
を組むのなら、その時は我々は完全にあなた達を消滅させるつもり
だ」

淡々と述べるメツシユの少女、ゼノヴィアの言葉にリアスの体から
僅かに紅い魔力が溢れる。部室の空気がどんどん悪くなっていく中、
一度大きく息を吐いたリアスは今回の件についての関与を否定し、教
会側の彼女達のこの町での行動を黙認する事とした

話が終わると教会側の二人は一口もお茶を飲まずに早々に立ち
去って行った。が、二人が出て行ってもなお、一部で空気が最悪なま
まだった

「お、おい木場・・・？」

「・・・」

その空気を作り出している張本人、未だ二人が出て行ったドアを殺
気の籠った瞳で睨みつけている木場に、代表してイツセーが話しかけ
るが返事は無く、彼は彼女達の後を追う様に扉へと手をかけた

「待ちなさい祐斗！さっきの話の通り、勝手な行動は・・・」

「すみませんが、この地に聖剣が、しかも複数集まっている以上、黙っ
て見過ごすつもりはありません」

リアスの声を遮って、淡々とした口調だが声音には黒い感情をのせ
た木場の言葉。向けられた冷たい瞳はまるで長年の宿敵を前にした
復讐者のそれだ。固まってしまったリアス達を尻目に、今度こそ彼は
部室を出て行った

「祐斗・・・」

「部長！一体木場と聖剣に何があつたんですか！」

悲痛な声を漏らすリアスにイツセーが詰め寄る。仲間を思う真っ

人に向ける。その人物とは・・・

「黙っていないわよ」

桐生藍華、オカルト研究部所属の一般人（笑）だった。藍華が何故ここにいるのか？何故怒っているのか？何故聖剣を持っているのか？疑問は尽きないが皆が思った事とは・・・

『（一体何がどうなってこうなった!?!）』

To Be Continued...

対峙と秘策

「んー、この草が厄介ね。アーシア、草で手を切らないように気を付けて」

「は、はいっ。あと、すみません桐生さん。手伝ってもらって・・・」
「良いって、良いって。別にこれくらい何てことないし」

放課後の旧校舎の近くの空き地で、アーシアと藍華は探し物をして
いた。その探し物と言うのが

「あうう、シルさんから頂いたお守りをなくしてしまうなんて・・・」
「まあ、落としたのはこの辺っぽいんだし、きっと見つかるわよ」

お守り、アーシアが初めてシルと会った日にもらった巾着袋。どう
やら首に下げる紐の部分が切れてしまい、昨日の部活帰りにそのまま
落としてしまったらしい。一応、家から学校までの帰り道と学校の落
とし物もチェックした為、あと可能性的にはこの旧校舎の周りという
訳だ

他のメンバーは部室で用事があり、残りの白音と黒歌の方は途中で
早退してしまった為、二人だけで探す事になった

「それに、その為にちゃんと今日のラツキーカラーのを着けてきたん
でしょ?」

「は、はい。桐生さんに言われた通り、ちゃんとピンク「おっと、そこ
までアーシア。それ以上は喜ぶ奴等がいるから」は、はい?」

今画面の向こうでドキリとしたあなた、バレてますのでご注意を
「そう言えばアーシア、あの中着袋の中って何が入ってたの?」

「え、えっと、綺麗な色が入ったガラス玉です」
「ん?ガラス玉?つてもしかして・・・こんな奴?」

思い当たる様な素振りを見せた藍華は、ポケットから出した小さな袋
の中の中身を自分の手のひらに出した

「あっ!、これはです!これと全く同じです!」
「成程ね、やっぱりか」

藍華が手に出したのは、一つのガラス玉。それは十年前に枕元に置

かかっていた赤、青、シルバーの三色の綺麗な模様が入ってるものだから、これ」

「ひ、光ってます?」

取り出したガラス玉は、ユラユラと蠟燭の様な小さな光を放っていた

「ど、どういう事でしょう桐生さん?」

「・・・もしかして、共鳴してる?」

手のひらに乗せたまま動いてみると、光が若干強まったり、弱まったりとした

「っほいわね。これならすぐにも見つけられそうよアーシア」

「ほ、本当ですかっ!」

ぱあ、つと一気に顔に喜色を浮かべるアーシアと共に、ガラス玉の光に従って空き地をウロウロと動き回る事数分。弱い事には変わらないが、ガラス玉が今までで一番光を放った

「アーシア、この辺を集中的に探すわよ」

「は、はい!」

その辺りの草むらを注意しながら2人で掻き分けて探していくと・・・

「あ、ありました!桐生さん見つけられましたよ!!」

「おっ、良かったわねアーシア」

「はい!これも桐生さんのお蔭です!!」

喜びの声を上げるアーシアの手には巾着袋があった。大事そうに胸に抱える様子を見て、藍華の頬も緩む

「んじや、探し物も見つかった事だし帰るとしますか。早退した黒歌先輩や白音ちゃん達の事も気になるし」

「はい!あつ、桐生さん!手が」

「ん?ああ、ちよつと切っちゃってたか。注意したのに、自分になつてちや世話無いわね」

藍華の手の甲に、僅かながらに切り傷があり、血が滲み出していた

「桐生さん!手をこちらに。私の神器で治療を」

「いや、別にこれくらいの傷はすぐに治るって」

「ダメです！小さな傷でもばいきんが入ったら大変です！さあ、手を！」

「わ、分かったから。じゃあ、お願い」

「はい！」

頑として引く気が無いアーシアに、折れた藍華はおとなく手を差し出す。こういう時のアーシアが引かない事をよく知っているからだ。差し出された手にアーシアは満足そうに微笑むと、傷の部分に手を当てて治療を始める。手を包んだ淡い光がすぐさま傷を治し、まるで最初から無かったかの様になった

「はい！これでお終いです」

「ありがと、アーシア」

「おい」

突然声をかけられ、振り返るとそこには白いローブの様なものを着込んだ少女がいた。鋭い目つきのその少女は目を細めて藍華……ではなくその隣のアーシアに視線を向けていた

「お前、『魔女』アーシア・アルジエントだな。まさかこの地で会おうとはな」

魔女と呼ばれ、ビクツと体を震わせるアーシア。アーシアは目の前の彼女を見た時からその正体が分かった。見覚えのある白いローブ、そして首に下げている十字架が何よりの証拠だ

「え、ホント？じゃあ、さっきのが悪魔や墮天使を癒す能力なのね。追放されてどこかに流れた、とは聞いてたけどまさかこんな所にいたなんて」

「え、あ、あの……」

同じような格好をした栗毛ツインテールの少女にまじまじと見られ、対応に困るアーシア

「……行こうアーシア」

「あつ、桐生さん」

そんなアーシアの手を引き、この場を去ろうとする藍華。しかし、その進路をみつきの鋭い少女が立ち塞がった

「……何？そこ、邪魔なだけだ」

「つたく、随分ふざけた事言ってくれるわね、あんた達」

眼鏡をかけ直し、自分達に視線を向けて来る者。それはつい先程まで目の前にいた人物だった

「私も、私の友達に手を出すっていうんなら・・・」

思わず手放してしまった『破壊の聖剣』地面に突き刺さっていたそれを引き抜き、切っ先を向けられる

「黙っていないわよ」

はつきりと告げられたその言葉に乗せられた怒気。ゼノヴィアとイリナの思考は突然の展開に停止し、尻餅をついたまま動けなかった。騒ぎを聞きつけてやって来ていたリアス達も、この光景に言葉を失っていた

「大体あんた達は何様なのよ」

誰もが口を開けず、動けないでいる中（あわあわしているアーシアは除く）藍華の声が空き地に響く

「幼い頃から都合のいい事ばかり教え込んで、力が見つかったからって勝手に『聖女』に祭り上げて孤独にさせ、挙句散々利用しといて都合な事があつたらすぐに見限って女の子をたつた一人で放り出して・・・それが聖職者っていうののやる事？」

それに誰を断罪するって？あんた達にそんな権利があると思ってる訳？それとも神様の使徒ってのは何をしても許されるとかかって思ってるのか？・・・神を免罪符代わりにしてるんじゃないわよっ。今を精一杯生きているこの子の人生に、これ以上関わるなあっ！」

溜まっていたものを一気に吐き出すように述べた。かつてライザーが部屋にやって来た時以来の、あるいはそれ以上の怒りを見せる藍華。そしてまるでそれに答えるように、握られた聖剣から白い聖なるオーラが発せられる

「あと分かってない様だから今はつきりと言うけど、あんたらは信者なんかじゃない。盲信者」

「わ、私達が盲信者ですって！」

「事実でしょ？本当の信者ってのはアーシアみたいな子を言うもんですよ。寧ろアーシアが本当の信者じゃないって言うんなら誰を信者と

言うのかつて話だけど」

「馬鹿な事を。そこにいる『魔女』は悪魔を癒した、これは神に対する冒瀆だ」

「例え敵であろうとも、目の前で傷ついた者を救おうとする事が出来る優しい心を持つてるって事でしょ？少なくとも今時そんな子は、この子以外に私は知らない。逆にそんな尊い心の持ち主を放り出したあんた達教会や神様って奴は随分と御・立・派だ事で」

「っ！貴様っ、神を愚弄するか!!」

「人の大切な友人の事を散々貶めておいてよく言うわ。あんた達をそんな風に行っているのか、放っておいてるかは知らないけど、どっちにせよその神様ってのも同罪ね。今すぐ神の座っていうのを降りた方が良いんじゃない？」

「っ！よくも!!」

「許さん!!」

イリナは腕に着けていたミサンガ、『擬態の聖剣』の形を日本刀に変えて構え、ゼノヴィアも己の得物は無いが、構えを取って鋭い目を更に細めて藍華の事を睨みつける。対峙する藍華は視線を逸らさずに、真っ直ぐに二人を見据えていた

「止めなさい。双方、武器を下ろしなさい」

拮抗する両者の間にリアスが割って入った。三者の視線がリアスに集中し、教会側の二人が何かを言う前にリアスは言葉をかけた

「あなた達、確かに私は教会側のこの町での行動を黙認するとは言ったけれど、それは事件に関わる事に対してよ。そこにいる二人はこの学校の生徒、そして私達の部の一員。手を出す事は許さないわ」

「リアス・グレモリー……そこにいる者は我々が神を冒瀆した、これは我々が動くには十分過ぎる理由だ。ましてそちら悪魔側の人間という事は我々——教会への宣戦布告と取れるぞ」

「あら？先程の話を聞くに先に手を出そうとしたのはそちらではなくて？魔王の管理する街の人間を手を賭けようとした。これも十分な理由になるわよ？」

『……………』

沈黙し、鋭い視線と殺気がぶつかり合う。一触即発の空気が流れ、誰かの喉の鳴る音がやけに大きく聞こえた

「……イリナ」

「……ええ」

やがてゼノヴィアが声をかけて腕を下ろすと、イリナも構えを解いた。張りつめた空気が霧散した事にほっと息を吐くイツセイ達。ゼノヴィア達の視線は、リアスから藍華へと移る

「貴様、確かキリユーと言ったな。我々には優先すべき任務がある、今回は引こう。だが……次は無いです」

「二昨日来やがれって、のっ！」

藍華は手に持っていた聖剣を力を込めて地面へと突き刺すと、刺さった地面が大きく陥没してクレーターの様になった。突然の揺れる足場に、その場にいた殆どの者がバランスを崩して転ぶ。本日二度目の尻餅をついた教会の二人を一瞥した藍華は踵を返し、こけたアシアを起こして一緒に帰って行った

「……一体何者なんだ」

二人が去った後、ゼノヴィアの口からポツリと漏れた言葉。その視線の先にクレーターとその中心に突き刺さる『破壊の聖剣』。それからすぐに刺さった聖剣を回収し、ゼノヴィア達も同じくその場から去っていった

——気のせいかな、『破壊の聖剣』はいつもより重く感じられた



「待ってえええええ！シルキゆううん！」

「待てと言って待つ人はいませんよ！」

「私達とイイ事しましょう！」

「僕にとっては悪い事です！」

「大丈夫、全身全霊で愛でるだけだから！」

「今ので確信しましたよ!?大体愛でるって何ですか！ペットじやあるまっつ」

『安心して！乱暴な方のエロ同人誌みたいには誓ってしないよ！優しいエロ同人誌の方だから!!』

「女の人がそんな事言っちゃいけません!!」

『きゃあー！シルきゅんに叱られちゃったあ♡』

「・・・何か凄い疲れるな。精神的に」

「律儀に相手するからだろ」

「・・・どおーも皆さん、未だに逃走中のシルです。流石にそろそろ僕も限界。というか寝ずにずっと・・・あれ？ここにきてどれくらい経ったっけ？」

「リュウさん、僕がここに来てからどれくらい経ってます？」

「あ？ああー・・・大体1週間位じゃねか？」

え、マジですか？僕って1週間も逃げ続けてたの・・・？ど、どーりで家のベットが恋しい訳だ・・・ん？って事はあの（腐）女神様達も1週間連続で追いかけてるって事!?さ、流石女神様って事なのかな？

「いや、褒めてる場合じゃねえだろ」

「ごもつともです」

『シルきゅーん♡』

ふあ・・・いい加減この状況を何とかしないとなあ。そろそろ本格的に神様探しをしないとだし。さて、どうしたのですかねえー

「リュウさん、何かいい考え無いですか？」

「あー・・・ぶつとばす？」

いきなり物騒のが出て来たよ。考えて出て来たのがそれって・・・もしやリュウさん天然入ってます？

「出来れば平和的解決をお願いします」

「じゃあ、お前が捕まる？」

「それは一番平和的じゃないです!？」

100%僕が！うーん、こりゃあ自分で考えるしかないかね。でも、寝不足で碌にいい考えが浮かびそうにないなあ。うー、意識したら眠気が・・・

「隙ありー!」

「ありませんよ?」

「とりや!」

「よつと」

「ダーイブ!」

「危ないですよ?」

「・・・お前、本当は結構余裕なんじゃね?」

ひよい、ひよい、ひよいつと待ち伏せていた女神様を躲していくと、リュウさんからそんな指摘が。いやあ、本当にそろそろ辛いんですよ?つと、話が逸れた。ええつと、この状況をどうにかするには・・・
「んんー・・・はっ!ティンツと来た」

「何だ?何か名案でも思い付いたのか?」

「はい、でも・・・ちよつとイチかバチかになりそうです」

チラリと後ろの暴徒ゲフンゲフン、ご腐神方を見やる。ん・・・正直失敗の方が確立高そうだなあ

「でもまあ、腹括ってやりますか、つと!」

「お、おい!」

僕は地面を削りながら急停止し、後ろを振り返って女神様達に向き合う。(あつ、やっぱりしなきや良かった)向こうは突然の事に驚くも、凄く嬉しそうな顔になってそのまま僕に飛びかかろうとするそんな彼女達の前に手を突きだし一言

「タンマ!!」

『!?!』

キキキッー!!と言う感じで丁度僕のすぐ前で止まった。いやあ、これはちよつと冷や汗ものだね。皆さんの視線もギラギラとした感じで足が震えてきそうだぜい(泣)で、でも、ここは踏ん張らねば!

「ねえ、女神様達?」

僕は女神様達に今出来るとびっきりの笑顔を向け——この時点で結構な数の女神様の顔がやばい事になってたと記述しておく。あと真つ赤な華が咲いた気もする。よし、作戦変更だ——その笑顔のまま、ある事を指摘した

「お風呂、入ってます?」

『っ!?!』

僕がその言葉を言った瞬間、ビシッ!?!という大きな音が聞こえた気がした。それに続いて目の前の女神様達の顔がドンドン青くなっていって……

「そ、総員!直ちに浴用の支度を!!」

『はい!!』

「抱きしめて臭いなんて言われたら私死んじやう!」

「私だって!」

「あつ、でも蔑んだ顔で言われたら良いかも……」

「それと冷たい眼差しと共に……」

「か、感じちやうつ」ビクンビクン

「ダメだこいつら、早く何とかしないと……」

「待っててシルキゅん!そして綺麗になった私を一番に抱きしめてちやうだい!」

『させるかああああああああ!!!』

—————

—————

—————

—————

「……ふう、上手く行ったね」

「お前、あの笑顔で中々エグイ所責めたな」

大慌てで去っていく(腐)女神様達に安堵の溜息を吐いて振り返れば、若干頬を引き攣らせているリュウさん。いやあ、本当は言う気は無かったんですよ?でも、これも神様を探す為です(´・ω・´)キリッ え?責任転換?何それ美味しいの?

「というかもう一個プランを考えてましたけど、そっちは失敗しそうでしたから、かなり失礼でしたが急遽あっちにしました」

「……ちなみにどんな奴だ?」

「猫耳尻尾出してうるうる上目遣いでちよつと溜めてからの『お、お願

突然のやばいテンションと共に、羞恥で赤面するリュウに追いかけられながら神様探しをするシル。限界はもう超えてしまっている様だ。誰か、シルに休息を与えてください

リユウと昔話

「発情期・・・？」

「はい、私達の種族の身体が成熟した者に起きるものです。しばらくはおさまりがつきませんので、くれぐれも姉さまの部屋の傍には近づかないようにしてください。絶対ですよ？本当に危ないですから」

家に帰宅した藍華とアーシアは、白音から早退した黒歌についての説明を受けていた。最後の部分がやけに真剣な声音だった為に、藍華も弄る事なく素直に頷いた

「あらあら、じゃあご飯やお風呂とかはどうするのかしら？」

「一応部屋にトイレとお風呂は完備していますから。食事は・・・私が持っていていきます」

はあ、と大きく嘆息する白音。その小さい体からは苦労人のオーラが若干滲み出ていた。そこで思い出したようにぱんつと手をつく藍華母

「あつ、そろそろご飯の仕度しなくっちゃ。白音ちゃん、手伝ってくれるかしら？」

「勿論です」

白音を伴ってキッチンへ向かう藍華の母。リビングに残された二人の間に暫し無言の空気が流れた

「・・・あの、桐生さん」

「ん？」

「さつきは、本当にありがとうございました」

ペコリと頭を下げるアーシア。頭を下げたまま言葉を続ける

「私、とても嬉しかったです。こんな私に桐生さんが言ってくれた言葉が。私の為に怒ってくれた事が・・・とても言葉では言い表せない程嬉しかったんですっ・・・ずっと、ずっと一人だった、誰も味方がいなかった私がつ、死ぬ寸前だった私をシルさんが助けていた দিয়ে、この優しく温かい場所で桐生さんや皆さんに出会えてっ、本当につ、幸せです・・・！」

肩を震わせ、嗚咽交じりに述べられる感謝の言葉。そんなアーシアを藍華は優しく包み込んだ

「友達だから当然でしょ。それと、こんな私なんて言っちゃダメ。あなたは私の大切な友達なんだからさ」

「っ、はいっ、桐生さん」

「藍華」

「ふえ？」

「友達なんだから名前で呼んで。結構前から呼んでくれるの待ってたのよっ」

「・・・はい！藍華さん」

涙を拭ったアーシアは、輝くような笑顔を見せた

「いやあ、青春ねえ。若いっていいわあ〜」

「いえ、あなたも十分お若いと思うのですが。ホントビツクリするくらい・・・」

ここそと二人のやり取りを覗いていた藍華母と白音がそこにいた。白音の疑問はもつともで「人間・・・ですよ？」という眩きが漏れてしまっていた。覗く・・・見守りを終え、キッチンに戻った二人は並んで夕食の支度をする中、ふと藍華母が白音に質問を投げかけた

「ねえ、白音ちゃん。あなた達もシルちゃんに救われた、のよね？」

「・・・はい、シルが居なければ私も姉さまも飢え死か、従属か。どちらにしても酷いものだったでしょう」

「ゴメンなさい、辛い事言わせちゃって」

「いえ、でもそれがどうかしたんですか？」

調理の手を止め聞いてみると、同じように藍華のお母さんも目線はそのままで手を止めた

「他にも、この十年であなた達の様にシルちゃんに救われた子がいるのかしらっ？」

「それは・・・救われた、かどうかはわかりませんが、シルが連れてきた人なら何人かいます。今は用事で出ていますが」

「そう・・・」

何かを考えるように黙ってしまふ藍華の母。何やら真剣な表情をしている彼女に白音が口を開こうとした時、目の前の鍋がふきだした。慌てて火力を弱め、勢いが落ち着いた事にほっと息を吐く。そして視線を戻せば、先ほどと違っていつもの笑顔の藍華母が

「あつ、白音ちゃん。白い取り皿を準備しておいてくれるかしら？」

「あ、はい」

反射的に返事をした白音は戸棚から皿を持ってリビングへと向かって行った。皿を並べ終えた後、姉の黒歌がフラフラと部屋の外を歩いている所を見つけ、嘆息しながら取り押さえるのだった。そのせいで先ほどの事がすつぽりと頭から抜け落ちてしまった

「シルちゃん・・・あなたは、一体どれだけ・・・」



「へ、へくっしゅんっ!？」

「何だ、(腐)女神達がお前の事でも話し合ってるのか？」

「そこは風邪か、でしょ!?ありそうな怖い事言わないでくださいよ!」
「はっ、さっきからかったやつのは返しした」

くう、そう言われたら言い返せないじゃないですか・・・

あつ、どうもシルです。ただ今僕とリュウさんは一息ついて休憩中です。ずっと探し続けるよりは(腐)女神様達がお風呂に入ってる内に体を休める事にしました。その方が効率的だしね。リュウさんの話によると、どんなに早くてもあの様子なら数時間は大丈夫だろうって。本当は寝たいけど、リュウさんのご機嫌を治してもらわなくちゃだから。いやあ、深夜テンションに身を任せちゃったのが仇になった。最初は口もきいてくれなかったもん。でも拗ねて「ふんっ」とか「ぶいっ」って言っちゃってる姿をもうちよつと見ていたかったなあ

「・・・なあ、今変な事考えてなかったか？」

「え？何の事ですか？」

「・・・ならいい」

セーフ、あぶないあぶない。下手な事考えられなくなっちゃったよ。これからは気を付けよう

さて、現在僕達はまた袋小路の様な場所の入口に白いシートでカモフラージュした空間の中にいる。丁度いい所に椅子になりそうな段ボールがあつたからそれに固定化の魔法をかけて二人で並んで座ってます。僕が倉庫から取り出したジュースと一緒に飲んでいる中（リュウさんコーヒーが飲めないんだって）ふと気になった事を尋ねてみる

「リュウさん、いつ神様を好きになつたんですか？」

「ぶふーっ!?!ゴホッ、ゴホゴホッ」

ど直球で聞いてみたら案の定盛大に吹き出すリュウさん。おー、虹が出来てる。せき込みながらも恨みがましい視線を僕に向けて来る

「お前・・・!」

「いや、今回はからかうとかそういうのじゃなくてちよつと真面目なお話です」

「い、いや、だから俺は別に・・・」

「そういうのも大丈夫です。思いつきりわかつちやってますから」

「なん、だと・・・!?!」

いや、そんなに驚いた顔をしなくても。というかあんなにわかりやすい反応してたら、どこぞのワンサマーじゃないんだからわかりますって

「・・・ほ、本当に分かつてるのか？」

その問いがもう答えでしように。僕が頷くとリュウさんは両手で真っ赤になつた顔を覆い「うー、うー」と唸りながら首を横に振りだした。・・・あれかね、リュウさんは僕を（萌え）殺しにかかつてるのかね。もう僕の中ではリュウさん＝可愛いつて感じになってます。最初の姉御！って感じはもう微塵も見られません。あれは幻想だったのだー。な、なんだつてー!?!・・・いけない、イラン事まで考えだ

してしまった。流石に疲れてるって分かるよ

それからまだ若干顔が赤いけど、落ち着いたリュウさんに神様との馴れ初め？を聞かせてもらった。指を絡めてもじもじしてる姿可愛いですね！

うん十億年以上前、神に成りたてで右も左も分からないリュウさんの教育係を担当したのが神様だったらしい。神の仕事というの大部分は書類関係なのだけど、リュウさんはそういった関係の物が苦手で中々やり方を覚えられずミスばかりだった

でもそんなリュウさんを責めるどころか嫌な顔一つする事などなく、神様は何度も優しくやり方を教えてくれ、ミスした所は丁寧にどいう風の間違ってているのかを指摘し、締め切りに間に合いそうにない時には隣で一緒に手伝ってくれたそうさ

ある時、リュウさんはどうしてこんなにも親身になってくれるのかと尋ねてみると「俺も最初はそうだったから」と苦笑しながら言われ、その事にリュウさんは驚いたそうさ。自分よりも遥かに多くて難しい仕事を任されていて、その全てをいつも完璧にこなしている神様の姿とは全くと言っていい程かけ離れていたから。信じられない表情をしているリュウさんに、神様は自分の成り立ての頃の失敗した書類を見せてくれた。それを見てみると、いたる所に赤いペンでミスを指摘する記しが成されており、自分とよく似た所をミスしていた

『俺も最初の頃は苦手で仕事を中々覚えられずに何度も失敗してたからさ、リュウの気持ちもよくわかる。でも何度もこなして行けば自然と覚えていけるしミスも無くなっていくよ。その証拠に今の俺があるだろ？それに俺はリュウと仕事をするのが楽しいからさ、苦なんて思った事ないよ』と

笑顔で言われたその言葉にリュウさんの胸が高鳴り、顔に熱が集まるのを自覚した。そしてそれが、リュウさんの【恋】の始まりだった

.....

.....だ、だれかー！コーヒー、コーヒーをください!!

何この少し青臭くも甘酸っぱい話は!?聞いているこつちまで身悶えてしまつちやつたよ!そして話している時のリュウさんの顔・・・完全に恋する乙女じゃないですか!?あれだよね、この人リュウさんだよね?俺とか言つちやつててちよつとアクティブとかボーイッシュ感がするあのリュウさんだよね!?

しかも今の話を聞くに、うん十億年前からの片思いつて・・・いじらしいリュウさん、いやもうリュウちゃんだ!可愛すぎるやろー!ツ!!(確定)

あと神様一体何やってんですか!僕神様から聞いたことないですよ!素晴らしい子がすぐ傍にいるじゃないですか!それをうん十億年も待たせちゃダメでしょうが!あれですか?神様はワンサマーなんですか?ワン様と呼びましょうか!?

ふう・・・一旦落ち着こう。ちよつと熱くなり過ぎた。c o o l d o w n , c o o l d o w n 。何か椅子まで熱くなつちやつたよ

さて、まだ続きを聞かねばなるまい。準備はいいかい?僕は出来たよ

その日からというもの、リュウちゃんなりに神様にアプローチをかけてみたらしい

○手作りのお菓子をプレゼント

おー、定番だね。だけど効果はかなりあると思う。僕の頭の中には悪戦苦闘しながらも可愛らしいエプロン姿で一生懸命になって料理している姿が。そして顔に小麦粉を付けながらも出来上がったものにやり切った感の表情を見せ、神様に渡すのを想像して喜んでくれるかな?美味しくないって言われたらどうしよう?って言う風に表情を変化させている訳ですね、分かります・・・これだけでコーヒー十杯はいけるね!

そして出来上がったお菓子を仕事終わりに勇気を出して神様にプレゼント。神様の反応は・・・

『美味しい、とっても美味しいよりユウ。ん?確かに形は不揃いだけど、その方が手作り感が出ていて俺は良いと思うよ。なんだか可愛いし』

好☆感☆触！やったねリュウちゃん！多分その後自分のベットで枕を抱きながらゴロゴロと悶えていたんだろうなあ。リュウちゃんカワユス！略してリュカワ！

○神様に好きな女性のタイプを尋ねる

お、おお：・リュウちゃん中々攻めますな。あつ、でもリュウちゃんの事だから挙動不審になりながら尋ねようとして神様に「どうかした？」って言われて「な、なんでもないから！」って感じ？

・・・聞いたら僕の予想通りだったみたい。流石リュウちゃん、予想を裏切らない。にしてもリュウちゃんにはちよつと厳しかったかあ。でも、なんとなくだけど神様の好みのタイプは分かっただけならいい

- ・ 髪はセミロングからロングくらい
- ・ 可愛いよりは綺麗系
- ・ 歳はあまり気にしない
- ・ 出来れば料理が出来る人
- ・ スタイルは不明

うくん、この条件なら結構リュウちゃん当てはまりそうだなあ。髪はリュウちゃんセミロング、というよりは完全にショートだけど顔は綺麗系、女神様だから物凄い美人だし。歳は気にしないって事だから年上でも年下でもOKって事かな、多分。というか神って何億年も生きてるからその辺はあまり気にしないのかも。料理は今はどうか聞いてみたら家庭料理レベルならほほいけるとの事。神の家庭料理って何か凄そうって思ってた僕達のと殆ど変わらないってさ。ただし、使っている食材が伝説級の物ってちよつと見てみたい。あとスタイルってあれかな？大きくても小さくても気にしないって奴？それともどつちもいける？捉え方によっては神様の見方が変わっちゃいそうだなあ。リュウちゃんは・・・モデルさん並の黄金律って感じだね。ただちよつと服の露出度が高い、かな？ボーイッシュ的っていうのかな。まあ、似合ってますけど

取り敢えずどうして髪は伸ばさないか、と聞いてみたら少し前に切っちゃったとの事。一体どうして？と聞いたけどすぐにそれを後

悔した。言った途端、リュウちゃんが寂しげな表情を浮かべて言葉を濁したから。髪を切る+寂しげな表情 あっ（察し）

・・・うーん、どうしよう。僕生まれて転生して初めて神様に殺意覚えちゃった。一体どう落とし前つけてくれようか？（ニッコリ）僕から出た殺気がこの空間の空気を震える

・・・まあ、僕の殺気は一旦収めて話の続きを聞こう

○一緒に出かけ。つまりはデート

お、おとおおおッ!!マジですかリュウちゃん!?え、いきなり飛んだね。レベルが一気に上がってないですか?というかりュウちゃんから誘ったの?・・・ん?頑張って誘ってみた?

グ、グツジヨオオオオオブ!!よくやったよりュウちゃん!へーいとなんだかノリでリュウちゃんとハイタッチ。そう言えば神様ってあまり仕事を休まないタイプだったからそういうイベントとて面白いと思います。リュウちゃんもあの時の自分は神がかったって言うてるけどあなた女神様だからね?

で、どこに出かけたの?・・・神のデートスポットで有名な場所? りゅ、リュウちゃん!あんたそれともう遠回しに言っちゃってるようなものじゃないですか!しかも一面花畑ってなんていい感じの場所だ。ここってあれですかね?女神様が花を見て綺麗って言ったら男神様が君の方が綺麗だよって言っちゃやう感じですか?いや、まさか神様はそんな事・・・

『花に囲まれているリュウは、綺麗って感じより可愛らしさが際立つな』

ごめんなさい、もうお腹一杯です。リュウちゃんの恥ずかしい表情でコーヒーがぶ飲みしたのに吐きそう、砂糖を!かーみーさーまー?もうあなた分かってるんですよね?わかっちゃってて言ってるんですよね?そうじゃないんだったらラノベ主人公じゃないとこんなセリフ吐けませんよ?いい加減にしない!

ん?しかもその後神様と手を繋いだ?リュウちゃんから?・・・神様からと

よくやった!神様よくやった!リュウちゃんはあまりの嬉しさに

その後の事はあまり覚えていないそうだ。惜しい、と思ったけどそれでも神様から手を握ってくれた事の幸福で胸がいっぱいだったって

初々しいなあ・・・乙女だなあ・・・リユカワだなあ・・・コーヒー甘いなあ、ブラックだよな？ゴフツ、あれ、何か白い物が

それからもリユウちゃんの頑張りの数々を聞いていったけど中々やるねリユウちゃん。僕はもう瀕死です。ここまで追い詰められた事は今まで無かったよ。にしても神様、ここまでして気が付かないものか!? あゝ!? 「毎日ご飯作ってあげるね」なんて、言っちゃえばプロポーズみたいなものじゃないですか! 鈴ちゃんより分かりやすいじゃないですか! あんたいつからそんな子になっちゃったのさ! あたしや情けなくていけないよ!! (オカン)

・・・そして楽しい時間はあっという間に過ぎ去っていった。気が付けばリユウちゃんも立派に一人前の神となり、ある事が訪れていた

神の研修期間の終了

これはつまり神様との別れを意味していた。勿論永遠に、という訳ではないけれど出張の様なもので少なくとも数億年はお互いに会う事が出来なくなる事だった。若い神は見分を広げる為だとかなんとかでこれは絶対なんだそうさ。勿論神様も過去に同じような事をしたらしい

だけど離れ離れになってしまいう事がどうしても嫌だったリユウちゃん。それはそうだよな、大好きな人と離れ離れになっちゃうのって本当に辛いよね・・・

だけどそれを言えば神様が困ると思ったりリユウちゃんは別れの時まで努めていつも通りでいようと決めた。自分の本音は心に押し込めて・・・この辺りで僕の涙腺が危なくなってきた。あっ、ハンカチありがとう

そして遂に来てしまった別れの時。最後まで笑顔で別れようとし

ていたリュウちゃんんのは神様の言葉で崩れ去った

『・・・寂しく、なるな・・・』

告げられたその言葉は、リュウちゃんんのを決壊させた。一気に溢れだした感情のまま彼女は愛しの人に抱き付いた。笑顔で別れるって決めていたのに、一度溢れだした思いは止まらない。大粒の涙が彼の服を濡らしていく

そんな彼女を彼は優しく抱きしめた

『ごめんなりユウ、俺も笑顔で別れるつもりだったけど・・・リュウの顔を見ていたら言わずにはいられなかった』

ずるい、と彼女は思った。だけど嬉しくも感じていた。だって自分と同じ気持ちだったから。涙で濡れた顔を彼に拭かれた彼女は不安で聞けなかったある言葉を口にした

——私の帰りを・・・待っていてくれますか？

それに対して彼はこう言ってくれた

『ああ、勿論だ』

聞きたかった答えが聞けた嬉しさで、彼女は一層強く彼の事を抱きしめ、彼は彼女の事を優しく撫で続けた。それは二人が別れるまでずっと

そして最後に彼女は最高の笑顔を向けた

『それじゃあ行ってきます！』

ドラマ、ですよ？え、ノンフィクション？

・・・え、この二人って付き合っていないんですか？

・・・おかしいでしょおおおおおツツ!!?

だってこれ完全に離れ離れになる彼氏彼女のやり取りだよ！僕おかしくないよね!?そしてリュウちゃん乙女！健気な姿に僕の涙腺崩壊だよ!?

それと神様あ、ちよつとオハナシ（肉体言語）があります、至急こ

こちらにいらして下さい。慈悲？何それ美味しいの？というか（腐）女神様の中に初恋の人がいるって言うってた？リュウちゃんを差し置いて？待ってるって言うってたのに・・・？嘗めくさっとなんかワレエエエエツ!!何億年も好きな人の事を想ったりリュウちゃんが戻ってきてやっ与会えた愛しの人を他の人を好きになっとなって・・・いけない、殺気が沸いて来た

これはさっさと神様探し出して説明してもらわなくちゃいけませんねえ（ ^ω^ ；#）ピキピキ

久しぶりにマジギレ寸前の僕。これは馬に蹴らせるだけじゃ済みそうにありませんよ

そんな僕に震えているのか、振動が伝わって来た。いけないいけない、リュウちゃんを怖がらせちゃダメ、絶対。殺気を抑えてリュウちゃんは震えてはいなかったのだ。ならこの震えは？一度二人で立ってみると、椅子にしていた段ボールが震えていた・・・まさか？

「・・・・・・・・」

僕は無言で震える段ボールに近づいて、持ち上げた

「・・・・・・・・」 「あ、あぁっ!？」

そこにいたのは・・・

「や、やあ、二人とも、久しぶり・・・」

引き攣った表情を浮かべている探し神の神様だった

飲酒とキヤラ崩壊

「——わかりまふ、わかりまふよりユウちゃん！僕もね、10年ぶりに再会した愛華が、あの純真純粹無邪気お転婆っ娘だった愛華がエロ娘になってたんですから！それがわかった時の衝撃は血反吐を吐いちやうダメーじでしたよ・・・んくっ、ぷはああああ・・・りやかりやぼく、リユウちゃんのきもひ、しゅごいわはりましたゆー！」
「うううっ、わ、わかつてくれますかあシルう〜」

「うむ！だから今日は一緒に飲み明かそう！そして全部吐き出しちゃうの！リバーズしちゃうんだよりユウちゃん！溜め込むの、よくない」

「は、はい！私、いきましゆ！んくっ、んくっ！」

「おおー、いい飲みっぷりい！だけど、僕だつて負けないよお〜！」

「・・・」

・・・えー、今現在俺の目の前で酒盛りをしている2人。さつきから随分とハイペースで飲み続けてるけど、見てのとおり一升瓶を持っているシル君はもうベロンベロンだ。

リユウがシル君を呼んで2人で俺の事を探してくれてたのはありがたかったんだけど、まさかこんな事になるとは・・・。

全ての事の発端はあの（腐）女神達が原因なんだよなあ・・・。
冗談半分で、やりそうだなあとは思っていたけど、いくらなんでも流石に本当に実行しようとするなんて思ってたなかったし。

その名も『シルきゅん神化計画』

決してモンスターなんかじゃない。それに俺はどちらかというところ最近はエレスト派だし。でも中々精霊祭で欲しいのが当たらないのが・・・つて今はこんな事どうでもいいんだ。

『神化』

それは神が気に入った人間等を自分達と同じ存在、つまり神格持ちへと昇格させる事。

勿論色々条件や制約があるけど、（腐）女神達が殆どをその力全てを使って強引にクリアした。残す条件はあと一つのみ。それは、神界に

いる全ての神に認められる事。この条件も（腐）女神達の圧力によって、残すのは俺くらいだと思う。あの厄介なロキも承認させたんだから（腐）女神達はホント恐ろしい。一体何をしたんだか。全く知りたくはないけどね！それからロキが部屋に引き籠ってるって聞いたなら尚更に！

ただでさえ、俺の初歩的で致命的なミスで死なせてしまったシル君にこれ以上こっちの苦勞は掛けさせるわけにはいかない・・・いや、情けないながら愚痴とか色々聞いてもらっちゃったりしてるけど・・・。
んんっ！と、というか、神なんかになつてしまつたら本当にシル君の身が危ないんだ。精神的にも肉体的にも。前々から常々思つていたけど（腐）女神達がヤバ過ぎる。いつから神界は変態が溢れる巣窟になつたんだよ・・・！しかも日に日に変態が増してるし！ヤンデレ、メンヘラは辛うじてまだいいけど、DMやDS達がやばい。それはもう、説明するだけで精神衛生的に非常によくなくらいに。見た目絶世の美女や可憐な美少女達が放送禁止用語を連発しているって言えば分かつてもらえるとと思う。

だから隙を見て（腐）女神達が来る前に逃げ出したのは良かったんだけど、まさか辺境にあるこの迷宮空間にまで追跡の手が入る思わなかった。某スパイの段ボールには何度助けられた事か・・・冗談半分で持ってきたけどホント良かった。某蛇先生は偉大だったんだ。今度熱帯雨林でメタルギア買おう。

それから段ボールを駆使しつつ隠れる事暫く。承認期限も残り少なくなつてきて、もうここで最後まで絶対逃げ切つてやろうと思つていたけど、なぜか一気に追手の手が増えて下手に動けずに隠れていたここに、シル君とリュウが来るなんて思いもしてなかった。

しかもこっちが声を掛ける前に隠れてる自分ごと段ボールに固定化の魔法をかけて、その上に座つて自分に向ける恋暴露をされるなんて神でも予想できないよ。固まつてるから耳を塞ぐことも出来ずに全部聞いちゃったし・・・あー！うー！あああうあああー！ふおおおおおおお!!・・・ふう、神の予想を超えるって凄くない？（現実逃避

「ぷはあああつー！ふいー。んん？どうひたーリュウひゃん！もうおちまいでしゆかあ〜？」

「むう〜ま、まだやまだやあー！んくつ、んくつ……！ぷはあああ！」
「にやはははは！〜そうこにゃきやねえ〜」

う、うわあ、一升瓶を一気飲み。もう20超えたんじゃないのかな？2人とも呂律回ってないし、顔真つ赤だし、テンションも高いし。とかさつきから思ってたけど、シル君どれだけお酒持ってるの？俺の愚痴に付き合ってもらう時にもよく美味しいの持って来てくれるけど。しかも全部高そうなやつだし、気のせいじゃなかったら神酒も交じってるし……（ム）。ゴクリ……あれ、今更だけどシル君ってお酒飲んだ事あったっけ？

それにしても、見つかった時のシル君の表情はヤバかった……！目のハイライトが消えて、所謂ヤンデレ目になっちゃってたし、手にはいつの間にか神殺しでも出来そうな剣を握ってたし、神である俺を震え上がらせ殺気出ちゃってたし……ホント、生きてるって素晴らしい（ガクブル

最初は尋問をされていたはずなのに（その間リュウは悶絶ゴロゴロ）、いつの間にか説教からどれだけ良い娘なのかの紹介になって（羞恥やらなんやらで顔真つ赤のリュウを隣に座らせて）、今では本人を目の前にして自棄酒をしている始末。どうしてこうなった。

ホントどうしてこうなったし……リュウもあまりの恥ずかしさに最初らへんはあれだけゴロゴロと転がって悶えてたのに、今では少し前から始めた俺っ娘から以前のリュウに戻っちゃって酒盛りしちゃってるし……というか2人とも服が肌蹴て、お酒の影響で桜色に染まった肌が見えちゃってて目のやり場に非常に困ります。艶めかし過ぎます。シル君も今ここに（腐）女神達がいたら即食べられちやいそう。勿論物理的じゃない方で。いや、ある意味物理的とは言えるけど。

「りやかりやねえ！例え愛華しやんがエロエロっ娘になっちゃってても、根っこはあの時の優しい愛華だっていうのに気がちゅういたにゃ！そしてわかったの、ああ、愛華は愛華なんだにゃ、つて！大事なのは

受け入れることにやんだよ！」

「う、うけいれりゆこと？」

「そうにや！否定したってなにも変わらない！それもひっくるめてその人なんだから！僕はエロエロでも愛華しやんの全てを愛しゆりゆのどー！すう・・・愛華ああああ大好きだよおおお！」

「相手の全てをうけいれりゆ事、か・・・」

oh・・・シル君のテンションが最高を超えちゃった。普段は絶対に言わない事やしない事をしまくってるし。ってシル君やめて！こんな狭い所で両手に炎と氷を纏わせて踊らないで!?あぶ、危ないから！ちよー危ないから！

「黒歌達も愛してるよおおお!!にやはははははは！氷炎龍の翼撃い!!」

「受けいりえりゆ、受けいりえりゆ、受けいりえ・・・うにゆうく、考えすぎて気持ち悪い・・・！」

「にやにやつ、それはいけない。ほら神様！ぼうつとしてないでリュウちゃんの介抱をしなしゃい！」

「え、ええ・・・？「ん？」アツハイ」

即座にシル君の言葉に従ってリュウの隣まで移動する。こういう時は逆らっちゃいけないっていい加減分かれよ俺！じゃないとシル君の両手の氷炎に滅される。笑顔がさらに恐怖を煽る。なんとというパワハラ、上司との飲み会の場でもこんなのないよ。

とりあえず背中をさすりながら水の入ったコップをリュウの口元に持って行くと、リュウはちびちびとまるで猫の様に水を飲んでいく。

その間そんなリュウの可愛さに頬が緩んだり、大きく肌蹴て露出してしまっている胸元に視線が行ってしまいそうになるのを根性で耐える。だってシル君がニコニコとこつちをみてるから・・・手に氷炎を纏わせたまま下手やったら絶対あれで燃やされる凍らされるう!!「にやははく、リュウちゃん可愛いにやあく。にしても神様見せつけちゃってかれて・・・このリア充め！破ーぜろー！」

「ピュツ!？」

閃光、そして遅れてやってくる熱と冷氣。チリチリパキパキと耳元で聞こえる音。そつと触つてみると毛先が少し焦げて若干凍つていた。ドツと冷や汗が噴き出す。

「にやははくいけないいけない、ついネタで神様をやっちゃう所だったにやん。うっかりうっかり、てへ♪」

・・・今俺は世界でもっとも恐ろしいてへ♪を神類で初めて見たんじゃないかなー・・・一歩でも間違えなくても運しだいでやられる。そしてこの現状から見ると今日の俺はとても運が良いとは言えない。ふへっ、それってどんなムリゲー？

「それにしてもくせつかくリュウひゃんが愛しの神様といちゃいちゃしてるんだから・・・写真を撮っておくのは当然だよね！」

ど　こ　が　！　？

思わず声に出してしまいそうになったのを喉元ギリギリで堪えた。けどせめて心の中でもう一度言いたい、一体どこがいちゃいちゃしてるように見えるんだい!?リュウはともかく、俺は自分でも今顔が真っ青で引き攣った表情をしているのが分かるくらいなんだよ!?世間一般的にそんな表情をしている神物がいちゃいちゃしてるように見える!?そうだと言うなら飲みすぎてきつと幻覚が見えてるに違いない。今すぐ寝る事を強く勧めます！全力で！お布団敷いてあげるからさあ！

「ふあああゝ・・・うう、ねみゆい」

そつちかい!?リュウの方だったよ！

でもくしくしと眠たそうに眼を擦っている姿が幼く見えて胸がドキドキ。これってリュウの可愛さにときめいてるせいなのか、それとも危機的状況に瀕しているせいのとどっちなんだろうね？だれか教えてください。いや、それよりも誰か助けて・・・！

『ごつちよーこの奥から声がするわ！』

「ふあっ!?!」

そ、そうだったあああああッ!?今隠れてる最中だったんだあ!そりゃああれだけ騒いでたらいくらなんでも気づかれるよね!今の今まですっかり忘れてたよこの野郎!

ここは袋小路、出口はもう意味を成していないカモフラージュ用のシートで隔てられた1箇所。さらにこの迷宮空間は転移系の力が一切使う事が出来ない。どうする・・・どうする!?

「ふっ、こんな事もあるうかと・・・」

っ！まさかシル君、この状況を想定して何か手を・・・！酔っていてもやっぱりシル君は頼りになる！そこに痺れるウ懂r

「ちゃんとお布団も準備済みによー！」

ズツシヤアアア！ゴンツ!?

うごあ・・・上げてから落とすってこういう事を言うんだろうね、お蔭で擦った顔面とぶつけた頭部が痛い。そんな間にもシートの向こうから続々とこちらに集まって来る足音が聞こえてくる。完全に包囲網が完成しつつあるみたいだ！。

逃がっている最中に（腐）女神達が神器を持っている事は確認済みだし、こつちには実質戦力差は絶望的だ・・・こうなったら俺がシル君を守らなきゃ。最悪捕まって拷問されたとしても期限まで口を割らなければこつちの勝ちなんだから。俺だっけいつもの情けない姿だけじゃなくってやるときはやるって所を証明してやらなきゃな、覚悟を決めよう。

「はいリユウちゃん、お布団で寝んねしましょうねえ〜」

「うみゆう・・・」

「はい、良い子良い子、よしよし」

・・・和むなあ、なまじ見た目は美少女達だからこの美しい姉妹愛のような、百合っぽいような感じが・・・

「って!?!いやいやいや！シル君!?!今の状況分かってる!?!俺達囲まれてるんだよ!?!まだ詳しい話をしてなかったけどこのままじゃ主に君が大変な事にむぐっ!?!」

「しー！今リユウちゃんが寝ちゃったところなんですから大きな声を出さないでください神様」

シル君の人差し指を軽く押し当てられて言葉を切られる。思ってもみなかったその行為と、至近距離から柔らかなまるで女の子の香りに、思わずドキリとした。

「いや待て！その反応は可笑しいぞ俺!?シル君は男なんだって！こんなんじや(腐)女神達の事を言えないじゃないか！」

俺が必死に正気を保とうとしているのを知ってか知らずか、シル君の視線は布団で安らかな寝息を立てているリュウを一撫でしたと思ったら、立ち上がってそのまま唯一の出口の方へ向かって行く。

「し、シル君？」

「神様、僕があの人達を注意を引き付けてここから引き剥がします」

「なあっ!?・・・な、何を言ってるんだいシル君!?分かってるのかい!?外にはあのただでさえ厄介な(腐)女神達がガチの完全武装で大勢いるのにみんないろいろと溜まっちゃって危険度が倍増しちやってて・・・」

いかに危険かという事を伝えようとして俺の言葉は最後まで続かなかった。何故なら今、目の前に立つシル君の後ろ姿は、俺達にとつて酷く見覚えがあり、同時に見惚れてしまう様なものだったから。

それは、例えどんな困難な道や壁だろうとそれを乗り越えてきた者達。俺達にとつて瞬く間の刹那ともいえる時間の中で一際眩しい輝きを魅せた彼等と同じ

「神様・・・僕は、冒険をします

叶えたい願いのために

たどり着きたいあの場所に立つために

あの人の隣に立てるように

僕は・・・英雄になりたいッ！」

「あつ、これあかんやつや」

ベル君・・・じやなくってシル君のセリフを聞いて一気に頭が覚めた。よく見ればふらふらと体が揺れて重心がさつきから安定してない。飲酒後の夢心地状態はまだ継続中だった。

「ストップシル君！ホントにダメだから！お願いだからちよつと水でも飲んで酔いを醒まして！」

「僕は酔ってません」

「酔っぱらいはそう言うんだよ！そんな状態で外に出たら一瞬で揉みくちやにされちゃうんだよ!！」

「私の戦闘力は53万です。ひつく・・・寧ろ揉み返してやるぜい！」
「死亡フラグの上にキャラ崩壊が激しいよ!?!」

必死になって止めようとするも、シル君はその華奢な見た目からは想像も出来ない力で俺をどこからか取り出した毛布で簀巻きにしてリュウの布団に押し込めた。なんとか抜け出そうともがくも、結構きつく巻かれたせいで結局片腕しか出せなかった。

「さあ、素敵な冒険パーティーを始めましょう!」

「ただっじやなかったベル君! じやなくってシル君! シル君——
——ツツ!!」

伸ばした手は決して届く事なく、シル君はそのままシーツの向こうへと行ってしまった。



「ん・・・?」

「? どうかしましたか愛華さん?」

登校中、ふと足が止まった愛華の横を歩いていたアーシアが顔を覗き込んでくる。

「いや、どつかで酔っ払いに愛の告白をされたような気が・・・」

「なによそれ・・・」

「えらく具体的っすね」

「あ、愛のっ、(ここ)、告白う!?!」

「(。▽。) キタコレ!! shutter chance!!」

すかさずカメラを取り出してシャッターを切るミツテルト。最近では見慣れたいつもの登校風景だった。

「あー、これを見るとなんか平和だなあって思うわ。最近物騒だけど」

「ええ、それについては同感。それにしても愛華、本当に体は大丈夫なの?」

「大丈夫大丈夫、別にどこも何ともないし」

早速、最近ではすっかり見慣れた行為をしている2人を他所に、夕麻は愛華に心配そうな眼差しを向け、当の本人はひらひらと手を振っ

て心配ないと伝える。

「でも聖剣よ？普通なら悪魔じゃない愛華はそこまで影響は出ないかもだけど、それでもあれだけの聖なるオーラは逆に悪い影響があるのよ？」

「んー、そこはほら、このお守りっていうのが守ってくれたんじゃない？確信ないけど」

そう言ってお守りのガラス玉を取り出し、日光にかざす愛華。ずっと前から変わらない、綺麗な3色の模様が輝いていた。

「そう言われるとそれが一番正解っぽいけど・・・そう言えばあの時愛華、聖剣を使いこなしていなかった？」

「それについては本当に知らないんだけど（あの時は結構頭に来てよく覚えてないのよね）・・・もうあれよ、全部シルの仕業って事で」
「ええー・・・」

投げやりな発言に夕麻もなんとも言えない顔になってしまう。

「それに、私より黒歌先輩のほうが問題なんじゃないの？誰かさんが、昨日襲われたみたいだしさあ」

「・・・やめて、あれは本当に危なかったのよ。もし、もし、白音がいなかったら・・・！」

抑揄う愛華の言葉に、震える自らの体を抱き、顔を青くしている夕麻。

まさかそんな反応をするとは思わなかった愛華も、若干引き気味になる。

「え、そ、そんなに？」

「・・・あの野獣みたいにギラついた目で部屋に引き込まれそうになつたらね。アーシアも部屋に絶対近づけないようにしないと」

「うわあ、ウチ男子共が聞いたらまっすぐ立てなそうな話ね・・・ある意味では反り起ちそうだけど」

「朝から下ネタやめい」

その話の中心の本人はというと、現在進行形で白音に部屋に閉じ込められて謹慎中だったり。そして当然白音も、本人としてはかなり不本意ながらも欠席だ。



「わ、わからないって、あなたねえ……」

「あらあら」

放課後、今朝と同じようにリアス達にも聖剣を使った事を問われ、同じ返答をした愛華に、リアスは呆れ朱乃は困ったように頬に手を添える。

「いやあ、もうあれですよ。全部シルの仕業って事にして、帰ったら本人に説明してもらおうって事で」

『それしかないわね・な・っすね』

満場一致で、採決は決まった。すると、周りを見渡した愛華がリアスに質問を投げかける。

「リアス先輩、やっぱり木場君は休みですか」

「……ええ」

そう言つてリアスは目を伏せる。それを聞いた他の面々も表情が若干暗くなった。

数日前、愛華と教会の2人組との騒ぎの後、木場は誰に告げる事もなく姿を消した。リアスが連絡を取ろうとしたが、携帯は繋がらなかったそうだ。

重くなった空気が消えないまま、今日は解散する事になった

「このままじゃいけないよな……何か、俺に出来る事を」

イツセーと獣

球技大会の翌日の休日に、俺はとある人物と喫茶店にいた。

「という訳で、力を貸して欲しい」

「いや、どういう訳だよ」

生徒会長眷属であり、俺と同じ『兵士』の匙を適当な喫茶店に呼び出して協力を頼み込むと、向こうは訳が分かかっていないみたいだ。

「いや、お前も聞いてるだろ？ 教会から来たエクソシストや聖剣の話」

「あー、確かに会長から聞いてるぜ。なんか色々厄介そうなんだってな。まあ、関わるなってお達しが来てるから、俺には関係ねえけどなー……っっておい、まさか力を貸せて……」

「ああ、その件についてだ」

「はあッ!？」

椅子から飛び上がらなければ驚いた様子の匙。周りの視線が集まった事に気づいて、やや恥ずそうに座り直すと、まくし立てる様に小声で猛反対してきた。

「いやいやいやいや、俺の話聞いてたか!? 会長が、俺の主が関わるなって言ってるの!」

「ああ、俺も部長にそう言われた」

「じゃあ尚更マズいだろツ。主命に逆らうなんて、後でどんな仕置きされるかわかんねえぞツ。寧ろ拷問されても可笑しくねえって。ウチの会長はリアス先輩みたいに厳しくて優しいなんて事はないんだからよお! 厳しくて厳しいんだぞ!」

顔色がかなり悪いし、なんか震えてる。もしかして、既にお仕置きされた事があるのか。

確かに部長は優しい、でも今回でおれもお仕置きはまず免れないだろう。だが、今の俺はそんな事がどうでもよくなる。

「これは同じ兵士として、そして男としてお前にしか頼めないんだ。頼む……ッ」

深く頭を下げる。匙から息を呑む音と、視線が注がれているのを痛い程感じる。

体感的に長い時間が経った頃、匙が大きな溜め息を吐いた。

「……とりあえず、頭を上げてもうちよい詳しい話を聞かせろ。じゃねえと、協力も何も分からねえだろ」

「……ああ」

そして俺は語った。木場の過去——生まれながらのエクスカリバーとの因縁、教会の闇とその憤りを感じさせずにはいられない悲劇の事件について。

「——という訳だ」

「う……うおおおおおおおおおおおんツ!!」

匙は泣いていた。男泣きという言い方がピッタリな程。俺も初め聞いた時は涙が止まらなかった。まさか、あの木場にこんな過去があったなんて、思いもしてなかった。

「木場、俺はお前の事をキザ野郎死ね！　って嫌ってたけどごめんなあツ！　俺は、俺はなんて屑なんだああツ!!」

とうとうテーブルに突っ伏してしまった。分かるぞ、匙。俺も少し前まで同じ気持ちだったから。

周りからやばいくらい視線を浴びているが、俺も匙も完全に無視している。ガバツと起き上がった匙は、涙も拭わず宣言した。

「兵藤ツ！　俺に出来る事なら何でもする！　会長のお仕置きがなんだツ、そんな事屁でもないぜ！　だからぜひ協力させてくれ!!」

「ああツ！　お前ならそう言ってくれろと信じてたぜ!!」

ガツチリと握手を交わす。男と男の熱い誓いは今ここに成った！
そうと決まれば早速行動開始だ！

「まずは聞き込みだ、あんだだけ目立つ格好をしてればすぐに見つかる」
「おうー！」

会計で万札を出し、釣りはいらないと喫茶店を出た。

「それで、兵藤。例の教会組を探し出してその後はどうするんだ？」

「ああ、あいつ等に——聖剣エクスカリバーの破壊許可を貰う」



「はぐんぐ．．．美味い．．．！」

「そうよこれよ日本の味はッ！」

一心不乱にテーブルに所狭しと並べられた料理を口にかき込む白いローブの2人組。それは先日グレモリー先輩と会談をした協会から派遣されてきた悪魔エクソシストい。そんな事言うと普通だったらイタイ人認定だけど、墮天使や悪魔がいるんだからそりゃいるわよねえ。

まあ、今はそんな事よりも——

「なんで連れて来ちやったのかねえ」

「そ、その、すごく困っている様子だったので．．．」

思わずぼやいてしまった心の声にアーシアは眉尻を下げる。

いや、確かにこの子は目の前で困ってたらスルーなんて出来なさそうだけど、それにしてもついこの間自分を殺そうとした奴まで助ける様とするとは思ってなかった。世界中探してもきつとこの子くらいよね。アーシアらしいといえばアーシアらしいんだけど、ホントにこの子が心配だわ。絶対詐欺とかに騙されまくるタイプ。

というか、この二人も二人よね。あんな事があつた後にも関わらずに、喧嘩売った相手のとこでごはん食べまくってるなんて、どういう神経してんだか。怒りなんて忘れて逆に呆れるわね。まあ、性懲りもなくアーシアに剣を突きつけたなら、今度こそただじゃ置かないけど。

「はいはい、お代わりまだまだあるから遠慮しなくてもねえ〜」

「おお！ 感謝致します！ 主よ、この慈悲深き御仁に祝福を……」

「あつ、私クリスマスとかイベント事で祝うけど、どっちかって言うと仏教徒なのよ〜」

「おのれ異教徒めツ!!」

「ねえ、あんたらその振り上げた手に持った箸で何する気？ 誰のお蔭で今食事にありつけているかって事を忘れてんじやない？ なんなら今すぐ放り出してもいいんだけど？ それとも110番通報がいい？」

「すみませんでしたあツ!!」

すぐさま土下座する2人組。そういう所が変に日本人っぽいわね。いや、片方は日本人らしいけど。

「んで？ 何がどうなってあんた達はそんな怪しい格好のまま、道など真ん中で物乞いみたいな真似をする状況になったわけ？」

「ふおいふふあふあふいッ！」

「ちゃんと食ってから喋んなさい。というかいつの間に食事再開してんのよ」

「まあまあ藍華ちゃん、難しい話はごはんを食べてからでもいいですよ。さあ、皆も食べて食べて」

「……いや、そりやそつちの子が悪いでしょ。客観的に見なくても。旅費として持って来た全財産を考えもなしに全部この絵に使っちゃったんだから。というかどう見てもこの絵は酷い。抽象的や芸術的って言えば聞こえはいいけど、これじゃあ何がなんだか全然分かりやしないわよ。最初双頭のワニっぽいクリーチャーかと思ったし。

「これのどこがああ聖人様？」

「ほらな！ だから言っただろうイリナツ！」

「ぐふう……」

率直な意見と相方の青髪の少女の強い叱責に、栗毛のツインテールの少女は何も言い返せず、床に手を付きガツクリと項垂れる。

そんな彼女にアーシアが心配そうに駆け寄ろうとするも、万が一を考えて夕麻達がそれを止めた。流石アーシア親衛隊。

にしても、このイリナツて子は普段は知らないけど、信仰や信仰心が厚いというより熱いせいで、正常な判断が出来なくなる程のバカになる。というか、信仰に殉じる自分に酔ってる？ ある意味でアーシアより騙され易そうな子ね。

ゼノヴィアの方は多少の常識は持ち合わせてそうだけど、信仰一筋・殉教も名誉って狂信も入ってる系。自分の事に関しても無頓着って感じ？

こんな二人を寄越した教会の上層部とやらは本当に解決する気があるかねえ。態々聖剣を奪って行った輩に、それと同等の物を持たせて送り込むなんて、向こうからしたら正に鴨が葱を背負ってくるってもんよねー。2人以外に送った人員はほぼ重症を負って撤退してるって話だし。教会は余程の人員不足か、それともこの子等を犬死させたいのか。

「(とうか……)」

またわちやわちや騒いでいる二人組が持つエクスカリバーに目を向ける。

エクスカリバーと言えば、言わずと知れた伝説の聖剣中の聖剣。聖剣の代名詞とも言われる程の代物。

それが大昔に粉々になったものを、当時の錬金術によって何故か7本の剣に再構築して現在に至る、と。効果は全部が悪魔に対しての大ダメージ持ち。まああ、これはゲームとかでもよくあるからいいとして、問題は7本それぞれが特性を持っているけど、能力としてはありきたり。それこそ、聖剣としての評価は二人が持っているのがそれぞれ

れB十とC―と微妙。これじゃあ、聖剣（笑）ねー。
愛剣がこんな扱いじゃ、アーサー王も涙目不可避ね。

『…………ふえ』

んー、それにしてもその敵――墮天使コカビエルの目的っていうのも今んとこはつきりしてないのがモヤツとする。

そんな大物が聖剣を奪っていったのはそれ自体が必要だったからなのか、それともそれとは別の目的の為に必要だったからなのか。あとはなぜ駒王町に来てるのかって事かしらねえ。これはグレモリー先輩も関係してるとみるべき、か。なんせリアル魔王の妹なんだし、狙われる理由も勢力も事欠かないだろうし。あー、今シルが居ないのは辛いわねえ。白音ちゃんとはともかく、せめて黒歌先輩が真面な状況だったら色々聞けたりしたんだけど、あの様子じゃあほぼ不可能だし。

とりあえず、このまま考えてても答えは分かんない事だし、目の前の問題からなんとかするか。

「というか、あんた達着替えはそれしかないの？」

「ああ」

「ええ」

「ええ…………」

流石に引いた。だってローブの下は体のラインがもろ分かりのピチピチのボンテージみたいなの恰好。うら若き乙女がよく恥ずかしくないわね。教会の戦闘服だかなんだか知らないけど、これ考えた奴絶対ド変態ね。やっぱ教会はクソと見るべきね。二度とアーシアを関わらせない様にしよう。

「（あれ？　そういうえば夕麻の戦闘衣装もそんな感じじゃあ…………）」
視線を向けると、思っている事に気づいた夕麻はかなり恥ずかしそうにしている。成程、彼女のは純粹に興味か。思わず優しい眼差しになっちゃった。これは後で思いつきり揶揄うつきやないわね。

一部微妙な空気になってしまった中、そんな空気を変える様にインターホンが鳴った。モニターを除けば、そこには意外過ぎる人物が映っていた。

「どうぞ、粗茶です」

「あ、ありがとうございます」

「お茶菓子も追加を持って来るわね」

「お構いなく」

そんな典型的なやり取りの後、一息ついて本題に入る。

「珍しい組み合わせね。んで、態々休日にて兵藤と生徒会の匙がこんな所に？」

「俺達が用があるのはその2人だ」

そう言つて、見た事もない真剣な表情の兵藤が視線を向けたのは、教会の2人組。

「俺達に奪われた聖剣エクスカリバーの件について、協力させて欲しい。可能なら、その一本くらいの破壊許可も」
「なに？」

ゼノヴィアとイリナは目を見開く。私等もかなり驚いている。そんな私等に構わず、兵藤は変わらない真剣な眼差しと共に更に続けた。

「確か会談の時こう言つてたよな？ 『教会は堕天使に利用されるくらいなら、エクスカリバーがすべて消滅しても構わない、最低でも堕天使の手からエクスカリバーを無くす事だ』つて。つまり破壊してでもコカビエルから奪いたいって事だろ？ 利害は一致しているはずだ」

考え込んでいる様子のゼノヴィア。普通に考えるなら悪魔と共同戦線なんて、考えられない事だろう。しかし、2人で挑むには命を賭

けたとしてもあまりにも分が悪い事は分かっているはず。果たして

「……奪われた聖剣は3本。上層部も3本無事に奪えるなんて思っていないはず。なら、一本ぐらいいは彼等が破壊しても構わないだろ」

「ちよつとゼノヴィア!?!」

相方の判断に、大層驚いているイリナ。批難する様な声を上げている。反対に、意外とあっさり認められたからか、兵藤も匙も私等も肩透かしを食らっている。

ゼノヴィアはイリナに向き直ると、本音を語り始めた。

「イリナ、正直言っただけでは三本回収に加え、コカビエルとの戦闘は辛い」

「それは分かるわ、けれど!」

「赤龍帝の言う通り、最低でも我々は三本のエクスカリバーを破壊して逃げ帰れば十分だ。私達のエクスカリバーも、奪われるくらいならば、自らの手で破壊すればいい。本音を言えば、我々が奥の手を使つたとしても、生きて帰れる確率は三割を切る」

なんだ、案外とちゃんと分かっているのね。というか、こういう事を考えられる子だったんだ、ちよつと意外かも。

「それでも十分勝算があるからって覚悟を決めて日本に来たはずよ」

「そうだな、上にも任務遂行してこいと送り出された。自己犠牲に等しい」

「それこそ、私達の信徒の本懐じゃない!」

ああ、やっぱりイリナって子の方はこういう感じなのね。

「気が変わったのさ。私の信仰は柔軟でね、いつもベストな形に変化する」

「前から思っていたけど、あなたの信仰心って微妙に可笑しいわ!」

「自覚しているさ。だが任務を遂行し、出来る事なら生きて帰り、これからも主の為に戦い続ける———それこそが私の信仰さ、これは違う事か?」

「———違わないわ、でも」

「言いたい事は分かっている。だからこう考えたのさ、悪魔の力を借

りるのではなく、ドラゴンの力を借りる。それにイリナ、彼は君の古い馴染みだそうじゃないか。信じてみようじゃないか、ドラゴンの力を」

上手い事丸め込んだわね。前対面した時は堅物の直情型だと思ってたけど、見誤ってたわね。それも良い感じに。

「ふーん、何だかんだ話は決まった様ね。それで兵藤、あんたの方はどうすんの？」

愚問だと分かかって問う。兵藤は最初から変わらない強い眼差しのままはつきりと頷いて見せた。

「勿論OKだ、俺はドラゴンの力を貸そう」

「ついでと言っちゃあなんだが、俺のドラゴンの力もな。これでも元龍王クラスの力だぜ」

「ああ、商談成立だ」

「しよがないから今回だけだからね」

握手こそ交わさないものの、ここに一時的な異色の同盟が成った。

「そうだ、一応聞いておこう赤龍帝。君達は何の為に我々に手を貸すのか」

「俺達はただ仲間の為に、いつまでも復讐に囚われているよりは良いはずだと思っただけだから。木場も……亡くなった木場の仲間達の為にも」

「その後は殴り合いでもして何とかするさ」

なっ、と男らしい笑みを浮かべて笑い合う兵藤と匙。なんかかなり仲良くなってるみたいだけど、一体何があつたのやら。

「呆れた、最後は考え無しじゃん……まあ、その方が上手いきそうだけどね」

こっちはまだまだ大変そうね。全く、いつまでちよろちよろしてんだか。早く帰って来なさいよ、シル。



空間すら揺るがす鳴りやまない轟音
視界を奪う程の眩い閃光

飛び交う大勢の者共の雄叫びと悲鳴
幾千もの金属のぶつかり合い生まれる火花

舞い散る赤い血飛沫が、阿鼻叫喚の戦場を鮮やかに彩る

やがて、積み上げられた屍の上に立つ人影は、ただ1人だけ

己が身は余す所無く鮮血に染まり

それでもまだ乾きを訴える心

その者は抗う術を持つてはいなかった

何故ならその身は既に囚われているのだから

それはまるでつかみ所のない霧の様で

それでいて一度嵌れば抜け出す事は叶わない泥沼の様で

永遠と続く心地良さと、不快感が押し返す波の如く

狂気にも似たその心は、もう既にボロボロで

早速自分が明らかに可笑しい事に気づけない

光を無くし濁った瞳は焦点が定まっておらず

怪しく微笑む様はかつての面影を窺う事は出来ない

新たな戦場を求め、ゆらゆらと亡者の様に彷徨い続ける

THE BEAST

前線から離れた場所に存在する、仮設の司令部。そこは今現在進行
形、一目瞭然で忽々たる様子だった。

『——ちゅう！——繰り返か——N2が——ぐはあ!?!——
ザー……………』

「応答せよ！繰り返す、応答せよ！……くつ、ダメか」

「たった今、第7防衛線突破されました！前衛部隊、被害甚大！」

「交戦中の部隊より入電！援軍はまだか、と！それとMDOがやばい
とか叫んでいます。意味が分かりません！」

「α・K——171番通路に展開している部隊を回り込ませろ！それ

からすぐに待機している支援部隊を送れ！ 後方に控えている第5
07部隊とマスタング小隊も随伴せよ！あとMDOってなに!? . . .
分析班！」

「ま、まるで・ダメな・おっさん？」

「おお、なるほど、って何でマダオ!？」

「補給部隊及び救護部隊との連絡途絶！ 『N2 & MDO . . . ふう、我が
神生に一片の悔いなし!』と残して逝きました!！」

「やられも、というかそっちもなの!？」

「もうっ！ 偵察班からの連絡はまだ！ 目標の情報が何一つ入って
来ないじゃない！ さつきからN2とかMDOとか . . . 皆ちゃんと
仕事しろよお!！」

「おい、結界封印班は何をやっている！ いつまで時間をかけるつも
りだ！ このままでは被害が拡大する一方なんだぞ!！」

「そ、それが、隊の半数以上が流れ弾の被害に遭い、ほぼ壊滅状態との
事ですっ」

「Shit! だからあれほど近づくなと言っておいたのに . . . !」

「ちよっ、勝手な行動は! . . . もしもし! もしもし! た、大変ですう
!」

「もうっ、今度はなんなのさ!？」

「神風隊及び夜戦主義隊が独断専行! 『我、コレヨリ突入ス!』と持ち
場を無視して前線に突入していききましたあ!！」

「名前からしてやると思ってたよ畜生ッ!！」

悪態を吐き、机に拳を叩きつける女性。その周りには彼女と同じく
軍服を纏った数名の部隊長がそれぞれ指示を飛ばし続ける。その補
佐官達が通信を行いながらテント内を忙しなく動きまわり、中央に設
けられた大きな机の上に広げられた地図の駒を退かせてバツ記しを
書き込んでいく。

その地図には全体をパツと見ても四分の一程が赤い×で塗りつぶ
され、被害の甚大さを物語っていた。およそ前軍の40%、事実上の
全滅だった。

彼女達はこの戦況に焦り、動揺すると同時に戦慄していた。

「まさか、たった数分でこれだけ・・・っ」

絞り出すように出たその言葉はこの場にいる全員の総意だった。当初は過剰とも思われた何十にも敷かれた包囲網はもう殆ど意味を成しておらず、残る部隊も命令に従わない者達が出て来た。壊滅と云っていいだろう。

今回の作戦に問題はなかった。行動も迅速だった。戦力も十分だった。士気もこの上なく高かった。

なら、なぜこの様な惨状になっているのか。それは単純に、目標の力を見誤っていたという事に尽きた。

3分。たった3分。

そんなカップラーマンが出来る時間で、最も戦力が集中していた第一包囲網が壊滅し、延べ20,000の精鋭達が血の海に沈んだ。

どこかで慢心があったかもしれない。

この数ならと高を括っていたかもしれない。

下心全快の妄想に浸り過ぎて自分の世界に旅立っていたかもしれない。

けどそれにしたってこれは異常だった。第一防衛網が突破されたという電文はすぐに全部隊に通達された。気を引き締めた第二包囲網の部隊だったがそれから間もなく、第一防衛網と同じ運命を辿る事になったのだ。

どうにかして戦線を立て直すにも、先の通りどうにもならず、戦線は次々と崩壊していく一途で、焦りだけが募っていく。それでもなんとか打開策を打ち出そうとしている内に、とんでもない知らせが飛び込んで来た。

「ふあっ!?!・・・さ、最重要伝達!?! 目標が進路を大幅に変更!

一番分厚い防衛線を真正面から突破しながらこの司令部に向かっているとの事です!?!」

『・・・ふあっ!?!』

「え、ええッ!?!」

本日一番の驚愕が司令部に駆け巡った。補佐官のみならず、部長、司令官までもが慌てふためいている様は、終局がそこまで来てい

る事を物語っている様だった。

~~~~~ツツ!!!!

突如としてテントの外から、耳をつんざく様な破壊音とも炸裂音とも判断がつかない大音量が鳴り響く。咄嗟に耳を塞ぐも、鼓膜が痛い程震えた。

同時に周囲の守備についていた1人の女性兵が司令部となつている仮設テントに、ボロボロになって倒れ込む様に入つて来た。

「グハツ……も、申し上げますっ……たった今、本陣の最終防衛線が突破されまし、た……」

それだけ言うと、彼女は地に伏し動かなくなった。地面には赤い液体がゆっくりと広がっていく。

「っ……総員、戦闘準備！」

『はっ！』

各々が得物を手にテントを飛び出すと、まずその目に入つて来た光景に絶句した。

他と比べ比較的広い空間にある司令部の周りに、先程の守備兵の様に地に倒れ伏している数十の物言わぬ骸の山。鮮血で赤く染め上げられた不気味なほどの静けさを保った空間。死屍累々、地獄絵図はこの事か。

「っ！目標はどこだ！」

誰もが息を飲む中、いち早く我に返つた大隊長の指示でこの惨状を作り出した張本人の姿を探す面々。その姿は先程の取り乱したものと打って変わり、まるで歴戦の戦乙女の様だった。

それに仮にも大隊長の直属の者達、その実力は今ここに居る者達の仲でもトップクラスだ。早々簡単にはやられは——

「——かはっ!？」

「っ！だ、大隊長お!？」

突然の大隊長の吐血。傍にいた補佐官が体を支えるも、既に彼女はもう——

「っ、じ、陣形を維持しつつ遮蔽物のある場所まで移動！ 目標の遠距離攻撃に注意！」

司令官ねな指示に従って迅速に行動する。しかしその際にも次々と仲間達が物言わぬ屍となってしまった声が聞こえた。けれど足を止める事は出来ない。

歯を食い縛りながら走り抜け、遮蔽物に身を隠す。乱れた息を整えつつも、僅かに身を覗かせて油断なく周囲を警戒する

「くっ、残ったのは何人っ」

目標の姿は確認出来なかった。気配も同様に。分かっていた事だが相手は相当な手練れだ。生半可な実力ではとてもじゃないが敵わないだろう。

・・・というかぶっちゃけると私って別に戦闘に秀でてる戦神でも戦乙女でもなんでもないんだけど。寧ろ悪い方で、自慢じゃないけどクラスでは赤点レベルだよ？ 何やったってどうにか出来る訳ないじゃん。戦術とかも「何それおいしいの？」状態なんだよ？ そんなんで一応司令任されてるけど殆ど司令（笑）だよ。

それでも任されちゃったらやり切らないといけないと思ったから、まずは形からと思ってアニメ見て口調や態度も司令官っぽい感じにしてみたり、搜索網を張って可能な限り情報収集に努めたり、部隊長の中にいた比較的まともな戦乙女の子に意見とか貰って一生懸命頑張って作戦考えたり、なんだか突然皆が一斉にお風呂に駆け出した時もすぐに仮設風呂の設置や順番決めとかその対応をしたり、目撃情報や今までの行動パターンから居場所を割り出して、すぐに包囲網を何重にも引いて、あとは確保するだけでようやく終わるはずだったのに・・・。

いざ作戦開始ー！ってなったらいきなり壊滅状態だし、戦況わけわかんないし、電文意味不明だし、味方変態ばっかだし、近頃寝不足で肌荒れ荒れだし・・・ここ最近、良い事全然ないよう・・・私は邪な気持ち一切なく、ただ可愛いものを愛でたいだけなのに。これなら自分の部屋でベットに寝転んで、お菓子片手に可愛いもの特集の雑誌を読んだ方がマシだったよ。ああ、抱き枕のにゃんこが恋しい。

はあ・・・まあ、どうせもう作戦は失敗だし、無理に私達がこれ以上何かする事はないよね。あとは報告だけしてあの方達にな

んとかしてもらおう。うん、それがいいよね。だって私もう疲れたもん。私は壊滅の責任取って辞職するからもう知らない。

まあ、それも全部生きて帰れたらだけど。

「おい、返事はどう——」

あつ、口調戻してもいいかなー、なんて思いながら振り返つてようやく気付いた。

？そこには誰もいなかった”

「……………そっかあ」

ぼつりと出た言葉にははつきりと諦めとか達観の色が浮かんでいた。

力が抜け地面に尻もちを付き、手から武器——特大捕獲網が零れ落ちてカランと寂しい音を響かせる。

いつの間にか耳に装着しているあれだけ五月蠅かった通信機も静かになっていた。通信不良のノイズすら響いてこない。早速どうなったかは既に理解出来た。

「全滅かあ……………ははっ、もうどうにもなれーい」

自暴自棄気味にそうぼやき、通信機をその辺に放り投げる。足を投げ出して、大きく手を伸ばしてそのまま寝転ぼうとして何か背中当たっている事に気づいた。岩や壁にしてはいささか小さいし、なにより柔らかい。なんだろう、とふと振りかえ——

「アハッ♪」

「……………え」

すぐ傍…………正確には耳元で聞こえた無邪気な笑い声と共に腕が回される。その腕は力を入れれば折れてしまいそうな程に細く、それでいて包まれているだけで途方もない安心感を得られる包容力があつた。もし、真つ赤な液体に塗れていなかったら、このまま眠りに落ちていただろう。

呼吸が止まる。けど鼓動は激しくなる。静かな空間で自分の動悸

の音と、自分のものではない誰かの息遣いだけが煩いくらいに聞こえる。視界に映る腕と赤以外が色を失い、まるで自分以外の物の時が止まったかの様。

どれだけ経ったか定かではないけれど、停止していた思考が動き始める。でもただ無意味にまさか、そんな、等と似たような思いばかりが浮かび上がるだけだった。そして、再びゆっくりと、ゆっくりと首を動かし、その姿を目に収めた。

「ツカマエタ」

それは破滅の笑顔だった

To be Continued...?